兵庫県文化財調査報告　第216冊

神戸国際港都建設事業道場八多地区特定土地区画整理事業に伴う

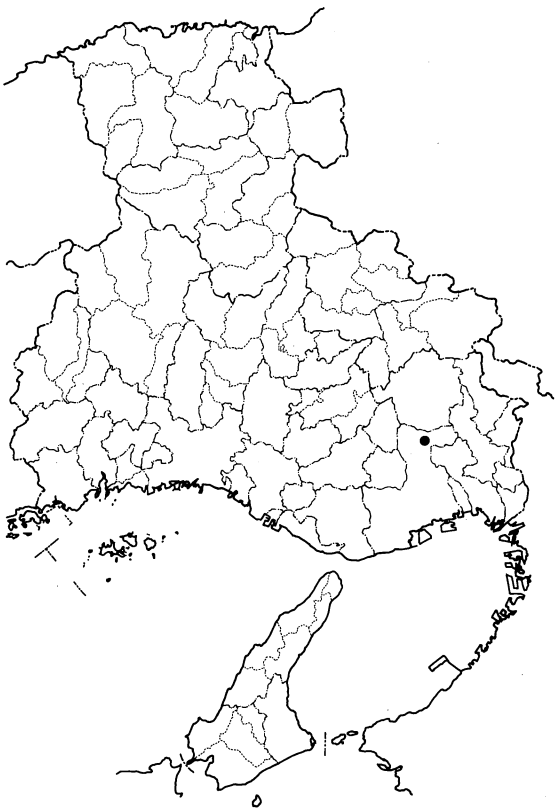
八多中遺跡発掘調査報告書

平成13年３月

兵庫県教育委員会

神戸国際港都建設事業道場八多地区特定土地区画整理事業に伴う

八多中遺跡発掘調査報告書



平成13年３月

兵庫県教育委員会

例　　言

1．　本報告書は、震災復興事業「神戸国際港都建設事業道場八多地区特定土地区画整理事業」に伴って実施した神戸市北区八多町中に所在する八多中遺跡の調査報告である。

2．　調査は、神戸市都市整備公社からの委託により、兵庫県教育委員会が調査主体となって現地での発掘調査を平成７年度から平成９年度にかけて、整理調査を平成10年度から平成12年度にかけて実施したものである。

3．　調査の実施については兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が担当し、復興調査に係る各都府県の支援を得て、兵庫県教育委員会職員と支援職員と合同で実施したものである。当該年度にかかる調査担当者、遺跡調査番号は第1章第2節調査の経過の項に記述している。

4．　整理調査は、神戸市都市整備公社の委託を受け、兵庫県教育委員会が主体となり、平成10年度から平成12年度にかけて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財事務所で実施した。整理調査の担当についても第１章第２節に記述している。

5．　発掘調査に係る経費は神戸市都市整備公社が負担した。

6．　本書に掲載した写真類の内、遺構写真については各調査担当者が撮影したものである。航空写真については各年度ごとに委託して撮影し、遺物写真については平成10年度に委託して撮影したものである。

7．　本書の原稿は吉識雅仁 、久保弘幸、池田征宏が分担して執筆した。

8．　本書に掲載した実測図版は吉識雅仁と久保弘幸が作成した。ただし、調査は震災復興の支援を得て実施したものであることから、下図の作成にあたっては原図をそのまま活用させて頂いた。

9．　本書に使用した方位は座標北を示している。また本書に使用した水準はＴ．Ｐ．を使用している。

10. 本書に掲載した挿図の内、第1図は国土地理院発行の１／25000の地図を使用して作成した。また実測図版の図版1及び各地区の全体図は神戸市都市整備公社が作成した図を使用して作成した。

11. 遺物番号は通し番号とし、本文・実測図版・写真図版とも共通にしている。遺物の内、鉄製品は頭に「F」を、石製品には「S」を付し、地区毎には分けずにまとめて掲載した。玉類については出土地区毎に掲載し、番号は土器番号と区別していない。

12. 本発掘調査で出土した遺物、作成した図面、撮影した写真類は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。

13. 本発掘調査は震災復興事業の一貫であり、都府県から支援を頂いて実施したものである。支援を頂いた関係都府県及び関係機関、並びに支援いただいた職員の方々には改めて厚く謝意を表します。

14. なお遺跡の環境および調査に至る経過については日下部遺跡の調査報告書を参考にされたい。

本　文　目　次

第１章　はじめに

１．調査に至る経緯……1

２．調査の経過……2

第２章　池尻地区の調査

１．概要……5

２．遺構……5

３．遺物……8

４．小結……10

第３章　上ヨサ田地区の調査

１．概要……11

２．遺構……11

３．遺物……12

４．小結……12

第４章　堂ノ元地区の調査

１．概要……13

２．遺構……13

３．遺物……15

４．小結……16

第５章　カイモリ地区の調査

１．概要……17

２．遺構……17

３．遺物……21

４．小結……24

第６章　フケ地区の調査

１．概要……25

２．遺構……25

３．遺物……27

４．小結……28

第７章　道ノ上地区の調査

１．概要……29

２．遺構……29

３．遺物……31

４．小結……32

第８章　岸ノ下地区の調査

１．概要……33

２．遺構……33

３．遺物……34

４．小結……34

第９章　まとめ

１．居住遺構の立地と広がり……35

２．遺跡の変遷……35

３．まとめ……37

実測図版目次

図版１	全面調査区位置図	
図版２	池尻地区	全体図
図版３		１～４区　遺構全体図図
図版４		２区　ＳＢ－１・２／柱穴断面図
図版５		１区　ＳＢ－３
図版６		１区　ＳＢ－４・５／ＳＢ－６
図版７		１区　ＳＥ－１
図版８		１区　ＳＸ－１
図版９		２区　自然流路／自然流路上遺物出土状態
図版10		６区　全体図／ＳＤ－１
図版11		出土遺物１
図版12		出土遺物２
図版13		出土遺物３
図版14	上ヨサ田地区	全体図
図版15		遺構全体図／土層断面図
図版16		出土遺物
図版17	堂ノ元地区	全体図
図版18		１区ＳＨ－１
図版19		３区　全体図
図版20		３区　1号墳周溝内遺物出土状態
図版21		３区　ＳＫ－１
図版22		４区　全体図／土層断面図
図版23		４区　ＳＢ－1／ＳＡ－1／ＳＡ－２
図版24		出土遺物１
図版25		出土遺物２
図版26		出土遺物３
図版27	カイモリ地区	全体図
図版28		１区　平面図
図版29		１区　ＳＫ－12～14・42
図版30		１区　池状遺構
図版31		２区～４区平面図
図版32		出土遺物１
図版33		出土遺物２
図版34		出土遺物３
図版35		出土遺物４
図版36		出土遺物５

図版37　出土遺物６
図版38　出土遺物７
図版39　出土遺物８
図版40　出土遺物９
図版41　出土遺物10
図版42　フケ地区　全体図
図版43　Ａ区　ＳＢ－１および池状遺構
図版44　Ａ区　池状遺構
図版45　Ａ区　ＳＢ－６／Ｃ区ＳＢ－４・５
図版46　Ｂ区　ＳＢ—２／ＳＢ－３
図版47　Ｃ区　ＳＨ－１
図版48　Ｂ区　ＳＤ－６／ＳＤ－７／Ｃ区ＳＤ－６・７
図版49　出土遺物１
図版50　出土遺物２
図版51　出土遺物３
図版52　道ノ上地区　全体図
図版53　Ａ区全体図／Ｃ区主要遺構部／ＳＫ－４／ＳＫ－６
図版54　Ａ区ＳＫ－１／ＳＫ－５
図版55　Ｅ区平面図／Ｆ区平面図
図版56　Ｅ区ＳＢ－１／ＳＫ－１／柱穴１
図版57　Ｆ区ＳＢ－２
図版58　Ｈ区平面図／Ｉ区平面図／Ｊ区平面図
図版59　出土遺物
図版60　岸ノ下地区　全体図
図版61　杭列
図版62　出土遺物

挿　図　目　次

第１図　包含層出土墨書土器
第２図　包含層出土砥石
第３図　２区出土土器
第４図　出土石器
第５図　Ｅ区南壁土層図
第６図　出土遺物2

写真図版目次

写真図版１　池尻地区　１区全景
写真図版２　上）１区全景（北から）
下）２区全景
写真図版３
上）ＳＢ－１・２
中）ＳＢ－１ピット１内遺物出土状態
下）ＳＢ－３
写真図版４　上）ＳＢ－４・５
中）ＳＢ－６
下）ＳＢ－６西側柱穴群
写真図版５　上）ＳＢ－７
中）ＳＢ－８
下）ＳＢ－９
写真図版６　上）ＳＥ－１
中）ＳＥ－１断面
下）２区自然流路上遺物出土状態
写真図版７　上）ＳＸ－１木棺
中）ＳＸ－１棺外遺物出土状態
下左）西木口部遺物出土状態
下右）東木口部遺物出土状態
写真図版８　上左）２区西半
上右）３区西端
中左）３区中央付近
中右）３区東半
下左）６区全景
下右）６区）ＳＤ－１
写真図版９　出土遺物１
写真図版10　出土遺物２
写真図版11　出土遺物３
写真図版12　出土遺物４
写真図版13　上ヲサダ地区　上）全景
中）上段柱穴群
下）出土遺物
写真図版14　堂ノ前地区　上）１区　ＳＨ－１
中）ＳＨ－１ベッド状遺構壁の炭化材
下）ＳＨ－１内炭化材検出状態
写真図版15　上）３区　3号墳全景
下）３号墳周溝内遺物出土状態
写真図版16　上）３区　１号墳周溝
中）３区　２号墳周溝
下左）ＳＫ－１全景
下右）ＳＫ－１内須恵器出土状態
写真図版17　上）４区　全景(北から)
中左）４区　全景
中右）ＳＡ－１・２
下）７区全景
写真図版18　出土遺物１
写真図版19　出土遺物２
写真図版20　カイモリ地区　上）１区西半全景（西から）
下）１区東半全景（東から）
写真図版21　上）１区東半全景（西から）
下）１区東半の遺構群
写真図版22　上）１区ＳＸ－１と溝群
中）１区ＳＸ－１断面
下）１区ＳＲ－２断面
写真図版23　上）１区ＳＫ－12・14断面
中）ＳＫ－14断面
下）ＳＫ－13断面
写真図版24　上）２区全景（東から）

		中）２区ＳＢ－１・２
		下）３区全景（南から）
写真図版25		上）４区全景（南から）
		中）ＳＫ－１
		下）ＳＫ－１完掘状況
写真図版26		出土遺物１
写真図版27		出土遺物２
写真図版28		出土遺物３
写真図版29		出土遺物４
写真図版30		出土遺物５
写真図版31	フケ地区	上）遠景（航空写真）
		下）調査区全景（航空写真）
写真図版32		上）Ｂ区西半遺構群（ＳＢ－２）
		下）Ｂ区東半遺構群（ＳＢ－３）
写真図版33		上）ＳＢ－１と池状遺構（北から）
		下）池状遺構内石組み（北から）
写真図版34		上）Ａ区北部遺構群
		下）Ｃ区遺構群
写真図版35		出土遺物１
写真図版36		出土遺物２
写真図版37		出土遺物３
写真図版38		出土遺物４
写真図版39		出土遺物５
写真図版40		出土遺物６
写真図版41	道ノ上地区	上）遠景（航空写真）
		下）調査区全景（航空写真）
写真図版42		上）Ａ区全景（東から）
		中）Ｃ区全景（北から）
		下）Ｃ区ＳＫ－１完掘状況
写真図版43		上）Ｃ区ＳＫ－４（東から）
		中）Ｃ区ＳＫ－６（西から）
		下）Ｅ区池状遺構断面
写真図版44		上）Ｅ区ＳＢ－１（西から）
		中）Ｅ区柱穴内土器出土状態
		下）Ｆ区ＳＢ－２（北から）
写真図版45		上右）Ｊ区全景（東から）
		上左）Ｉ区全景（西から）
		下）Ｈ区全景（東から）
写真図版46		出土遺物１
写真図版47		出土遺物２
写真図版48		出土遺物３
写真図版49	岸ノ下地区	上左）１区全景（南から）
		上右）１区ＳＤ－１付近
		中左）１区ＳＤ－１
		中右）１区杭列
		下左）９区全景（北東から）
		下右）９区杭列
写真図版50		出土遺物１
写真図版51		出土遺物２

第１章 はじめに

１．調査に至る経過

遺跡は神戸市北区八多町中に所在する。八多町中は付近を山陽自動車道や中国縦貫自動車道などの高速道路が通過し、これらに挟まれた地区である。神戸国際港都建設事業道場八多地区特定土地区画整理事業は、地区内を分断するように山陽自動車道路が建設されるのに伴い、周辺部の道路・公園など生活関連施設を整備し、農地の計画的な宅地化と保全を図り、健全で良好な市街地を形成することを目的として、昭和63年に神戸市都市計画局によって計画され、事業の遂行は財団法人神戸市都市開発整備公社（以下公社と呼称）に委託された。

そして、平成７年１月に発生した「阪神・淡路大震災」以降、事業は区画整理を行うことで被災者に宅地を供給することを目的とした「復興事業」に位置づけられ、平成７年５月に現地に「道場八多土地区画整理事務所」が開設され、事業が本格的に進められ始めた。

この事業に伴う埋蔵文化財調査は、平成元年・５年・６年度に、神戸市教育委員会（市教委）によって確認調査が実施され、一応の遺跡範囲が決定された。事業が復興事業となった平成７年度以降は文化庁通知「阪神・淡路震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本方針」、及びそれを受けて兵庫県教育委員会（以下県教委と呼称）が定めた「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱い要領」の適用を受けることとなった。

これらの「基本方針」では、全面調査の対象範囲は遺構が損壊される範囲、恒久的な建造物が構築される範囲等に限定されることになった。本土地区画整理事業の計画では区画内はすべて盛土されることになっていることから、全面調査の対象範囲から除外され、全面調査は道路計画区域と公園用地の掘削される範囲に限定されることとなった。

一方、阪神・淡路大震災からの復旧・復興事業は急ピッチで進められ、それに伴う埋蔵文化財の調査件数も急激に増加し、神戸市教育委員会では対応が不可能となった。そこで「阪神・淡路大震災に係る埋蔵文化財発掘調査支援基準」に基づき、兵庫県教育委員会に支援の依頼があった。

これを受けた県教委では公社と協議に入り、発掘調査が大規模になること、事業の性格から３年以内に調査を終了する必要があること等から、県教委と公社が受委託契約を結んだ上で、調査を実施することになった。また調査計画を円滑に進めるために、工期を限定して、調査の諸作業を請負形式で実施することになった。

こうして、平成７年度より道路や公園などの公共用地を対象にした調査を、公社の依頼を受け、県教委が各県からの支援職員の応援を得て開始した。しかし、この平成7年度の調査で、広大な遺跡範囲の中には、遺構や遺物の極めて希薄な部分が含まれていることが判明し、平成８年度は従前の結果に基づく全面調査とともに、再度確認調査を実施し、遺跡範囲の絞り込みを行った。平成９年度の全面調査はこの再度の確認調査の結果に基づいて行ったものである。

2. 調査の経過

A．試掘・確認調査の経過

試掘調査は神戸市教育委員会によって平成元年度・５年度・６年度の３次に渡って実施された。この３ヵ年に渡る試掘調査は２×２ｍの坪を72ヶ所に設定して実施され、約70,000㎡の調査必要範囲が確定された。

この結果に基づき、平成７年度から全面調査を実施したが、事業が震災復興事業となって遺跡の取扱いも緩和処置が計られることになった。この処置を運用するためには遺跡の詳細な内容の把握が必要となり、平成８年度に２次に分けて公共用地を対象に確認調査を実施した。この２次に渡る確認調査は神戸市教育委員会が主体となり、「阪神淡路大震災に係る埋蔵文化財発掘調査の支援に関する協定書」（以下協定書）に基づいて兵庫県教育委員会に支援依頼があり、これを受けた県教育委員会は兵庫県埋蔵文化財調査事務所職員及び各都府県からの支援職員を派遣して実施した。

調査年度	種別	調査主体	調査期間	調査面積	調査担当者
平成元年度	試掘	神戸市教育委員会	平成２年１月26日～３月６日	10㎡	西岡功次　黒田恭正
平成５年度	試掘	神戸市教育委員会	平成５年11月４日～11月10日	140㎡	口野博史
平成６年度	試掘	神戸市教育委員会	平成７年３月27日～４月３日	128㎡	口野博史　橋詰清孝
平成８年度 第１次確認調査	確認	神戸市教育委員会	平成８年７月25日～８月23日	184㎡	小林公治　（山梨県） 大川勝宏　（三重県）
平成８年度 第２次確認調査	確認	神戸市教育委員会	平成８年10月21日～11月15日	192㎡	久保弘幸　（兵庫県） 小野田義和（福島県） 伊藤敏行　（東京都） 工藤　忍　（青森県）

B．平成7年度の調査

岸ノ下地区、堂ノ元地区の４区、池尻地区６区及び同地区２・３区の一部の計4,115㎡について、平成７年12月11日から平成８年３月22日にかけて全面調査を実施した。

調査は「協定書」に基づく支援要請が神戸市教育委員会から兵庫県教育委員会にあり、これを受けた兵庫県教育委員会が調査主体となって、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が下記の表のように各府県からの支援を得て実施した。

調査の実施にあたっては、調査範囲が広範囲であることから調査の効率化・迅速化を計る必要があるため、神戸市都市整備公社と兵庫県教育委員会が受委託契約を締結し、調査作業を請負工事方式で業者発注する方法を採った。

	調査地区	調査面積	調査期間	調査担当者
第１次全面調査	岸ノ下地区 池尻６区 堂ノ元４区	7,465㎡	平成７年10月11日～ 平成８年３月13日	池田征弘　（兵庫県） 桝本　哲　（大阪府） 黒石哲夫　（大阪府） 河村健史　（福井県） 小野木学　（岐阜県）

C．平成８年度の調査

この年度は第２次全面調査として、池尻地区の１～４区、上ヨサダ地区、堂ノ元１区、カイモリ地区の１区南半・２～４区の調査を実施し、第３次調査として池尻地区の５区、カイモリ地区の１区北半の調査を実施した。

調査はすべて前年度同様、神戸市教育委員会からの支援要請に基づいて、兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県埋蔵文化財調査事務所が各府県からの支援を得て実施した。調査の実施にあたっては神戸市都市整備公社と兵庫県教育委員会が受委託契約を締結し、調査作業を請負工事方式で業者発注する方法を採った。

	調査地区	調査面積	調査期間	調査担当者
第２次全面調査	池尻１～５区	8,268㎡	平成８年６月10日～ 平成８年11月15日	吉識雅仁　（兵庫県） 中田　英　（神奈川県） 青山　透　（広島県） 深谷憲二　（茨城県） 藤原直人　（長野県） 大川勝宏　（三重県） 横田　明　（大阪府） 鈴木篤英　（福井県） 福島孝行　（京都府）
	上ヨサダ地区			
	堂ノ元１・５～７区			
	カイモリ地区１区南半 ２～４区			
第３次全面調査	カイモリ地区１区北半	2,565㎡	平成８年11月18日～ 平成９年２月28日	吉識雅仁　（兵庫県） 久保弘幸　（兵庫県） 鐵　英記　（兵庫県） 小野田義和（福島県） 吉田東明　（福岡県）
	池尻地区５区			

D．平成９年度の調査

下の表の通り、堂ノ元地区２・３区、フケ地区、道ノ上地区の調査を実施した。これらの地区の調査で、本土地区画整理事業に伴う日下部遺跡の内、公共用地部分については全て終了した。

なお、今年度の調査も「協定書」に基づく支援要請が神戸市教育委員会から兵庫県教育委員会にあり、これを受けた兵庫県教育委員会は神戸市都市整備公社と受委託契約を締結し、兵庫県埋蔵文化財調査事務所が実施した。調査の諸作業は請負工事方式で業者に発注した。

	調査地区	調査面積	調査期間	調査担当者
第５次全面調査	堂ノ前地区	2,189㎡	平成９年10月16日～ 平成10年２月17日	久保弘幸　（兵庫県） 岡田章一　（兵庫県）
	フケ地区			
	道ノ上地区			

E．平成10年度の調査

この年度から出土品整理調査を開始した。調査は神戸市都市整備公社からの委託を受け、兵庫県教育委員会が受託し、調査の作業は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が担当した。震災復興の各都府県からの支援は前年度までに終了し、出土品の整理については調査に関係した吉識、久保、鐵が担当し、嘱託職員の補助を得て実施した。

本年度は土器の接合・補強の作業を行った。

F．平成11年度の調査

前年度に引き続き出土品の整理作業を行い、本年度は実測・復元・写真撮影作業と、鉄製品の保存処理作業を行った。調査は神戸市都市整備公社からの委託を受け、兵庫県教育委員会が受託し、調査の作業は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が担当した。実測等の作業は吉識・久保・鐵が嘱託職員の補助を得て実施し、保存処理については加古千恵子、岡本一秀が嘱託職員の補助を得て実施した。なお、遺物写真の撮影は業者に発注して実施した。

G．平成12年度の調査

本年度も、神戸市都市整備公社からの委託を受け、兵庫県教育委員会が受託し、調査の作業は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が担当した。本年度は報告書の刊行に向けたトレース・レイアウト・原稿執筆等の調査作業を行い、これらの作業終了後には出土品の収納作業を行った。出土品の収納は報告書に掲載した遺物、実測した遺物、その他の３種に分け収納した。鐵が兵庫県立博物館に転勤したため、本年度の作業は吉識、久保が嘱託職員の補助を得て実施した。

整理作業の体制

年　度	主な作業の内容	担　当　者	備　考
平成10年度	接合・補強	吉識雅仁　久保弘幸　鐵　英記	ネーミングまでは現場で終了
平成11年度	実測・復元・写真撮影 保存処理	吉識雅仁　久保弘幸　鐵　英記 加古千恵子　岡本一秀	写真撮影は業者委託
平成12年度	トレース・レイアウト・報告書刊行	吉識雅仁　久保弘幸	

第２章　池尻地区の調査

1．概要

A．概要

沖積地に面した小さな扇状地が段丘化した地区にあたり、北西から南東方向に向けて傾斜する。また地区の東側には上ヨサダ地区から連続してくる谷部となっており、４区東半の地区はこの谷部にあたる。遺構は奈良時代後半～平安時代末（中世初期）の掘立柱建物跡・井戸・溝・土坑等が検出されている。これらの遺構は南北約75ｍ、東西約45ｍの範囲に集中おり、検出した建物の方位で範囲をくくれば、遺構の集中する範囲は北西―南東方向に約60ｍ、北東―南西方向に約45ｍとなる。出土遺物には飛鳥時代、奈良時代後半から平安時代中期、平安時代末の遺物がみられ、奈良時代後半から平安時代中期の遺物が多く見られる。この中には緑釉陶器・灰釉陶器、須恵器稜椀が含まれている。

B．

北西から南東方向に徐々に高さを減じる扇状地が段丘化して形成された地形であり、段丘上は等高線に沿う形で水田化されている。こうした地形が背後の丘陵に入り込んだ開析谷の作用によるものか、八多川の作用によるものかは定かでないが、開析谷口にはこうした地形がみられる。調査区の東は浅い開析谷となり、東側の堂ノ前地区とはこの谷によって隔てられる。

C．基本層序

遺構検出面は黄橙色シルト層上の1面であり、１区と２区の東半ではこの層上に暗灰色砂質シルト、灰茶褐色シルトが堆積していた。これら２層中に少量の遺物が含まれていた。この上層は客土層となる。これ以外の段丘上にあたる地区では自然堆積層は確認できず、遺構検出面と同一の黄橙色シルト層まで耕土客土層であった。谷部にあたる地区では客土層下に灰色シルトが堆積していた。

2．遺構

A．１・２・４区の遺構（図版３　写真図版１・２）

遺構は1区、２区東半、４区西半を中心とした地域に限定される形で検出されており、その他の地区では２区中央で自然の流路が検出された以外、水田化に伴う遺構である。検出された遺構は掘立柱建物９棟、井戸1基、木棺墓１基、土坑９基、溝などがある。

SB－１（図版４　写真図版３）

２区で検出された東西４間（10.2ｍ）、南北4間（9.3ｍ）以上の総柱建物に復元しているが、西側柱列の柱穴は小さく、深さも浅いことから庇あるいは柵になる可能性もある。建物方位はN46°Wである。柱間は東西が東から280㎝、300㎝、220㎝、240㎝となっている。南北は南から230㎝、220㎝、250㎝、220㎝を測る。柱穴は径30㎝前後で、深さは西側柱列以外の柱穴で約45～55㎝を測る。Ｐ－19では柱根が遺存し、Ｐ－１では柱の抜き取り後に甕腹を入れ、その上に緑釉陶器の耳杯の半欠けが置かれた状態で出土している。

SB－2（図版4　写真図版3）

ＳＢ－１と重なって検出された総柱建物跡で、方位はN41°Ｗである。建物規模は東西3間（約6.6ｍ）、南北２間（約4.6ｍ）以上の規模である。柱間は東西が東から230㎝、200㎝、230㎝となっている。南北は南から250㎝、220㎝を測る。柱穴は径20～30㎝前後で、約20～30㎝を測る。Ｐ－３では底に柱根が遺存していた。

SB－3（図版5　写真図版3）

１区の北端で検出されたN51°Ｗの方位をもつ総柱建物跡で、この地区で検出された遺構の中では最高所に位置する。東西２間（約5.4ｍ）以上、南北２間（約4.4ｍ）以上の規模である。柱間は東西が東から280㎝、260㎝となっている。南北は220㎝等間である。柱穴は遺存状況が悪いため、径20㎝前後と小さく、深さも約10㎝以下の浅いものである。東約3.5ｍの位置には建物と平行して柵状の柱列があり、直角に曲がって、建物の南側約2.2ｍの位置を建物に平行する柱列が存在する。建物に付随する柵かあるいは庇になるものであろう。

SB－4（図版6　写真図版4）

ＳＢ－５と重なって検出されたN41°Ｗの方位をもつ総柱建物跡で、東西３間（約6.4ｍ）以上、南北４間（約8.1ｍ）の規模である。柱間は東西が210～220㎝、南北は200㎝前後となっている。柱穴は径20～30㎝前後で、深さは深いもので約20㎝を測る。

SB－5（図版6　写真図版4）

ＳＢ－４から南東にずれて検出されたN46°Ｗの方位をもつ側柱建物で、東西1間（2.4m）以上,南北2間（4.8m）以上の規模である。南北の柱間は約2.4㎝を測る。柱穴は径約25～30㎝の円形で、深さは最高約15㎝遺存していた。柱穴内には約16㎝の柱痕が確認された。

SB－6（図版6　写真図版4）

棟方位をN51°Ｅとする桁行3間（5.4ｍ）以上、梁行2間（3.1ｍ）の側柱建物で、柱間は棟方向が約180㎝、梁方向は155㎝を測る。柱穴は径約30～40㎝の円形で、深さは最も深いもので約30㎝遺存していた。柱穴内には約15～20㎝の柱痕が認められている。

SB－7（写真図版5）

建物方位をN41°Ｗとする南北2間（4.0ｍ）以上、東西1間（2.2m）以上の総柱建物で、南北の柱間は約200㎝を測る。柱穴は約20～30㎝の円形で、深さは約15㎝遺存していた。建物の東側には建物に平行して幅60㎝のＳＤ－４が存在し、建物の北側で西に分岐している。この溝は建物に伴う雨落溝の可能性があり、その場合この建物は南北2間の規模となる。

SB－8（写真図版5）

桁行2間（4.4ｍ）、梁行1間（約2.4ｍ）の規模で、棟方位をN46°とする建物である。柱穴は径約20～30㎝の円形で、深さは最高約20㎝遺存していた。

SB－9（写真図版5）

４区で検出された、桁行2間（4.5ｍ）、梁行1間（約2.2ｍ）の規模で、棟方位をN46°とする建物である。柱穴は径約20㎝の円形で、深さは最高約15㎝遺存していた。

SE－1（図版7　写真図版6）

ＳＢ－３の東で検出された井戸で、掘り方は長径約95㎝、短径約80㎝、深さは最高約95㎝である。掘り方は約80㎝下がったところで狭められて段状となり、底までの径は約45㎝となっている。この段状部

には刳り抜き式の井戸枠が据えられていた。井戸枠は長径約70㎝、短径約55㎝の楕円形で、高さ約50㎝遺存していた。

井戸内の埋土から12～16の土器が出土しており、中には墨書土器（15）含まれている。

SK－1（図版8　写真図版7）

主軸を建物方位とほぼ同じくする木棺墓で、掘り方は長軸約190㎝、短軸約64㎝深さ約20㎝であるが、斜面下方側が上方側より約5㎝幅が広くなっていた。この掘り方の内部から長さ約125㎝、幅約40㎝の木棺の痕跡が確認され、深さは最高約20㎝遺存していた。斜面下方側の小口部には須恵器椀と小皿が（17～21）、斜面上方側の小口隅には土師器の甕（22）が供献されていた。須恵器類は椀を中心に正位置に置かれ、甕は破片になっていたが出土状態からみて、掘り方の隅に正位置でもたせかけた状態で供献されていたものと推測される。

溝跡群

検出された溝は14条あるが、いずれも幅約60㎝以下の細いもので、深さも最も深いもので約25㎝と浅いものである。溝の走行方向はほぼ建物と並行、直行しており、建物と関連して屋敷地内の区画あるいは建物の雨落ち溝としての機能を有するものと思われる。

SD－1

ＳＢ－６の北側約3.5ｍの位置をＳＢ－７に並行して走行する溝である。幅約60㎝、深さ10㎝。36の須恵器壺片が出土している。

SD－4

ＳＢ－７の東側約１ｍの位置を建物と並行し、傾斜に直行して走行する溝である。建物の北側で西に分岐している。幅約60㎝、深さ約15㎝。

SD－6

ＳＤ－７と直交する方向性をもつ幅約40㎝、深さ約15㎝の溝である。内部より須恵器杯Ａ（27）が出土している。

SD－7

調査区の南端で検出された幅約50㎝、深さ約25㎝の溝である。ＳＤ－６と直交しており、一つの区画を構成するものと思われる。溝の南側には並行して２間（約5.0ｍ）の柱列が存在している。内部から28～31の土師器小皿、灰釉陶器皿、須恵器鉢が出土している。

自然流路（図版9　写真図版6）

２区中央付近で北西方向から流下してくる幅約6.0ｍ・深さ約50㎝の流路に、西側から幅約25㎝・深さ約15㎝の流路が合流し、幅約2.4ｍ・深さ50㎝の流路となる部分が検出されている。流路の内部からは37～41の須恵器杯Ｈ・杯Ａ・壺、緑釉陶器が出土し、流路の埋土上面からは42～45の須恵器椀が重ねられた状態で出土している。

Ｂ．６区の遺構（図版10　写真図版7）

１区の東側に位置する調査区で、地形的には１区の乗る段丘裾から谷部にあたる。遺構は溝１条が検出されたのみであるが、この溝は平成５年度に山陽自動車道の建設に伴って実施した調査時に検出された溝に連続するものである。溝は幅約90㎝、深さ約35㎝で、22ｍにわたって検出されている。

3．遺物

断続的ではあるが、飛鳥時代から中世前期の遺物が出土しており、遺構内からは奈良時代後半から中世前期の遺物出土している。

A．１～５区出土遺物

飛鳥時代から中世前期に至る長期間の遺物が出土しているが、量的には少ない。

SB－１出土遺物（図版11　写真図版９）

３～７の須恵器椀・杯Ｂ蓋、土師器椀、黒色土器椀、緑釉陶器耳杯が出土している。３の杯蓋は小型であるがにはツマミがつくものである。４の土師器椀はいわゆる回転台土師器で、低部は糸きりである。５・６は内外面とも燻された黒色土器の椀で、同一の柱穴から出土しており、同一個体になる可能性が高い。６の内面は丁寧にヘラ磨きしている。７は軟質の緑釉陶器耳杯であり、ミコミ部に段をもつ。

SB－２出土遺物（図版11）

８の瓦器椀が出土している。口縁端部は小さくつまみ上げられる。

SB－４出土遺物（図版11）

２の須恵器椀底部が出土している。底部は平底で糸きりである。

SB－５出土遺物（図版11）

１の須恵器椀底部が出土している。低部は平高台である。

その他の柱穴出土遺物（図版11）

須恵器杯Ａ・杯Ｂ・椀が出土している。９・11の杯類は低部から屈曲して口縁部は直線的に伸びる。

SE－１出土遺物（図版11　写真図版９･10）

須恵器杯Ａ・壺が出土している。15・16は杯Ａの底部であり、外面に墨書がある。15は「本大□」と読めそうであるが、両端を欠いており、判然としない。16は円が描かれている。記号か。

SX－１出土遺物（図版11　写真図版９）

須恵器小皿・椀、土師器鍋、瓦器椀底部が出土している。須恵器小皿は底部糸きりで、深い器形17～19と浅い器形20がある。深い器形は胎土に砂を多く含む。椀21の低部は平底である。22は土師器鍋で外面は粗い刷毛で仕上げられる。

土坑出土遺物（図版11）

ＳＫ－７から24が、ＳＫ－８から25の須恵器杯Ｂ蓋が出土している。ともに口縁部は屈曲する。

溝出土遺物（図版11　写真図版９）

須恵器杯Ｂ蓋・杯Ｇ蓋・杯Ａ・椀・壺・鉢、土師器小皿、灰釉陶器皿が出土している。ＳＤ－12出土の杯Ｂ蓋26は口縁部が屈曲し、ＳＤ－６出土の杯Ａ27の口縁部は下半が内湾する。28～31はＳＤ－７から出土したもので、28・29は土師器小皿である。低部は手づくねで器壁が厚く、口縁部が横方向に開く浅い器形である。30は灰釉陶器でほぼ完形である。口縁端部は短く開き、釉は口縁部の内外面に薄くかかる。32・33はＳＤ－２から出土した須恵器椀で、32の椀底部は平底で糸きりである。34・35はＳＤ—42から出土した須恵器の杯Ｇ蓋と椀底部で、35は高い高台が付き、金属器写しの椀であろう。36はＳＤ－41から出土した須恵器長頸壺である。

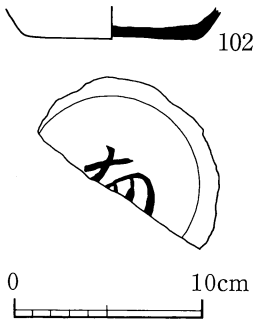
2区流路出土遺物（図版12　写真図版10）

流路の内部から須恵器杯H・杯A・椀・壺、緑釉陶器が出土し、肩部付近の埋土上層から須恵器椀が出土している。37は杯Hで、低部のヘラ削りは省略されて、ナデのみとなっている。受部は外上方に伸び、口縁部の立ち上がりは極めて短い。38の杯Aの底部はヘラ切りである。39は高台の付く椀で、体部下半はヘラ削りである。稜椀の底部であろう。40の壺底部は下半をヘラ削りしている。41は緑釉陶器の底部で内外面に施釉している。高台は削りだしで、端部は露胎である。

42～45の須恵器椀は自然流路の肩部の埋土上から出土したものである。すべて低部は糸きりで、平底である。44・45の外面には「大西」と墨書されている。

主要遺構部包含層出土遺物（図版12　写真図版10）

須恵器杯A・杯B蓋・杯B・皿A・椀F・椀・小皿・壺・鉢、土師器小皿・羽釜、白磁が出土している。杯A46～48には口縁部が丸みをもつ46と、低部から屈曲して口縁部が直線的に開く47・48がある。杯B蓋49は口縁部が湾曲する器形である。50～54は杯Bである。54の底部外面には爪形文が施されている。56は皿Aで、55は体部の下半がヘラ削りされており、口縁部を欠くが稜椀になる。57・58は中世の椀で、57は低部が平底であり、糸きりである。他に59・60の椀低部がある。ともに底部の内面に段がつく。61は小皿である。壺は62・63の2個体があり、63の体部には1条の凸帯がつく。64の鉢は口縁部を上下に拡張する。



第1図　包含層出土墨書土器

土師器小皿65は摩滅ではっきりしないが底部糸きりと思われる。66は羽釜で鍔は横上方に伸び、口縁部の立ち上がりは低い。

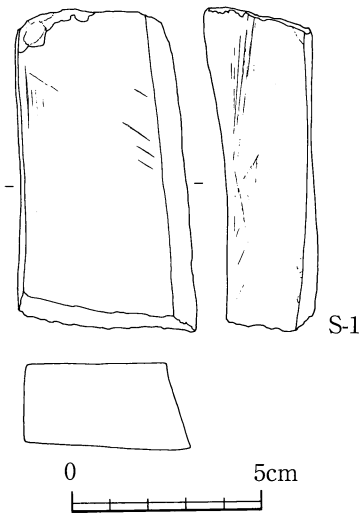
67・68は白磁である。67は鉢で、68は椀底部でみこみ部に圏線を巡らせている。

第1図の墨書土器は杯Aの底部外面の中央に書かれたもので、「南」と読めそうである。

第2図は砂岩製の砥石で、4面に細かい筋状の研磨痕が窺える。

3区西半部包含層出土遺物（図版13　写真図版12）

須恵器杯B（70）、須恵器碗（71）、須恵器小壺（72）、須恵器甕（73）、土師器甕（74）、緑釉陶器（75）などが出土している。71の須恵器碗の底部は糸切りである。73の須恵器甕は12世紀代のものである。75は緑釉陶器の底部である。低い貼り付けの輪高台で、底部には糸切りが残存している。釉は全面に施されている。



第2図　砥石

2区西端谷状地形出土遺物（図版13　写真図版12）

須恵器碗（76、77）、須恵器小皿（78）、土師器小皿（79～81）などが出土している。76の底部は糸切り、77の底部はヘラ切りである。土師器小皿（79～81）は手づくね成形である。

2区西半部包含層出土遺物（図版11　写真図版9・10）

須恵器杯A（82）、須恵器皿（83）、須恵器鉢（84）、白磁碗（85）などが出土している。82の杯Aの底部はヘラ切りである。83の皿の底部は糸切りである。84の鉢は口縁端部が外反する。85の白磁碗は森田・横田分類V類である。

B．６区の遺物

SD—１出土遺物（図版13　写真図版11）

須恵器杯Ｇ（86）、須恵器杯Ｂ（87）、土師器碗（88）などが出土している。これらの遺物は７世後半頃のものである。

包含層出土遺物（図版13　写真図版11）

須恵器杯Ａ（89）、須恵器杯Ｂ（90、91）、須恵器蓋（92～94）、須恵器碗（95）、須恵器小皿（96・97）、須恵器鉢（98）、須恵器硯（99）、瓦器碗（100）、瓦器小皿（101）などが出土している。92、93は須恵器杯Ｂの蓋で、94は須恵器壺の蓋である。99の須恵器硯は猿面硯と思われるもので、底面に滑り止めの当て具痕、硯面に使用による擦痕が残る。

４．小結

以上、今回の調査では、飛鳥・藤原期から平安時代末にかけての掘立柱建物跡９棟・土坑９基・溝・柵などの遺構が検出された。遺構はほぼ北西—南東方向に約60ｍ、北東—南西方向に約45ｍの範囲に集中しており、そこから離れた地区では建物跡に伴うような遺構は検出されないことからみて、明確な区画施設は伴わないものの、居住域はほぼこの範囲に限定されるものと推測される。

検出した遺構は出土した遺物からみれば、飛鳥・藤原期、奈良時代後半、平安時代中期、平安時代末の４時期に大別される。

飛鳥・藤原期の遺構は６区で検出されたＳＤ－１・42のみで、６区ＳＤ—１は平成５・６年度に実施された調査結果と併せると、扇状地の縁辺に沿うように設けられた溝であり、平成５・６年度の調査で古墳時代と報告されている竪穴住居と関連する可能性が考えられる。

奈良時代後半の遺構はＳＥ－１、ＳＫ－７・８、ＳＤ—12・41・42がある他、柱穴内からも遺物が出土しており、建物が存在した可能性がある。またＳＢ－６は梁行２間の側柱建物であり、この時期に属する可能性が高い。

平安時代中期の遺構にはＳＢ－１・２、ＳＤ—７があり、方位をＮ41・46°Ｗにとするか、それに直行する方向性をもつ。ＳＢ－１・２は柱穴に切り合い関係は認められなかったが、建物として重複しており、やや場所をずらして建替えが行われたものであろう。

平安時代末の遺構にはＳＢ－４・５、ＳＸ－１がある。建物の方位はＮ41・46°Ｗで、前段階と同方位を示す。ＳＢ－４・５も建物としては重複した関係にあり、出土遺物からみてＳＢ－５が先行する。ＳＸ－１は周辺に建物は復元できなかったが、所謂屋敷墓と思われる。

ＳＢ－３・７～９については出土遺物が少なく、時期を断定できなかった。遺構の方位により推測する手法もあるが、ここでは平安時代中期と平安時代末の遺構の方位に変化が見られず、この手法は有効な手段とはなりえないことから、これら４棟の建物については時期を断定しえない。

出土した遺物もほぼ上記の時期以外のものはみられず、本遺跡がこの４時期に営まれたことを物語っている。ただ遺構でもそうであったように、遺物においても飛鳥・藤原期の遺物は僅かであり、この時期、本遺跡において集落活動が活発に行われた形跡を示していない。遺物が量的に増えるのは他の３時期であるが、それでも遺構の検出される範囲は狭く、集落が大規模に展開された状況には窺えない。しかし、奈良時代後半・平安時代中期の２時期には墨書土器や緑釉や灰釉陶器を少量でも備えており、この２時期については、比較的富豪層の１軒の住居とみることができる。

第３章　上ヨサ田地区の調査

1. 概要（図版14）

A．概要

池尻地区からふけ地区にかけて谷を回りこむような調査区で、段丘上から段丘縁、谷内部の沖積地にあたる地区である。遺構は最も標高の高い調査区が直角におれる地点付近で検出され、段丘縁の地区や谷内部にあたる地区では検出されていない。検出した遺構は柱穴群と土坑状の落ち込みがある。遺物は遺構群から西に落ち込む斜面部の包含層から出土しており、時期的には中世前期に含まれるものである。したがって検出された遺構もこの時期に属するものであろう。

B．地形

池尻地区から北に伸びる部分は段丘の縁にあたり、そこから調査区が直角に折れる地点の段丘面に向かって段状に上っていく。そしてそこからふけ地区に向かっては階段状に高さを減じていく。調査において遺構の検出された地区は池尻地区より１段あがった段丘面と、そこからさらに１段あがった段丘面にあたる。下面の段丘面は幅狭な面であり、上面は僅かに削り残された狭小な段丘面である。調査区が直角に折れる地点からふけ地区にかけては谷を横断する調査区であり、谷内部にあたる。

C．基本層序

地形的に大きく異なるため、各調査区で共通するような土層の堆積は認められなかった。池尻地区から北に伸びて段丘の縁にあたる地区は耕土・客土下に褐灰色シルトが堆積し、その下に池尻地区の遺構面である黄橙色砂質シルトが連続している。遺構の検出された地区は比高差があるにもかかわらず、遺構検出面は黄橙色細砂であり、耕土直下に検出されている。遺構の検出された下位の段丘面から西は急激に下がり、その斜面を覆ってにぶい黄橙色シルトを中心とした層が堆積し、中世の遺物が出土している。谷部を横断する地区は灰色系の還元された土層が、段丘を形成する黄橙色砂質シルト上に堆積していた。この谷部を横断する地区からの遺物の出土はほとんどなかった。

遺構検出面は黄橙色シルト層上の１面であり、１区と２区の東半ではこの層上に暗灰色砂質シルト、灰茶褐色シルトが堆積していた。これら２層中に少量の遺物が含まれていた。この上層は客土層となる。これ以外の段丘上にあたる地区では自然堆積層は確認できず、遺構検出面と同一の黄橙色シルト層まで耕土客土層であった。谷部にあたる地区では客土層下に灰色シルトが堆積していた。

2．遺構（図版15　写真図版13）

遺構は調査区が直角に折れる地点と、そこから西に１段さがった地区の狭い範囲で検出されている。標高差の高い地区を上段、低い地区を下段として記述する。

上段の地区で検出された柱穴群には３個の柱穴が調査区と並行するような並びをもち、さらにその外側にも、この柱列に並行する２列ほどの柱の並びが観取できる。ただ調査区が狭いため、建物と断定していない。柱穴は規模の小さいもので底は窄んで尖った状態であり、杭状の柱が打ち込まれていたよう

である。

下段からは柱穴群と土坑状の落ち込みが検出されたが、建物として復元できるような痕跡は見出せなかった。

3．遺物（図版16　写真図版13）

遺構の検出された下段の面から下がっていく斜面に堆積した土層より、103～122の須恵器椀・鉢、土師器小皿・皿・鍋、丹波焼の擂鉢が出土している。須恵器椀は103～112があり、いずれも底部は平底である。103～111は口径約13.7～15.8㎝に対して、器高が約3.1～4.1㎝と低く浅い器形である。112は少し器高が高く、口縁部も丸みを帯びている。鉢113は片口の鉢で、口縁部を上方に拡張している。

土師器は小皿115･116、皿117、鍋118～122がある。皿類はいずれも低部は指押さえで、口縁部のみヨコナデしている。小皿は口径約9.5㎝前後、皿は口径12.4㎝である。鍋は口径が16㎝前後と小型の118、約21～23.5㎝と中型の119～121、口径28.6㎝と大型の122の３種が出土している。いずれも口縁端部が小さく外側に突出するが、118～120は上端面が外傾する。121・122の上端面はほぼ水平となっている。114は丹波焼の擂鉢であり、摺目は櫛書きである。

4．小結

遺構が検出された地区は調査区の最高所であり、背後は丘陵斜面に続いていく段丘面上である。検出された遺構は柱穴群であり、柱列のみであったことから建物跡として復元はしていないが、建物跡になる可能性は高いといえる。その場合北側や東側の柱列は建物に伴う庇などの施設と捉えることができる。

しかし、検出された地区の乗る水田は狭く、水田の東側の畦畔は崖状となっている。したがって上段の遺構の存在が予想される範囲は極めて限定された狭い範囲となり、検出された柱列が建物としても小規模なものであると推定される。また柱穴が杭状となることからも、大規模な建物は想定しにくい。下段では建物として復元できるような柱列は確認されず範囲も狭い。こうした状況からみて、今回検出された柱列が構成する建物は小規模で、周囲に庇を設けた簡易な建物と想定される。

検出された遺構の時期を直接的に示す遺物は無いが、下段の西斜面から出土した土器は周囲の状況からみて、これらの遺構に伴う可能性が高い。出土した遺物の内、須恵器の椀は深さのない浅い器形となっており、神出古窯址群では13世紀後半～14世紀に位置づけられるものである。また土師器鍋も比較的小さくほぼ同時期とみてよいものである。

したがって今回検出された遺構類は鎌倉時代の後半から室町時代にかけての時期が想定される。

第４章　堂ノ元地区の調査

１　概要

Ａ．概要（図版17）

調査地は北西に所在する谷から広がるの扇状地状の微高地に位置する。１区で弥生時代末期の竪穴住居跡、３区で古墳時代後期の古墳、４・５・７区で中世の集落跡などが検出された。２・６区では明瞭な遺構は検出されなかった。

Ｂ．地形

調査地は北西に所在する谷から広がるの扇状地状の微高地に位置する。このうち４～７区は高い部分にあたり、１～３区は扇端部の低い部分にあたる。

Ｃ．基本層序

基盤である黄褐色のシルト質砂の面には、洪水による部分的な砂礫層がみられ、その上に灰～黄灰色の砂質土が堆積している。中世の遺構はこの黄灰砂質土層より切れ込んでいる。

２．遺構

Ａ．１区の遺構

検出した遺構は竪穴住居跡1棟である。

ＳＨ－１（図版18　写真図版14）

一部後世の撹乱で壁を検出することはできなかったが、一辺５ｍの規模で、壁は最高で約10㎝遺存していた。検出できた部分では壁下に幅約８㎝、深さ約６㎝の壁溝が全周する。南壁から東壁の南半を除いて床面の周囲には幅約80㎝～100㎝・高さ約10㎝の高床部が設けられていた。高床部の床面側壁は板止めされていたようで、北東隅部では壁に密着して炭化した板材が確認されている。床面には中央やや北寄りの位置に長径約100㎝、短径約80㎝、深さ約10㎝の中央土坑が設けられていた。また高床部の設けられていない南壁の際からは長径約80㎝、短径55㎝、深さ約15㎝の土坑が設けられており、内部から甕123が出土している。主柱穴は中央やや北よりで検出された２本の柱穴になる。他に床面上からは台石と思われる石材が置かれていた。123から126の弥生土器の甕が出土している。

Ｂ．３区の遺構

古墳３基、古墳時代の土坑、中世の土坑・溝などを検出した。

１号墳　（図版19・20　写真図版15・16）

調査区の南端に位置する。約1/2が調査区外にあたり、周溝の北側で最大幅約２ｍ、延長約８ｍ分のみが検出できた。周溝の西側はすでに削平を受けて消滅している。 残された周溝から古墳の復元径は約12ｍとなる。墳丘は遺存しておらず、墳丘高、主体部は不明である。周溝は底に近い部分のみが検出され、断面はゆるやかな皿状を呈している。溝底からは破片となった状態で須恵器杯（130～132）・甕

（133・134）などが出土した。

2号墳（図版19　写真図版16）

1号墳の北に位置する。墳丘の大部分が調査区東側にあり、調査できたのは周溝の一部にすぎない。当初、溝と土坑としてとらえていたが、土坑が溝の円弧の延長上に位置し、土坑自体が整然とした形態をもたないことから、溝が削平されてその深い部分のみが残存したものと判断した。墳丘の直径は6m前後と推定される。溝の幅は0.5～1.2mを測る。溝内からの出土遺物は僅少である。

3号墳（図版19）

調査区北側で検出された。今回検出した古墳の中では最も遺存状態が良く、墳丘の直径は13m、周溝の外径は15.4mを測る。古墳の約1/2は調査区西側にあって、調査できたのは全体の半分であった。周溝の底面から、現存する墳丘頂部までの比高は0.5mを測る。周溝幅は最大約2.6m、断面形は皿状を呈している。周溝内の溝底より須恵器杯身（137）・蓋（135･136）が出土した。墳丘盛土はまったく残存しておらず、墳丘頂部では黄褐色砂質シルト層が露呈していた。埋葬施設は検出できなかった。

SK－1（図版21　写真図版16）

SK－1は、長さ3.0m、幅1.1mを測る、長楕円形の土坑である。土坑は長軸を北東－南西に向け、その北東端の底面に須恵器杯などが検出された。土坑底面は皿状を呈している。土坑は砂質シルトを主体とする堆積物で、自然埋没していた。

SK－2

SK－2は、長さ2.8m、幅1.2mを測る、楕円形土坑である。土坑は長軸を東北東－西南西に向ける。土坑底面は緩やかに開くU字形を呈する。出土遺物は認められなかったが、自然埋没状態にある土坑内の堆積物は、その色調・粒度などから中世の遺物包含層に最も近いものと考えられる。

SK－3・4

SK－3・4は、今回の調査区内で最も高い、微高地の中央部に位置している。ともに不整形な平面形態を呈しており、SK－3が長さ1.2m、幅0.9m、SK－4は長径約1.8mを測る。土坑内は、いずれも自然堆積により埋没していた。出土遺物はないが、近代～現代の撹乱ではないことは、埋土から明らかで、中世以降、近世までに属するものであろうか。

C．4・5・7区の遺構（図版22・23　写真図版17）

4区では掘立柱建物跡、柵列、ピット、溝、土坑などが、地形の一番高い部分を中心に検出された。5・7区は4区と同じ扇状地形にあるが、削平部分が多いため、溝、ピット、土坑などが少数検出されたにとどまる。遺物の出土状況も希薄であったが、4区で検出された集落と一体のものと思われる。

SB—1　桁行2間（4.4m）以上、梁行2間（4.8m）の総柱建物と推定される。ピットの埋土中からは12・13世紀の須恵器碗・土師器皿などが出土している。

SA—1　柱間4間の柵列で、総延長は8.7mである。

SA—2　柱間4間の柵列で、総延長は8.4mである。

SD—1　現畦畔の直下に検出された溝で、幅2.3m、深さ15cmである。埋土からは須恵器、丹波焼、石鍋などが出土しており、13世紀後半ごろと考えられる。

3．遺物

A．１区の遺物

SH－１出土遺物（図版24　写真図版18）

弥生土器の甕が出土している。123は外面を叩き後刷毛、内面を刷毛調整した小型の甕で、体部中央やや下よりの位置に接合痕が認められる。124～126も小型の甕で、124・125の外面には叩きが残る。

B．３区の遺物

１号墳出土遺物（図版24　写真図版18）

１号墳出土の遺物は、周溝内からの一括出土遺物である。いずれも須恵器であり、少なくとも甕２個体、杯Ｈ２個体以上、蓋２個体以上が含まれる。130～132は、杯Ｈの蓋と身である。130は天井部と口縁部を欠く。天井部は平坦で、回転ヘラケズリが施される。比較的顕著な稜が巡る。131の蓋は天井部が大きく膨らみ、回転ヘラケズリが3/4の程度まで施される。天井部と口縁部境界の稜は凹線に変化している。口縁端部は内傾する凹面となる。ＭＴ15型式に比定できよう。132は坏身である。底部には回転ヘラケズリが2/3程度の範囲で施されている。体部は丸みをもち、口縁部の立ち上がりは内傾する。端部は丸く納めている。ＴＫ10型式に比定される。133・134は、甕である。　は口縁部のみの残存である。外反しつつ開く口縁の端部は、肥厚し、外方にやや凹ませた面を形成している。外面には回転カキメ調整が施されている。134は概ね完形にまで復元できた個体である。球形の体部から、強く屈折して外反気味に開く口縁部をみせる。口縁端部は上方に拡張され、外方に段差をもつ端部を形成している。体部外面はタタキ整形の後カキメ調整が、内面には同心円ないし青海波タタキが施されている。

３号墳出土遺物（図版24）

杯Ｈ身・蓋３個体出土している。135は坏蓋である。平坦な天井部から、まるみをもって口縁部に至る形態を示し、天井部と口縁部の境界は不鮮明である。天井部には回転ヘラケズリが施される。口径12.7㎝、器高3.5㎝。ＴＫ209型式に比定できる。136は坏蓋である。膨らみを持つ天井部から、１条の凹線が形成する稜を境界として、口縁部に至る。回転ヘラケズリは、体部の2/3程度まで施される。口縁端部は内傾し、凹面となる。137は坏身である。平坦な底部から丸みを持って立ち上がる体部を見せる。底部の回転ヘラケズリは、体部の2/3程度に施される。受け部は小さく丸みをおびる。口縁部の立ち上がりは内傾し、口縁端部はまるみをもって終わる。口径12.2㎝、器高4.9㎝。ＴＫ10型式に比定される。

SK－１出土遺物（図版24　写真図版18）

ＳＫ－１からは杯身1個体、蓋2個体が出土した。127は杯蓋である。天井部は比較的平坦で、口縁部と分ける稜は丸みを帯びる。天井部の4/5程度にはヘラ削りが施される。口縁端部は内傾し、凹面となる。128も杯蓋である。大きく膨らむ天井部から、わずかに凸線状を呈する稜をへて、内彎気味に口縁部に至る。口縁端部は内傾し、凹面となる。129は杯身である。平坦な底部から丸みをもって立ち上がる。受け部は大きく斜め上方に突出する。立ち上がりは急斜で、直線的に口縁部に至る。口縁端部は内傾する凹面が形成されている。これら３固体の杯類はＴＫ47～ＭＴ15型式に属する。

包含層出土の遺物（図版24　写真図版18）

138・139は古墳時代の須恵器である。138は短頸壷、139は坏身である。坏身はその形態から、ＴＫ10型式に比定できよう。140は須恵器小皿である。短く直線的に開く体部を見せる。底部は回転糸切りで、

「大」の文字が墨書されている。13世紀代の所産であろうか。141の椀も概ね同時期であろう。142は白磁皿（？）の底部である。底面は釉薬が施されていない。

C．４・５・７区の遺物（図版25・26　写真図版19）

４区ピット出土遺物　143の須恵器碗はＰ4から出土したものである。底部は糸切りである。147の須恵器捏鉢はＰ42から出土したものである。口縁端面が斜めになるもので、12世紀のものである。144の土師器鍋はＰ47から出土したものである。口縁端部が外側につまみ出されるもので、13世紀のものである。145はP43から出土した土師器小皿で、底部は糸切りと思われる。146はＰ49から出土した土師器小皿で、手づくね成形である。

４区ＳＤ１出土遺物　148は須恵器碗で、底部は糸切りである。149は丹波焼甕である。口縁端部が垂下するものであるが、垂下部が本体と接合気味になっている。13世紀後半頃のものである。S2は石鍋の底部である。

４区包含層出土遺物　須恵器碗（150～152）、須恵器小皿（153・154）、須恵器捏鉢（155～159）、丹波焼甕（160・161）、美濃焼折縁皿（162）、白磁碗（163）、青磁碗（164～166）などが出土している。須恵器は12～14世紀のものが含まれている。丹波焼甕は160がⅢ期で14世紀代、161がⅣ期で15世紀代である。美濃焼折縁皿(162)は美濃大窯Ⅱ期で16世紀中葉のものである。163は白磁碗Ⅴ類、164は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－２類、165は龍泉窯系青磁の小碗、166は同安窯系青磁碗Ⅲ類である。

５区包含層出土遺物　須恵器碗（167～169）、須恵器捏鉢（170）、土師器鍋（171）などが出土している。12～13世紀頃のものである。

７区包含層出土遺物　172・173は須恵器碗、175～177は須恵器捏鉢、178は須恵器甕で、179は土師器鍋である。これらの須恵器・土師器は12～14世紀頃のものである。180は丹波焼擂鉢で、16世紀頃、174は丹波焼碗で13世紀前半のものである。Ｆ－１は鑿状の鉄製品である。S3は石臼である。

４．小結

堂ノ元地区の遺構群は、弥生時代後期、古墳時代後期、中世の三時期に大別できる。

八多中遺跡内で弥生時代の遺構が検出されているのはこの地区のみである。検出されている住居跡は１棟のみであることから、ごく短期間の小規模な集落であったと思われる。

古墳時代の遺構群は、３基の古墳と土坑により構成されている。他の古墳に比べて低位に位置する点は特徴的である。墳丘本体の遺存状況が劣悪であるため、その詳細を断定的に記載することはできない。主体部は、周溝内への石材の転落などが認められなかったことを考えると、木棺直葬であった可能性がある。時期は周溝底における須恵器の出土状況から、概ね６世紀初頭から後半（ＴＫ47～ＴＫ10型式）に属すると言えよう。

中世の遺構群は微高地の高い部分に位置している。４区を中心とした部分に掘立柱建物跡などが認められ、小規模な集落が想定される。12世紀後半頃より開発が始まり、16世紀頃まで存続している。

第５章　カイモリ地区の調査

1．概要（図版27）

A．概要

沖積地に面した低い段丘上にあたる地区で、堂ノ前地区とは谷によって隔てられる。北側も調査で検出した流路によって画されており、この地区で遺構が検出された範囲は南北約75ｍ、東西は約35ｍである。ただ東西については遺構の検出状況からみて、さらに東に広がり、おおよそ最大幅が55ｍ前後になることが想定される。

遺構は１区を中心として検出されており、２区では遺構密度は薄くなる。また４区では僅かに検出されたに過ぎない。検出された遺構は平安時代末～室町時代の掘立柱建物・土坑・溝・池状遺構があるが、限定された調査区のため、建物等について全容を把握できていない。

遺物もやはりこの時期のものが最も多く出土しており、須恵器・土師器・輸入磁器・国産陶磁器・瓦質土器等が見られる。量的には須恵器が最も多いが、土師器が皿類を中心に比較的多くなっている。

B．地形

扇状地性の地形が段丘化して形成された地形と、丘陵裾部の段丘地形からなり、１・２区は前者に、４区は後者にあたり、３区は両方の地形に跨る調査区である。地区の南北両側は埋没谷で限られる。

C．基本層序

遺構検出面はにぶい黄橙色シルト層上の1面であり、２～４区では耕土・客土層下で検出される。１区では客土下に暗灰色砂質シルト、灰茶褐色シルトが堆積していた。少量の遺物が含まれていた。南側の谷部は灰褐色シルトを中心とした土層で埋没し、最下層から弥生時代に相当する杭などが確認されている。内部の堆積層からは飛鳥時代から中世前期の土器が出土している。北側の谷部は最下層に飛鳥時代の土器を含む砂礫層が堆積し、この層上に暗褐色シルトなどが堆積していた。この層中には中世前期の遺物が含まれていた。

2．遺構

A．１区の遺構（図版28　写真図版20・21）

南側は谷部で、北側は流路により画された南北約75ｍの地区で、南側谷部の南は堂ノ元地区となる。遺構は1区の中でも中央のＳＸ－１より南側の地区で建物跡・土坑・柱穴が密集して検出されている。ＳＸ－１より北側の地区では建物跡なども検出されているが、土地を方形に区画する溝が多く、柱穴などの遺構は少ない。調査の関係から柱穴群を建物跡として建物として復元できたものは僅かである。

SB－1

東西２間（4.0ｍ）、南北２間（4.2ｍ）以上の総柱建物跡に復元している。建物方位はN45°Ｅである。柱間は東西が東から200㎝、南北は南から約210㎝を測る。柱穴は径20～30㎝前後で、深さは約14～25㎝を測る。

SB－2

方位をN50°Eとする、桁行4間（約9.2m）、梁行2間（4.2m）以上の総柱建物跡である。柱間は桁方向が約230cm、梁方向が210cmを測る。柱穴は径25～40cm前後で、深さは約20～30cmを測る。182・183の須恵器椀が出土している。

SB－3

2間分の柱穴が直線的に並んで検出されたものであり、建物跡とすれば調査区外に伸びるものと思われる。柱間は約190cmであり、柱穴は径25cm～50cm、深さは8cm～15cmを測る。

SB－4

方位をN50°Eとする、南北2間（約4.8m）、東西2間（約4.0m）以上の総柱建物跡である。柱間は南北方向が北から約220cm・260cmで、北側が狭くなっている。東西方向は東から220cm・180cmを測る。柱穴は径20～30cm前後で、深さは約20～30cmを測る。

SB－5

SD－9・11・12によって区画された内部に位置する建物跡で、方位をN45°Eとする南北3間（約6.0m）、東西2間（約2.9m）以上の総柱建物跡である。柱間は南北方向が約200cm、東西方向が約150cmを測る。柱穴は径約25～40cm前後で、深さは約10～25cmを測る。

SB－6

方位をN39°Eとする、南北2間（約4.6m）、東西2間（約4.0m）以上の総柱建物跡である。柱間は南北方向が北から200cm・260cmで、北側が狭くなっている。東西方向は約200cmを測る。柱穴は径約20～30cm前後で、深さは約15～30cmを測る。

SK－11

径約46cmの円形を呈する土坑で、深さは約11cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトで、207・208の土器が出土している。

SK－12（図版29　写真図版23）

長軸約120cm、短軸約110cmの楕円形を呈する土坑で、南端はSK—13と切り合っている。深さは約46cmを測り、中央からやや北よりの埋土中間層には焼土層とそれを覆う炭化物層が認められた。

SK－13（図版29　写真図版23）

南北100cm、東西75cmの土坑で、SK－12・SD－5と切り合って不整形な平面形となっている。深さは約37cmを測り、埋土上層には炭化物が多く含まれていた。213～215の土器類が出土している。

SK－14（図版29　写真図版23）

径約40cmの円形を呈する土坑で、深さは約20cmを測る。埋土上層には炭化物が多く含まれていた。

SK－38

径約70cmの円形を呈する土坑で、深さは約32cmを測る。埋土は黄灰色及び浅黄橙色の砂質シルトで、黄灰色砂質シルトには土器類が多く含まれていた。その中で212の土師器を図化している。

SK－42（図版29　写真図版23）

SK－12と切り合って検出された径約95cm・深さ約50cmの土坑で、SK－12同様、埋土中間層には焼土層とそれを覆う炭化物層が確認された。埋土には遺物が多く含まれており、その中から209～211の土師器を図化している。

SK－45

径約60㎝・深さ約20㎝の土坑で、埋土は暗青灰色及び青灰色シルトであった。内部に中心部を除いて弧状に礫が詰められており、柱穴であった可能性が高い。205・206の土器が出土している。

SX－1（図版30　写真図版22）

長さ約10.8m・最大幅約1.8mの弦状に検出された遺構で、深さは約64㎝を測る。埋土は全体に黒あるいは暗い粘質土及び粘砂であったが、中間の第11層だけが黄色粘質土となって異質であり、西側から人為的に投棄された土層とみられる。この層上には礫が認められたものの遺構は認められず投棄された目的は不明である。この層の下層にあたる第12層西半には拳大から人頭大の礫が多く認められており、この礫も故意に投棄されたものと考えられる。土層の堆積状況からみて、この遺構は池あるいは流路内の溜まりとみられるが、どちらとも断定できなかった。

埋土からは321～350のように多くの遺物類が出土しているが、339・340～342・344・346・348は第11層の黄色粘質土より上層から、321～331・335～338・347・349・350は下層から出土したものである。

SR－2（写真図版22）

地区の北端で検出された巾約5.5m、深さ1.3m、断面形がほぼ逆台形となる流路である。断面観察では当初深さ1.1m の流露であったものが一旦埋没し、再度深さ30㎝の流路として機能したことが窺えた。そのため北肩は当初の肩と新しい肩の間に土層の堆積が認められている。この流路も区画を創出する溝類と同一の方向性をもち、集落の北端を区画する性格をもつものと考えられる。ただ調査区が狭小なため人工的に構築されたものかどうかの確定はできなかった。351～353の須恵器・陶器が出土している。

溝一覧表

遺構名	巾(㎝)	深さ(㎝)	埋　土	遺　物	備　考
SD－1	50	11～16	灰褐色砂質シルト	277	
SD－3	60	6	褐灰色シルト質細砂	279	
SD－4	45～60	3～5	灰黄褐色極細砂	278	SD-4Bは土坑か？
SD－5	30～40	5	褐灰色砂質シルト	220～230	SK-12·13·14を切る
SD－9	110	10～18	明青灰粘砂	254～256	
SD－11	35～70	4～8	青灰砂質シルト	258・259	
SD－12	35～100	5～41	青灰砂質シルト		端部は土坑状
SD－15	50～95	10	明青灰粘砂	260～264	
SD－16	30～50	10	灰オリーブ色砂質シルト		SD-17に切られる
SD－17	50～95	10	灰オリーブ色砂質シルト 灰オリーブ砂質シルト（極細砂） 暗青灰シルト	257	SD-16を切る
SD－18	150～180	24～30	灰オリーブ色砂質シルト 青灰シルト 暗青灰シルト		2条の溝が切りあう
SD－20	30～55	12～16	灰色砂質シルト 灰色砂質シルト（細砂）	276	
SD－23	55	9～13	青黒色砂質シルト 緑灰色＋緑黒色粘質シルト	231～244	
SD－24	50	8～14	青黒色砂質シルト 緑灰色＋緑黒色粘質シルト	265～267	
SD－25	35～60	7～20	青黒色砂質シルト 緑灰色＋緑黒色粘質シルト	245～253	SD-28を切る
SD－28	60	9～13	暗青灰シルト	268～271	SD-25に切られる
SD－29	25～65	3～12	灰色粘質シルト 緑灰色＋緑黒色粘質シルト	272・273	
SD－30	40～50	6～11	暗紫灰粘土質砂	274・275	

溝跡群（図版28　写真図版21・22）

検出された溝は21条あり、ＳＤ－９・11・12・16・17・20・23～25・28～30のように、ほぼN45°Ｅもしくはそれに直交する方位とし、方形の区画を創出する溝群と、ＳＤ－２・15のようにほぼ同方位をとりながらも区画を創出しない溝群、区画を創出する溝群とは全く異なった方位のＳＤ－１・３～５がある。区画を創出する溝群の内、ＳＤ—16・17は切り合い関係にあり、ＳＤ—16には改修の痕跡が認められた。またＳＤ－18にも2回程度の改修が認められている。ＳＤ－24・25とＳＤ－20・30は約1.1ｍｍの間隔で平行している。ＳＤ－25・28には切り合い関係があり、ＳＤ－25が先行し、ＳＤ－28が後出する。規模等は別表のとおりである。

B.　２・３区の遺構（図版31　写真図版24）

２区の西端は堂ノ元地区とカイモリ地区を分ける谷部に向かって流下する自然流路が検出され、遺構はこの流路より東側で検出された。２区で検出された遺構は建物跡３棟・溝２条であり、３区では２区から連続してくる溝1条である。この２・３区に連続する溝は２区の遺構の項でまとめて記述する。

SB－1

方位をN45°Ｅとする南北３間（約7.5ｍ）、東西１間（約2.2ｍ）以上の総柱建物跡である。南北方向の柱間は北から260㎝・240㎝・250㎝を測る。柱間から棟方位は南北とみられる。柱穴は径約20～30㎝前後で、深さは約20～25㎝を測る。

SB－2

方位をN45°Ｅとする南北２間（約5.0ｍ）分の柱列のみが検出された。柱間は約250㎝を測る。柱穴は径約20～30㎝前後で、深さは約20㎝を測る。

SB－3

方位をN45°Ｅとする南北３間（約7.5ｍ）分の柱列が検出された。柱間は約250㎝を測る。柱穴は径約30～35㎝前後で、深さは約15㎝を測る。

SD－3

２区東端から３区南端にかけてＬ字状に検出された溝で、巾約60㎝、深さ約25㎝を測る。埋土は灰黄色シルトであった。484･485の須恵器類が出土している。

SD－4

ＳＤ－３を切った状態で検出された溝で、巾約50㎝、深さ約10㎝を測る。埋土は黄灰色砂質シルトであった。486の青磁椀が出土している。

C.　４区の遺構（図版27　写真図版25）

丘陵裾部の段丘上にあたる調査区であるが、東１／３ほどは谷部になっていた。調査区の西半から土坑1基と柱穴が検出されている。柱穴は建物跡等には復元できなかった。

SK－7（写真図版25）

長軸約2.7ｍ、短軸約2.1ｍの楕円形を呈する土坑で、深さは約50㎝を測る。褐灰色シルトを中心とした埋土であった。内部には40㎝大までの礫が多く入れらていた。

3．遺物

A．１区出土遺物

遺構内や包含層から中世に属する遺物が多く出土している。出土した遺物には須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・磁器・陶器等の土器類の他、点数は僅かであるが石製品・金属製品がある。

土器類の内、須恵器には椀・小皿・鉢・甕・壺がみられるが、椀と小皿類が圧倒的に多く、甕・鉢類は少ない。壺は口縁部片が１点みられるのみである。これら須恵器類は東播系のものと小名田窯のような地元産のものとが存在するが、十分な検討は行っていない。

土師器は皿類と鍋・釜類があり、個体数では皿類が多い。皿類は手づくね整形のものばかりであり、底部を糸切りしたものは認められない。また器形・整形技法に違いがみられ、浅い器形で手づくね成形の後口縁部のみヨコナデするⅢＡ、手づくね成形で比較的深い器形となるⅢＢ、退化した「て」の字状口縁となるⅢＣの３種がある。ⅢＡは粗雑な造りの地元産であり、口径８～10㎝の小皿と口径14㎝前後の皿がある。ⅢＢ・ⅢＣは京の影響を受けたものとみられる。ⅢＢには口径８㎝前後の小皿、口径10㎝前後の中皿、口径13㎝前後の皿が、ⅢＣには口径15㎝前後の皿のみが存在する。

ＳＢ－２出土土器（図版32）

182・183の須恵器椀が柱穴から出土している。共に平底で口縁部は直線的となったものである。

その他柱穴出土土器（図版32　写真図版26）

184～200は建物として復元できなかった柱穴から出土した土器類である。184～189の須恵器椀類はすべて底部は糸切りで平底のものである。体部に丸みを残す185・186、体部が直線的となる184・188、底部が大きくなって杯状の器形となる187がある。190・191は須恵器の小皿で、低部は糸切りである。

192～196は土師器皿類であり、192・193はⅢＢの中皿、194はⅢＡの小皿、195・196はⅢＡの皿である。197は土師器椀の底部である。底部外面に板状の圧痕がみられる。

198は白磁の皿で、口縁部が外反する。内面から口縁部は施釉され、口縁部下は露体である。

199・200は国産陶器で、199は瀬戸美濃の天目椀の底部である。内面は施釉され、外面は露体である。200は丹波の鉢と思われる底部で、底部周囲を１回のヘラ削りする。内面に使用により生じたと思われる摩滅が認められる。色調はにぶい赤褐色を呈する。

土坑出土土器（図版32　写真図版26）

201～214は各土坑から出土した土器類である。201～204の須恵器・土師器はＳＫ－７から出土している。201・202は土師器のⅢＡ類で、201は小皿、202は皿である。203は須恵器椀、204は須恵器鉢で片口部を有する。205・206はＳＫ－45から出土した須恵器と土師器の小皿である。205は比較的口縁部の立ち上がりが大きい器形である。206はⅢＡ類の小皿である。207・208はＳＫ－11から出土した須恵器椀と土師器ⅢＡの小皿である。209～212は土師器ⅢＢ類であり、209～211はＳＫ－42から出土したもので、209が小皿、210・211が中皿である。212はＳＫ－38出土の中皿である。213～215はＳＫ－13から出土した須恵器椀・鉢と国産陶器の皿である。214の口縁部が大きく拡張された鉢で、神出産であろう。

溝出土土器（図版33・34　写真図版26・27）

220～279は各溝から出土した土器類である。220～230はＳＫ－12・13・14に含まれるものもあるが、区別が困難であるため、ＳＤ－５出土として扱った。220～229は土師器ⅢＢ類で、220～226が小皿、227・228が中皿、229が皿である。216・217は須恵器椀、218・219が須恵器鉢である。鉢類は口縁部を上方に

拡張する。230は瓦質の火舎である。

231～244はＳＤ－23から出土したもので、231～236は須恵器椀、237は須恵器小皿である。椀類には比較的丸みをもった器形と浅くなった器形が存在している。238～243は土師器皿Ａ類で、238～241は小皿、242～243は皿である。242は底部と口縁部の境が屈曲気味である。244は土師器鍋で、口縁部は内湾し、口縁端部は面をもつ。

245～253はＳＤ－25から出土したもので、245～251は須恵器椀、252は須恵器小皿、253は土師器皿Ａの小皿である。須恵器椀類は口縁部が直線的となっている。

254～256はＳＤ－９から出土した須恵器椀・小皿と白磁椀である。256の白磁は口縁部が玉縁状となる。257はＳＤ－17から出土した土師器皿Ｂ類の小皿である。258・259はＳＤ－11出土の白磁小皿と須恵器椀である。260～264はＳＤ－15出土の須恵器小皿・椀と土師器皿Ａ類の小皿・皿及び土師器托底部である。須恵器椀は口縁部が丸みをもち、底部は僅かに平高台となっている。265～267はＳＤ－24から出土した須恵器椀、土師器皿Ａ、瓦器椀である。瓦器椀267は内面全体にヘラ磨きを施すが、外面は指頭痕を残したままである。268～271はＳＤ－28から出土した須恵器椀、土師器皿Ａ類の小皿と皿、白磁椀の底部である。271の白磁椀の底部周囲は露体である。272・273はＳＤ－29から出土した須恵器椀と小皿である。272の椀は口縁部下が強く撫でられている。274・275はＳＤ－30から出土した須恵器椀と小皿であり、274は口縁部が内面に肥厚する。小名田窯産であろう。276はＳＤ－20出土の須恵器小皿、277はＳＤ－１出土の律令期の須恵器杯Ａである。278はＳＤ－４出土の丹波焼の擂鉢である。擂目はヘラ書きである。279はＳＤ－３出土の瀬戸の天目椀である。全面施釉されており、古瀬戸後期Ⅱ段階のものであろう。

南側谷部出土土器（図版35）

堂ノ元地区とわける谷部から出土した土器類である。谷部の最下層からは杭等の木製品とともに弥生土器の小片が出土している。

谷部から出土した土器類には須恵器皿・椀・鉢・甕、土師器皿・椀類、瓦器椀、白磁椀・皿、青磁椀・皿が出土している。280～287は須恵器の小皿で器高が低い280～285と器高が高い286・287が存在している。椀類はいずれも平底で、口縁部が直線的に開くものが多く、301は器高も低くなっている。304は東播系須恵器の鉢で、体部は丸みをもち、口縁部は小さくつまみ上げられる。305も東播系須恵器の甕である。

土師器皿類は全てＡ類で、306～310は小皿、311は皿である。312は高い土師器椀の輪高台である。313・314は瓦器椀であり、314は内面にヘラ磨きが残る。

315～319は輸入磁器類で、315～317は青磁椀類である。319は青磁の皿である。318は白磁椀で口縁部は玉縁となる。320は白磁の皿である。

ＳＸ01出土土器（図版36　写真図版27・29）

須恵器皿・椀・鉢・甕、土師器小皿・中皿・鍋・釜、瓦器椀、瓦質土器釜、丹波焼壺・甕、青磁椀、白磁椀・合子が出土している。321～325は須恵器小皿で、極めて器高が低い器形と比較的器高の高い器形がある。326～331は須恵器椀類で、全容のわかる326は底部が大きくなっている。331の底部は小さく、内面見込み部に段をもつ。322・323は須恵器鉢で、332の内面はナデが施されている。

336～340は土師器の皿類で、336～338は小皿Ａ、339・340は中皿Ｂである。341の土師器鍋は口縁部が水平につまみ出される。342は土師器甕、343は土師器の釜である。343の内面は刷毛調整の後、板状

工具によるナデ仕上げが施されている。

344は瓦器椀で、内面は細かくヘラ磨きされている。335は焼成等から丹波焼の壺とみられる。

347は青磁椀、348は青磁椀の底部、349は白磁椀の底部、350は白磁の合子である。350は口縁部に施釉される。

ＳＲ－２出土土器（図版36　写真図版27・29）

351～353は調査区北端の流路から出土した土器類である。351は須恵器椀で、低部はヘラ切りであり、口縁部外面に墨書が施されている。352は須恵器壺の頸部、353は丹波焼の壺と思われる底部である。

包含層出土土器（図版37　写真図版28・29）

354～368は1区中央の現在の溝より南側の包含層より出土した土器類であり、須恵器小皿・椀・鉢、土師器小皿・皿・鍋、瓦器椀、青磁椀・皿、白磁椀、瀬戸美濃の椀・皿・天目椀、壺がある。

354～359は須恵器小皿で低部は糸切りである。器高の高い器形と低い器形が存在する。360～362の須恵器椀の内、362は見込み部に段を残す。363～365の須恵器鉢はいずれも口縁部を拡張している。

366・368は土師器小皿Ａ、368・369は土師器皿Ｃである。土師器鍋370の口縁端部は斜め下方につまみ出されている。

371・372は瓦器小皿、373・374は瓦器椀である。ともに内面にヘラ磨き、外面に指押さえを残す。

375～379は白磁椀の口縁部と底部、380は青磁椀、381は青磁皿である。382～389は国産の陶器類であり、瀬戸美濃焼である。

包含層出土土器（図版38～40　写真図版28・29）

390～483は調査区中央の現代溝より北側の包含層から出土した土器類であり、特にＳＸ－１の周辺から多く出土している。出土した遺物には須恵器・土師器・瓦質土器・輸入陶磁器・国産陶器がある。

390～404は須恵器の小皿類で、390～402は平底、403は平高台、404は輪高台である。平底のものには器高の高い器形と浅い器形が存在している。405～426は須恵器椀である。器形的にはバラエティがあり、405・406の低体部の境は壇状となる。423・424は底径が大きく器高が低い器形になっている。
427～431は須恵器鉢で、小形の427と428は小名田窯産、429～431は東播系の鉢である。

433～460は土師器類で、433～449は皿Ａである。450・451は椀で、451は糸切りである。452～459は鍋類で、452～455は口縁部が内湾し、456は口縁部が内側に突出、457・458は口縁部が斜め下方につまみ出され、459は口縁部が直立する器形である。453は甕の可能性もある。460は甕である。

輸入陶磁器の内、463～467は白磁の椀・皿、468・469は青磁の椀・皿、470は天目椀である。

国産陶器の内、471～473は瀬戸美濃焼、474～481は丹波焼である。475・476の甕は丹波焼でも初期のものである。

石製品（図版41　写真図版30）

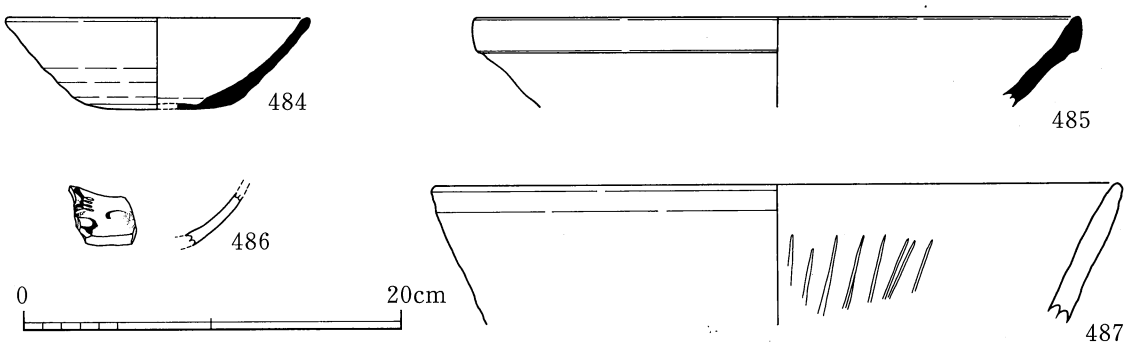
いずれも包含層からの出土である。Ｓ－４は磨製石製品で、石戈の破片と思われる。中央に鎬部が造り出され、太い茎がつく。磨きは粗い。Ｓ－５は打製の石製品で、両側に刃部が造り出されている。両端は欠損する。Ｓ－６は板状に磨製された不明の製品である。Ｓ－７は石鍋の底部付近の破片である。

鉄製品（図版41　写真図版30）

２点とも包含層からの出土である。Ｆ－２は一端を欠損しており、現状では平面が楕円の弧状を呈する。鉄板をＵ字状に折り曲げられ、ほぼ直交する方向の２カ所から釘止めされた製品である。

B．２区出土遺物（第３図）

ＳＤ－３から484の須恵器椀、485の須恵器鉢、486の青磁椀が、包含層から487の丹波焼擂鉢が出土している。487の擂目はヘラ描きである。



第３図　２区出土遺物

４．小結

この地区では堂ノ元地区と分ける谷部からＳＲ－２とした流路の間の１区を中心に多くの遺構が検出され、一部が２区に広がっていることが判明した。遺構の広がりは南北約80ｍ、東西35ｍ以上に及ぶ。

検出された遺構は掘建柱建物跡及びそれと推定される遺構が７棟、溝、柱穴多数などである。掘建柱建物跡や柱穴は遺跡の南半に多く検出され、１棟を除きほぼ同じ方位をとり、規則的に配置されていたようである。溝類は１区の北半で多く検出され、それぞれ直交して方形の区画を造り出している。この区画内で検出された掘建柱建物跡は１棟だけであり、この区画は建物を建築するためだけに造り出されたものではなさそうである。区画の目的ははっきりしないが、農業に伴うようなものであることも考えられる。

遺物は須恵器・土師器を中心とし、輸入磁器類、国産陶器など、多量に出土した。須恵器には東播系のものと小名田窯にみられる在地系のものが存在する。土師器皿類には京都系のものと在地系のものがあり、両者は共伴していない。ＳＸ－１では下層から在地系のものが、上層から京都系のものが出土しており、土師器皿類では在地系から京都系に交代したものとみられる。その時期については必ずしも明確でないが、ＳＤ－５やＳＸ－１の遺物から、神出Ⅲ期頃としておきたい。

国産陶器類は丹波焼・瀬戸美濃焼があり、丹波焼は地域的な関係もあるが、三本峠など、その開始期からのものがみられる。

遺跡の時期は東播系須恵器の編年観にあてはめると、神出Ⅱ期からⅢ期とみられるものが多く、検出された遺構の多くもこの時期該当するものであろう。ただ一部、ＳＤ－４から出土した遺物のように15世紀後半に下がるものもあることから、遺跡は11世紀後半から15世紀前半を中心に、15世紀後半まで存続していたと判断される。

第６章　フケ地区

１．概要

Ａ.概要（図版42　写真図版31）

今回の調査区は区画整理に伴う街路部分に相当しており、この段丘面を「Ｆ」字形に縦・横断している。調査の便宜上Ａ～Ｃ区に区分して調査をおこなった。

Ｂ．地形

ふけ地区は八多川の左岸に接した段丘面上に立地する。八多川の現河床との比高差は、約2.5ｍである。段丘面の標高は、171.5ｍ～173.0ｍを測り、東および北に向かって、緩やかに傾斜している。

Ｃ．基本層序

遺構検出作業をおこなったいわゆる地山面は、黄褐色砂質シルトを主体とした堆積物で形成されている。基本的には、地山直上に中世の遺物を包含する褐灰色の砂質シルト層が堆積している。

２．遺構

Ａ．Ａ区の遺構

ＳＢ－１および池状遺構（図版43・44　写真図版33）

ＳＢ－１は、Ａ区南部に位置する。調査区内では3間×5間までが検出された。南北に長軸をもつ、総柱の掘立柱建物跡である。ＳＢ－１の北側に重複するように、池状遺構と呼称した浅く広い落ち込みが検出された。ＳＢ－１と同時に構築されたものと判断される。

ＳＢ－２（図版46　写真図版32）

ＳＢ－１の北に位置する。長軸はＳＢ－１とほぼ直交する方位（東西棟）を示す、南北2間、東西4間の総柱掘立柱建物跡である。建物西辺の柱穴列はＳＢ－１の西辺柱穴列の延長線上に並ぶ。

ＳＢ－６（図版45　写真図版34）

周辺に関連遺構は見られず、２間×１間分の柱穴（５基）が検出されたのみである。

ＳＫ－１

Ａ地区中央に位置する、円形の土坑である。ＳＢ－１の北西に接し、出土遺物も同時期のものを含む。

ＳＤ－１

ＳＢ－２の西に接する位置にあり、ＳＢ－２の西辺に、ほぼ平行して直線的に延びる。

ＳＤ－８

規模および延長方向からみて、ＳＤ－７と同一である可能性が高い。

ＳＤ－９・10

ＳＤ－９は、ＳＤ－８の先端に接する位置からはじまり、ＳＤ－10に接する。ＳＤ－10との間に重複は認められなかった。ＳＤ－10は、Ａ地区北端角に位置し、延長方向は東西であろう。

B．B区の遺構

SB－3（図版46　写真図版32）

ＳＢ－３はＳＢ－２の南に位置し、1間×3間まで検出された。東西に長軸をもつ側柱掘立柱建物跡である。北辺の柱穴列はＳＢ－２の北辺の延長上にある。北および西側を不規則な柱穴列が取り囲む。

SD－4・5

Ｂ地区北部、ＳＢ－２とＳＢ－３の間に位置する。ともにＳＤ－１とほぼ平行する延びを見せる。

SD－6・7（図版48　写真図版34）

Ｂ・Ｃ地区で検出され、ほぼ直線的に延びると考えられる。断面観察においてＳＤ－６・７、ＳＤ－７・11の重複関係は認められなかったことから、いずれも同時期に機能していたものと判断された。

C．C区の遺構

SH－1（図版47）

Ｃ区中央部で検出された竪穴住居跡である。方形住居の南東角を含む1/2弱が、調査区内でとらえられたが、残る３方の角を含む残りの部分は、調査範囲外であった。

SB－4・5（図版45　写真図版34）

ＳＢ－４・５は、いずれも建物跡の北辺が検出されたのみであるため、建物の規模は不明である。

掘立柱建物跡の規模

番号	間×間　　短軸×長軸	方位	柱穴の大きさ	備考
1	（3）×5　(7.20) m×10.40m 柱間　(2.40～2.56)×(1.80～2.28) m	N－43.0° E	16～42cm	北側２間分が池状遺構と重複 ＳＢ－２と西辺が揃う
2	2×4　　4.48×8.76 柱間　(2.08～2.40)×(2.16～2.24) m	N－45.5° W	28～40cm	ＳＢ－３と北辺が揃う
3	(1)×(3)　　(2.20)×(6.76) 柱間　(2.20)×(2.16～2.28) m	N－47.5° W	24～44cm	ＳＢ－２と北辺が揃う 外周に柵？
4	3×？　5.20　×(？) 柱間　(1.64～1.80)×(？) m	N－10.0° E	52～60cm	西辺の柱穴列のみ検出
5	3×？　　4.12　×　(？) 柱間　(1.20～1.52)×(？) m	N－15.0° E	36～56cm	西辺の柱穴列のみ検出
6	2×(1)　　(1.84)×2.80 柱間　(1.84)×(1.40) m	N－31.0° W	44～56cm	西辺の柱列無し

3．遺物

A．A区の遺物

SB－1および池状遺構出土遺物（図版50　写真図版35）

ＳＢ－１柱穴土の遺物のうち、図示できるものは、柱穴３から出土した須恵器椀(511)のみである。

池状遺構からは多くの遺物が出土した。512は須恵器小皿である。底部中央が大きく上方に彎曲する。

513～522は須恵器椀である。底部に高台を作出するものはなく、いずれも糸切り無調整である。

523・524は須恵器片口鉢である。いずれも口縁端部はわずかに上方へつまみ出されている。

525は須恵器甕である。体部から強く屈曲して開く口縁部をみせる。口縁端部は、上面と外面を凹ませている。体部外面にはタタキが観察される。526は白磁椀底部である。逆三角形の断面形をみせる高台を作出しており、高台周辺は釉薬が施されていない。内面に、１条の沈線が陰刻されている。

SB－2出土遺物（図版50　写真図版35）

527は、柱穴12の掘方から出土した須恵器椀である。糸切り後無調整の平坦な底部から、やや膨らみをもつ体部が立ち上がるが、底部と体部の境界は不鮮明である。口縁部は外反気味となる。

528は、柱穴10の掘方から出土した土師器甕である。口縁端部は外方につまみ出されている。

SK－1出土遺物（図版49）

495・496は、須恵器椀底部である。497は須恵器壷の口縁部である。長頸壷と思われる。

SD－9出土遺物（図版49）

509は、須恵器椀である。底部中央を欠く。510は土師器土鍋である。口端部は外方に拡張される。

B．B区の遺物

SD－4出土遺物（図版49）

503は、須恵器鉢である。口縁部を残すのみで、片口部分も遺存しない。

SD－6出土遺物（図版49）

504は、須恵器小皿である。底部中央を欠く。505～507　は、須恵器椀である。508は、白磁椀底部である。高台外面は釉が施されていない。

SD－7出土遺物（図版49）

498は、須恵器小皿である。体部は直線的に開く。500・501は瓦器椀である。500は底部を欠くが、501は断面台形の高台をもつ。499は、小型の坏である。底部を欠く。502は、鉢の口縁部付近の破片。

その他の柱穴出土遺物（図版50）

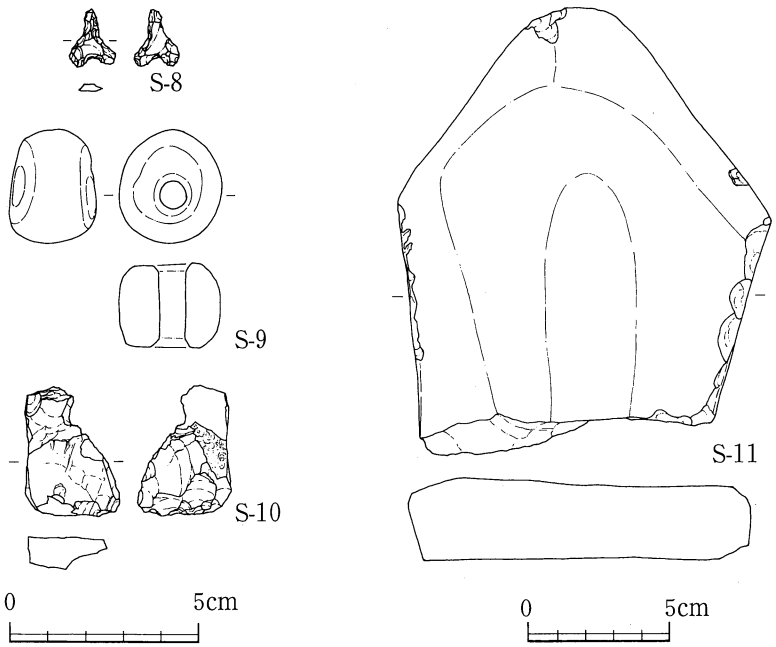
529は、柱穴5より出土した土師器羽釜である。530は土師器小皿である。

C．C区の遺物

SH－1出土遺物（図版49　第５図　写真図版35・36）

須恵器坏身・蓋が出土した。488～491・493　はＳＨ－１埋土内より、583はＣ区ＳＤ－７の埋土から、494は包含層から出土し、本来ＳＨ－１に帰属する遺物と推定された資料である。ＳＨ－１出土および関連遺物は、概ねＭＴ85型式に属するとみてよい資料である。

第５図Ｓ－11は、ＳＨ－１床面より出土した砂岩製砥石。きめ細かな砂岩の礫を用い、その１面を研



第４図　出土遺物４（石製品）

磨面としている。重量1050ｇ。

ＳＢ－５出土遺物（第５図　写真図版36）

第５図Ｓ－８は、ＳＢ－５の柱穴４より出土した凹基無茎式石鏃である。0.3ｇ。

Ｄ．包含層出土の遺物（図版51　写真図版36）

石器・石製品（第５図　写真図版36）

Ｓ－10は、Ａ地区より出土した、サヌカイト製楔形石器である。重量7.6ｇ。

Ｓ－９は、Ｃ区より出土した。めのう質の石材を用い、孔の縁辺には著しい光沢がある。重量19.6ｇ。

４．小結

ふけ地区で検出された古墳時代の竪穴住居跡は、出土した須恵器の型式から、古墳時代後期（６世紀後半）に属するものとしてよい。ＭＴ85型式期を中心とする時期に、集落が形成されたものだろう。

中世前半期（12世紀代～13世紀前半）には、整った配置を示す掘立柱建物群が出現している。ＳＢ－１とＳＢ－２の西辺、ＳＢ－２とＳＢ－３の北辺はほぼ揃えられており、かつ、ＳＤ－１・４・５という小規模な溝が、建物群に付随するかにみえる。また、規模の大きなＳＤ－６・７・８・11が、これらを囲むように設けられている。全体像は推測の域を出ないが、溝（ＳＤ－６・７）に囲まれた範囲は、一辺50ｍ程度であろう。集落というよりも、館的なものと解釈するほうが妥当かもしれない。

第７章　道ノ上地区

１．概要

Ａ．概要

道ノ上地区は、南北にのびる丘陵の東斜面から裾にかけての範囲を占め、標高は171ｍ～175ｍを測る。街路部分についての調査であったため、遺構群の広がりをとらえることはできなかった。

Ｂ．地形（写真図版41）

Ａ地区は、丘陵裾に近い緩斜面である。Ｂ・Ｃ地区は、丘陵斜面途中の平坦面である。Ｄ地区は急峻な谷にあたり、Ｅ地区は丘陵裾の平坦面である。Ｆ・Ｇ・Ｈ～Ｊ地区は、丘陵裾緩斜面上にある。

Ｃ．基本層序

道ノ上地区は、上述のように地形面の変換部を挟むため、調査範囲全体を通した基本層序は存在しない。丘陵斜面および裾部分では、地山面で検出され、その上位は現代の表土であった。ただしＥ地区では、地山上位に灰褐色を基調とする砂質シルト層の厚い堆積（細分される）が認められた（第６図参照）。

２．遺構

Ａ．Ａ区の遺構（図版52　写真図版42）

柱穴３基と土坑２基が検出された。近世末の遺物が出土てしており、当該時期の遺構群と思われれる。

Ｂ．Ｃ区の遺構

ＳＫ－３（図版54　写真図版42）

Ｃ区南部の、斜面にかかる部分に位置する、直径約1.4ｍの掘り方をもつ埋め桶遺構である。上部は削平により失われていたが、掘方の深さは0.46ｍ、桶の底径は0.84ｍを測る。遺物は出土しなかった。

ＳＫ－４（図版53　写真図版44）

歪んだ楕円径の土坑である。土坑の東半分が一段深く掘り込まれており、多数の礫が充填されていた。１石のみは平坦な面を持つ亜角礫であり、平坦面を上にして設置されていた。遺物は出土していない。

ＳＫ－５（図版54）

長方形の土坑である。南東部が攪乱により破壊されている。埋土中より近世磁器および炉壁（ないしは鋳型）破片が出土している。炉壁は、周辺の包含層からも出土している。

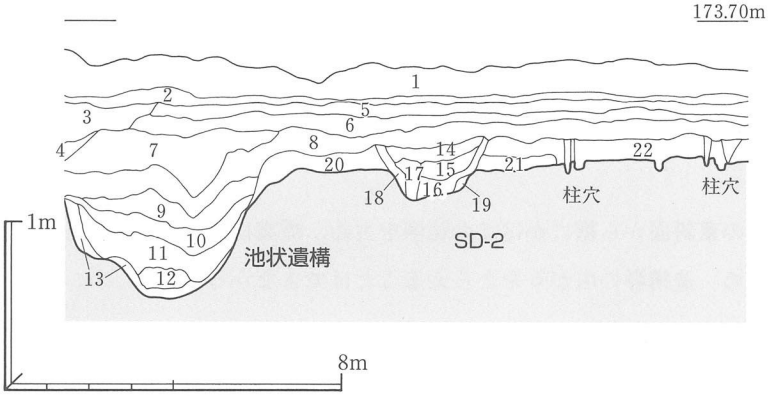
ＳＫ－６（図版53　写真図版44）

ほぼ円形の土坑である。坑内上半は、拳大以下の礫で充填されていた。顕著な遺物は出土していない。

Ｃ．Ｅ区の遺構

ＳＢ－１（図版55・56　写真図版43）

掘立柱建物跡は、調査区内で２間×３間まで確認できた。南側は調査区外に延びるため全体規模は不



第５図　Ｅ区南壁土層断面図

明である。柱穴内からは少数の中世前半期の遺物が出土している。

柱穴（図版56　写真図版43）

柱穴１では、柱痕部から丹波焼甕の胴部破片がまとまって出土し、意図的埋設と思われる。

ＳＤ－１・２

溝は４条が検出された。ＳＤ－１・２は、幅1m弱の溝で、平行して伸びる。ＳＤ－１は池状遺構に流入しており、ＳＤ－２も同様である可能性が高い。ＳＤ－４はＳＤ－１・２と直交する方位を示す。

池状遺構（図版55　第６図　写真図版44）

池状遺構は、Ｅ区の東南隅に位置する。直径は約５ｍ、深さは検出面から－0.7m前後である。

ＳＫ－１（図版56）

長楕円形を呈する土坑である。土坑北端の底から、土師器小皿1枚が出土している。

Ｄ．Ｆ区の遺構

ＳＢ－２（図版55・56　写真図版43）

調査区内で、２間×３間まで確認された。建物の南西部は調査区外にあるため、規模は不明である。柱穴の遺存状況は劣悪で、出土遺物もほとんど見られなかった。

Ｅ．Ｈ区の遺構（図版58　写真図版45）

調査区の北壁に沿って、直線的に並ぶ柱穴４基が検出されたが、柱間が一定しない。柱穴内からは、顕著な出土遺物は見られなかった。また遺物包含層からは、少数の中世前半期の遺物が出土している。

Ｆ．Ｉ・Ｊ区の遺構（図版58　写真図版45）

ＳＫ－２（図版58）

Ｊ地区の北西隅にあり、調査区外に広がるため規模は不明である。平安時代後期の遺物が出土した。

ＳＫ－３（図版58）

Ｊ地区の南隅にあるが、調査区が狭小なため全体の規模は不明。平安時代後期の遺物が出土している。

ＳＫ－４・５（図版58）

Ｊ地区北壁に接し、半ば以上が調査区外に広がる。ＳＫ－２・３と同時期の遺物が出土している。

3．遺物

A．A区の遺物（図版59　写真図版46）

SK－2出土遺物

556は、丹波焼の擂鉢である。赤褐色の焼成をみせている。557は、肥前系染付磁器の碗である。

B．C区の遺物（図版59　第7図　写真図版47）

SK－5出土遺物

558は、肥前系染付磁器の碗である。

第7図F－4は、断面がほぼ正方形をなす鉄製品である。下端が折損しているが、釘の可能性が高い。

C．E区の遺物（図版59　写真図版47）

SD－1出土遺物

563は、須恵器椀である。扁平な底部から、わずかに膨らみをもちつつ立ち上がる体部をみせる。

564は、須恵器鉢である。口縁部は玉縁状に拡張され、端部を上方につまみあげている。

池状遺構出土遺物

565は、池状遺構下層出土の須恵器鉢である。口縁部は上下に拡張されている。567は土師器鍋。外面に煤付着が顕著である。口縁端部には平坦な面を形成する。566は、丹波焼の鉢（？）口縁部である。

第7図F－5は、鉄釘である。先端を欠くが、ほぼ正方形の断面形態を示す。

SK－1出土遺物

568は土師器皿である。底部と体部の境界は不明瞭である。

柱穴出土遺物（図版59）

562は、柱穴2の柱痕部より出土した、須恵器杯身である。

D．J区の遺物（図版59　写真図版46・47）

SK－2出土遺物

569は、須恵器皿である。屈折して、外反しつつ立ち上がる体部をみせる。570・571は土師器皿。

SK－3出土遺物

572・573は、須恵器椀である。ともに、顕著な平高台をつくり、見込み部分は一段下がっている。は、強く膨らむ体部を持ち、口縁部は外反気味に終わる。

574は、黒色土器椀底部である。断面三角形の高台をもち、内底面にはヘラミガキが認められる。

578は、土師器皿である。平坦な底部と、そこから屈折して直線的に立ち上がる体部をもつ。

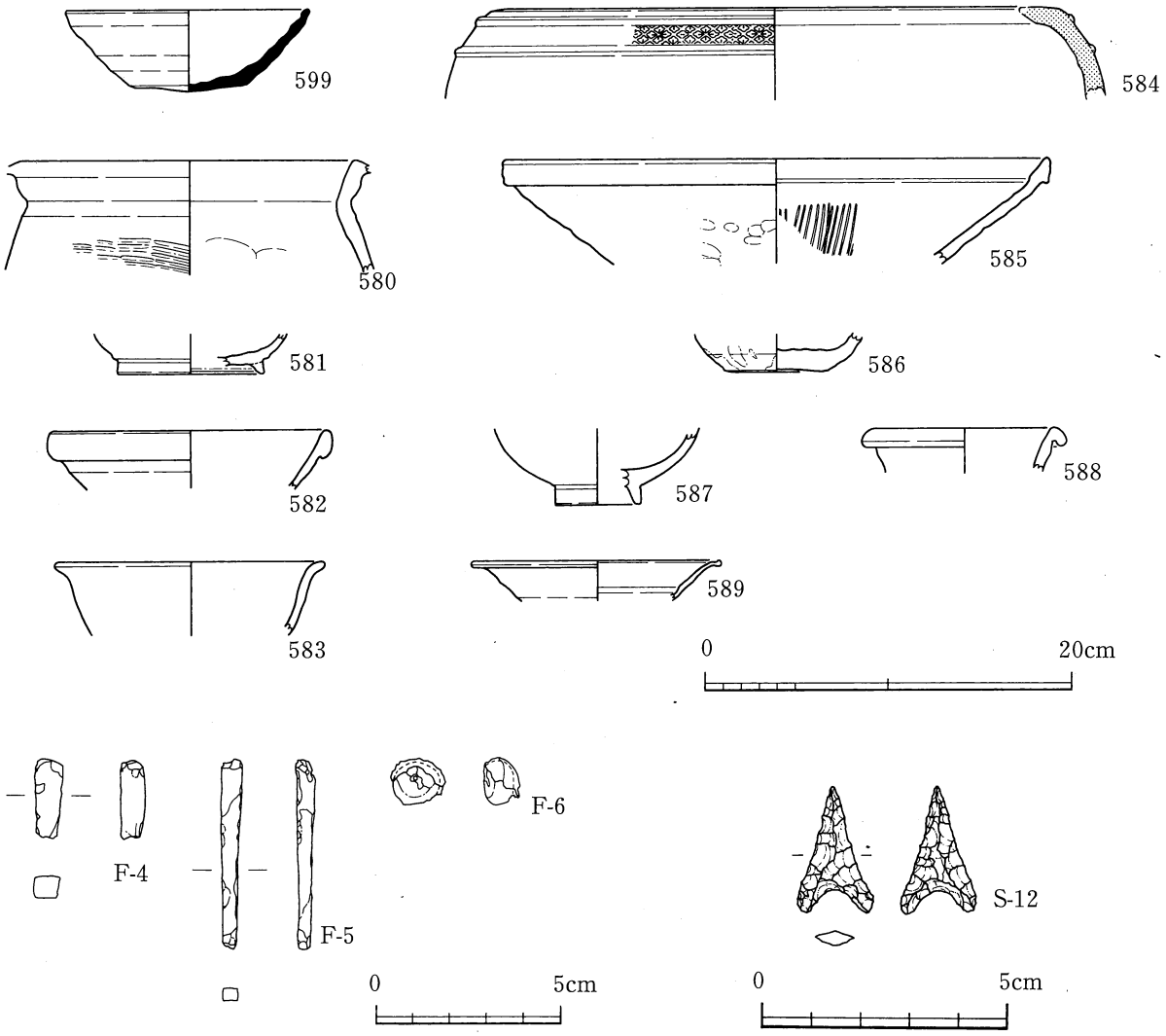
SK－4出土遺物

575は、黒色土器椀底部である。大きく外方に張り出した、薄い高台をもつ。

SK－5出土遺物

576は、須恵器椀である。体部外面下半に1条の沈線を施している。

577は、土師器杯である。平坦な回転糸切りの底部と、屈折して直線的に立ち上がる体部をもつ。



第６図　出土遺物２

包含層出土遺物　（第７図　写真図版47）

Ｆ－６は、球形の鉄製品である。劣化が著しく、元の形状・機能を推定することは困難である。

Ｓ－12は、サヌカイト製凹基無茎式石鏃。長さ25.9㎜、幅15.4 ㎜、厚さ3.6㎜、重量0.8ｇ。

４．小結

道ノ上地区で検出された遺構群は、３時期に大別される。

第１期は、中世前半期である。この時期に属する遺構群は11世紀末～12世紀前半と、13世紀前半を中心とした時期に細分される。１－１期の遺構は丘陵裾部の平坦面を中心に分布しており、掘建柱建物跡・土坑等から構成される集落の一部である。１－２期の遺構としては、Ｅ地区の遺構群があげられる。掘建柱建物跡を中心に、土坑・溝・池状遺構がある。

第２期は、16世紀代を中心とする時期である。柱穴の一部から、丹波焼などを中心とした当該時期の遺物が出土しているが、建物跡としては復元できず、遺跡の機能は明らかではない。

第３期は、近世後半期（18世紀後半以降）である。Ｃ地区では、鍛冶施設が廃棄された結果と思われる多数の遺物が包含層を中心に出土している。近世後期のいわゆる「村の鍛冶屋」であったろう。

第８章　岸ノ下地区の調査

１　概要

Ａ．概要（図版60　写真図版49）

岸ノ下地区は八多中遺跡のなかで最も南側にあたり、八多川東岸に位置する。最も高所である丘陵先端に位置する７区では、土師器などが散布していたが、遺構面は削平されたものと思われ、遺構は検出されなかった。１・２区は扇状地に位置し、中世の溝、畦畔などが検出されている。６・８・９区は段丘上に位置する。包含層には中世の遺物が含まれていたが、遺構はほとんど検出できなかった。９区では段丘崖下で中世の杭列が検出されている。３～５区は八多川の氾濫原に位置する。３区はわずかに近世の丹波焼などが出土していることから、近世以降に水田化したものと考えられる。４区では八多川旧河道の砂礫の上に、整地層が存在する。近世に宅地化された時に、整地が行われたものと考えられる。

Ｂ．地形

この地区の地形は大きく段丘上の部分と３～５区の八多川による氾濫原の部分に分かれる。段丘上の部分は東側から延びる丘陵端部である７区、丘陵の南側に位置する谷によって形成された扇状地形に位置する１・２区、扇状地形の影響を受けない６・８・９区に分かれる。

Ｃ．基本層序

段丘上の部分については黄褐色のシルト質極細砂を基盤とし、扇状地形の部分についてはその上に褐色の極細砂～細砂が堆積している。氾濫原部分については八多川の礫混じり細砂の堆積の上に、暗灰色シルト質極細砂が堆積し、湿地化していたようである。

２．遺構

Ａ．１区の遺構

調査地は東側に位置する谷の扇状地形上に立地する。調査区の東端部は谷状の地形を呈し、この谷状の地形を「へ」の字形に塞ぐかたちで杭列が検出された。杭列の両端は調査区外にまで延びている。その他に溝、ピット、土坑などが検出された。調査区の西端部は八多川の氾濫原である。調査区内では遺構は希薄であり、耕作地と考えられる。居住地は調査区以南の現集落下に存在するものと推定される。

杭列（図版61　写真図版49）

杭は調査区内に10～20m 間隔で約150本打ち込まれ、部分的に横板をわたされている。畦の芯などの用途が考えられる。この杭列は谷状地形がほとんど埋まった段階で打たれたもので、この谷状地形の埋土からは須恵器片が少量、杭が打ち込まれた後の堆積土からは須恵器・土師器・丹波焼・青磁・宋銭などが出土している。このことから杭が打たれた時期は15世紀以前のものと思われる。

ＳＤ１（写真図版49）

調査区の北側へ突出した部分で等高線に平行して、ほぼ東西方向に検出された溝である。幅は1.4ｍ、深さは0.7ｍで、潅漑用の水路と考えられる。埋土からは須恵器碗、土師器鍋などが出土しており、12

世紀後半から13世紀頃のものである。

B．９区の遺構（写真図版49）

調査地は段丘上に位置する。包含層には須恵器、土師器、丹波焼などの中世の遺物が含まれていたが、遺構はほとんど検出できなかった。断面でのみ水田面の存在を認めたが、畦畔などの遺構を検出することはできなかった。段丘崖の下ではくぼみの崖面側を取り囲むようにして杭が10本検出された。この杭付近では青磁碗が出土している。

３．遺物（図版62　写真図版50・51）

１区SD１出土遺物　590～592は須恵器碗で、底部は糸切り、593は須恵器捏鉢である。594は土師器鍋で、外面に平行タタキをもっている。これらの遺物は12世紀後半から13世紀初頭のものであろう。

１区杭列周辺出土遺物　須恵器碗（595・596）、丹波焼甕（597）、青磁碗（598）、木錘（W－１）、銅銭（F－７）などが出土している。595・596の須恵器碗は底部が糸切りである。口径はやや小さく、13世紀頃と考えられる。丹波焼甕（597）は口縁部が尖り気味に外反するもので、15世紀代のものである。598は龍泉窯系青磁の連弁文碗である。F-7は北宋銭で、1078年初鋳の元豊通寶である。

９区杭列周辺出土遺物　599は龍泉窯系青磁の無文碗である。底部から畳付にかけては露胎である。

包含層出土遺物　608・617が４区、612・615が６区である以外は１・２区から出土したものである。604は須恵器碗で、底部はヘラ切りである。平安時代中期のものである。600～602は須恵器碗で、底部は糸切りである。12～13世紀頃のものである。602は外面に墨書きがある。605～607は須恵器捏鉢である。605は口縁端部外面に丸味をもつもので、13世紀代のものである。内面にはヘラ書きがある。606・607は口縁端部が玉縁状に膨らむもので、14世紀代のものである。608は土師器小皿である。609～612は土師器鍋で、いずれも外面に平行タタキが施されるものである。口縁部が外反するもの（609）、口縁端部が外側につまみ出されるもの（610）、口縁端部が上を向くもの（611）、口縁端部が丸く膨らむもの（612）などがある。時期的には幅があり、12～14世紀のものである。613・614は土師器羽釜である。613はしっかりした鍔をもち、13世紀のものである。614は鍔が退化したもので、15世紀のものである。丹波焼擂鉢（615～617）は、615が端部の上に延びるもので14世紀、617が大平分類Ｆ類で18世紀のものである。618は瀬戸美濃焼の碗である。白磁皿（619）は森田・横田分類Ⅸ類である。軒丸瓦（620）は２重の圏線の部分が残るのみである、平安時代後期のものと思われる。

４．小結

この地区では12～13世紀に段丘上の扇状地を中心として開発が行われ、15世紀頃まで存続した。その後、18世紀には段丘下の氾濫原にまで開発が及び、居住地も設けられた。

第9章 まとめ

1．居住遺構の立地と広がり

八多町中に所在する八多中遺跡は八多川沿いに南北約1050m、東西約250mに渡って広がる遺跡とされている。今回はその範囲について巾6mのトレンチを設けたような調査であり、調査の結果、遺跡の内部は一応ではなく、地形的にも、遺構の内容にも各地区で特徴が認められている。

まず、居住に伴う遺構が検出された7地区の地形であるが、池尻・堂ノ元・カイモリ・フケ・道ノ上地区で、検出された部分は背後の丘陵地帯から八多川に向かって広がった扇状地が段丘化した地形の先端に位置している。丘陵裾部に貼り付いたような上ヲサダ地区でも居住に伴うような遺構が検出されているが、これは特殊な例であり、検出された範囲が狭く、柱穴などからみても、居住に伴わない庵あるいは特殊な建物遺構と考えられる。各地区間は谷部が入り込み、居住に伴う遺構は検出できていない。したがって居住域を伴うような遺構は遺跡内の扇状地が段丘化した地形の先端にのみ位置するものと判断される。

また、遺構が検出される範囲も各地区ともそれほど広くない。池尻地区では60m×45m、堂ノ元地区では80m×100m、カイモリ地区では70m×55m、フケ地区では一辺50mほど、道ノ上地区では谷を挟んで2ヶ所に分かれ、南側が約40m四方程度、北側では約50m四方程度である。このように各地区とも地形的な制約からか大きく集落が展開されているわけではなく、八多中遺跡の居住遺構は扇状地が段丘化したような一段高い地形の先端に、小規模に展開されていたようである。

2．遺跡の変遷

各地区で検出された遺構は弥生時代から室町時代にまで及ぶものであり、長期にわたって遺跡が利用されていたことが窺える。しかし、各地区ともがこの間を継続的に存続していたものではなく、地区によって差異が認められている。個々の遺構の検討が必ずしも十分ではないが、大まかに各地区の変遷や併行関係を記述しておく。

Ⅰ期

本遺跡で居住に伴う遺構が現れる時期である。堂ノ元地区で検出された竪穴住居が該当するが、1棟のみで集落の実態などは不明である。出土遺物は少ないが、弥生時代後期後半から終末を考えている。住居跡は床面周囲に高床部が設けられており、住居構造上では日下部遺跡木ノ元地区の住居と共通し、高床部の内側の壁を板止めする特徴をもつ。

Ⅱ期

古墳時代に属する時期をⅡ期としたが、遺跡内で検出される遺構はすべて須恵器を伴う時期である。また出土する須恵器に型式差がみとめられ、2段階に分けることが可能である。

第1段階　TK－47からMT－15に相当する時期である。堂ノ元地区で検出されたＳＫ－1が該当する。この遺構は古墳の周溝の残欠とみられる遺構である。

第2段階　MT－15からＴＫ－10段階に相当する時期である。堂ノ元地区で検出された2基の古墳とフケ地区の竪穴住居とみられる遺構が該当する。フケ地区が居住域、堂ノ元地区が墓域として利用されて

いたようである。

堂ノ元地区の３号墳やフケ地区の竪穴住居からは、この段階以降のＴＫ209形式に相当する須恵器の出土もみられるが、それぞれ直接的に遺構に伴うものではないとして除外している。

Ⅲ期

７世紀後半から10世紀までの律令期にあたる時期である。この時期は池尻地区のみで展開するが、各段階の間には隔たりがみられ、継続するものではない。

第１段階　カエリをもつ杯Ｂ蓋と杯Ｇが存在する段階であり、飛鳥・藤原Ⅳ期に該当する。池尻４区ＳＤ－42と６区ＳＤ－１が存在するが、地区内では他に遺構はない。日下部遺跡や二郎宮前遺跡ではこの段階の竪穴住居跡が検出されており、本遺跡でも山陽自動車道建設に伴う調査において、竪穴住居跡が検出されており、ここに含まれる可能性がある。

第２段階　口縁部の屈曲した杯Ｂ蓋と杯Ａがみられる段階であり、奈良時代後半の年代が与えられる。池尻１区のＳＥ－１や掘建柱物跡ＳＢ－７と溝SD—12が存在する。遺物では墨書土器がみられる。

第３段階　杯Ｂが消失する段階で、９世紀末から10世紀前半を考えている。池尻地区ＳＢ－１・ＳＤ－７が該当し、遺物では須恵器の他に緑釉陶器や灰釉陶器が導入されている。

Ⅳ期

中世の神出窯産の須恵器を中心に展開する時期であり、神出Ⅰ期からⅢ期まで、全時期にわたる遺物が出土している。全地区で遺構が検出され、遺跡の全域で点々と遺構が営まれたとみられる時期である。

第１段階　平高台の椀に代表される神出Ⅰ期第１段階の時期である。池尻地区と道ノ上Ｊ区に遺構がみられる。Ⅲ期に断絶していた池尻地区では再び掘建柱建物が築かれ、道ノ上地区では土坑群が設けられている。

遺物には須恵器・土師器・黒色土器がある。土師器では底部糸切りの皿・杯が存在する一方、Ａ類の小皿もみられる。

第２段階　平底化した椀の出現する段階で、神出Ⅰ期第２段階に相当する。カイモリ・フケ地区で遺構がみられる。両地区で初めて遺構が出現し、池尻・道ノ上地区では遺構がみられなくなる。カイモリ地区では溝1条のみであり性格は不明であるが、フケ地区ではＳＤ－６・７・９と遺跡の外側や内部を区画するような溝が営まれている。おそらく区画内に建物などの遺構が存在するものと思われる。

遺物には須恵器・土師器の他、瓦器と輸入磁器が初めて登場し、黒色土器は姿を消す。土師器の皿はＡ類のみとなり、フケ地区ＳＤ－９では須恵器椀に土師質の鍋Ⅱａが伴っている。

第３段階　椀が平底となる神出Ⅱ期第１段階に相当する時期で、池尻・堂ノ元・カイモリ・フケ地区で遺構がみられ、本遺跡の主要な地区で揃って遺構が築かれる。カイモリ・フケ地区では前段階から継続し、カイモリ地区では建物が出現する。ただ地区北半の方形区画は建物より遅れ次の段階になるようである。Ⅱ期以降断絶していた堂ノ元地区で新たに遺構が出現する。池尻地区では再度建物や墓が築かれているが、この段階で断絶し、以後に建物などが営まれることはなくなる。

遺物には須恵器・土師器・輸入磁器がみられる。前段階に導入された瓦器も当然存在すると思われるが遺構に伴っては出土していない。土師器皿類はＡ類のみである。

第４段階　神出Ⅱ期第２段階に相当する時期で、カイモリ・フケで前段階に継続して遺構が営まれ、断絶していた道ノ上地区で１段階とは場所を移して遺構が営まれている。カイモリ地区では地区の南半に建物、北半に方形区画という構造が出現する。フケ地区では細い溝に区画され、２棟の掘建柱建物から

各地区変遷表

地区名	池　尻	上ヨサ田	堂ノ元	カイモリ	フケ	道ノ上	岸ノ下
Ⅰ期			■				
Ⅱ期　1			■				
2			■		■		
Ⅲ期　1	■						
2	■						
3	■						
Ⅳ期　1	■				□	■	
2				■	■		
3	■		■	■	■		□
4		⊡	■	■		■	□
5		■		■			□
Ⅴ				■			

なる屋敷地が出現する。ただ遺跡を全体や内部大きく区画していたＳＤ－６・７・９がこの段階まで存続していたかは不明である。

遺物には須恵器・土師器・瓦器・輸入磁器がある。須恵器椀には274のように口縁端部が内面に肥厚し小名田窯産とみられるものが出現する。土師器皿はＡ類のみである。

第５段階　神出Ⅲ期に相当する時期であり、カイモリ地区で掘建柱建物や土坑が営まれ、新たに上ヨサダ地区で建物が構築される。また断絶していた道ノ上地区では場所を変え、Ｅ区で掘建柱建物などが営まれるようになる。他方、他地区での営みは消え、堂ノ元地区や岸ノ下地区で包含層から遺物が出土する程度となる。

遺物には須恵器・土師器・輸入磁器がある。上ヨサダ地区で出土した須恵器椀は極めて器高が低く、皿に近い形態のものも存在している。土師質の鍋Ⅱｃや神出Ⅲ期の須恵器鉢を伴っていることから、この時期に置いたが、神出窯での椀生産は終了し、小名田窯は操業を中止している。したがって産地は不明である。土師器皿類はこの段階で在地系のⅢＡ類から京都系とみられるⅢＢ類に変わる。

３．まとめ

南北１㎞以上、東西平均約250ｍ、面積約26万㎡に広がるとされる八多中遺跡を対象とした今回の調査で、遺跡内は居住域として利用された空間と、生産域などの居住域以外の空間が存在することが判明した。段丘化した扇状地の先端が居住域として利用され、谷部や八多川沿いの地域はそれ以外の生産域などに利用されたようである。

居住域としての利用は弥生時代末から中世の15世紀までに及ぶ。しかし、各地区の変遷でみたように、弥生時代末から律令期までは、堂ノ元地区・フケ地区・池尻地区が小規模に短期間利用された程度にとどまっている。それが中世になるとカイモリ地区を中心に各地区が居住に利用されるようになり、Ⅳ期

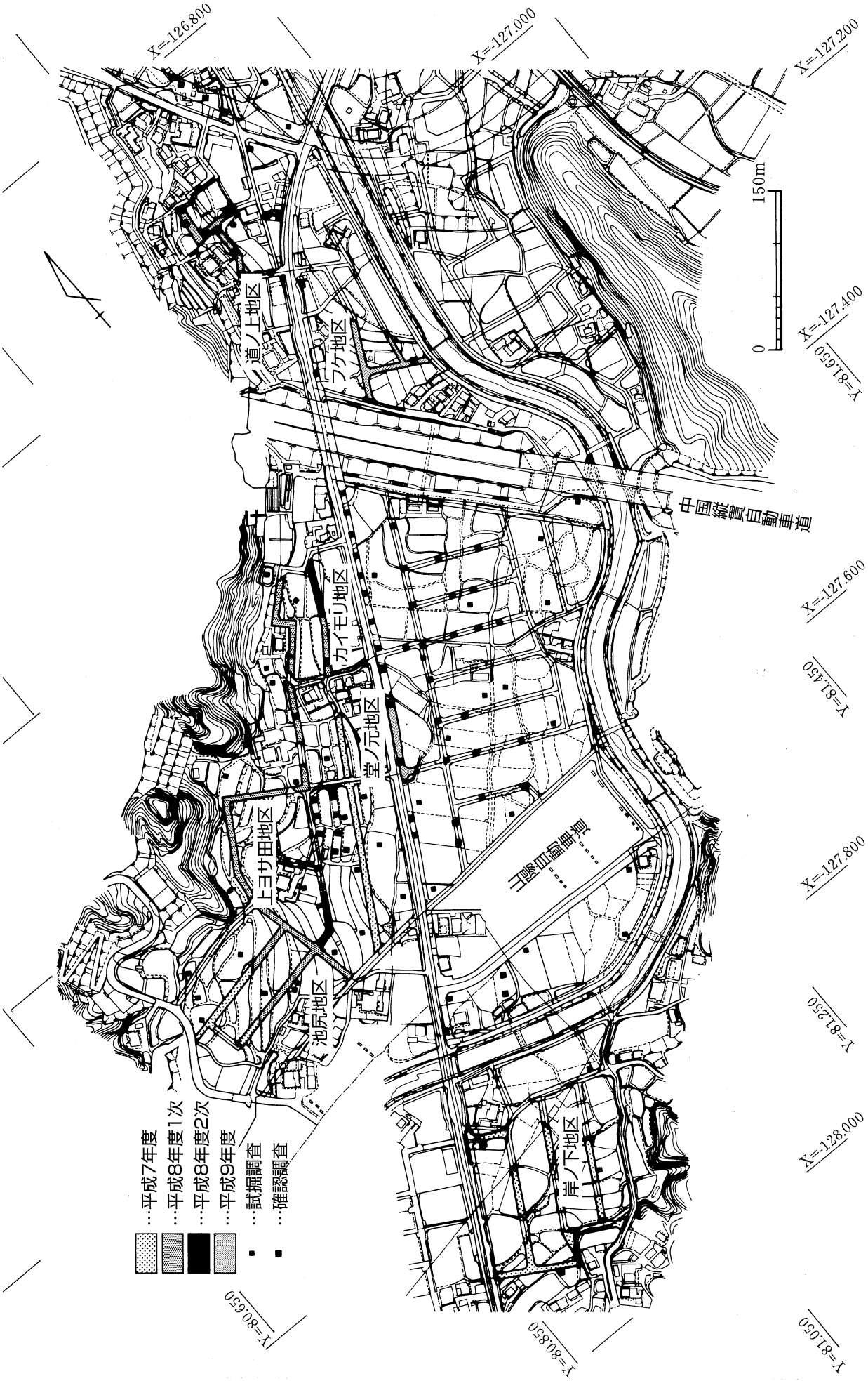
第３段階とした12世紀中葉から後半には最盛期を向かえる。カイモリ地区ではⅣ期第２段階から第５段階まで継続している。しかし、カイモリ地区以外は比較的短期間で利用をやめ、歪な方形区画を設けたフケ地区はⅣ期第４段階で終焉し、その他の地区では単発的な利用のされ方をして終焉している。しかし、第５段階まで存続するカイモリ地区も大規模に展開することはなく、単発的な地区を取り込んでいった様子は窺えない。カイモリ地区では遺構も密集し、遺物量も多く、また遺物に輸入磁器、初期の丹波焼、天目椀等の瀬戸美濃焼などの搬入陶器も含むなど、本遺跡内では最も活発に活動が続けられたようである。調査区の制約があって地区内の遺構の構成などは明確ではないが、中世の本遺跡の中心として存在していたようである。そしてカイモリ地区も15世紀代には終焉し、以後近世まで遺跡内に居住域はみられなくなる。

本遺跡の東方には中世居館と推定されている二郎宮前遺跡が存在し、ほぼ中世当初から15世紀中半までの間を継続して営み続けている。この遺跡とカイモリ地区は存続時期が併行し、ほぼ同時期に終焉を向かえている。またほぼ遺物の構成なども似通っている。ただ遺跡規模や遺構の構成、建物規模からみて、中世の本遺跡周辺は二郎宮前遺跡を中心に展開されたものと考えられる。今後カイモリ地区やフケ地区及びその他の地区の全容や遺構の構成の解明が進み、二郎宮前遺跡との共通点や差異、長期に継続する遺跡と単発的な集落の関係などが明確にされれば、中世荘園における支配構造や集落間の関係、そこにおける人民の行動といったものが明らかになるであろう。

参考文献

田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年
森田　稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要第３号』　神戸市立博物館　1986年
丹治康明「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』　中世土器研究会　1985年
宮原文隆「中世の土師質鍋について」『門前・上山遺跡』　兵庫県多可郡中町教育委員会　1992年
なお、日下部遺跡、二郎宮前遺跡は兵庫県教育委員会が調査を実施したものである。

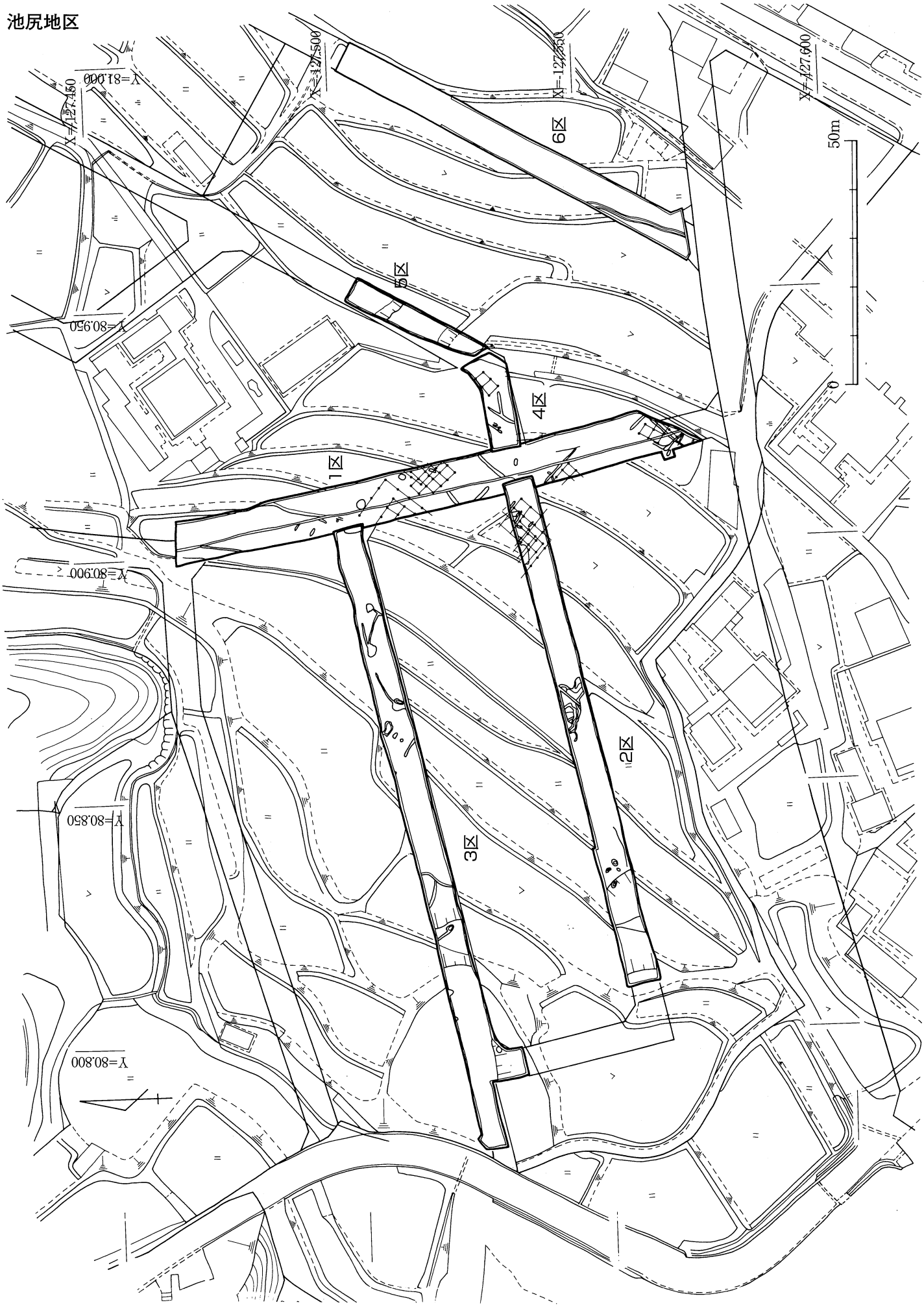
図　　版


X=-126.800
X=-127.000
X=-127.200
X=-127.400
X=-127.600
X=-127.800
X=-128.000
Y=81.650
Y=81.450
Y=81.250
Y=81.050
Y=80.650
Y=80.850
0
150m
ニノ道ノ上地区
フケ地区
カイモリ地区
堂ノ元地区
上ヨサ田地区
池尻地区
岸ノ下地区
…平成7年度
…平成8年度1次
…平成8年度2次
…平成9年度
…試掘調査
…確認調査

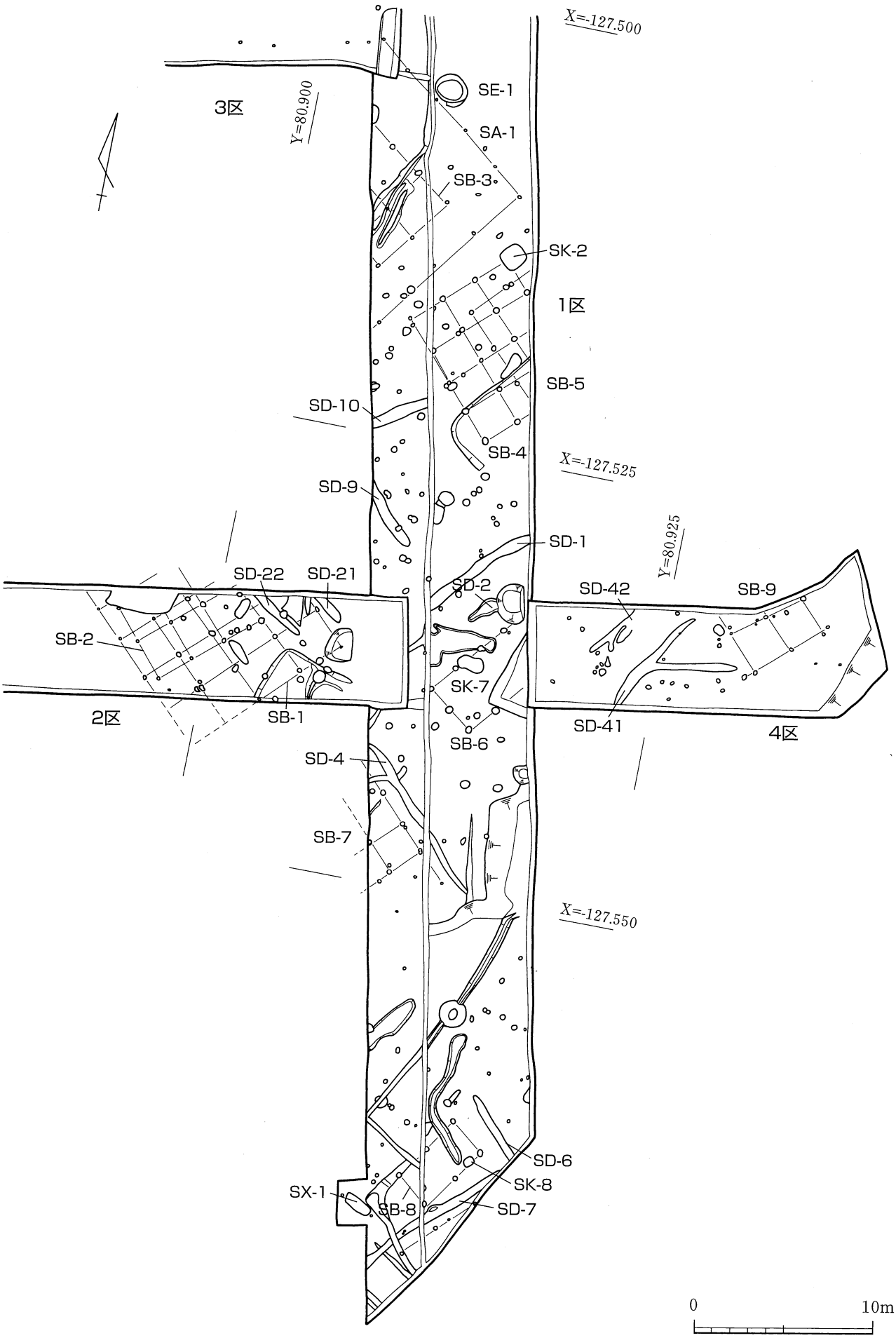
調査区位置図

図版 2

池尻地区


X=127,600
X=127,650
X=127,700
X=127,750
Y=81,000
Y=80,950
Y=80,900
Y=80,850
Y=80,800
1区
2区
3区
4区
5区
6区
0
50m

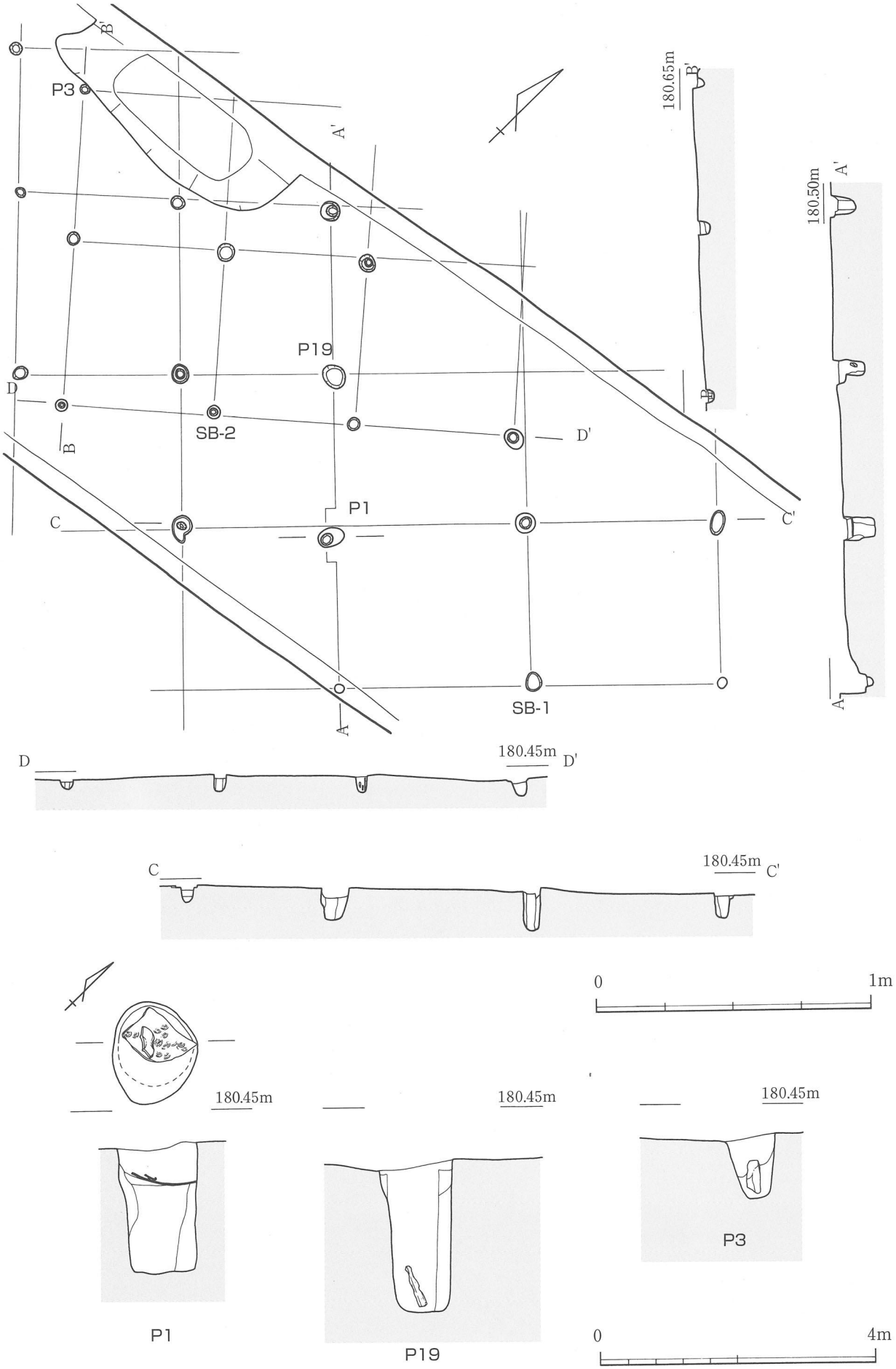
全体図


X=-127.500
SE-1
3区
Y=80.900
SA-1
SB-3
SK-2
1区
SB-5
SD-10
SB-4
X=-127.525
SD-9
SD-1
Y=80.925
SD-22
SD-21
SD-2
SD-42
SB-9
SB-2
SK-7
2区
SB-1
SD-41
4区
SB-6
SD-4
SB-7
X=-127.550
SD-6
SK-8
SX-1
SB-8
SD-7
0
10m

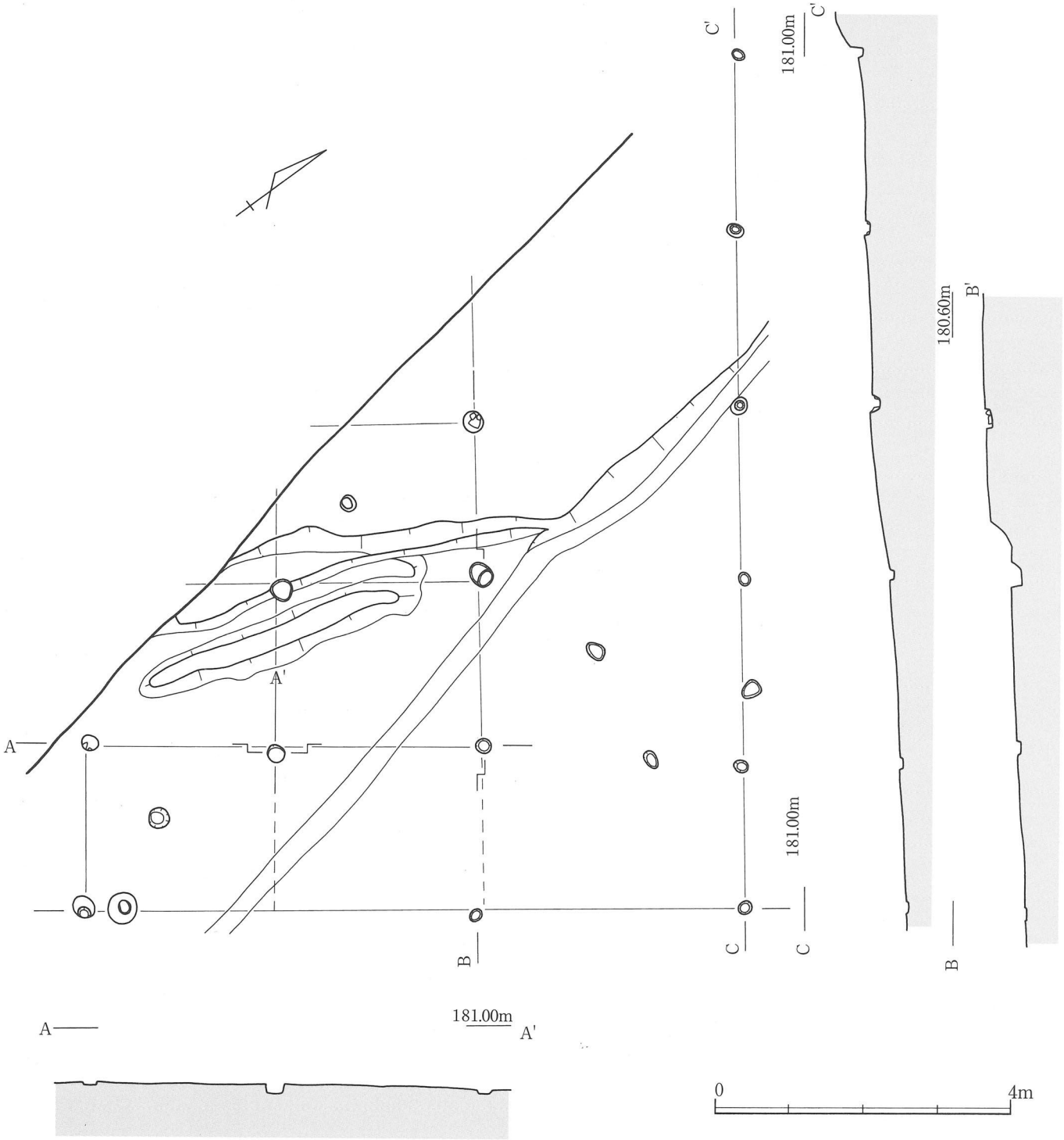
1～4区　遺構全体図

図版 4

池尻地区



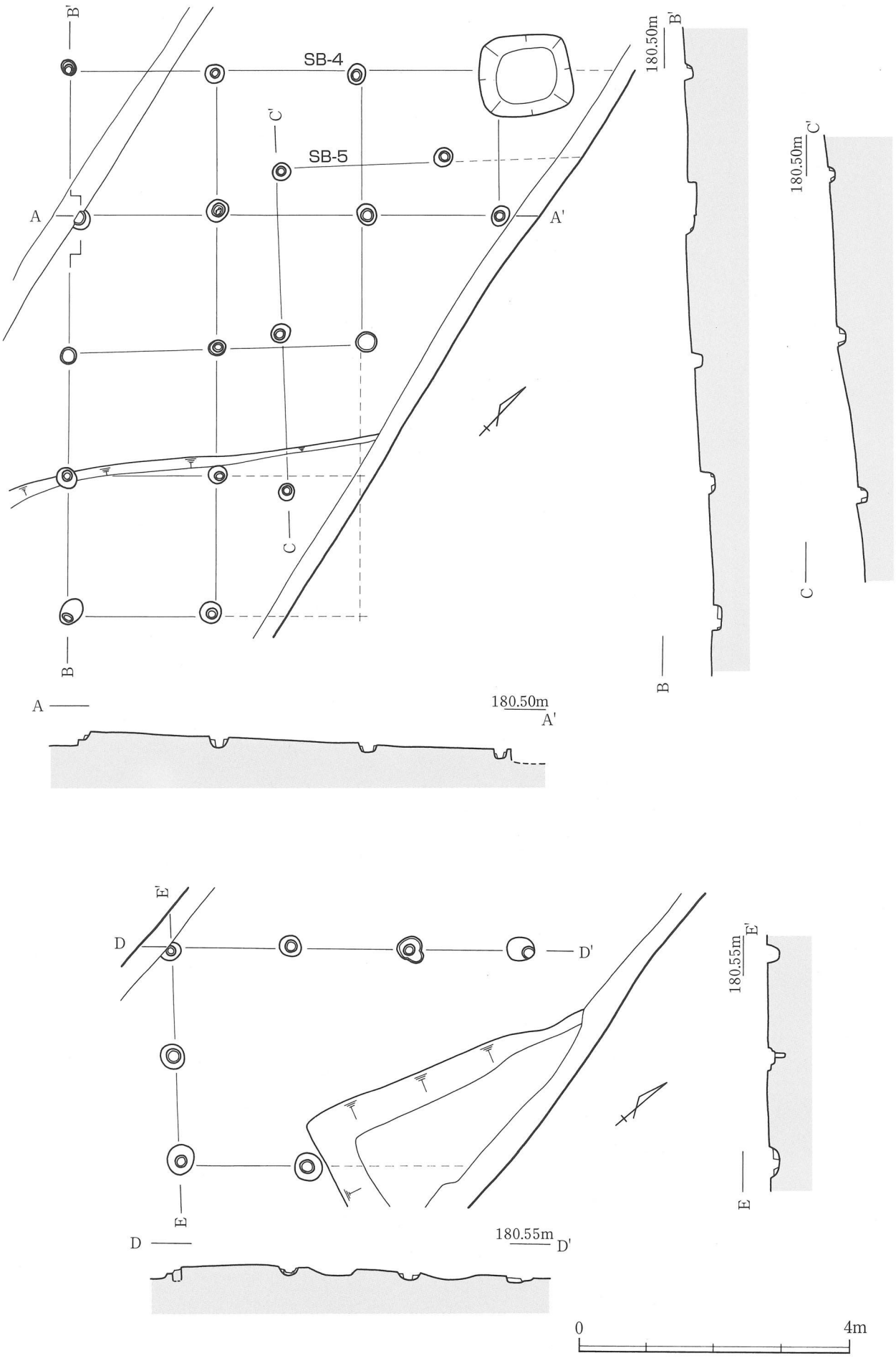
2区　ＳＢ－１・２／柱穴断面図



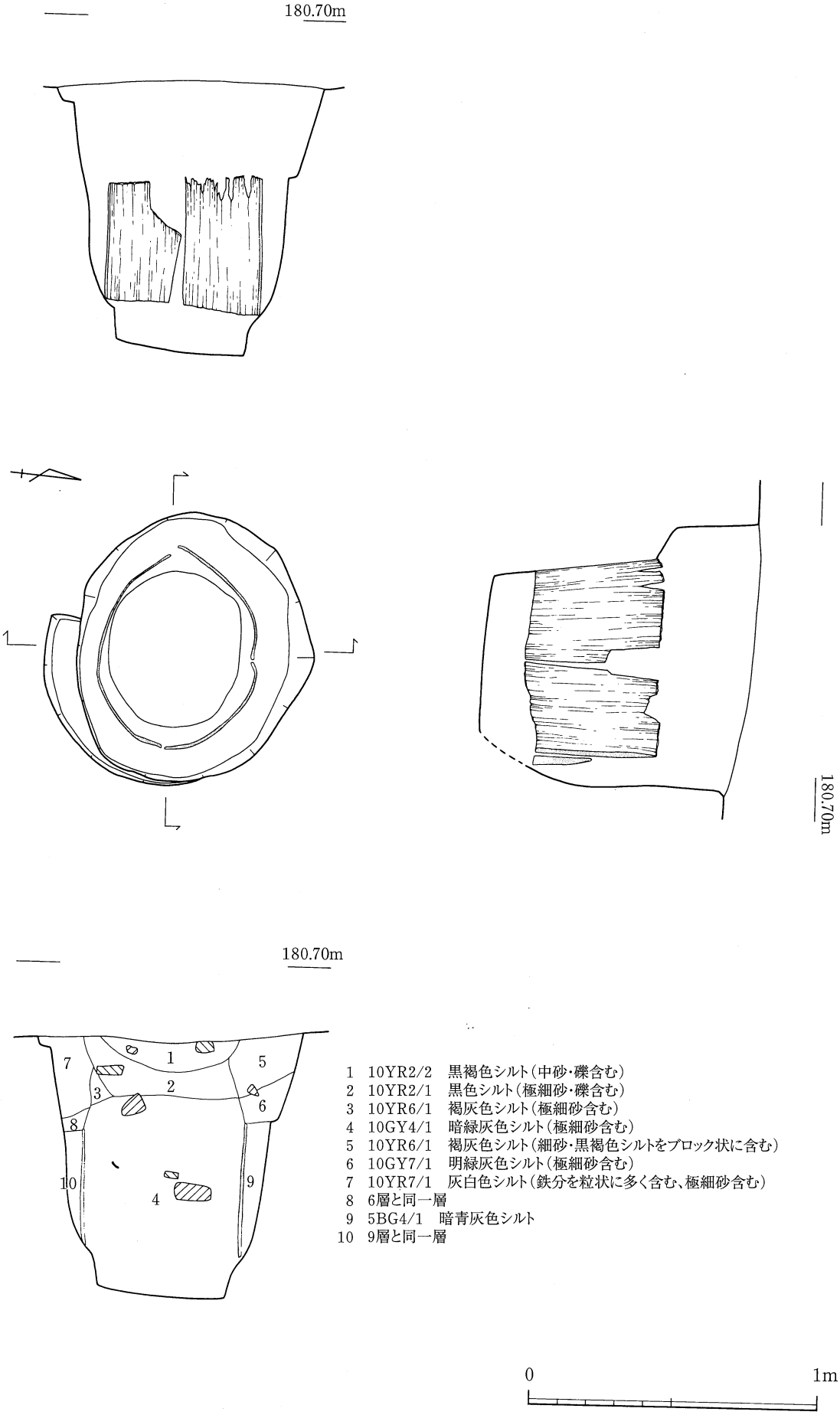
1区　SB－3

図版 6

池尻地区



1区　SB－4・5／SB－6

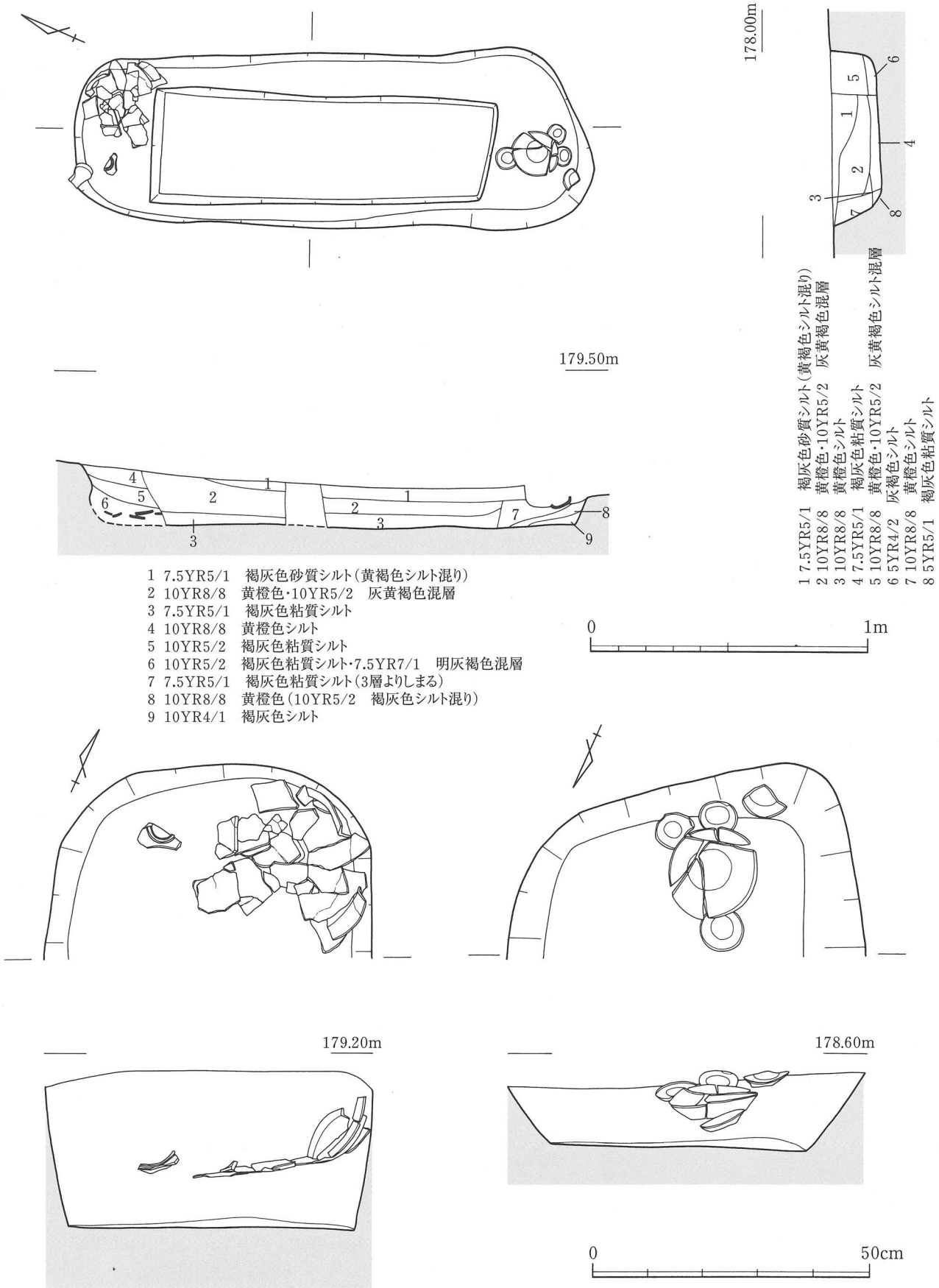


1 10YR2/2 黒褐色シルト（中砂・礫含む）
2 10YR2/1 黒色シルト（極細砂・礫含む）
3 10YR6/1 褐灰色シルト（極細砂含む）
4 10GY4/1 暗緑灰色シルト（極細砂含む）
5 10YR6/1 褐灰色シルト（細砂・黒褐色シルトをブロック状に含む）
6 10GY7/1 明緑灰色シルト（極細砂含む）
7 10YR7/1 灰白色シルト（鉄分を粒状に多く含む、極細砂含む）
8 6層と同一層
9 5BG4/1 暗青灰色シルト
10 9層と同一層

1区 SE－1

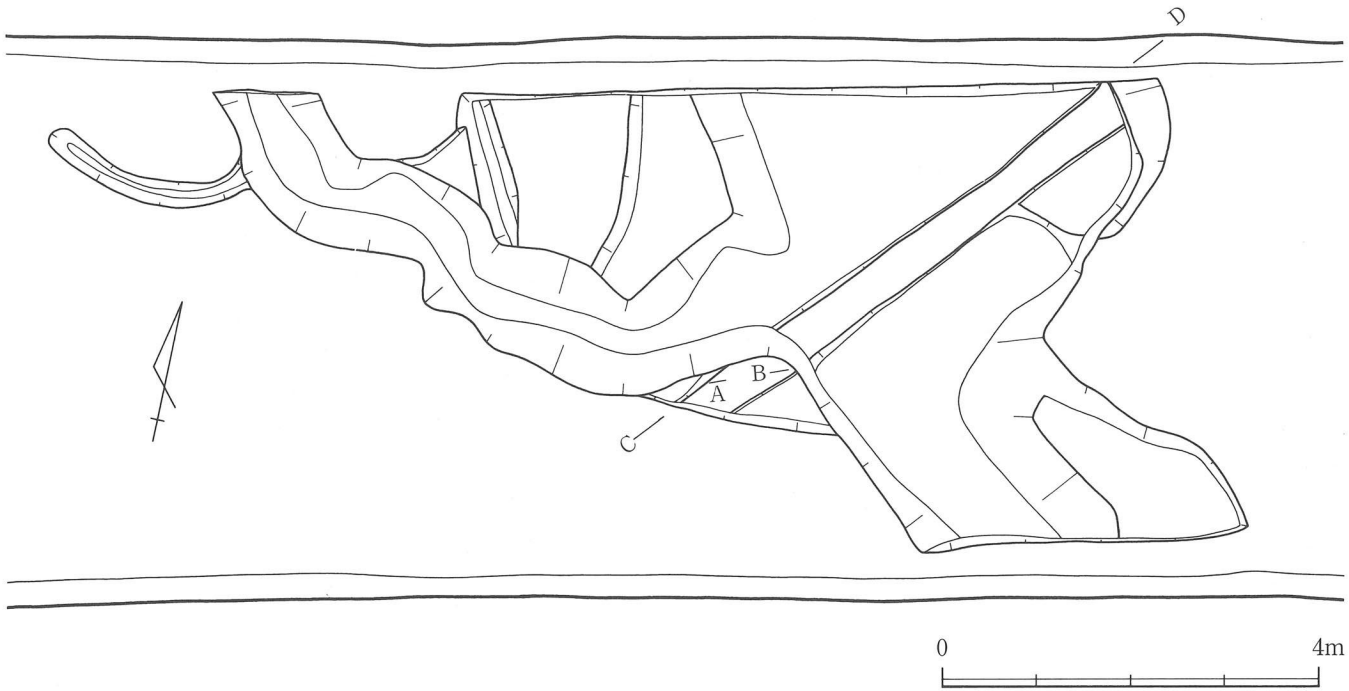
図版 8

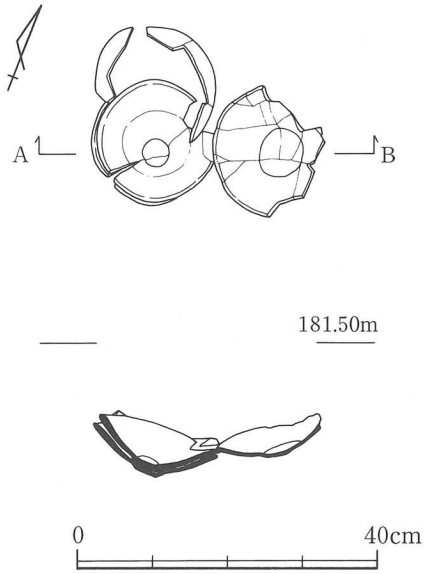
池尻地区

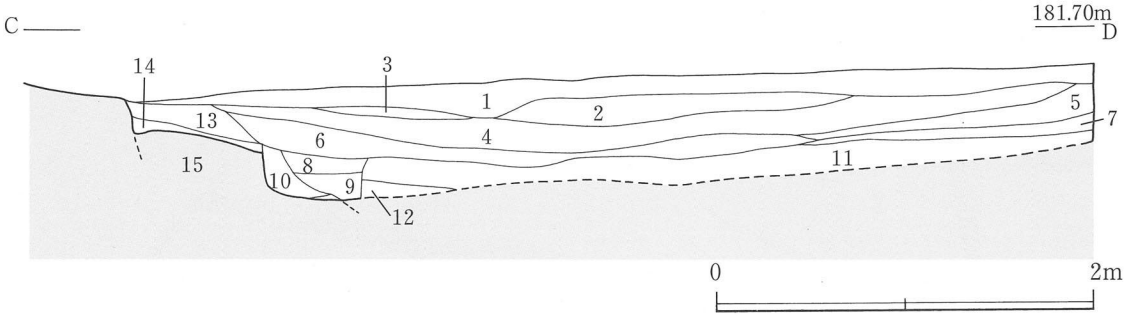


1区　SK－1

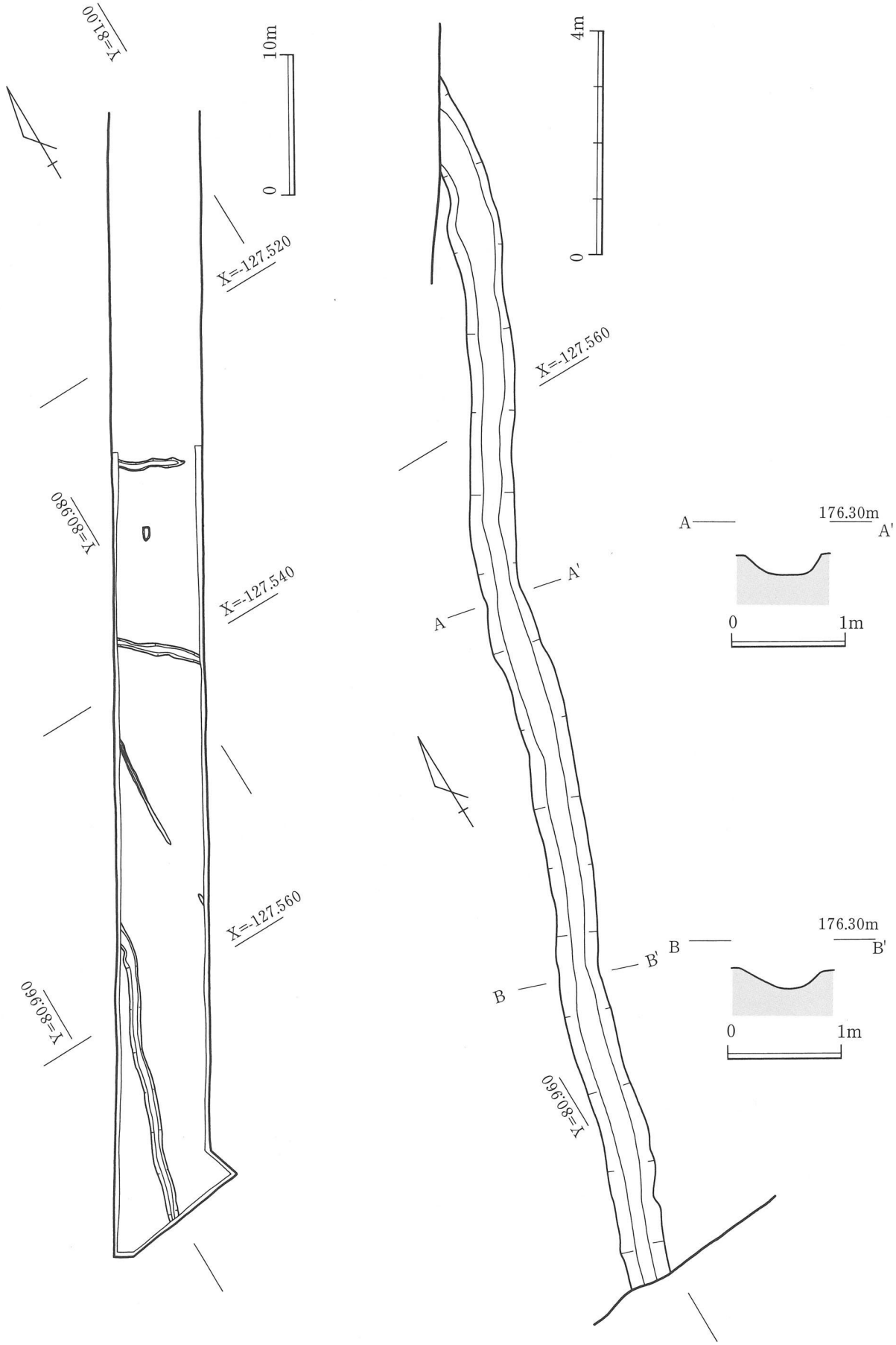
2区　自然流路



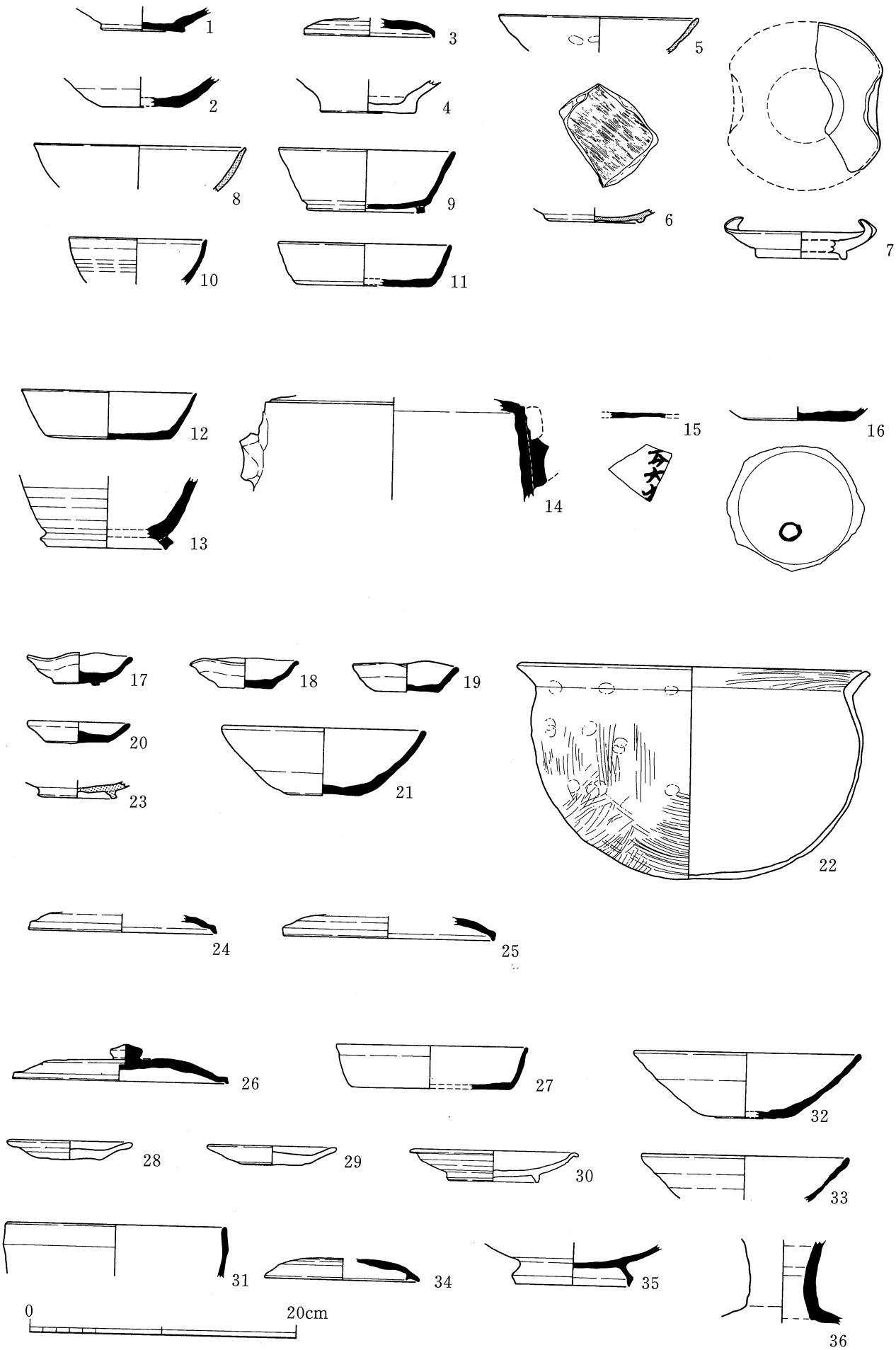




1　10YR5/1　褐灰色シルト（極細砂多く含む）
2　10YR5/1　褐灰色シルト（浅黄橙シルト混り）
3　10YR5/1　褐灰色シルト（浅黄橙シルト混り、礫・極細砂～粗砂混り）
4　N5/　灰色シルト（極細砂含む）
5　N4/　灰色シルト（浅黄橙シルト混り）
6　N4/　灰色シルト（粘質）
7　10Y5/1　灰色シルト（浅黄橙シルト混り、粗砂混）
8　5Y4/1　灰色中砂（シルト混り）
9　5Y5/1　灰色シルト（礫・粗砂混り）
10　5Y5/1　灰色砂礫層
11　N5/　灰色中砂層（シルト混り）
12　N4/　灰色細砂（シルト多く含む）
13　10YR8/3　浅黄橙色粘質シルト（褐灰色シルト混り）
14　10YR5/1　褐灰色中砂（粗砂～径3cmの礫混り、シルト含む）
15　10YR8/6　黄橙色粘質シルト（極細砂混り）


Y=81.00
10m
0
X=-127.520
Y=80.980
X=-127.540
X=-127.560
Y=80.960
4m
0
X=-127.560
A
A'
176.30m
0
1m
B
B'
176.30m
0
1m
Y=80.960

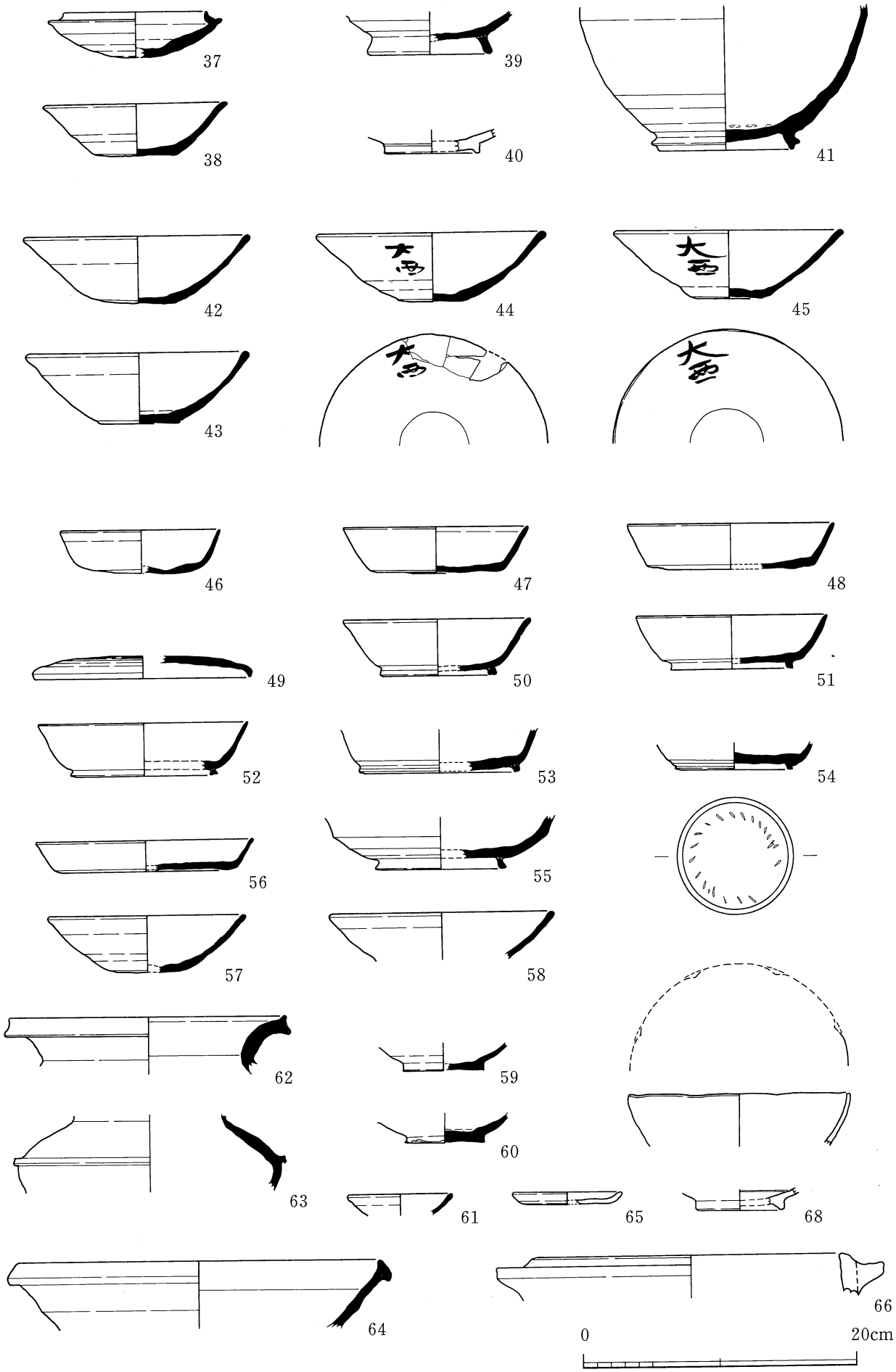
6区　全体図／ＳＤ－１


1
3
5
2
4
8
9
6
7
10
11
12
14
15
16
13
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
32
28
29
30
33
31
34
35
36
0
20cm

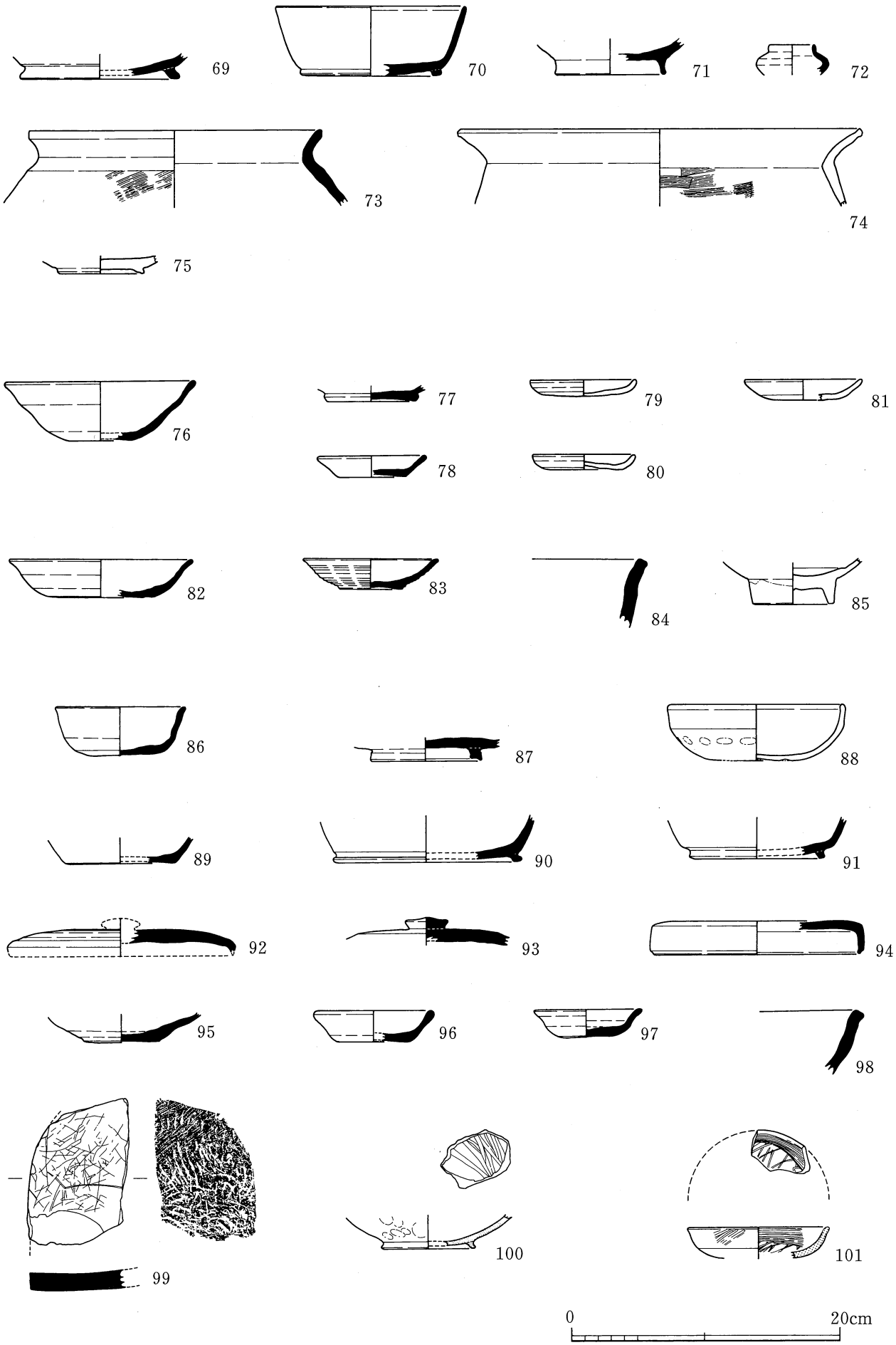
出土遺物１

図版12

池尻地区



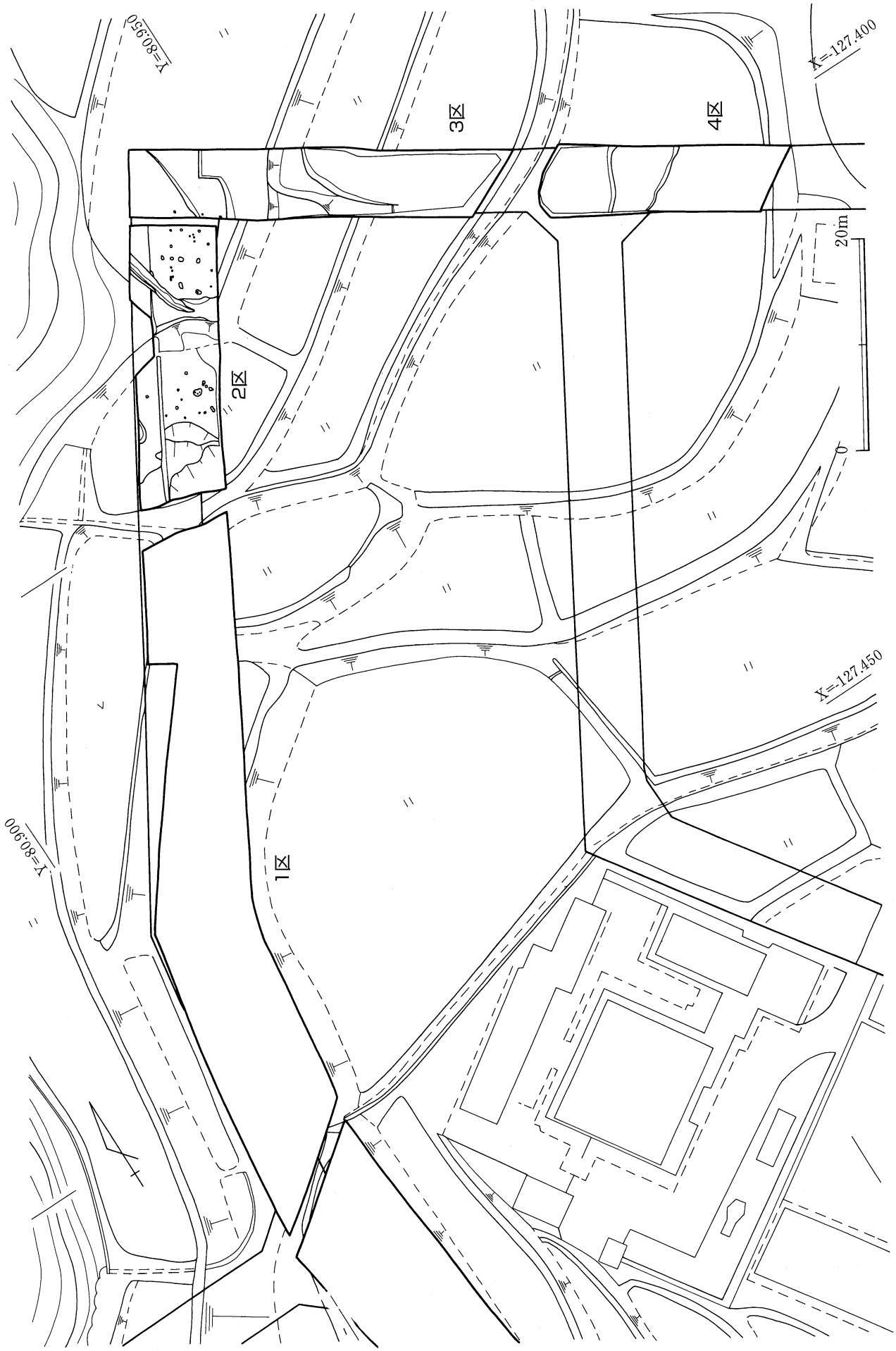
出土遺物 2


69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
0
20cm

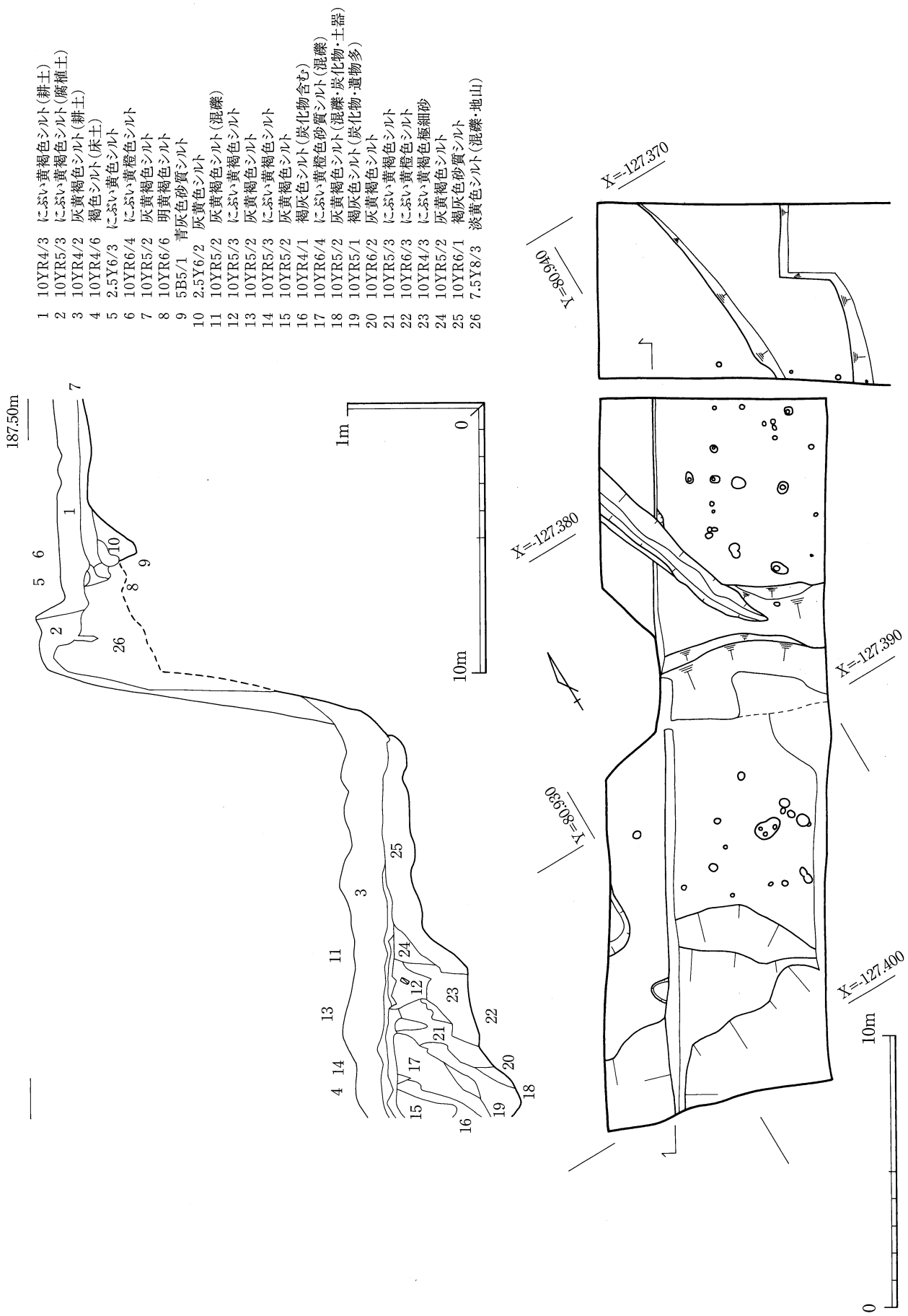
出土遺物 3

図版14

上ヨサ田地区



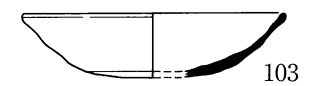
全体図

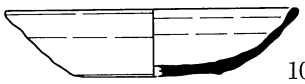

1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト(耕土)
2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト(腐植土)
3 10YR4/2 灰黄褐色シルト(耕土)
4 10YR4/6 褐色シルト(床土)
5 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト
6 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト
7 10YR5/2 灰黄褐色シルト
8 10YR6/6 明黄褐色シルト
9 5B5/1 青灰色砂質シルト
10 2.5Y6/2 灰黄色シルト
11 10YR5/2 灰黄褐色シルト(混礫)
12 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
13 10YR5/2 灰黄褐色シルト
14 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
15 10YR5/2 灰黄褐色シルト
16 10YR4/1 褐灰色シルト(炭化物含む)
17 10YR6/4 にぶい黄橙色砂質シルト(混礫)
18 10YR5/2 灰黄褐色シルト(混礫・炭化物・土器)
19 10YR5/1 褐灰色シルト(炭化物・遺物多)
20 10YR6/2 灰黄褐色シルト
21 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
22 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト
23 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂
24 10YR5/2 灰黄褐色シルト
25 10YR6/1 褐灰色砂質シルト
26 7.5Y8/3 淡黄色シルト(混礫・地山)
187.50m
1m
0
10m
X=-127.370
Y=80,940
X=-127.380
Y=80,930
X=-127.390
X=-127.400
10m
0

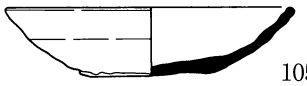
遺構全体図／土層断面図

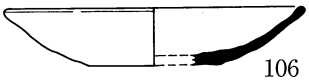
図版16

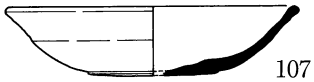
上ヨサ田地区

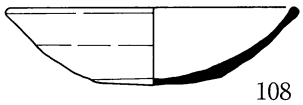

103

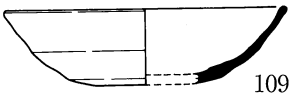

104

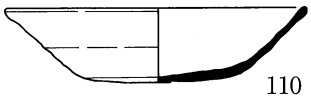

105


106

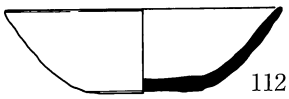

107

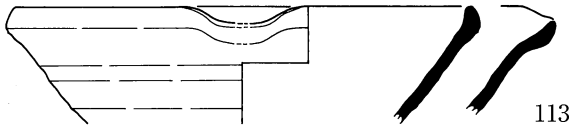

108


109

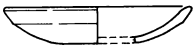

110

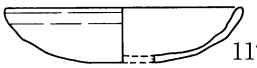
111

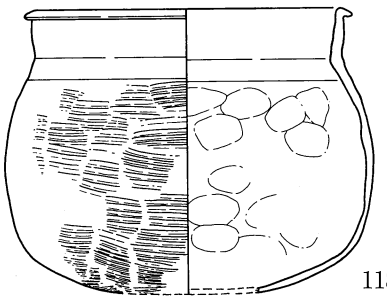

112

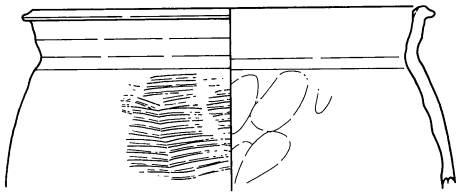

113

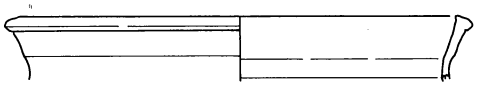
115

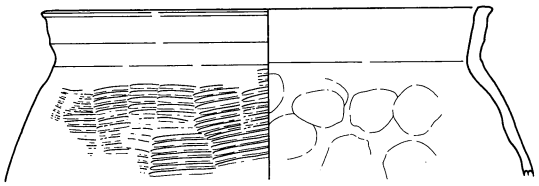

116

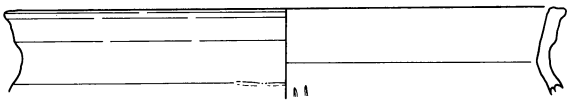

117


118

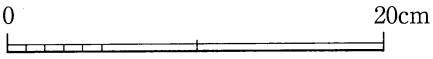

119


120


121


122

114



出土遺物

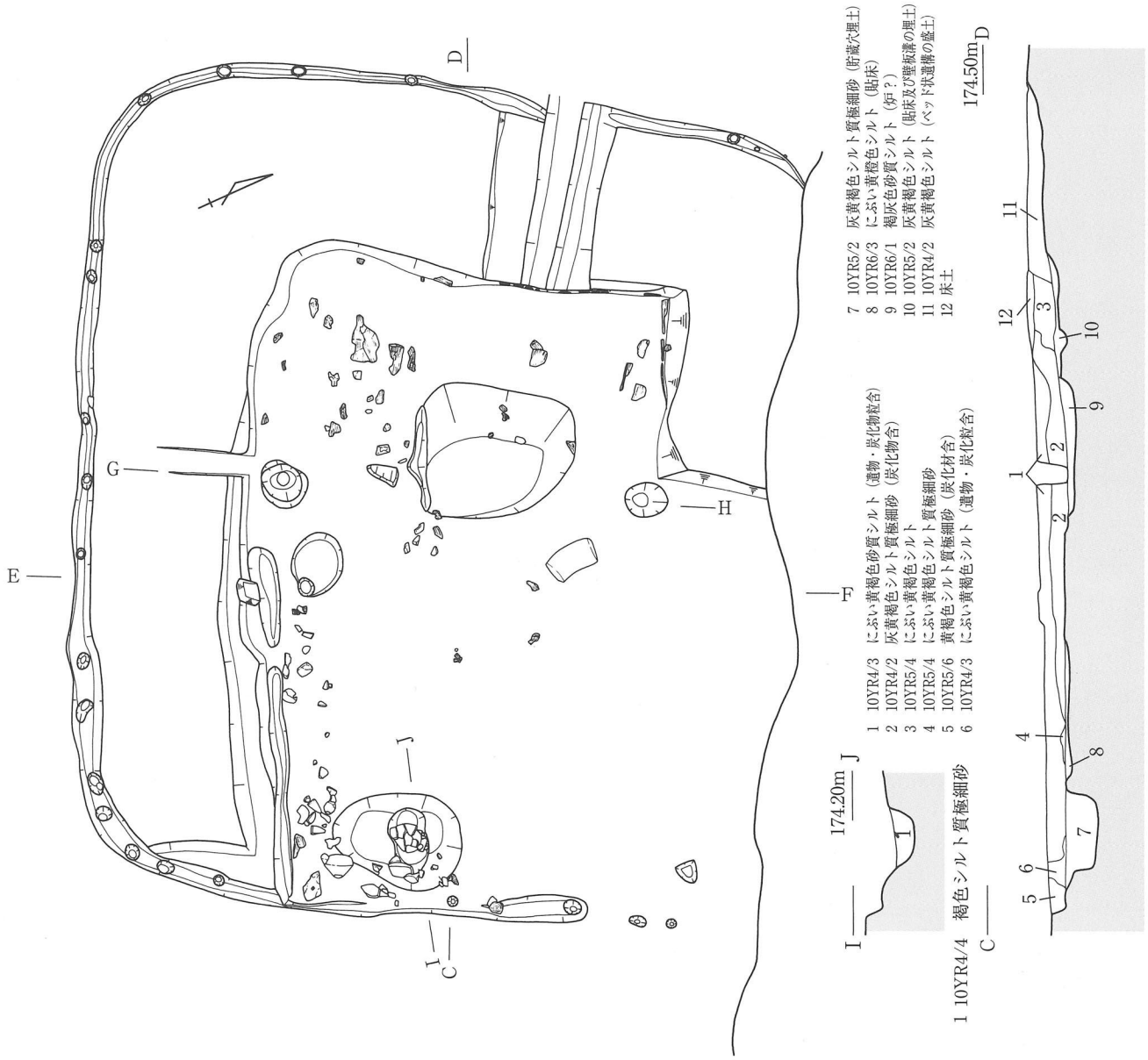
堂ノ元地区

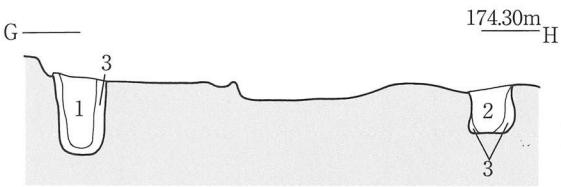
X=-127.300
Y=81150
Y=81050
1区
2区
X=-127.400
8区
7区
3区
4区
6区
5区
X=-127.500
Y=80950
0
50m

全体図

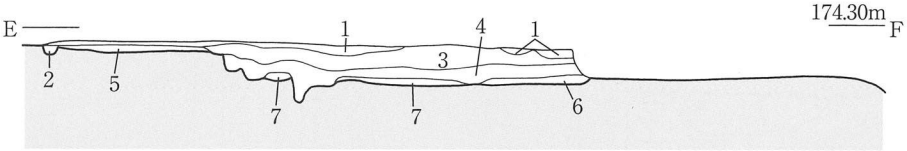
図版18

堂ノ元地区





1 10YR5/2 灰黄褐色シルト質極細砂（炭化粒含）
2 10YR4/2 灰黄褐色シルト質極細砂（炭化物粒含）
3 10YR6/1 褐灰色シルト質極細砂



1 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト（１５世紀以降の包含層）
2 10YR5/2 灰黄褐色シルト質極細砂（炭化粒含）
3 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト（炭化粒含）
4 10YR5/2 灰黄褐色シルト（炭化粒含）
5 2.5Y5/6 黄褐色シルト（ベッド状遺構の盛土）
6 10YR6/1 褐灰色砂質シルト（炉？）
7 10YR5/2 灰黄褐色シルト（貼床）

0 2m

1区 SH－1

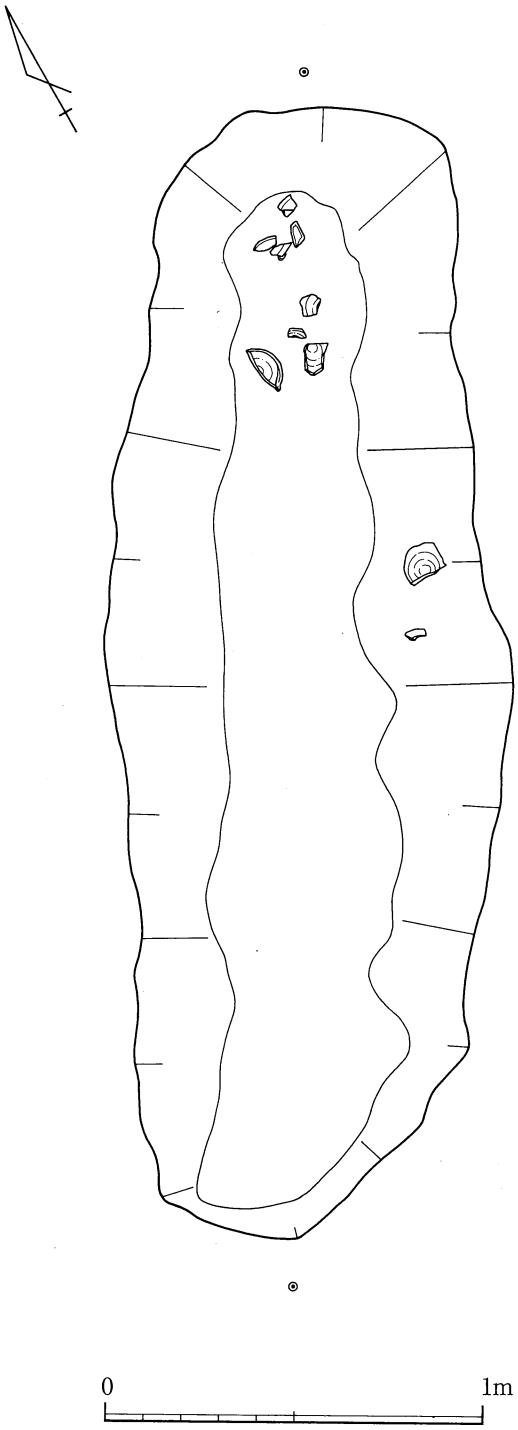
1 盛土
2 7.5YR4/1 暗褐灰色シルト
3 7.5YR4/1～5/1 暗褐灰色粘質土（灰色粘質土、褐色粘質土ブロック混）
4 10YR6/4～5/4 濃褐～灰褐色粘質砂（細砂）
5 2.5Y5/1～5/2 黄灰色粘質砂（細砂）
6 2.5Y5/2～5/1 灰黄色粘質砂（細砂）
7 2.5YR6/1～6/2 黄灰色粘質砂（極細砂）
8 10YR6/1 灰色粘質土（細砂を含む）
9 10YR6/1 淡灰褐色粘質砂（極細～細砂）
10 10YR6/1 淡灰褐色細砂
11 10YR5/1 灰褐色細砂（やや黄色味をおびる）
12 10YR6/1～5/1 灰褐色粘質砂（極細～微砂）
13 10YR5/1～4/1 灰褐～灰黄褐色粘質砂（極細砂）
14 10YR5/1～6/1 淡灰褐～淡灰黄色粘質土（極細砂を含む）
15 10YR6/2～5/2 淡黄色粘質砂（極細～細砂）
16 7.5YR5/1 淡灰～灰色粘質土（極細～細砂・淡灰白色粘質土のブロックを含む）
17 7.5YR4/1～7/1 暗灰～淡灰白色粘質土（極細～細砂を含む）
18 10YR6/1～5/1 灰褐色粘質土
19 10YR7/6～6/6 淡黄褐色粘質土（極細砂混）
20 10YR5/1～4/1 灰褐～暗灰褐色粘質土（細～極細砂混）

3区　全体図

図版20

堂ノ元地区

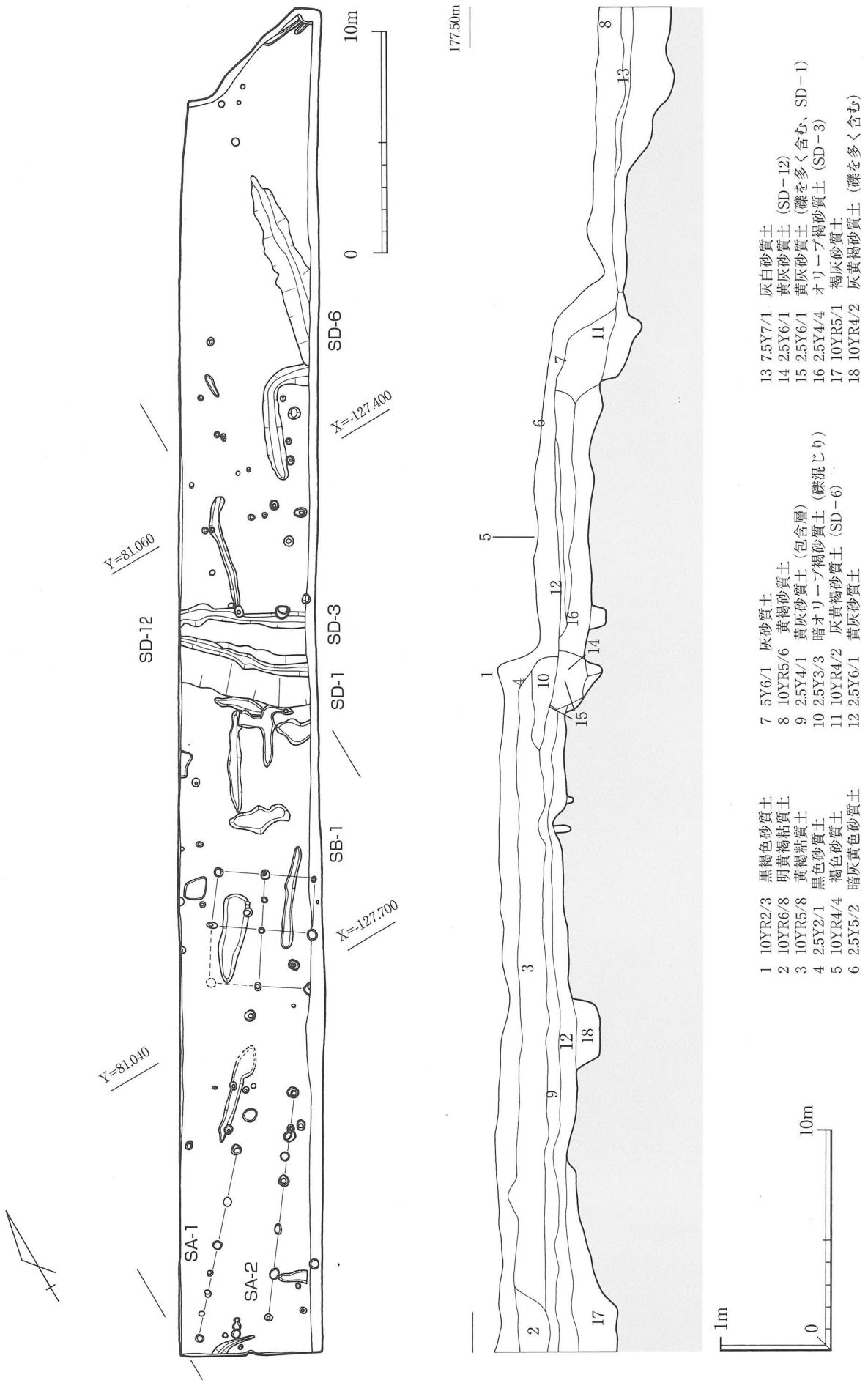
3区　1号墳周溝内遺物出土状態



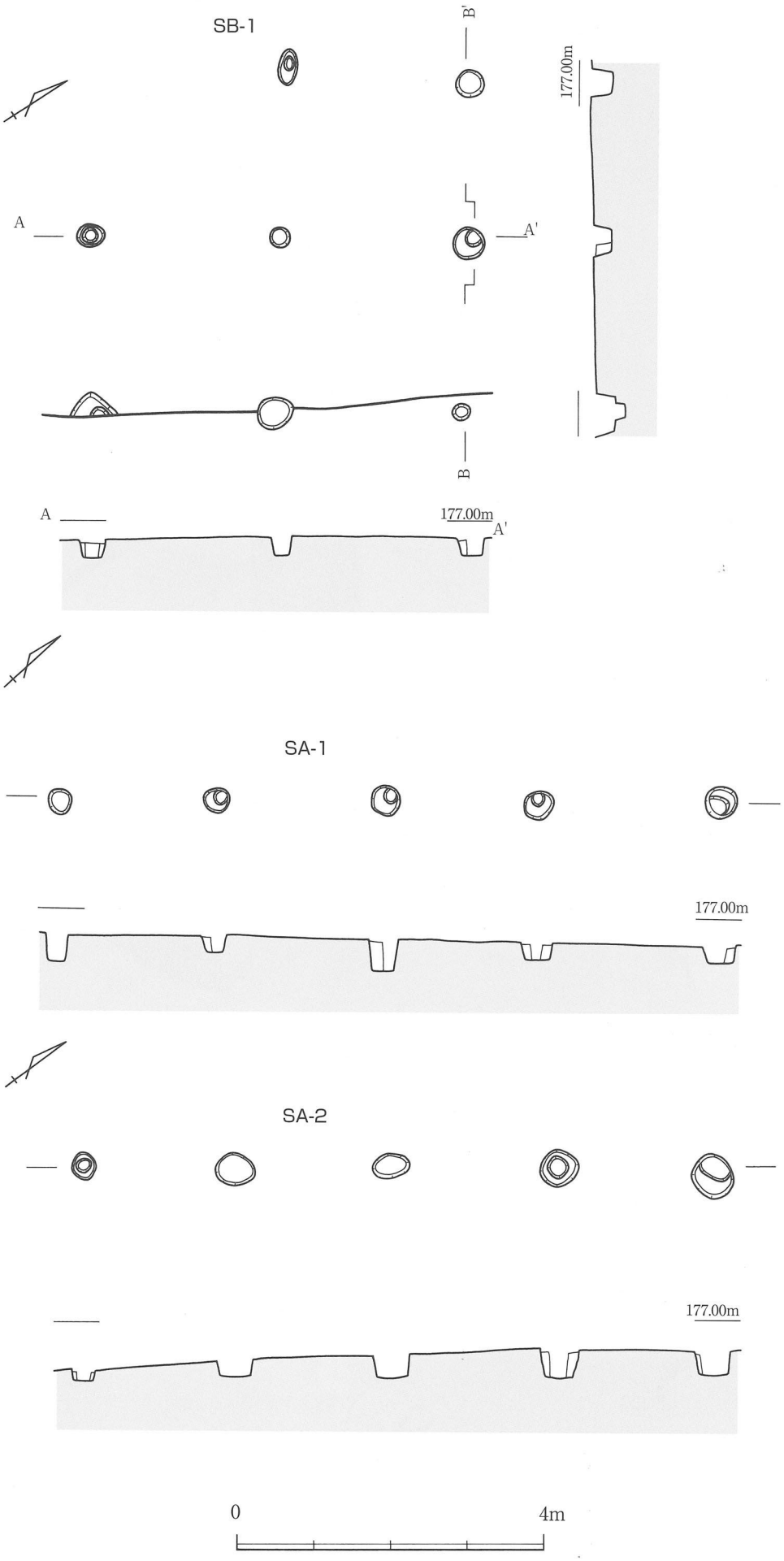
3区　SK－1

図版22

堂ノ元地区



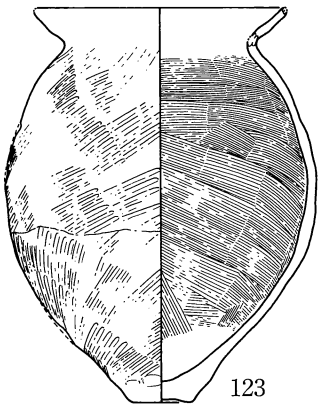
4区　全体図／土層断面図

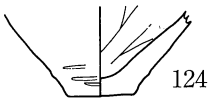


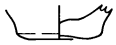
4区　ＳＢ－１／ＳＡ－１／ＳＡ－２

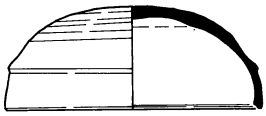
図版24

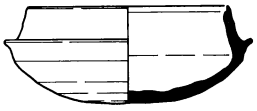
堂ノ元地区

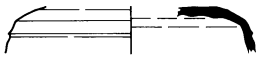


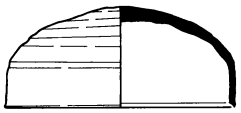


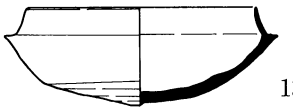


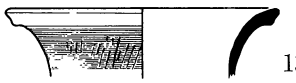


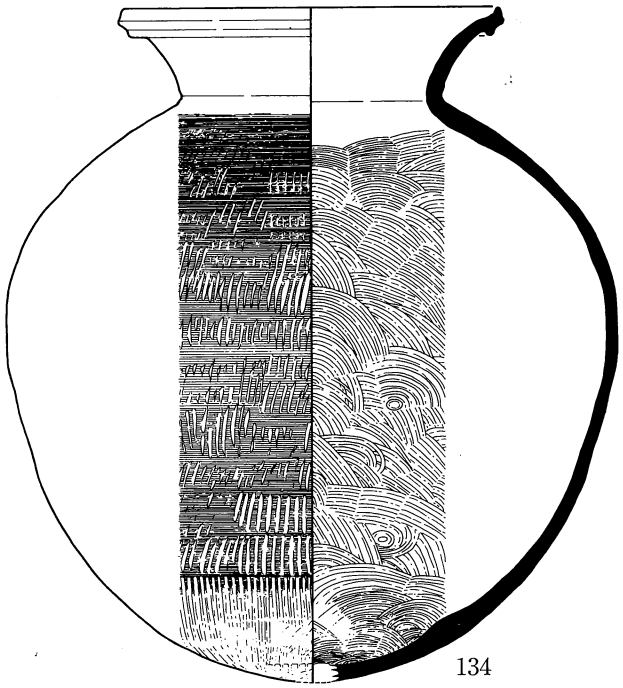


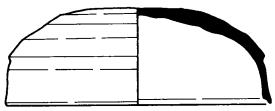


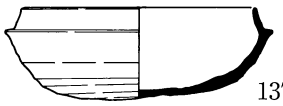


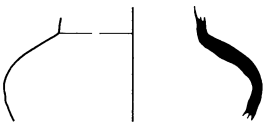


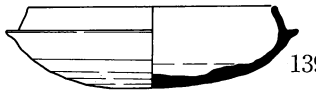


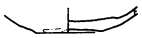




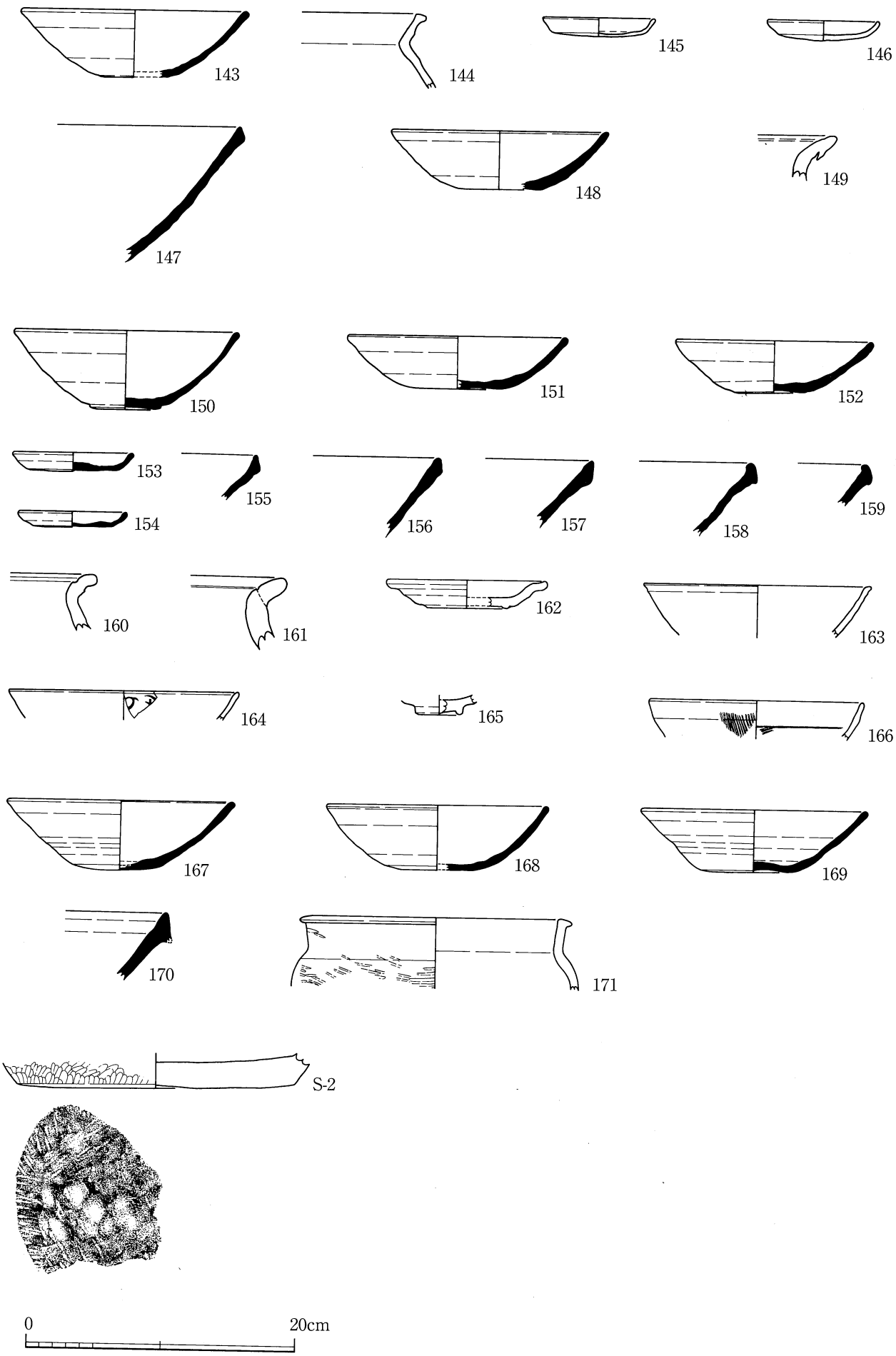








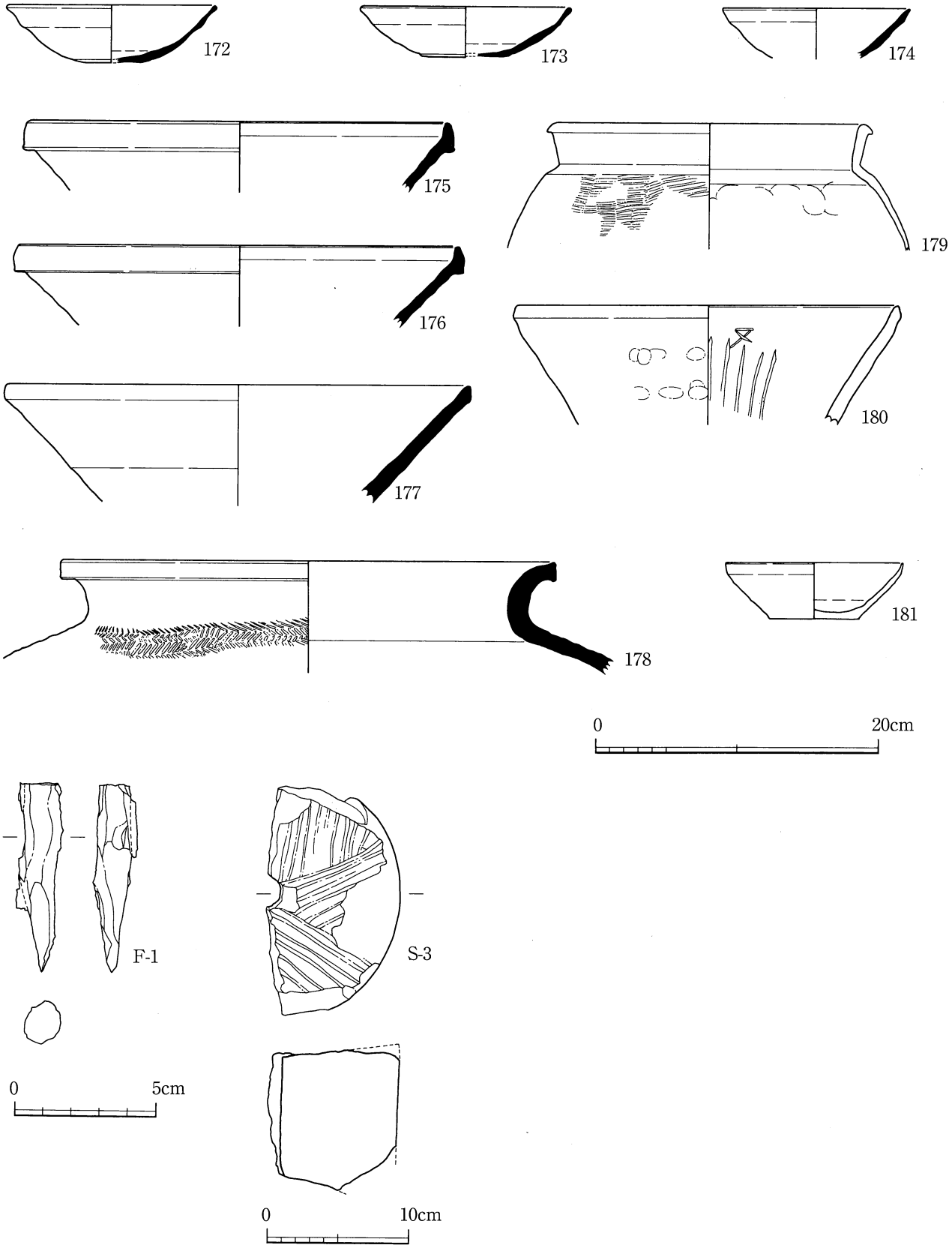
出土遺物 1


143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
S-2
0
20cm

出土遺物 2

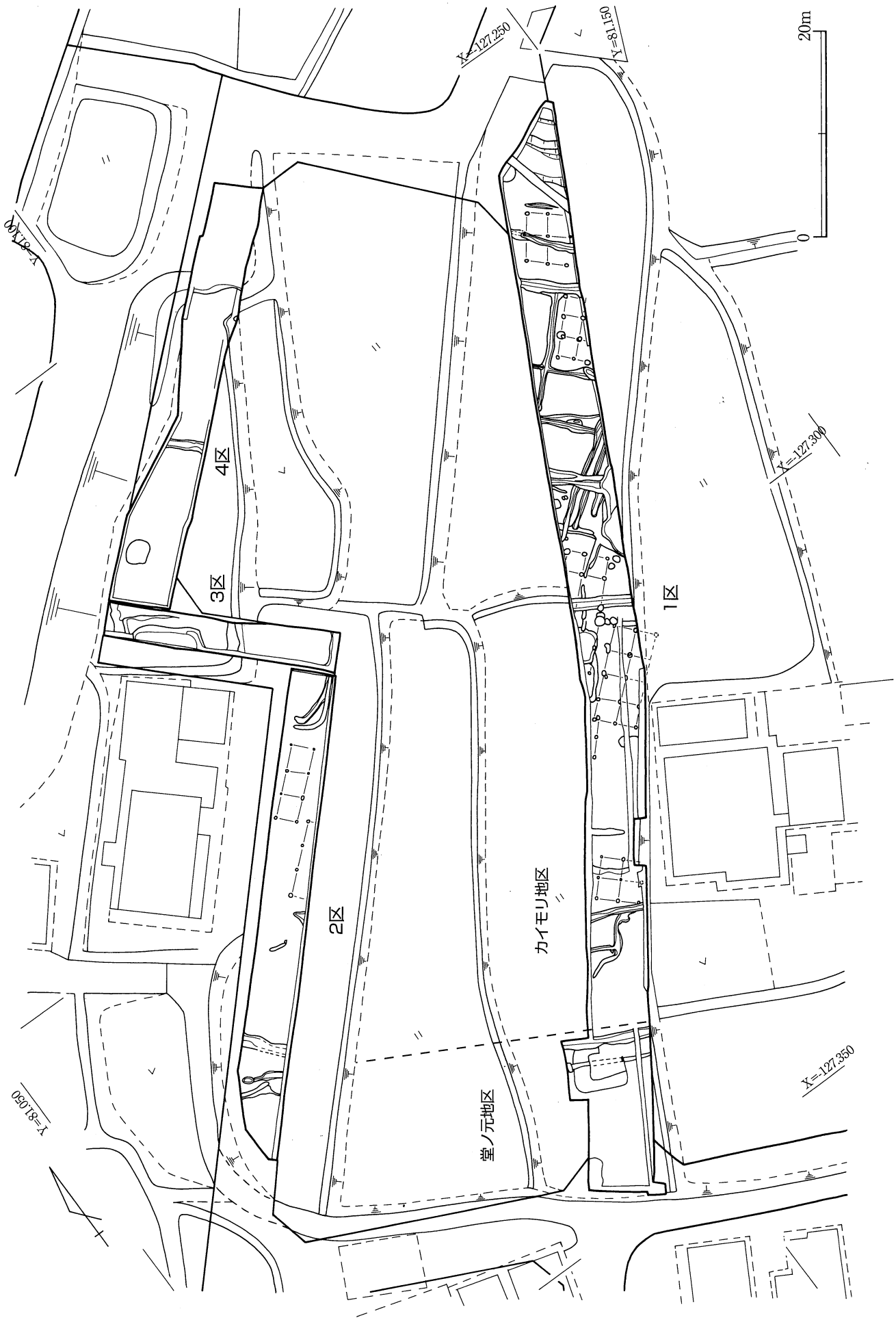
図版26

堂ノ元地区



出土遺物 3

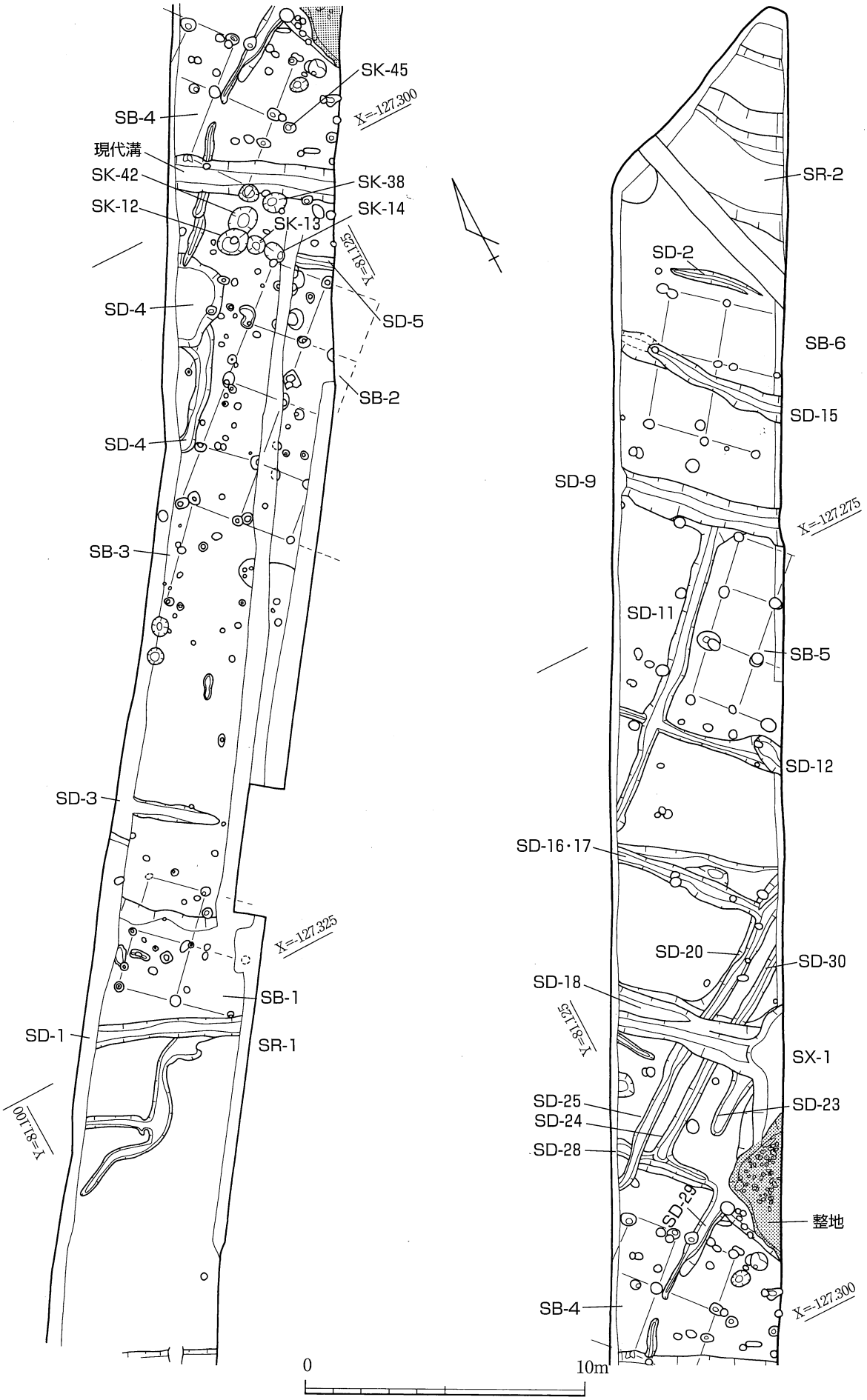
カイモリ地区


X=-127.250
Y=81.150
20m
0
Y=81.100
X=-127.300
4区
3区
1区
2区
カイモリ地区
堂ノ元地区
X=-127.350
Y=81.050

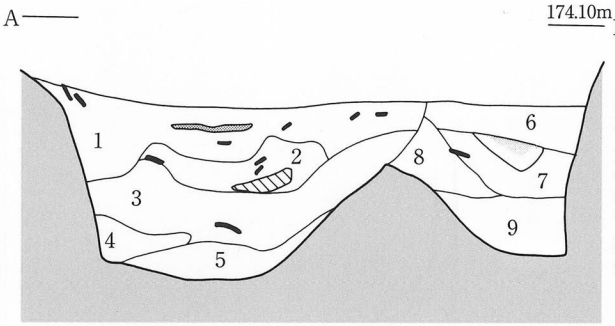
全体図

図版28

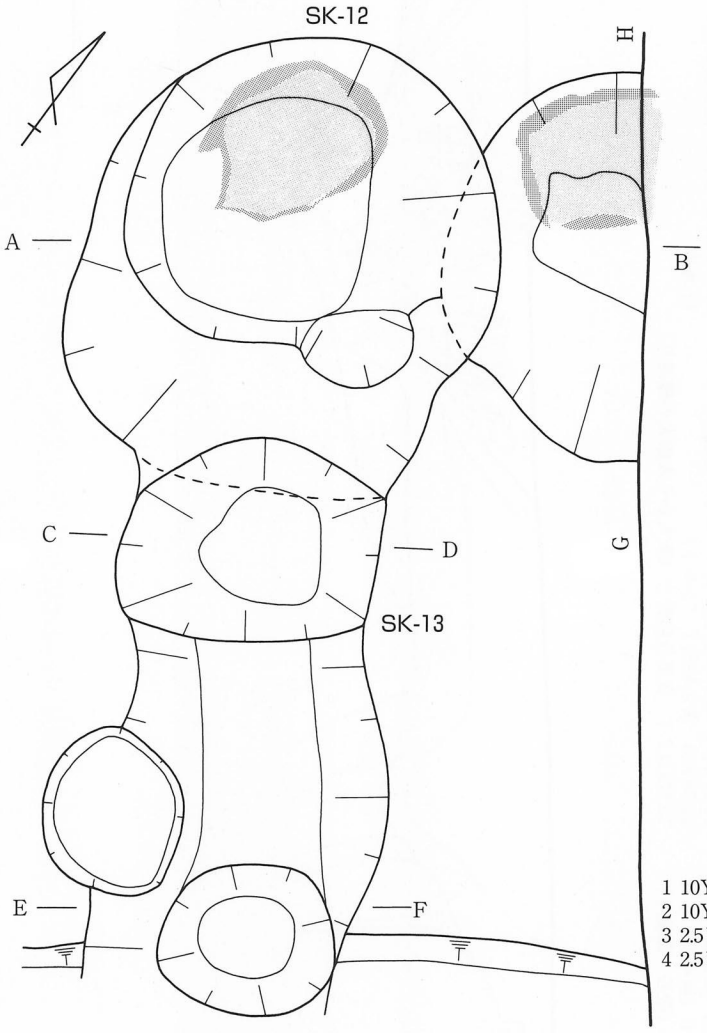
カイモリ地区

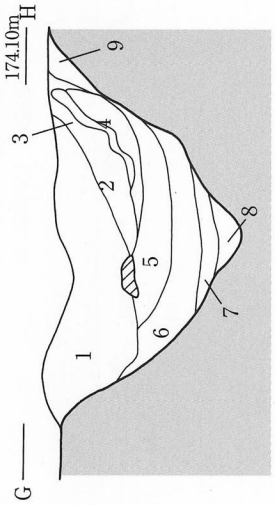


1区　平面図

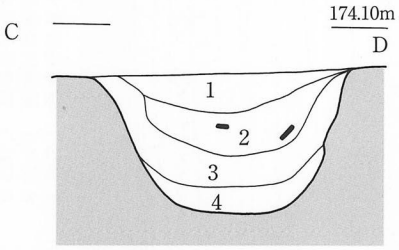


1 10YR4/1　褐灰色シルト（遺物・炭化粒多）
2 10YR4/1　褐灰色砂質シルト（遺物・炭化粒多）
3 10YR4/1　褐灰色砂質シルト（遺物・炭化粒多）
4 10YR7/1　灰白色シルト質極細砂
5 10YR4/1　褐灰色粘土質シルト（遺物・炭化粒多）
6 10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト（遺物・炭化物粒多）
7 10YR3/2　黒褐色砂質シルト（遺物・炭化物粒多）
8 10YR5/4　にぶい黄褐色シルト
9 10YR5/1　褐灰色シルト質粘土（炭化物粒・地山ブロック多）

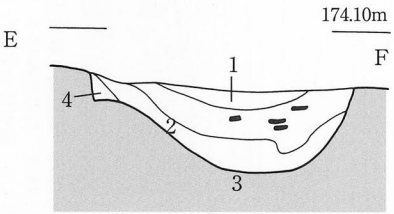




1 10YR4/2　灰黄褐色シルト（遺物多、炭化粒・材含）
2 10YR2/2　黒褐色砂質シルト（遺物多、炭化粒・材含）
3 10YR6/4　にぶい黄橙色シルト（焼土）
4 10YR1.7/1　炭
5 10YR5/1　褐灰色砂質シルト（遺物多、炭化粒含）
6 10YR 4 /1　褐灰色砂質シルト（炭化粒含）
7 7.5Y5/1　灰色砂質シルト
8 10Y5/1　灰色シルト質極細砂
9 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト



1 10YR5/2　灰黄褐色砂質シルト（遺物・炭化粒多）
2 10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト（地山ブロック多、遺物・炭化粒多）
3 2.5Y 4/1　黄灰色砂質シルト（地山ブロック非常に多、遺物混）
4 2.5Y 5/1　黄灰色砂質シルト（地山ブロック多）

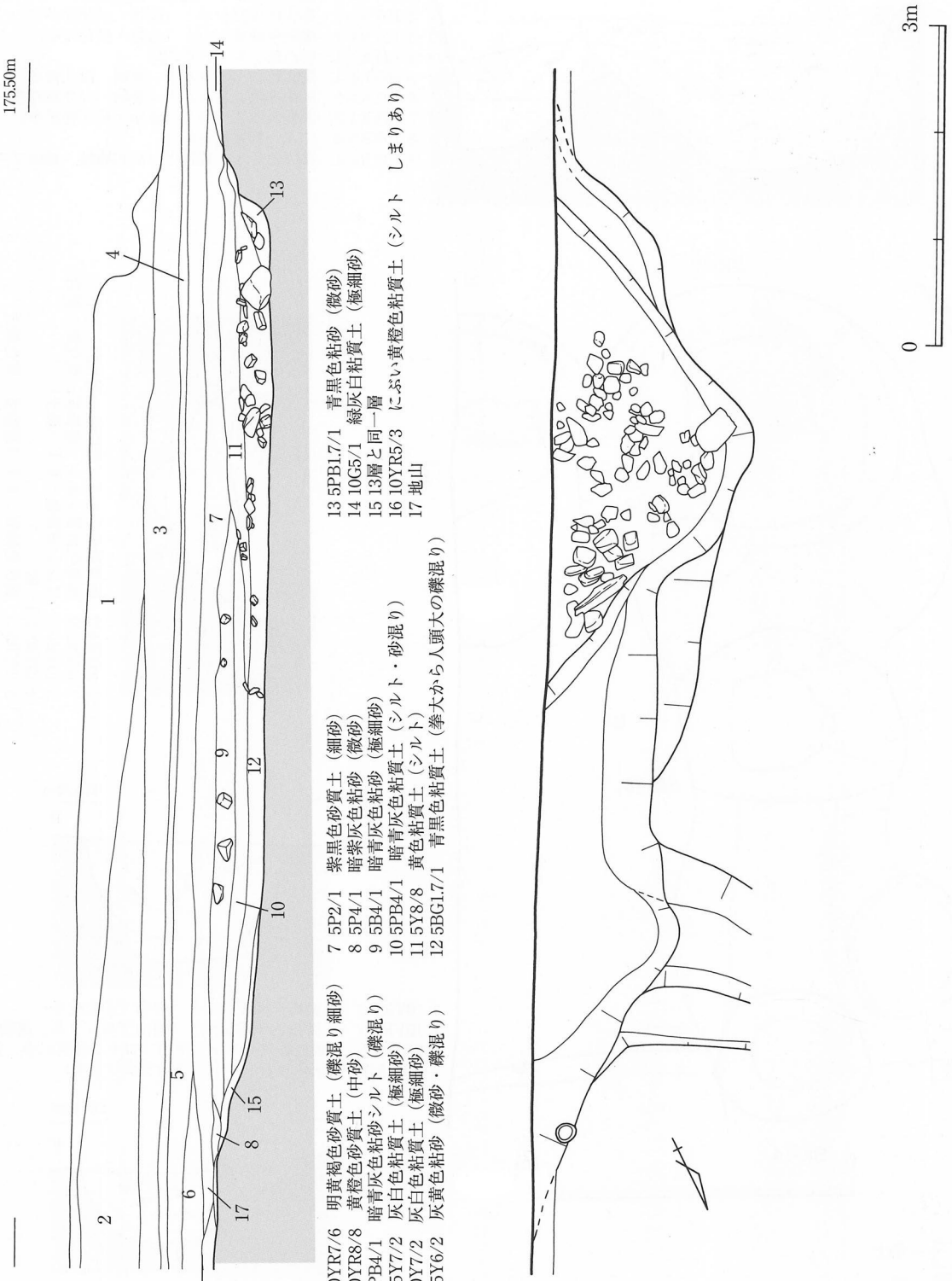


1 10YR5/1　褐灰色シルト（遺物・炭化粒多）
2 10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト（遺物・炭化粒多）
3 10YR5/1　褐灰色砂質シルト（地山ブロック多）
4 10YR6/3　にぶい黄橙色シルト

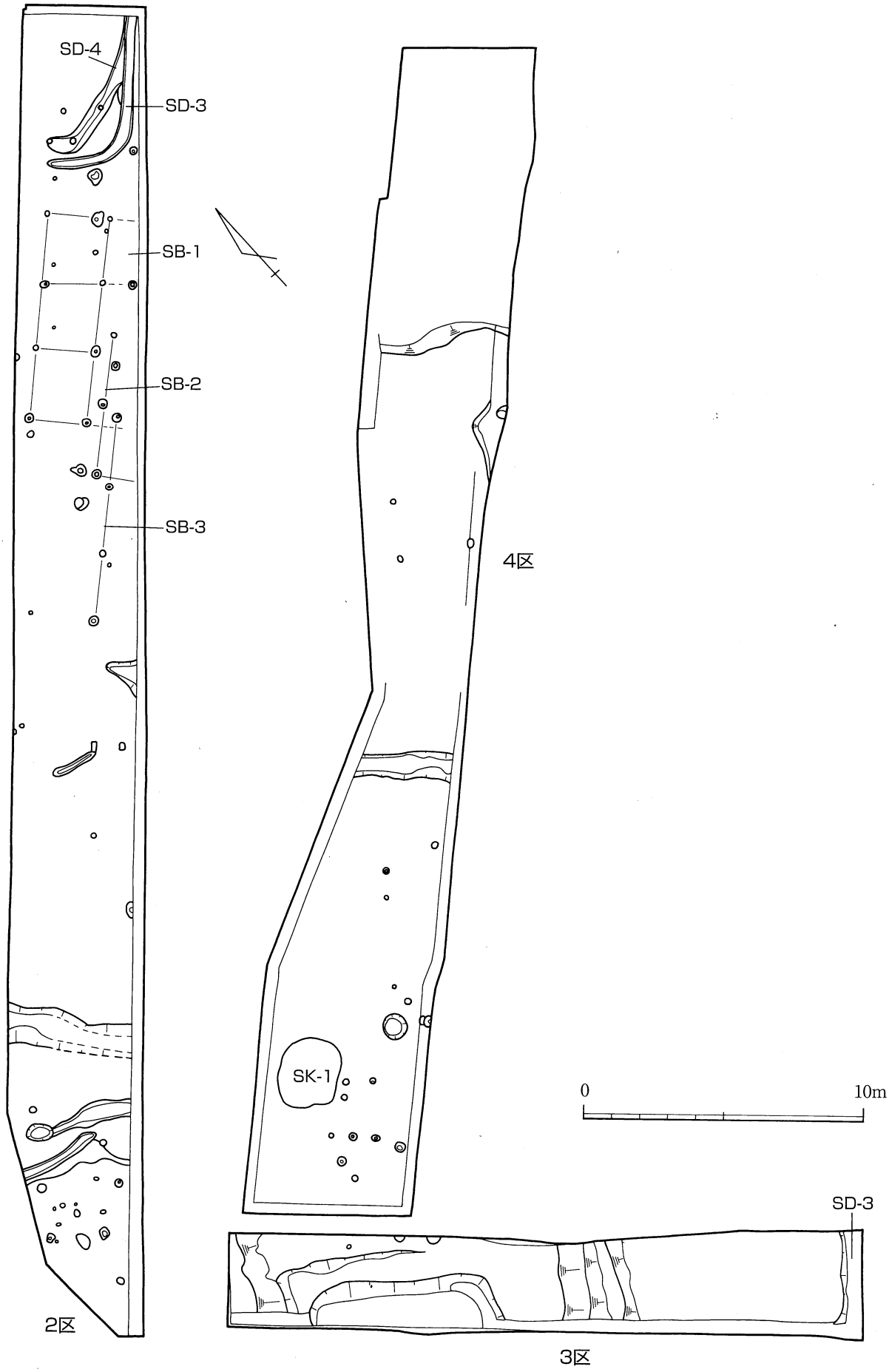
焼土
炭

図版30

カイモリ地区



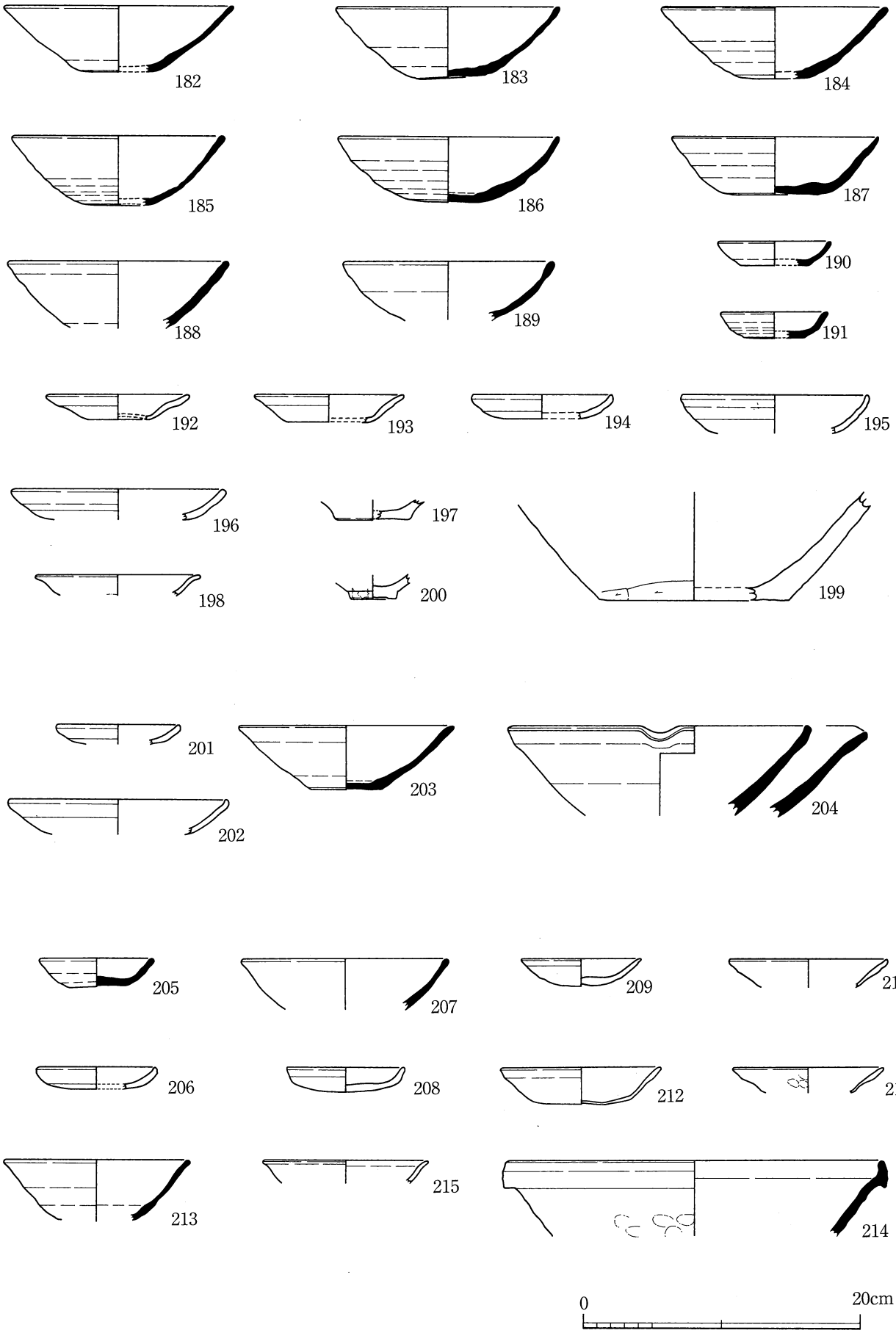
1区 SX－1



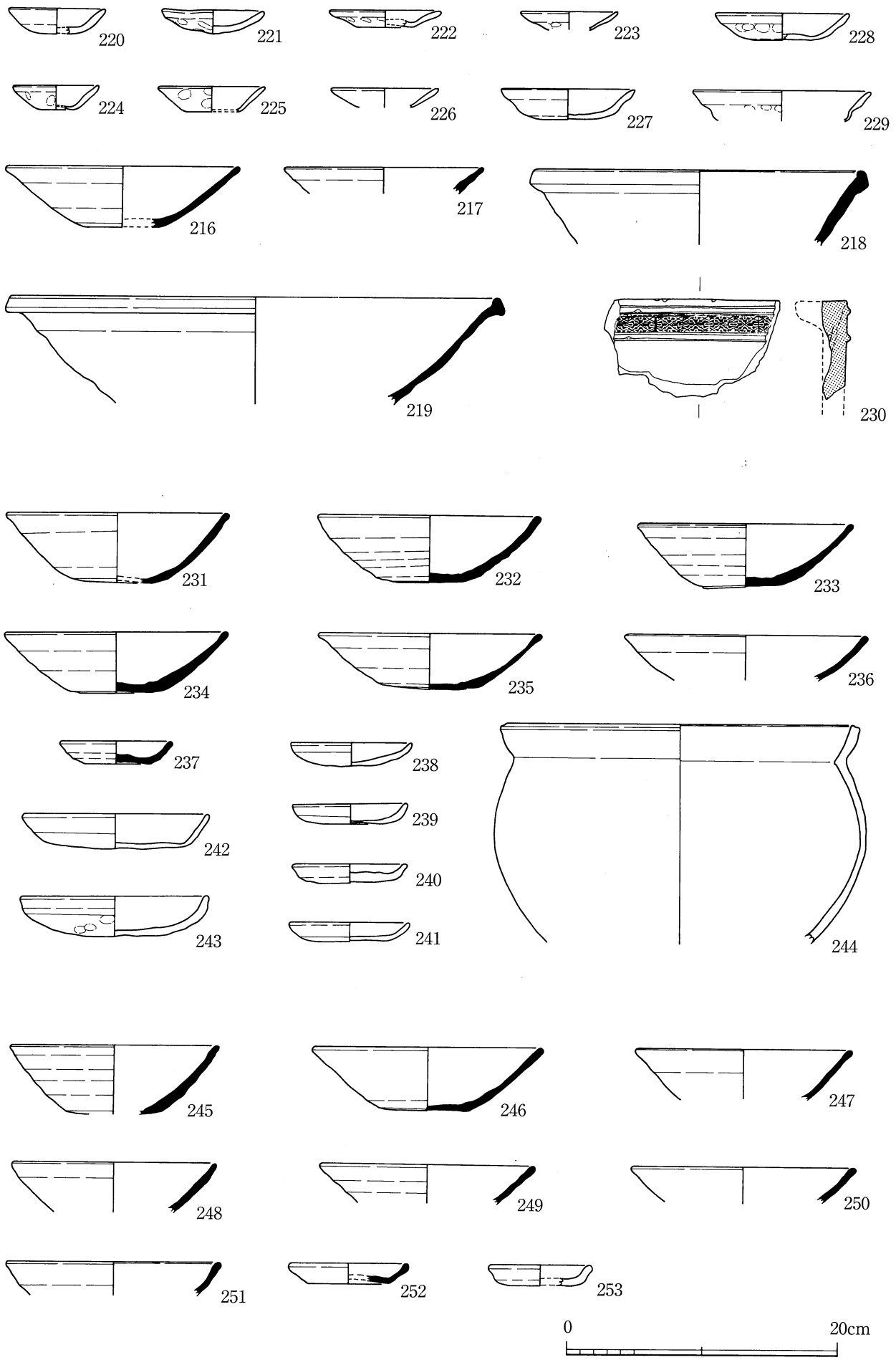
2区～4区　平面図

図版32

カイモリ地区



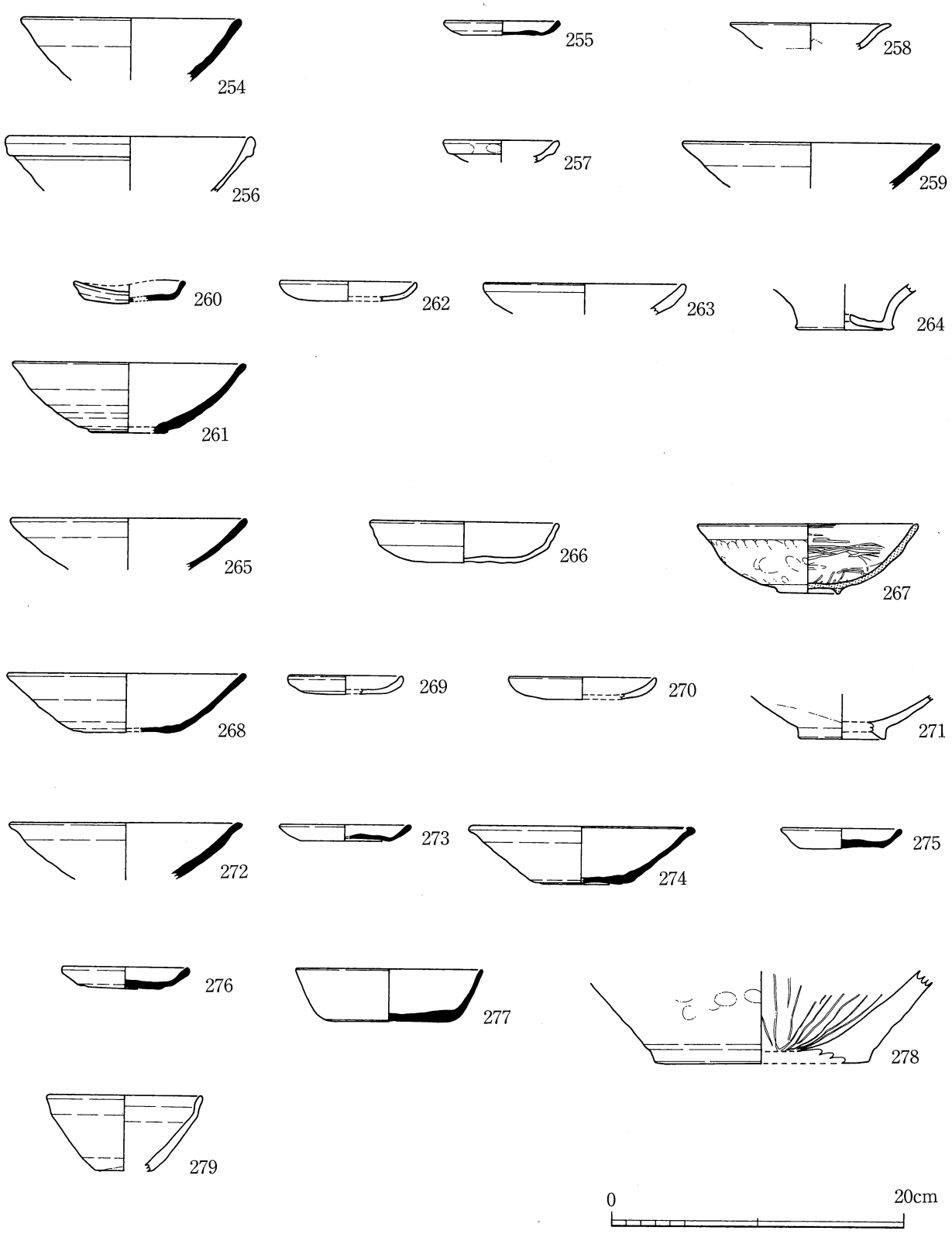
出土遺物 1

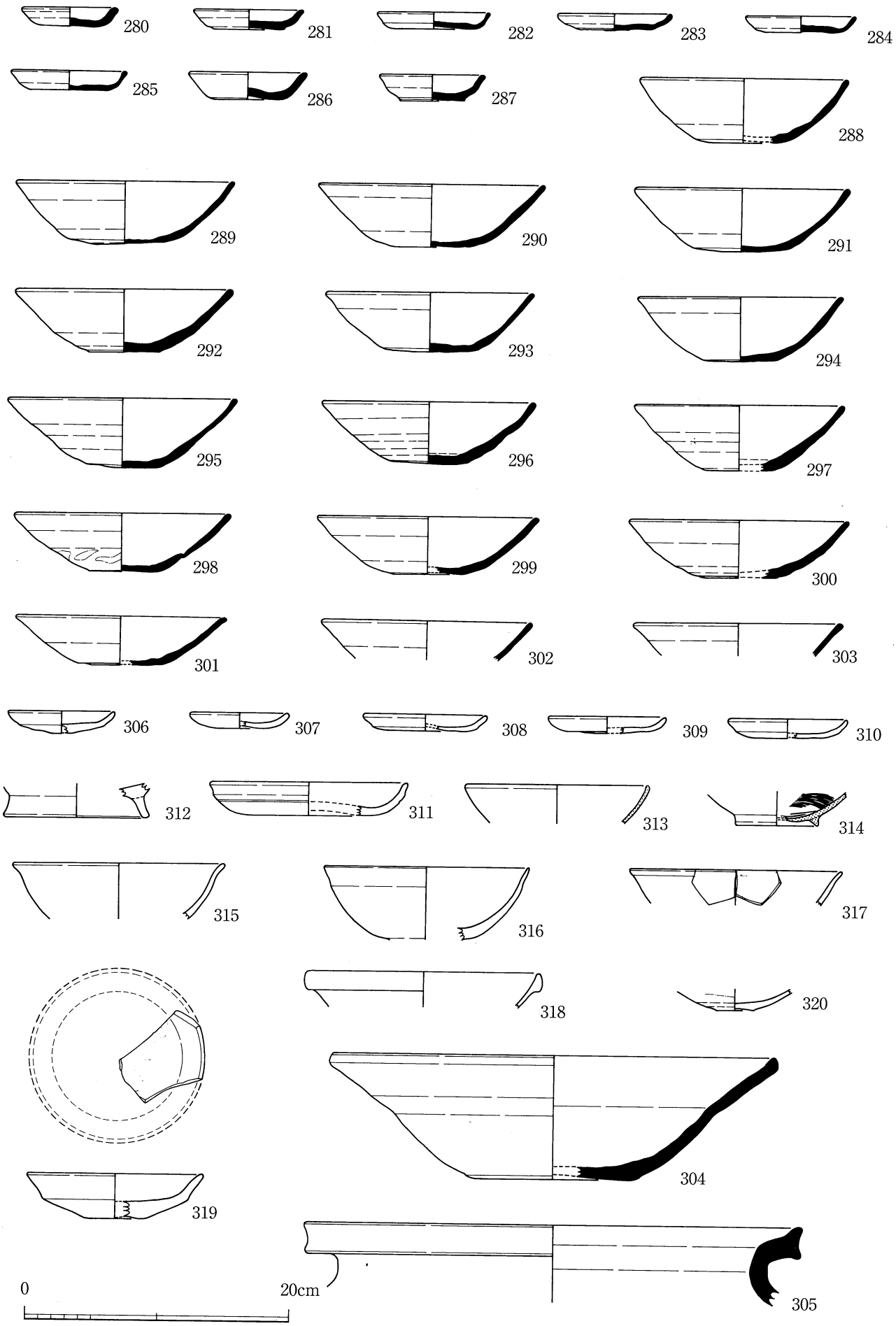

220
221
222
223
228
224
225
226
227
229
216
217
218
219
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
0
20cm

出土遺物 2

図版34

カイモリ地区

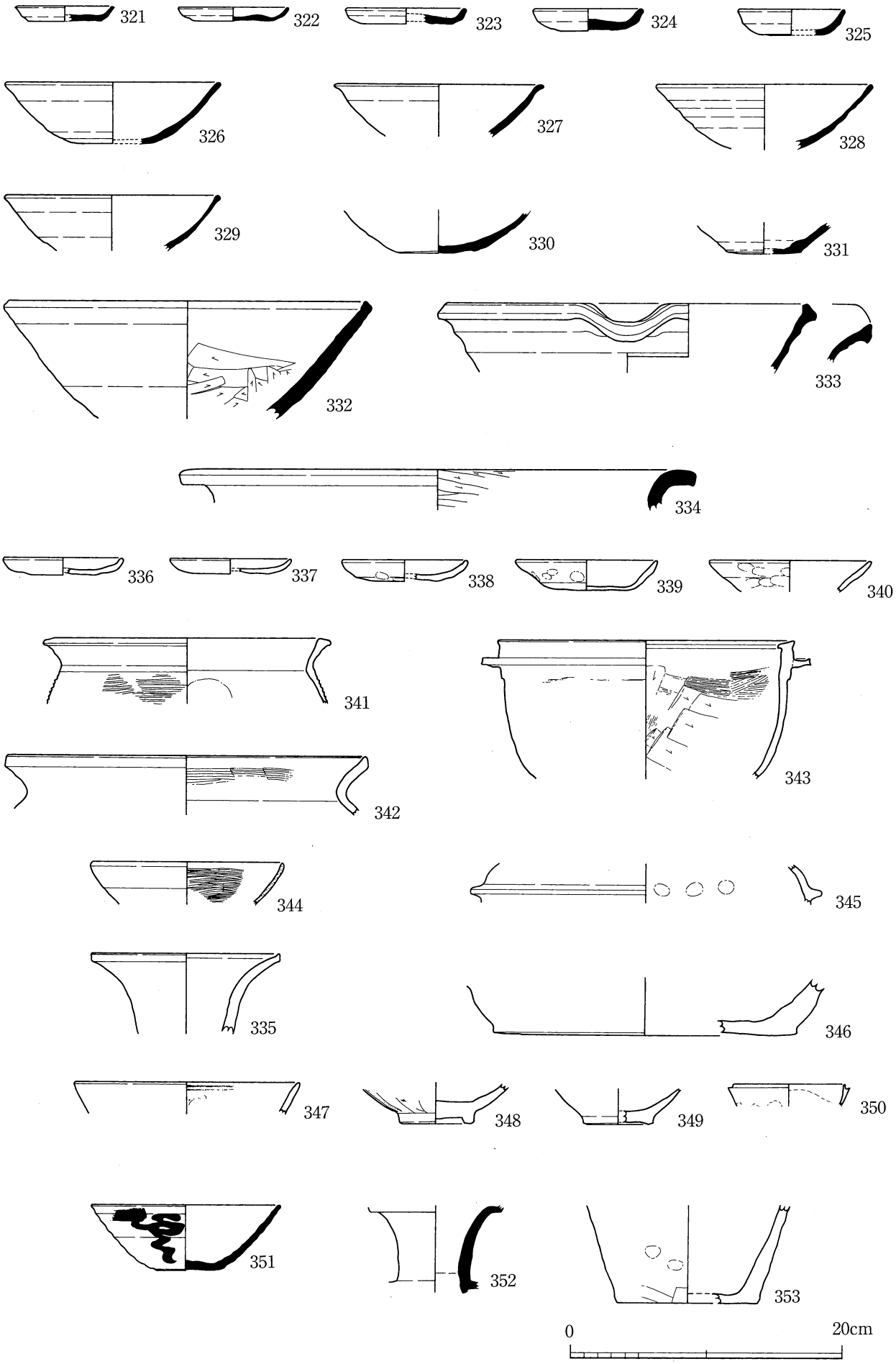

254
255
258
256
257
259
260
262
263
264
261
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
0
20cm


280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
306
307
308
309
310
312
311
313
314
315
316
317
318
320
304
319
305
0
20cm

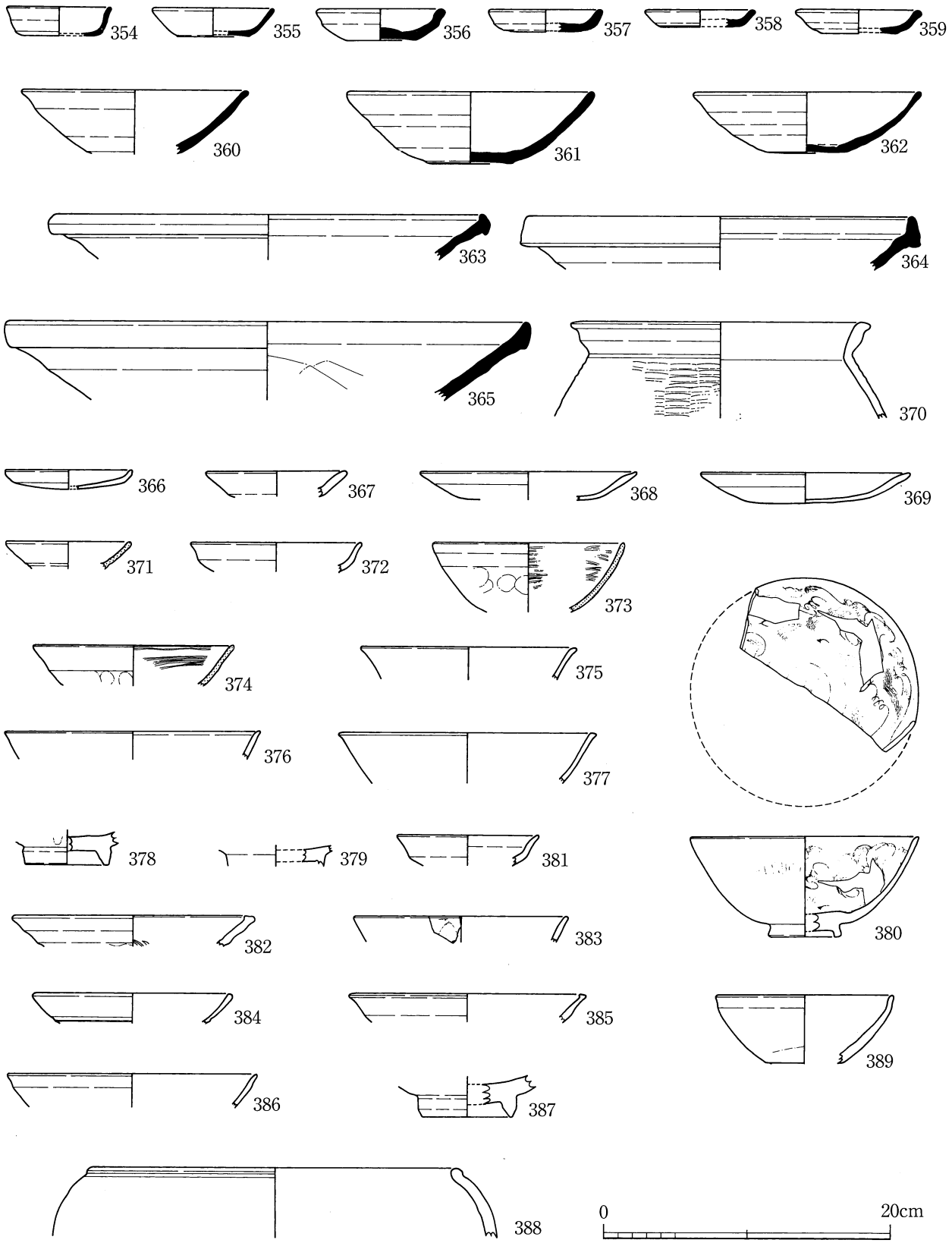
出土遺物 4

図版36

カイモリ地区

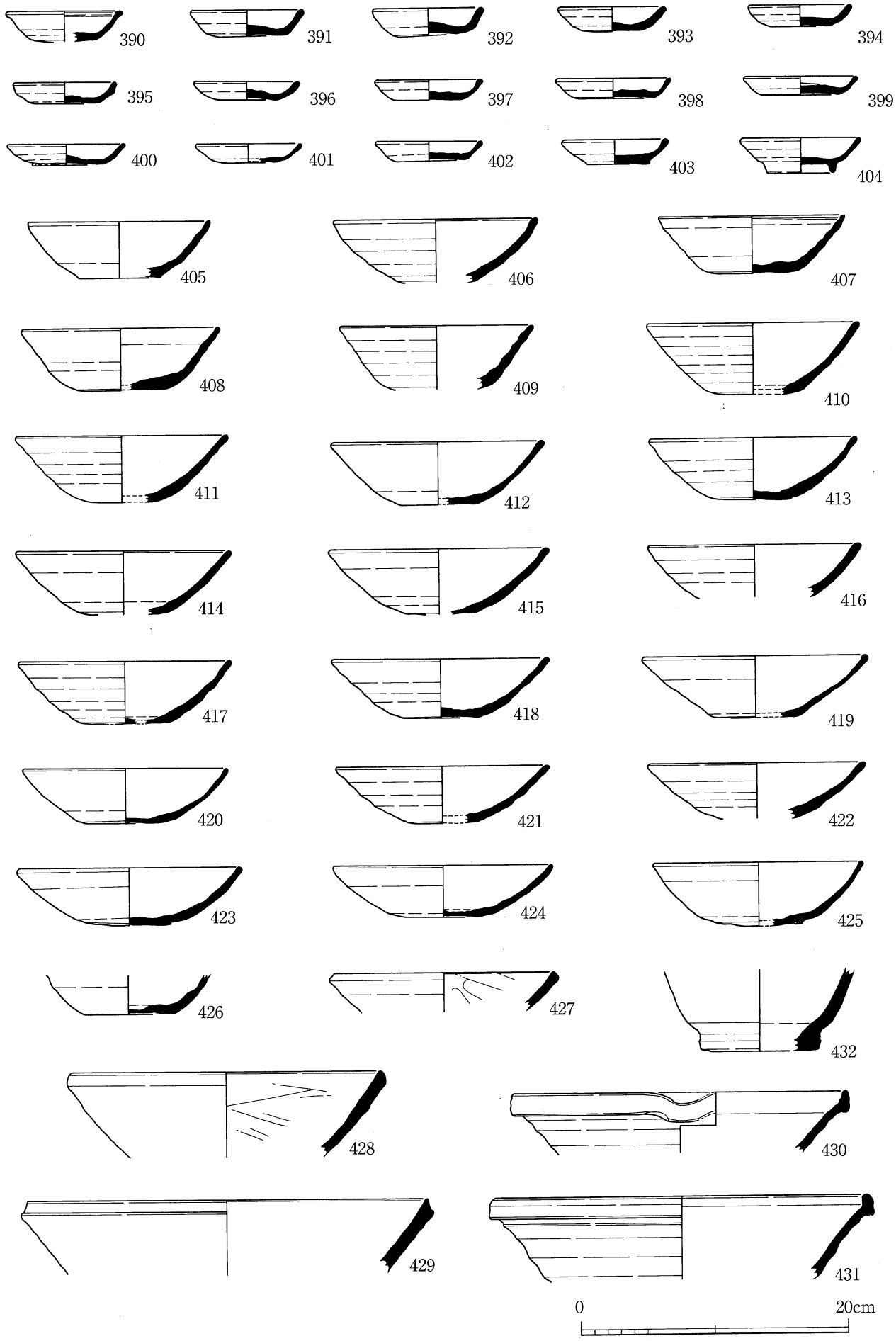


出土遺物 5

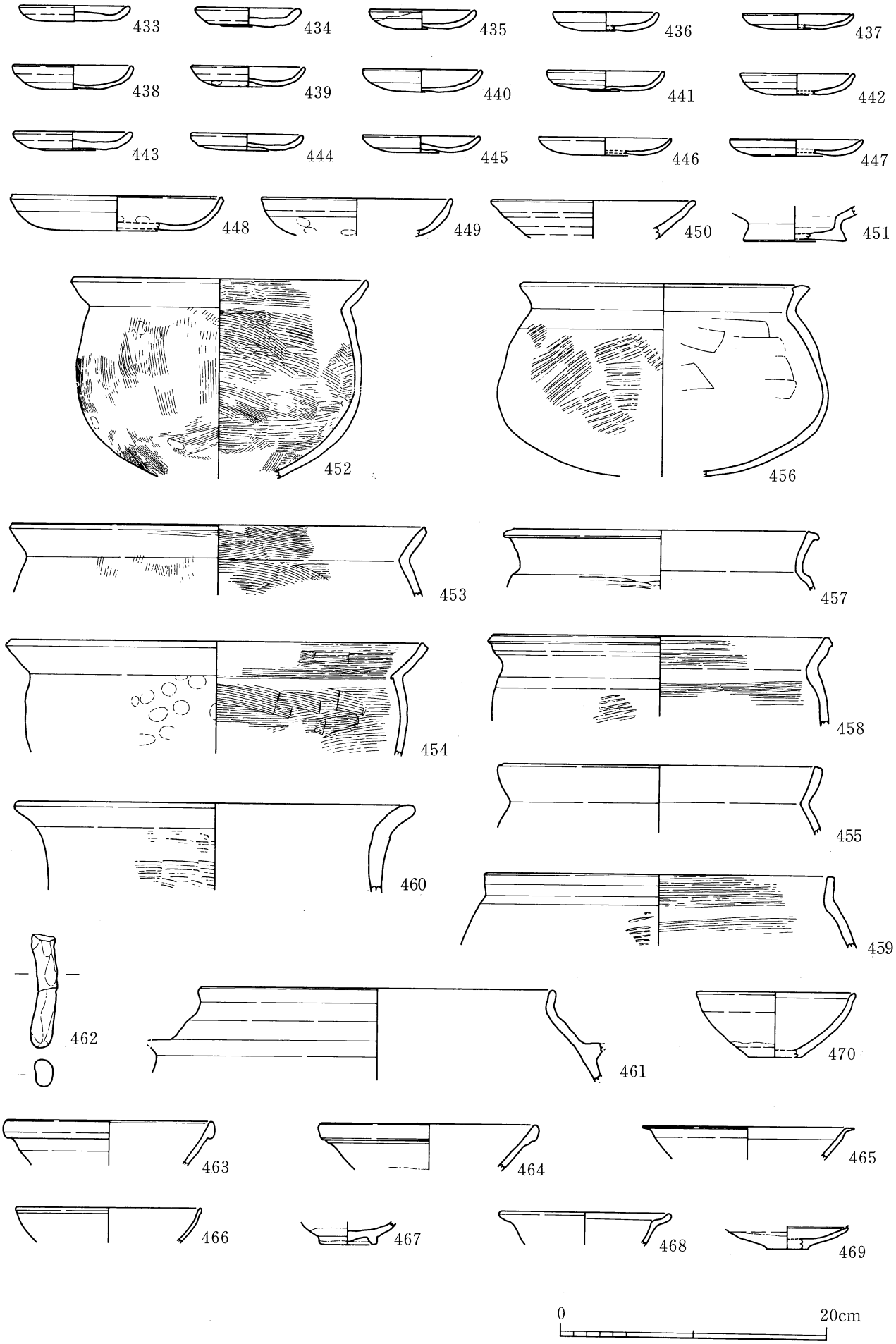

354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
370
366
367
368
369
371
372
373
374
375
376
377
378
379
381
380
382
383
384
385
389
386
387
388
0
20cm

図版38

カイモリ地区



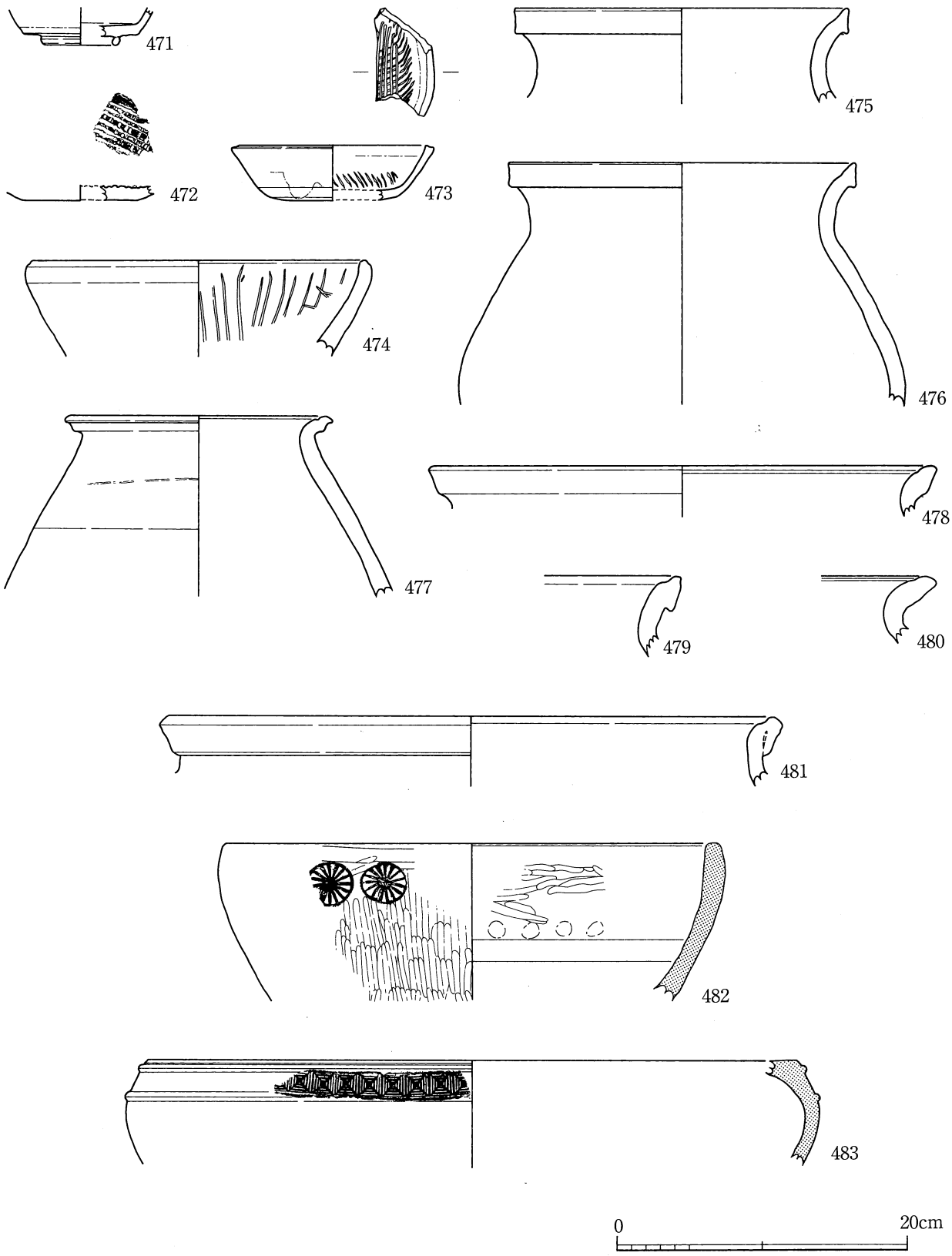
出土遺物 7

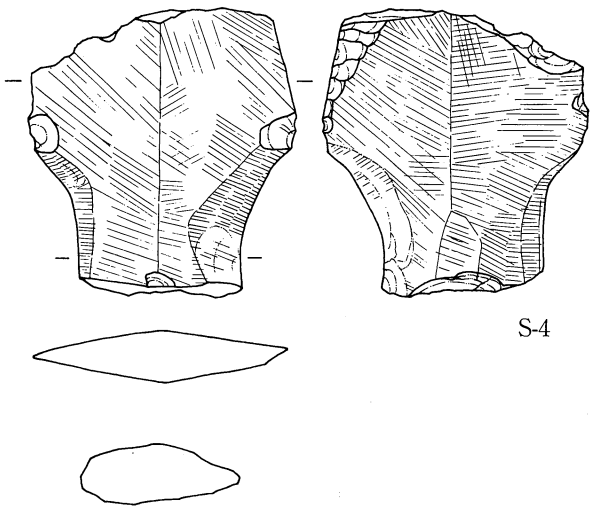

433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
456
453
457
454
458
455
460
459
462
461
470
463
464
465
466
467
468
469
0
20cm

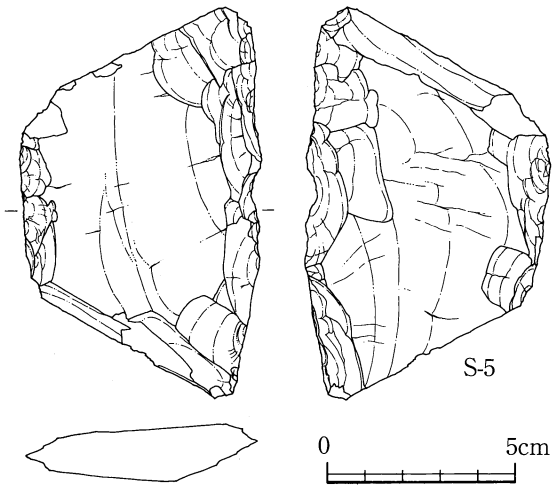
出土遺物 8

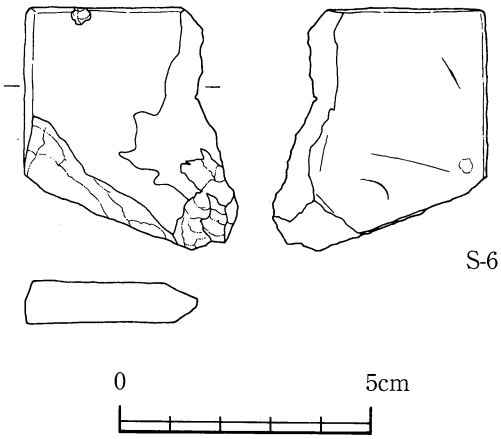
図版40

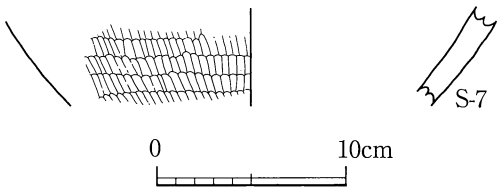
カイモリ地区

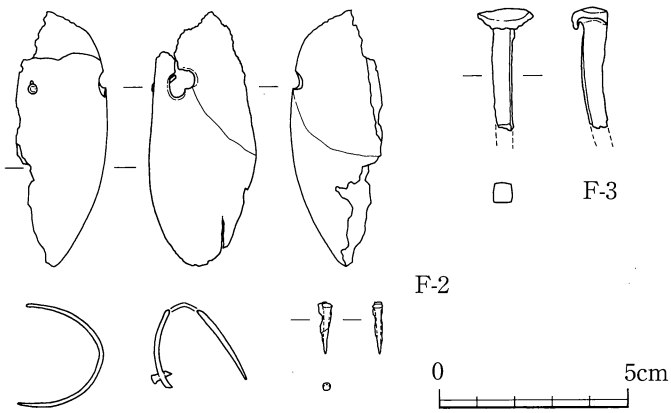



S-4


S-5
0
5cm

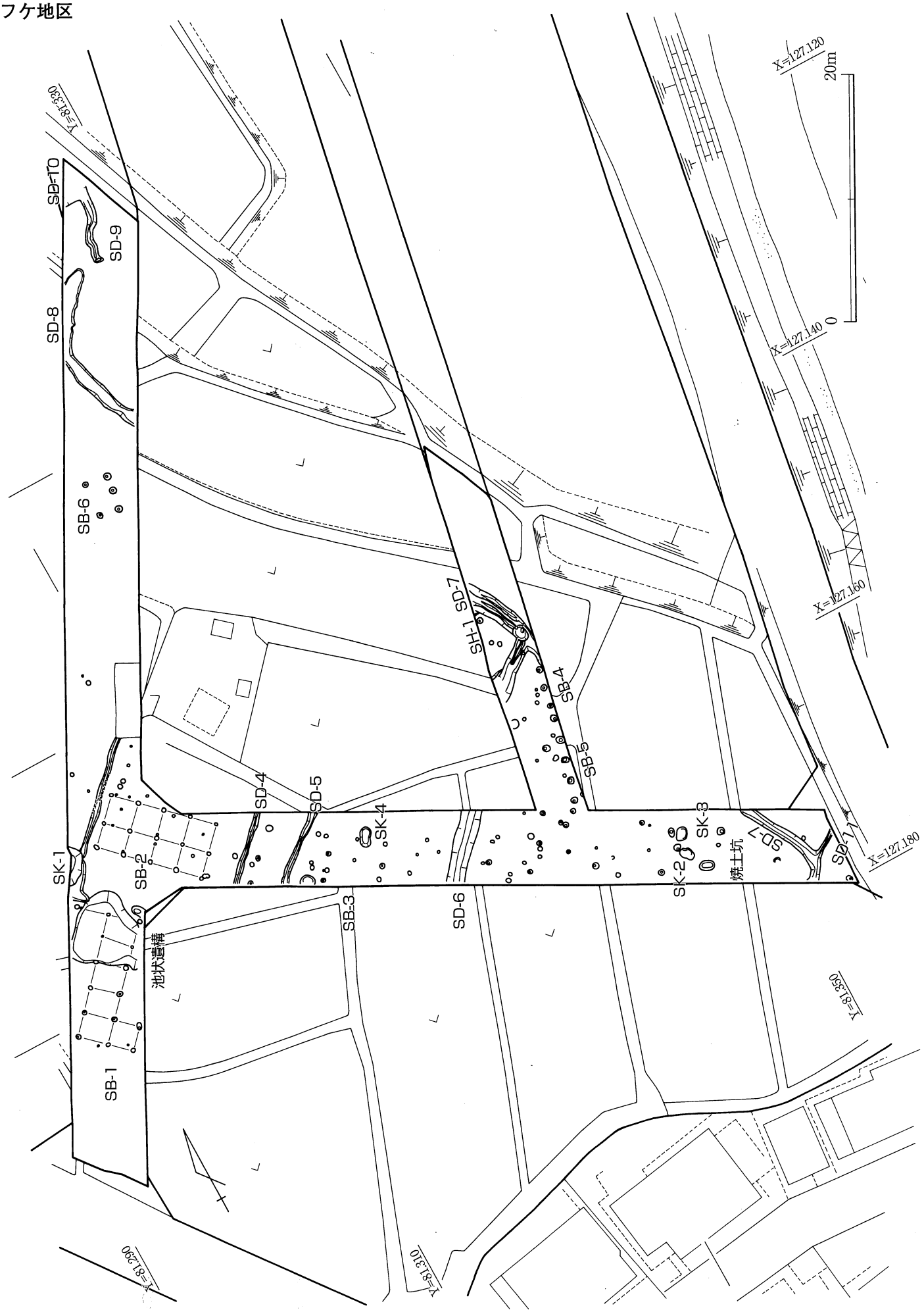

S-6
0
5cm


S-7
0
10cm

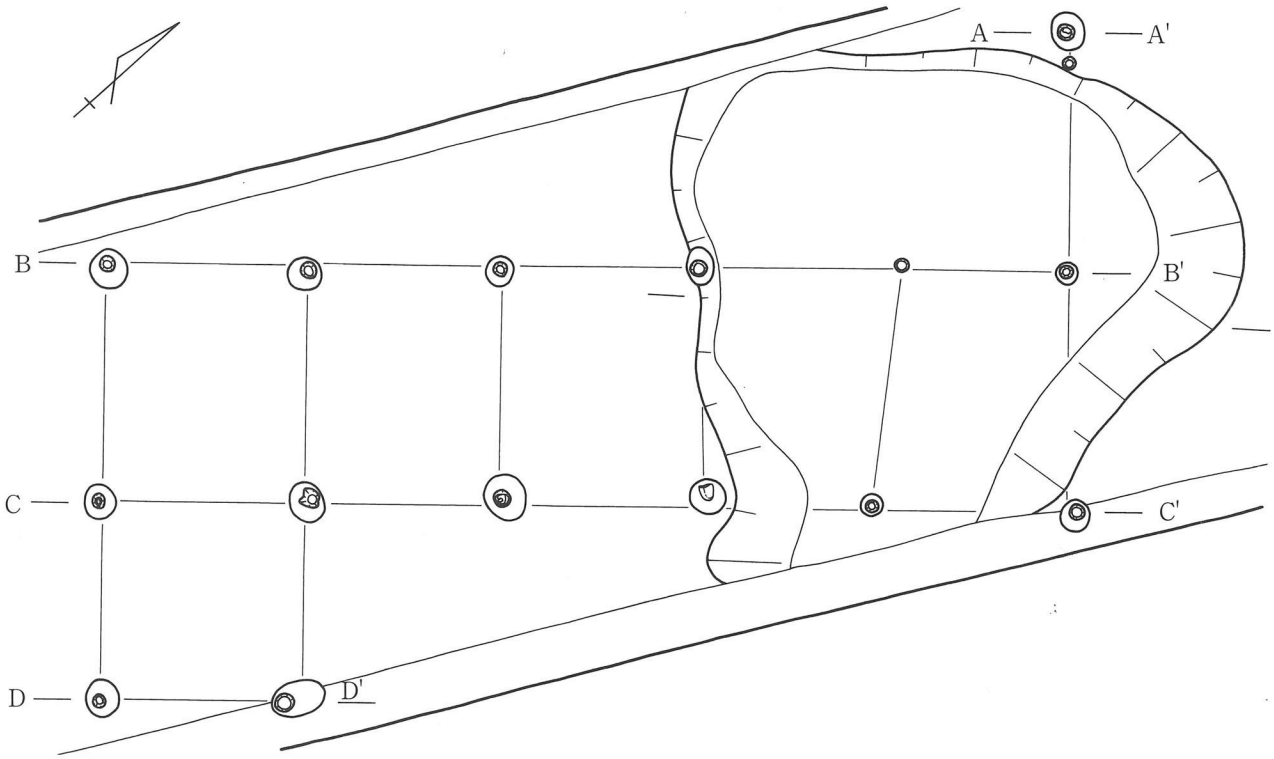

F-2
F-3
0
5cm

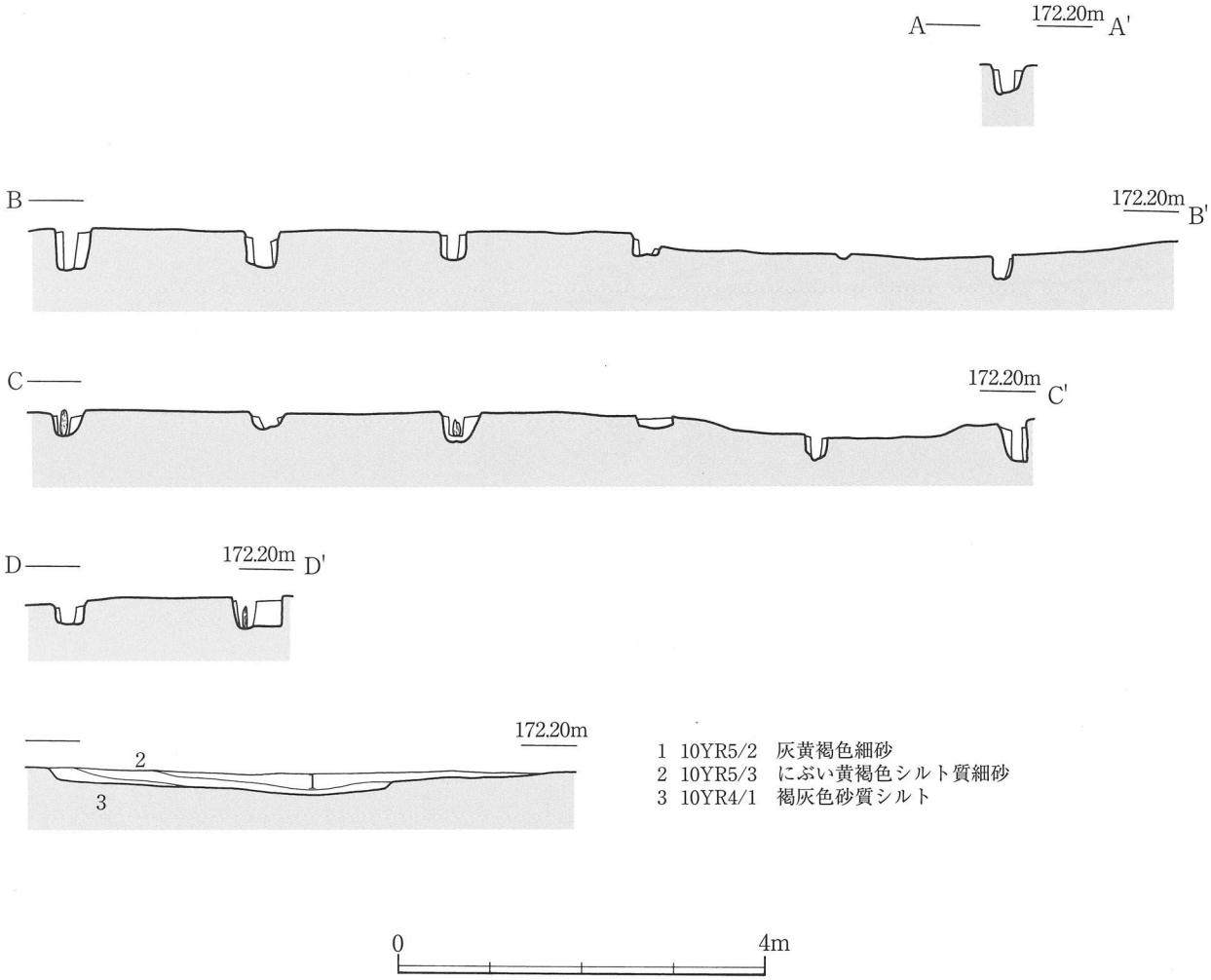
図版42

フケ地区

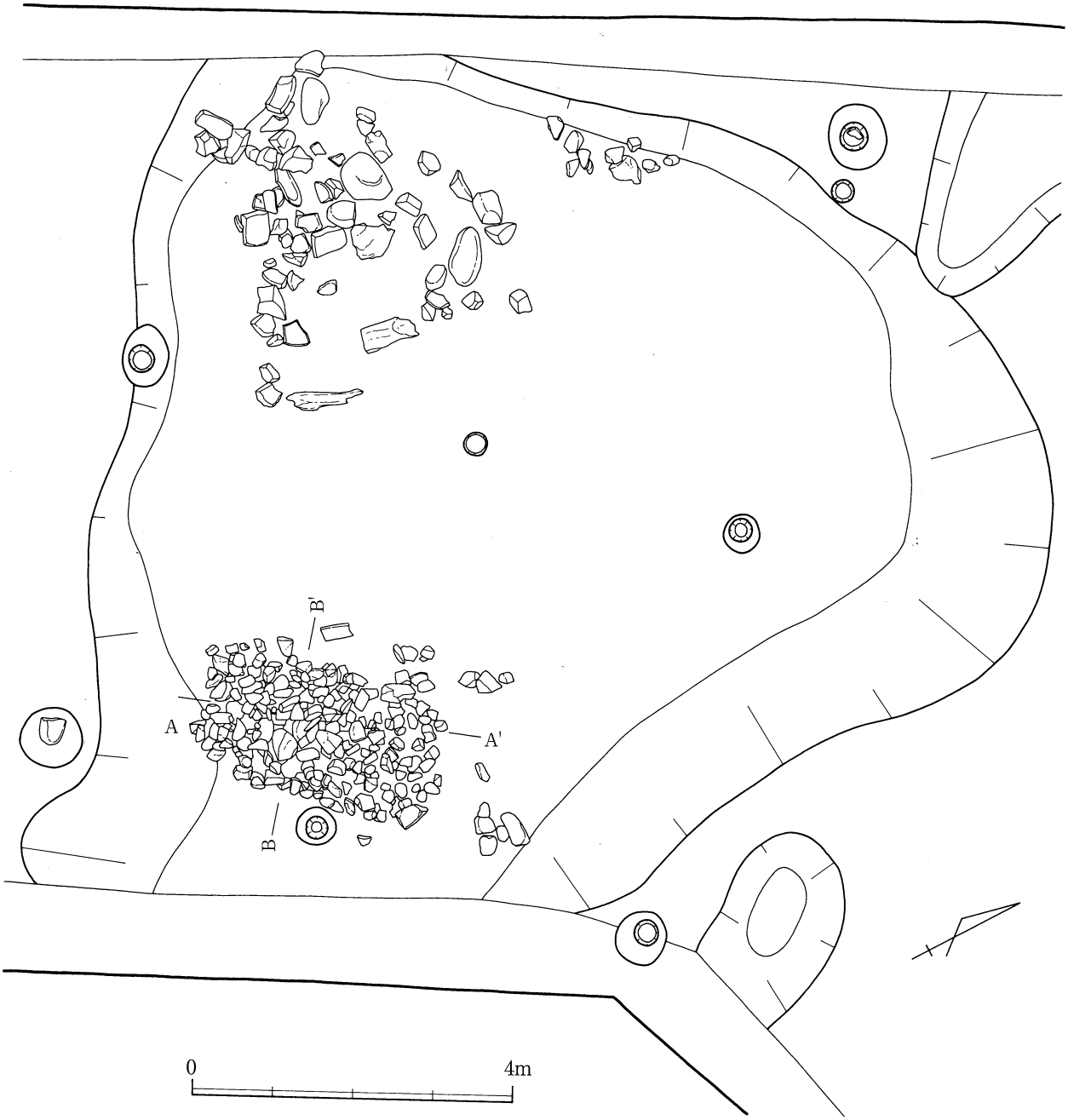


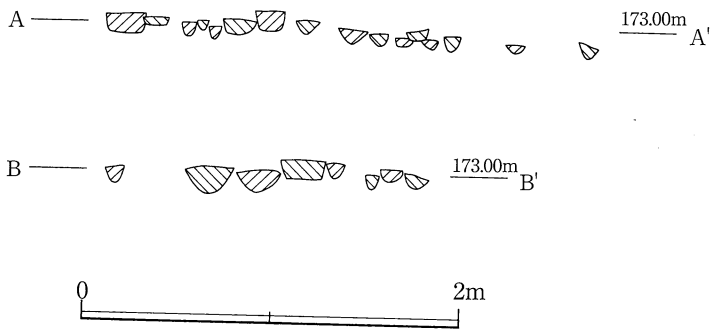
全体図



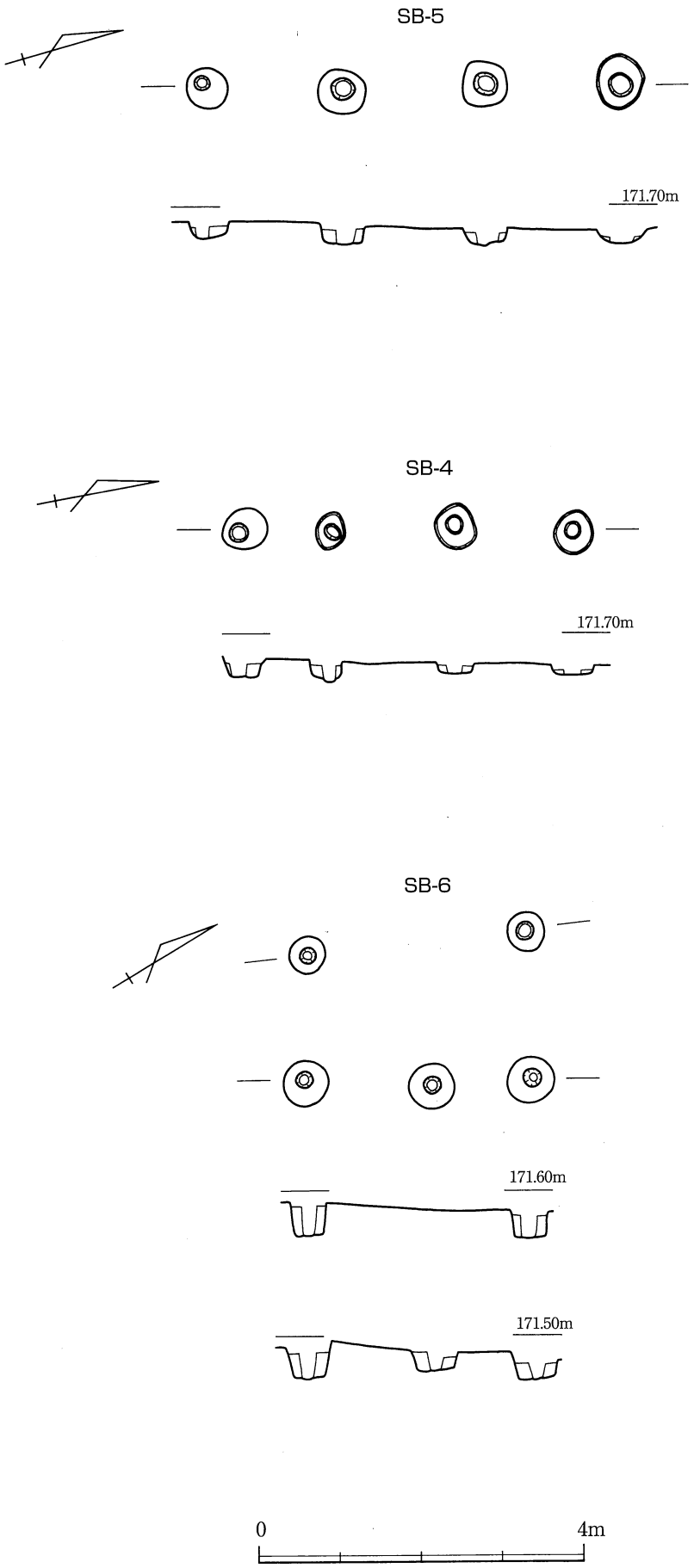


A区　ＳＢ－１および池状遺構平面図・断面図

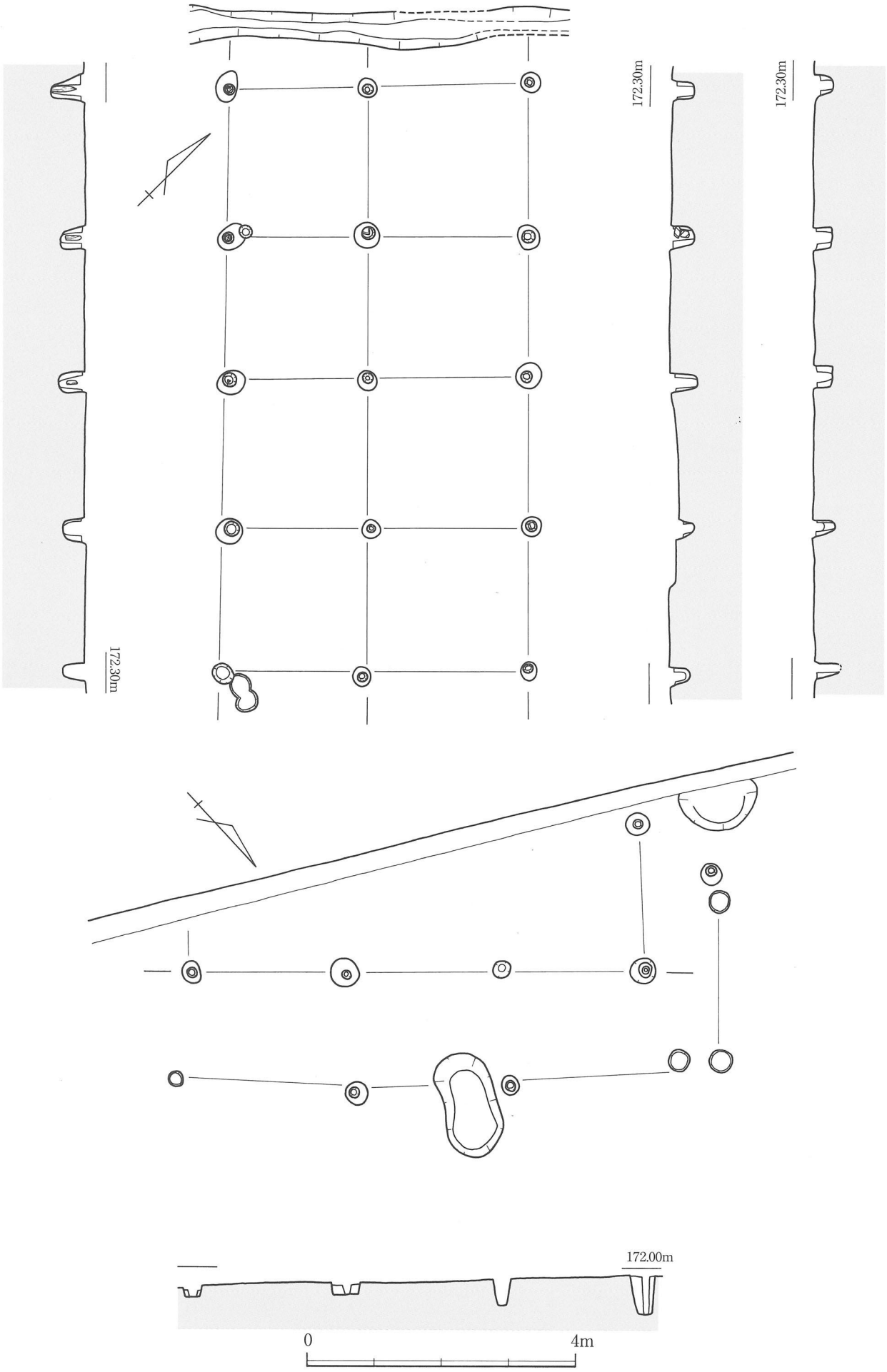




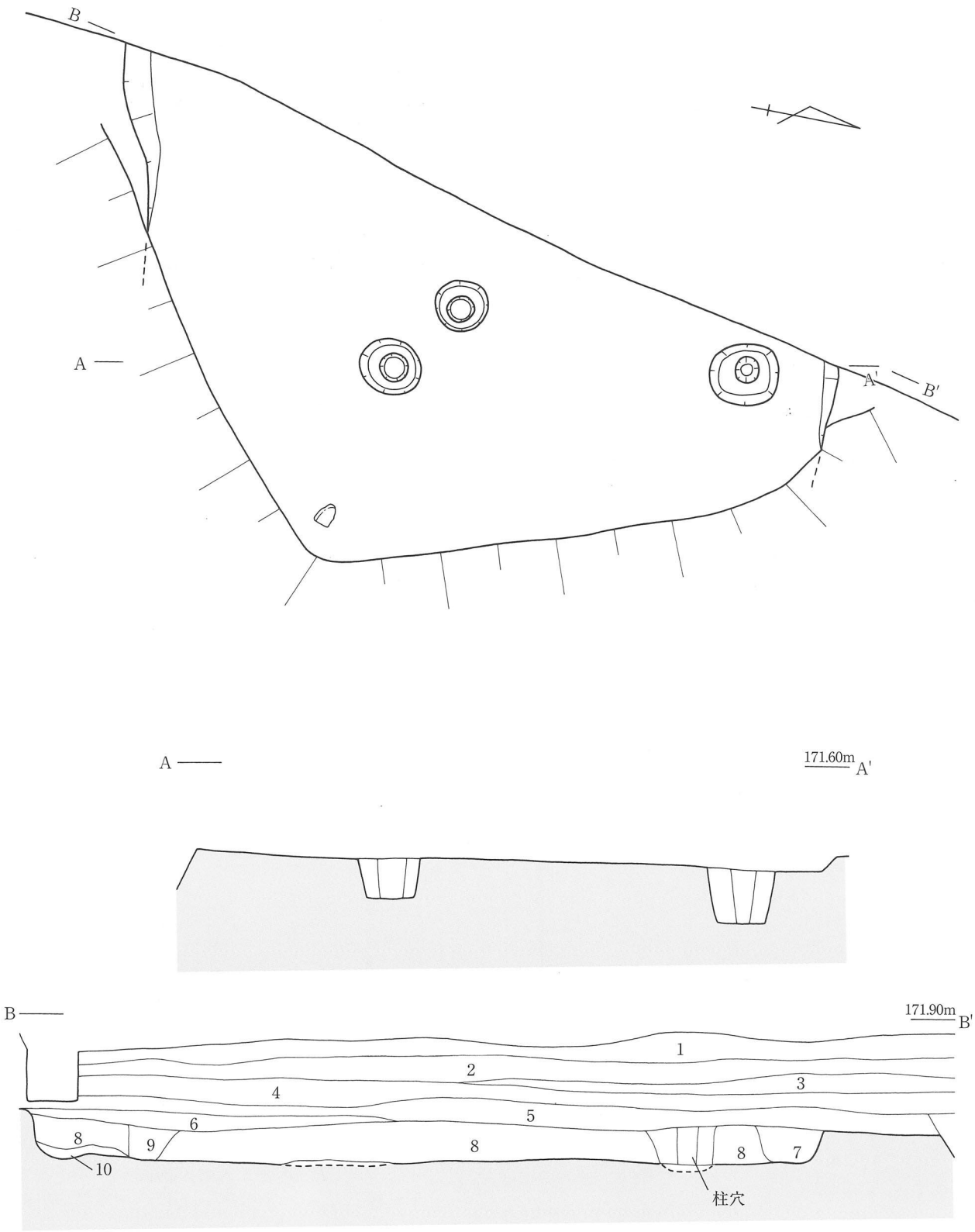
A区　池状遺構平面図・集石断面図



A区　SB－6．C区　SB－4・5　平面図・断面図



B区　SB－2・3　平面図・断面図

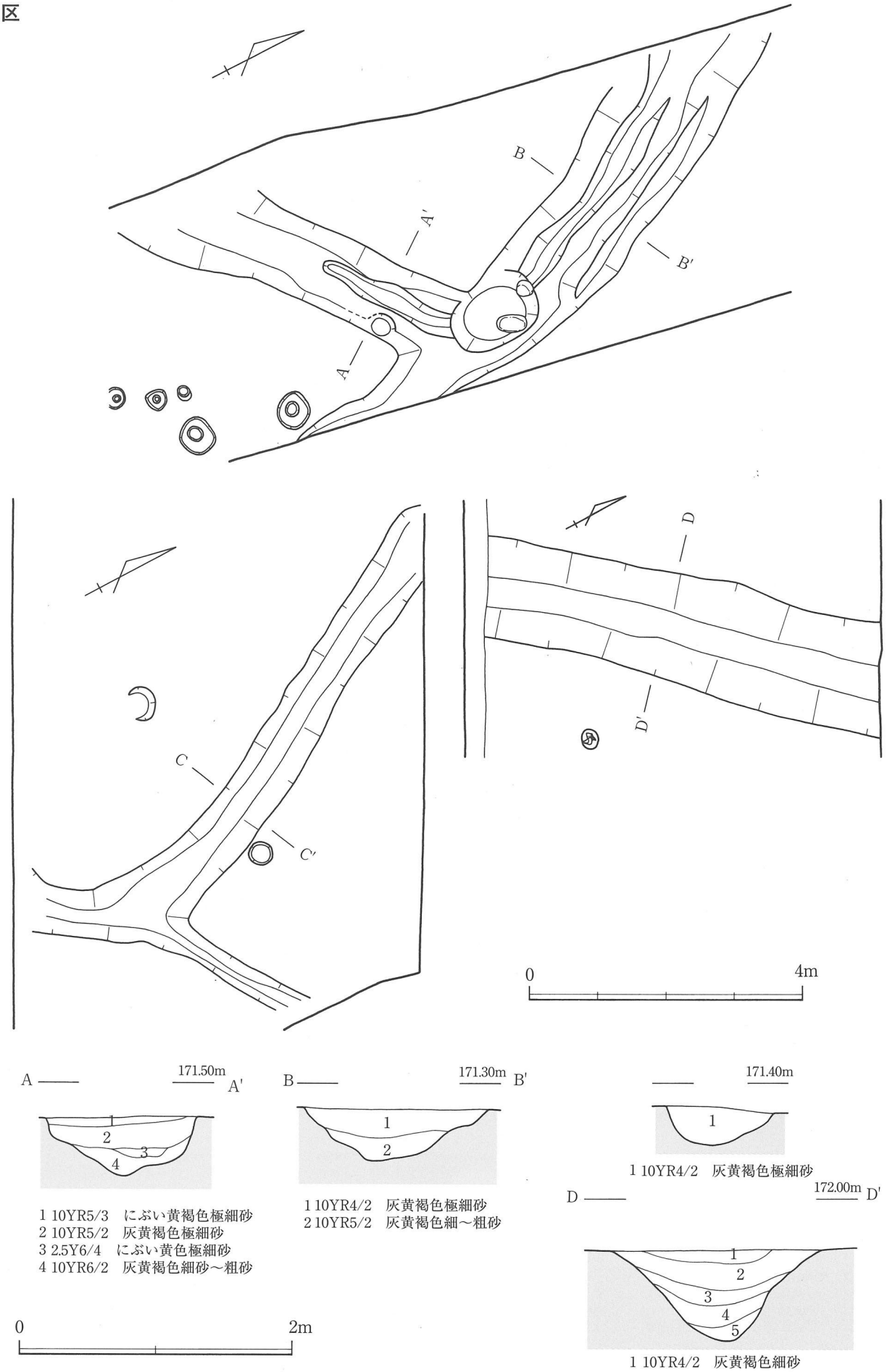


1 表土
2 10YR6/3　にぶい黄橙色細砂
3 2.5Y5/2　暗灰黄色細砂
4 10YR5/2　灰黄褐色細砂
5 10YR4/2　灰黄褐色細砂
6 10YR4/3　にぶい黄褐色シルト質細砂
7 10YR3/3　暗褐色極細砂（ブロック）
8 10YR4/2　灰黄褐色
10YR3/1　黒褐色シルト質細砂　ブロック状埋土（ＳＨ－１埋土）
9 10YR3/2　黒褐色細砂（ブロック）
10 10YR4/2　灰黄褐色シルト質極細砂
11 10YR6/4　にぶい黄橙色砂質シルト（地山）

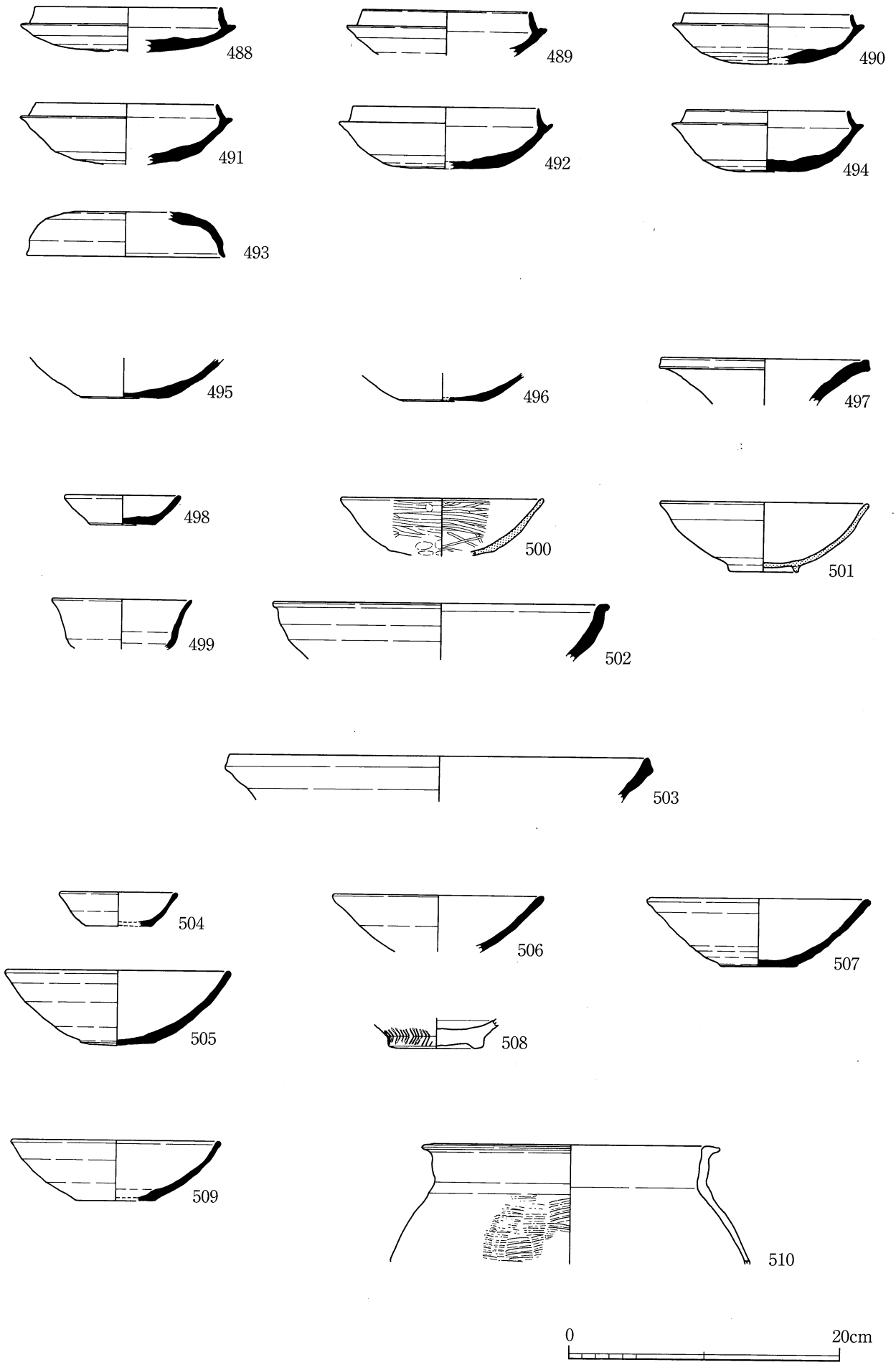
0　2m

Ｃ区　ＳＨ－１　平面図・断面図

フケ地区



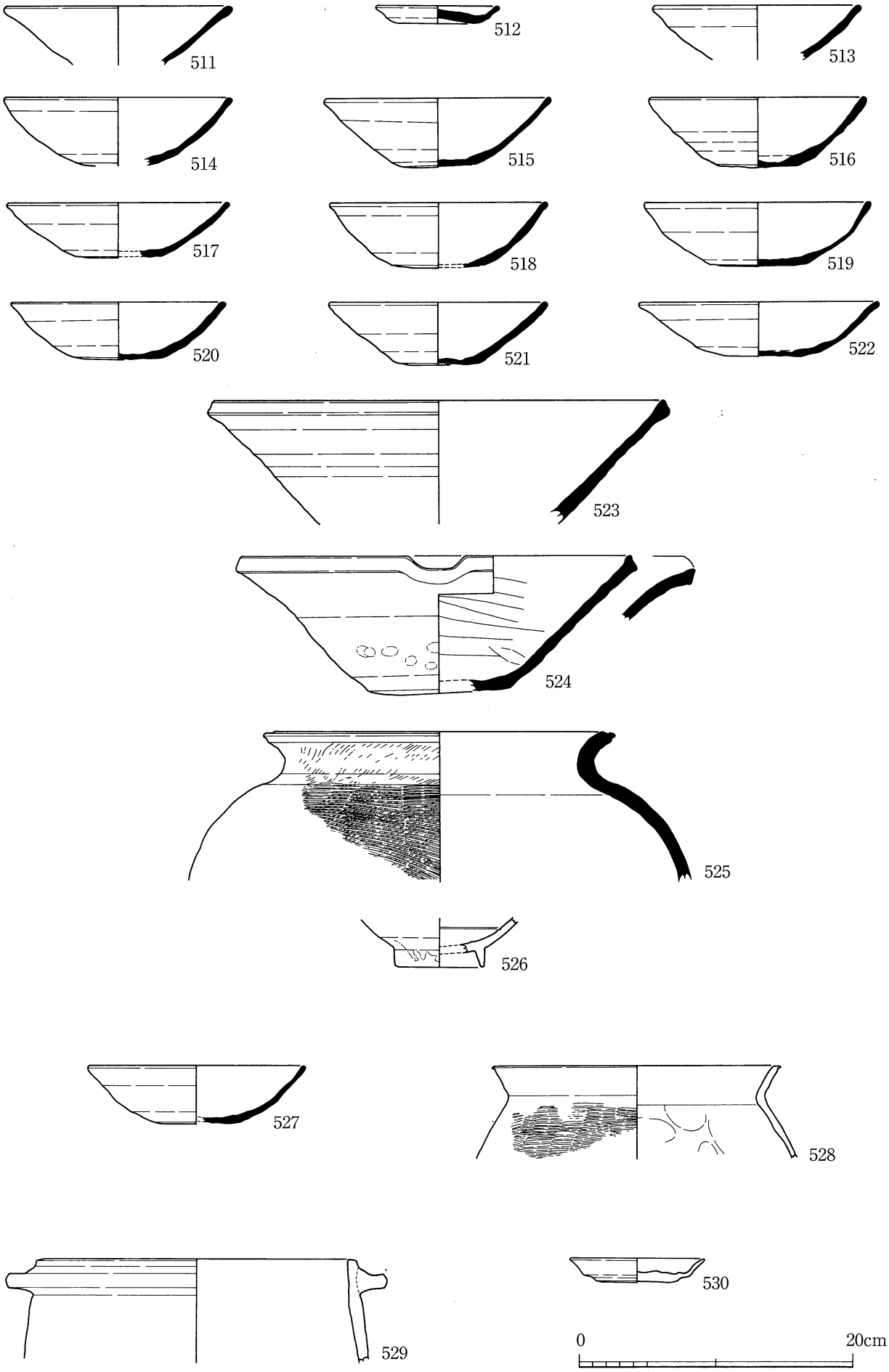
C区　SD－6・7合流部．およびB区　SD－6・7　平面図・断面図


488
489
490
491
492
494
493
495
496
497
498
500
501
499
502
503
504
506
507
505
508
509
510
0
20cm

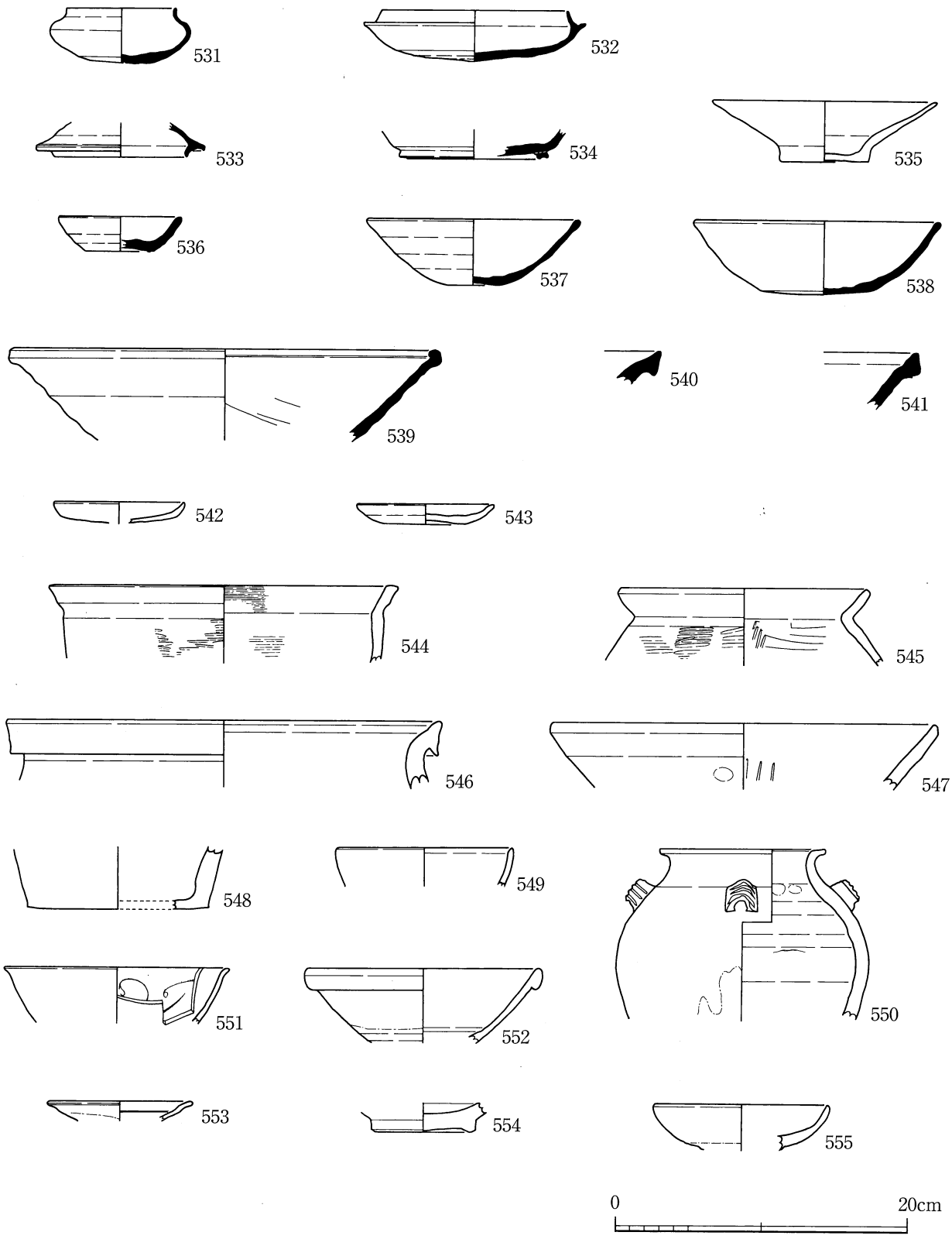
出土遺物１

図版50

フケ地区

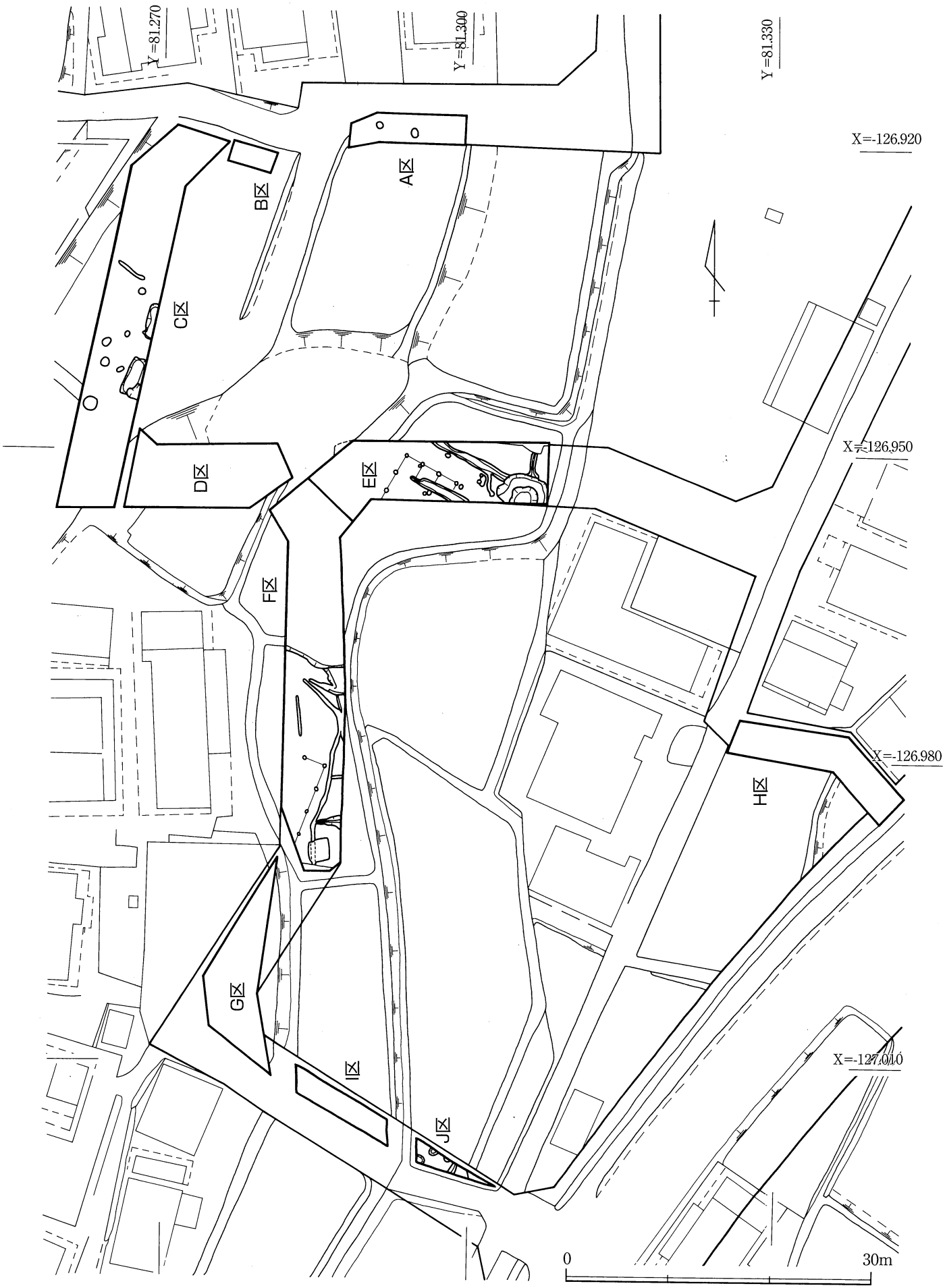


出土遺物 2

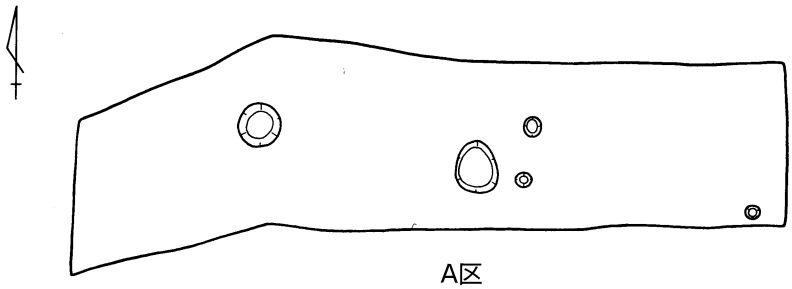

531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
0
20cm

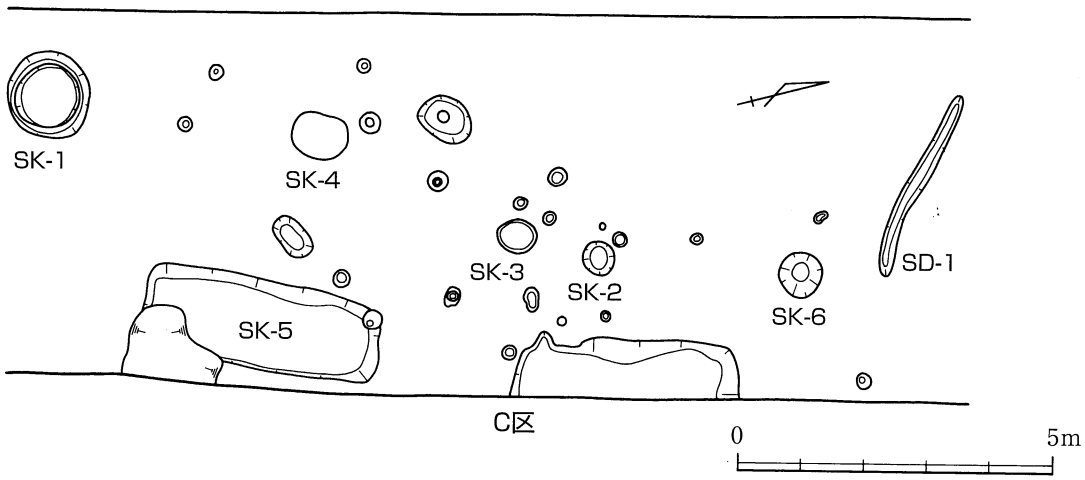
図版52

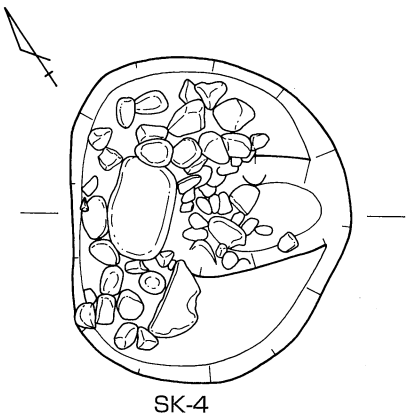
道ノ上地区

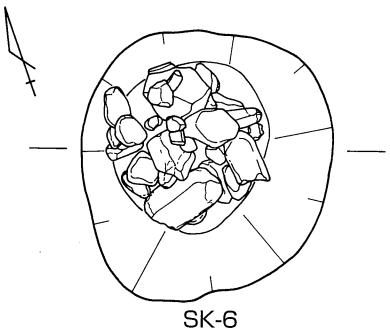


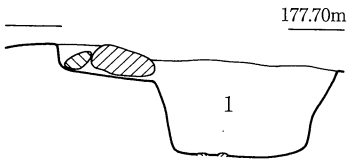
全体図



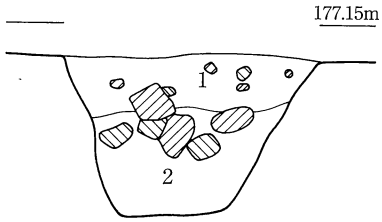








1 10YR4/2　にぶい黄褐色細砂　炭片を含む



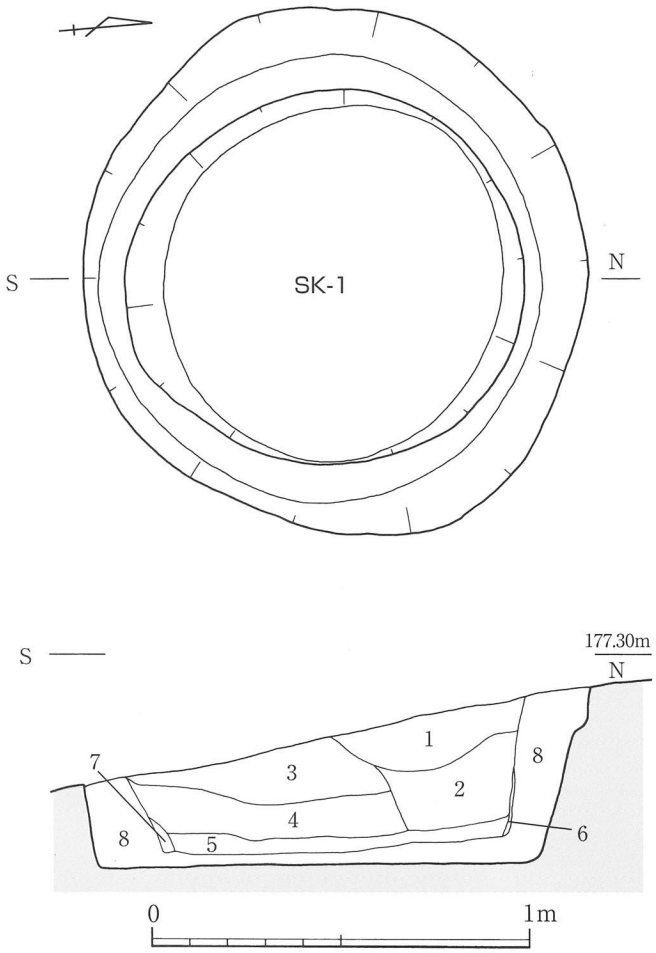
1 10YR6/4～6/5　黄褐色粘質土
2 10YR6/1～5/1　褐灰色～灰色粘土

0　1m

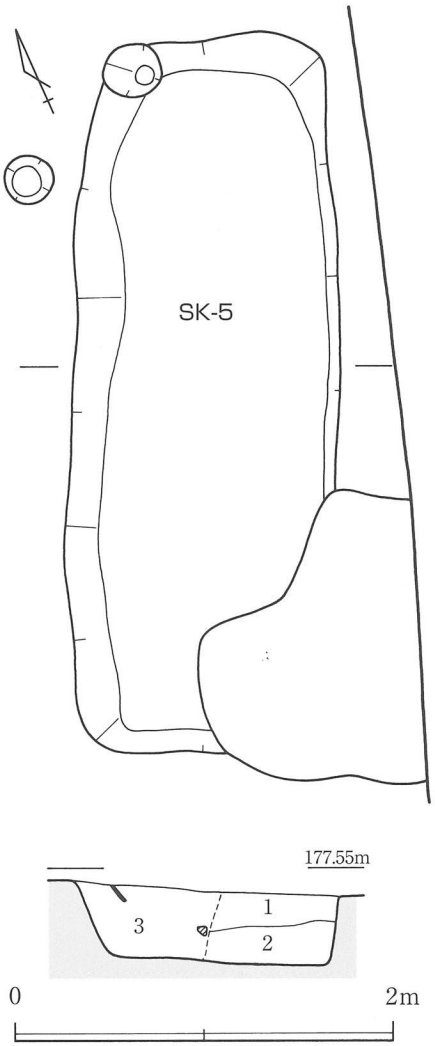
A区全体図　C区主要部平面図　SK－4・6平面図・断面図

図版54

道ノ上地区

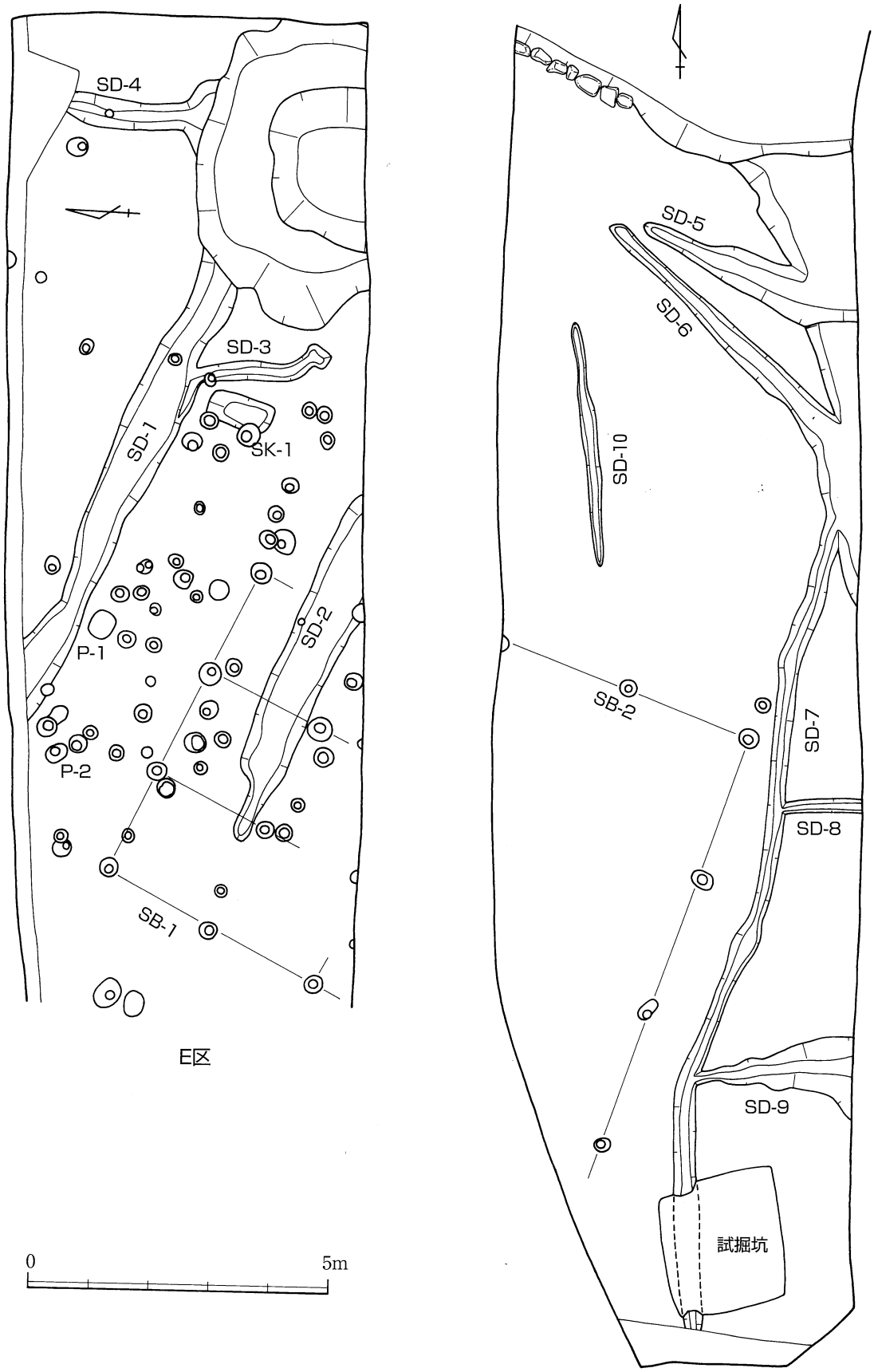


1 10YR6/1　褐灰色シルト質細砂
2 10YR6/2　灰黄褐色シルト質中砂
3 10YR6/1　褐灰色シルト質細砂
4 10YR6/1　褐灰色シルト質中砂
5 2.5Y5/1　黄灰色粘土質中砂
6 2.5Y6/1　黄灰色粘土質中砂
7 2.5Y6/1　黄灰色粘土質細砂
8 2.5Y5/2　暗黄灰色細砂（地山のブロック混）



1 10YR4/2～3/3　灰黄褐～暗褐色粘質土
2 10YR3/3　暗褐色粘質土
3 7.5YR3/2～4/2　暗褐～暗黄褐色粘質土

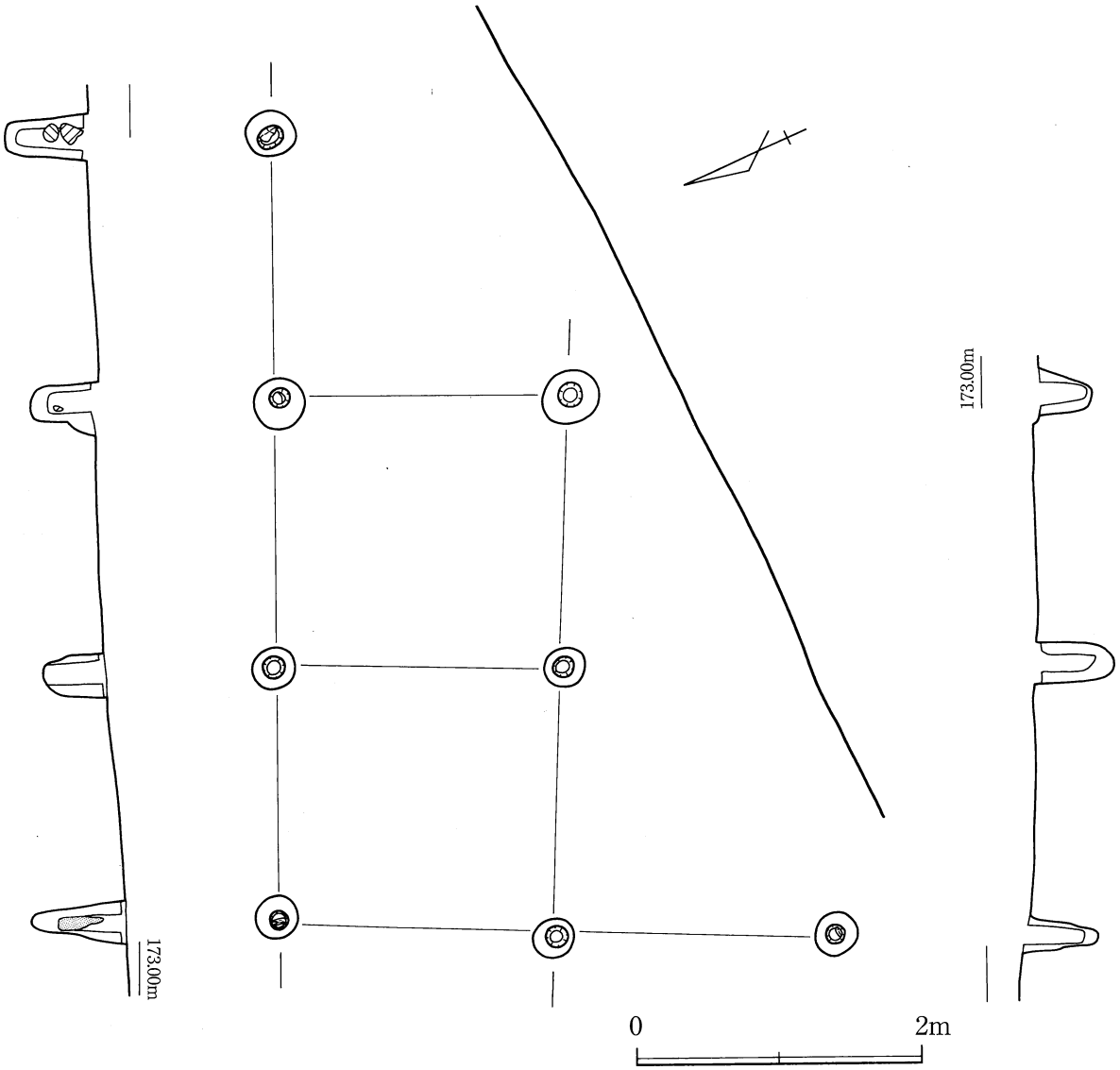
A区　ＳＫ－１・ＳＫ－５　平面図・断面図

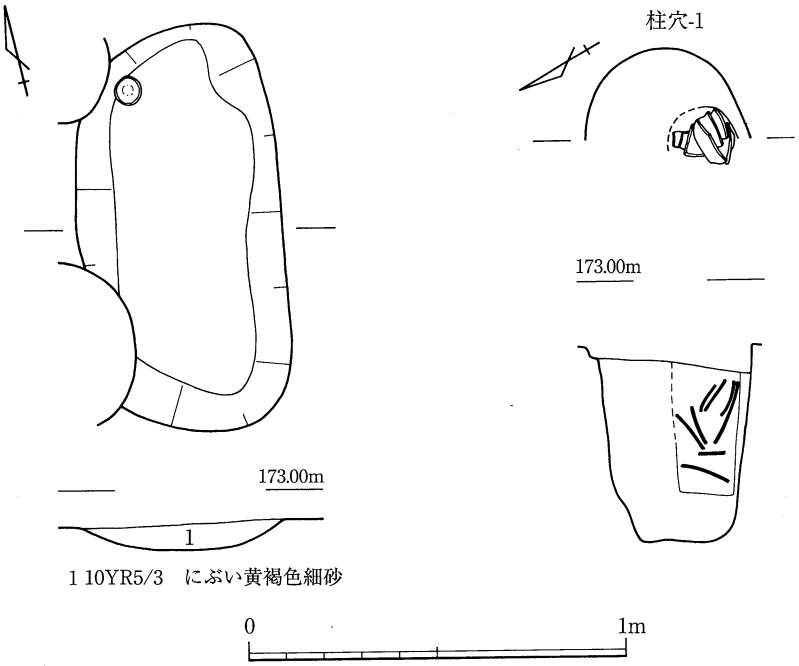


道ノ上地区　E区・F区　平面図

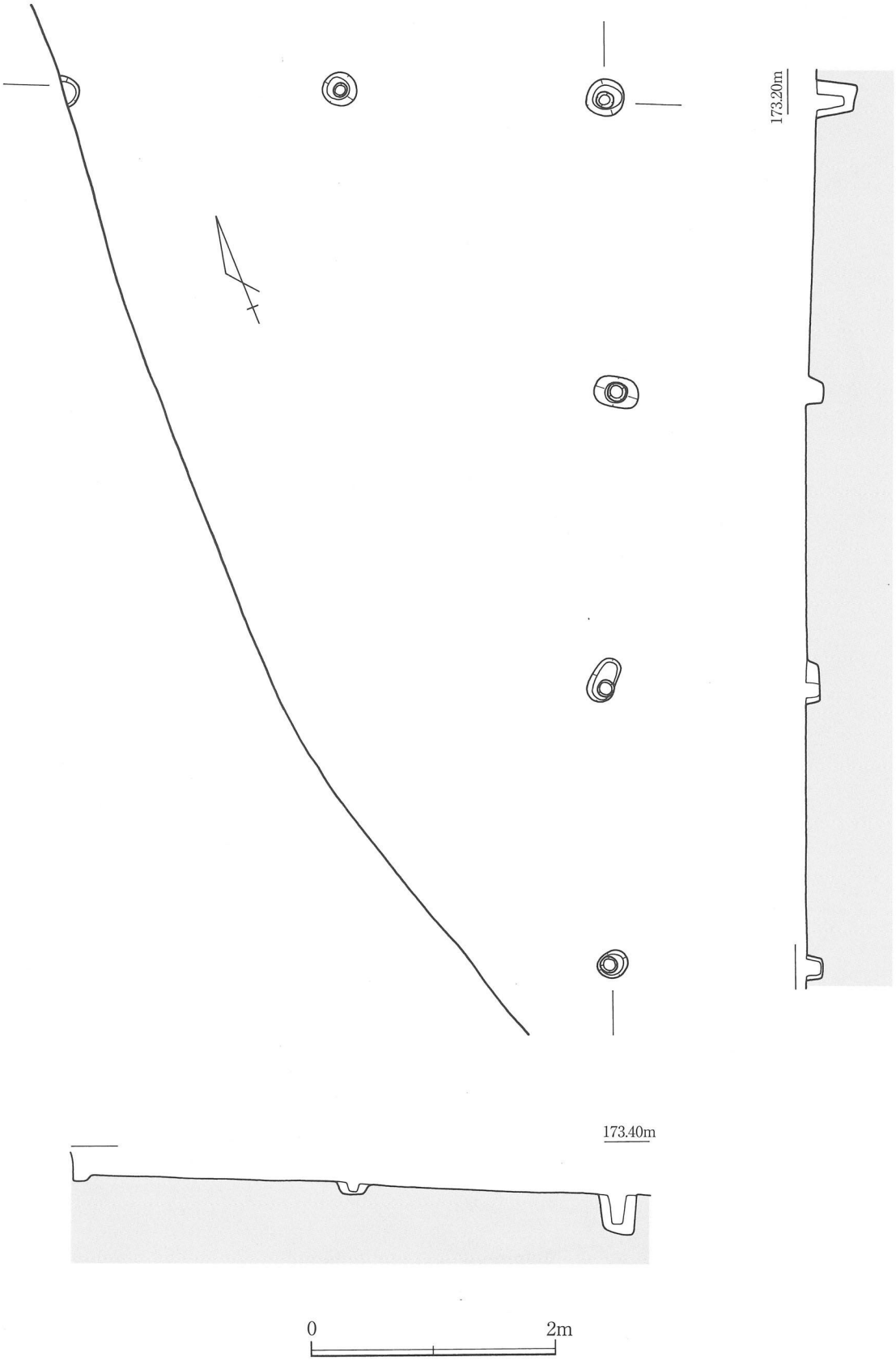
図版56

道ノ上地区





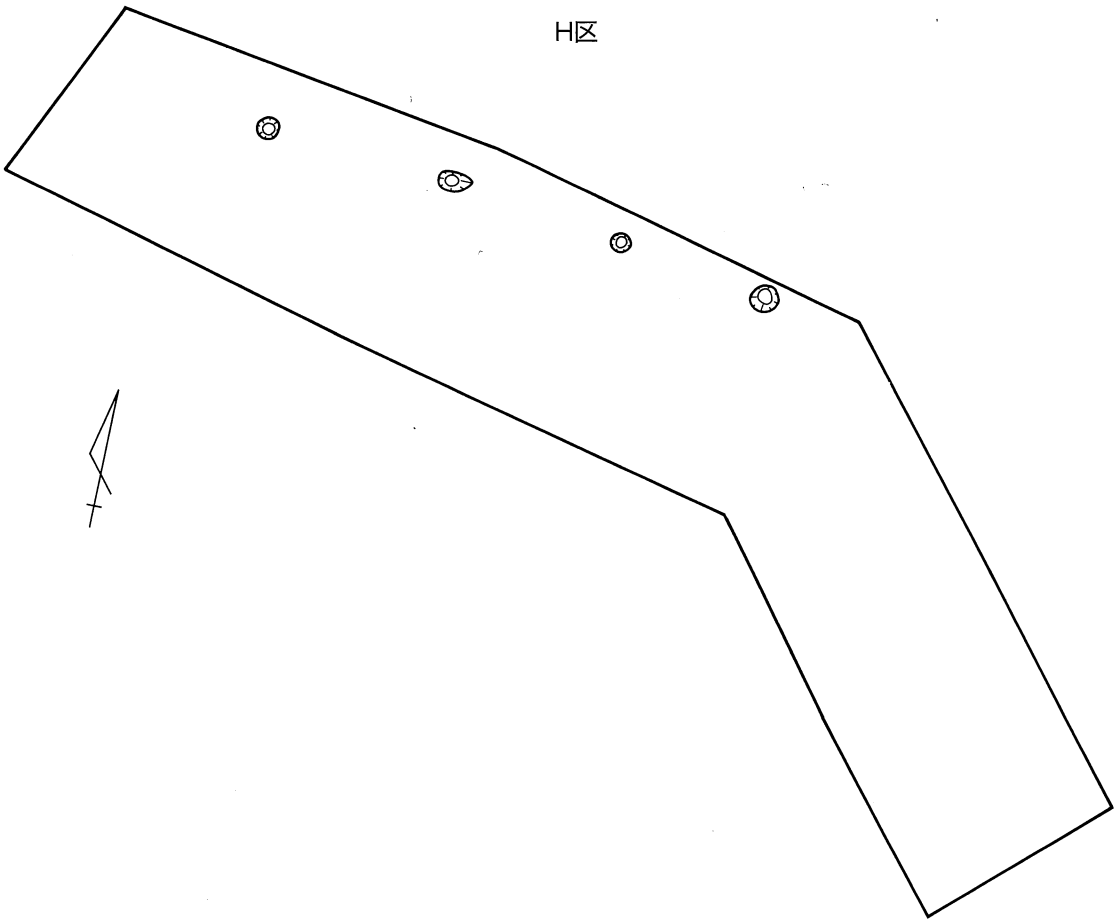
E区　SB－1．SK－1．柱穴1．平面図・断面図

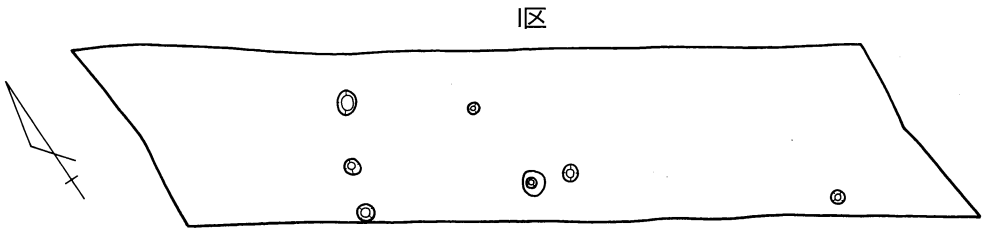


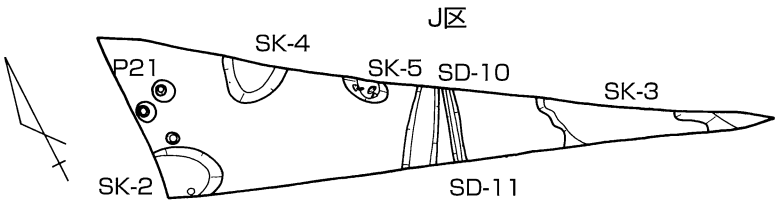
F区　SB－2　平面図・断面図

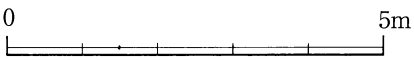
図版58

道ノ上地区

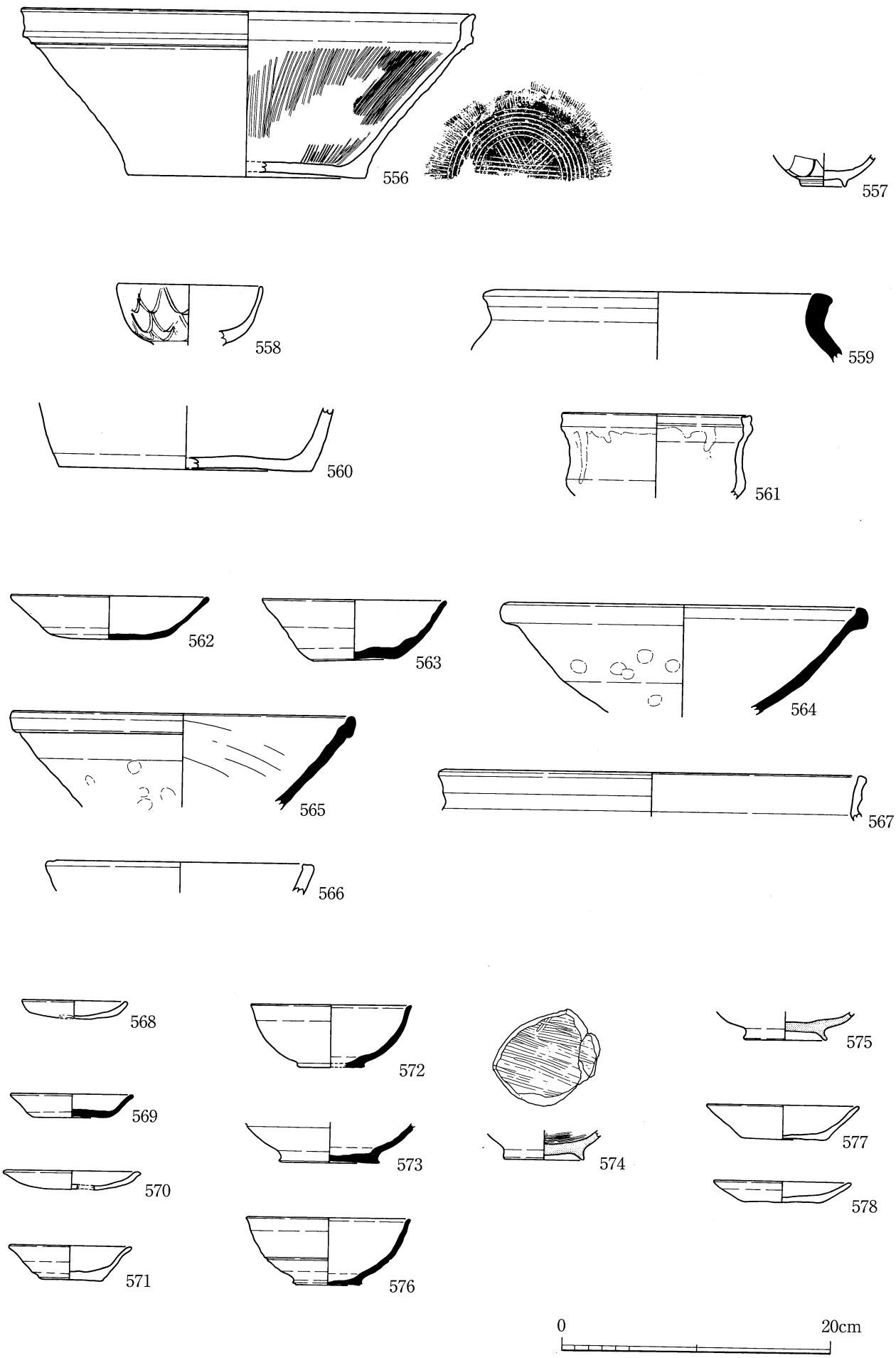








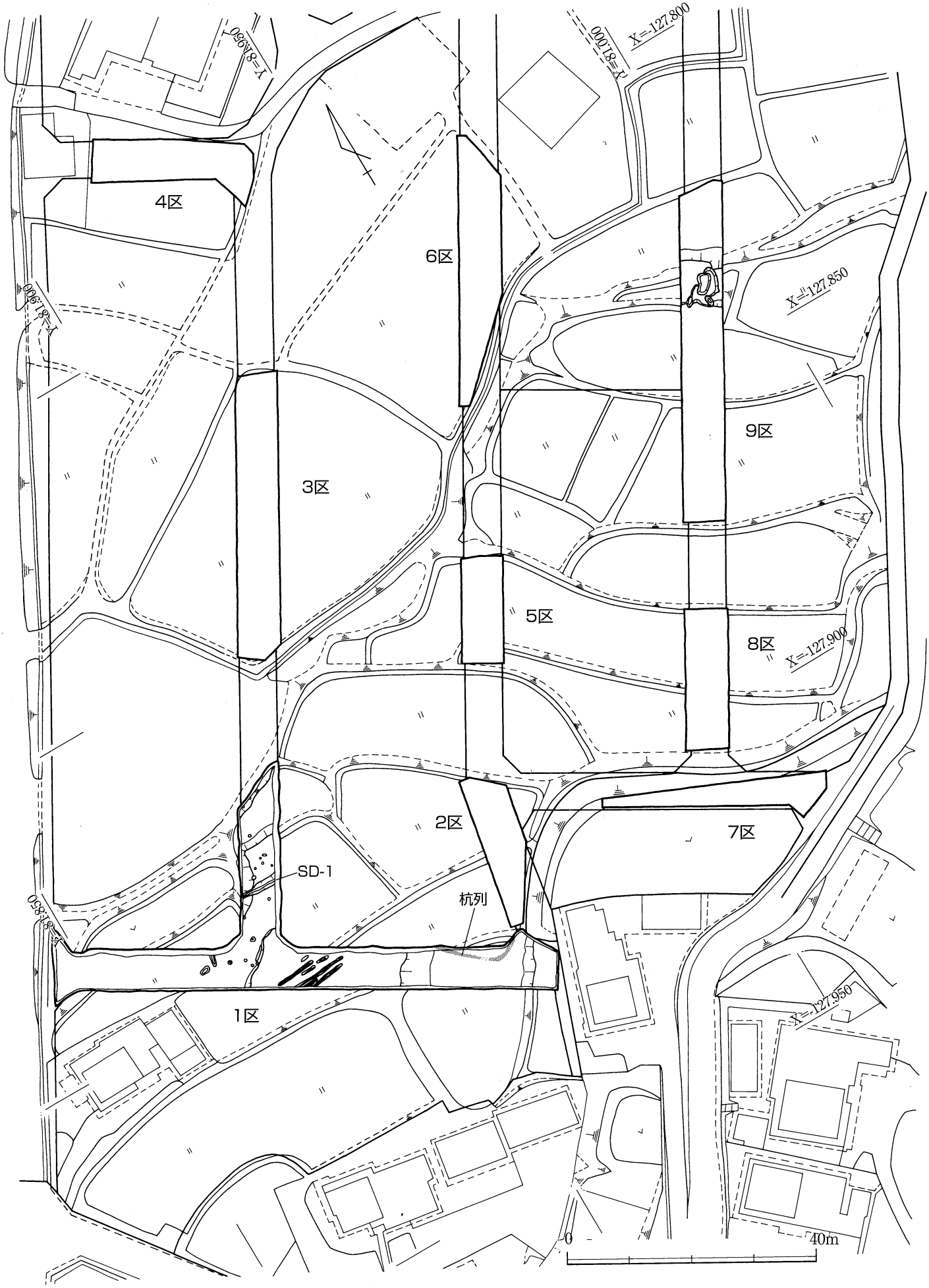
H・I・J区　平面図


556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
0
20cm

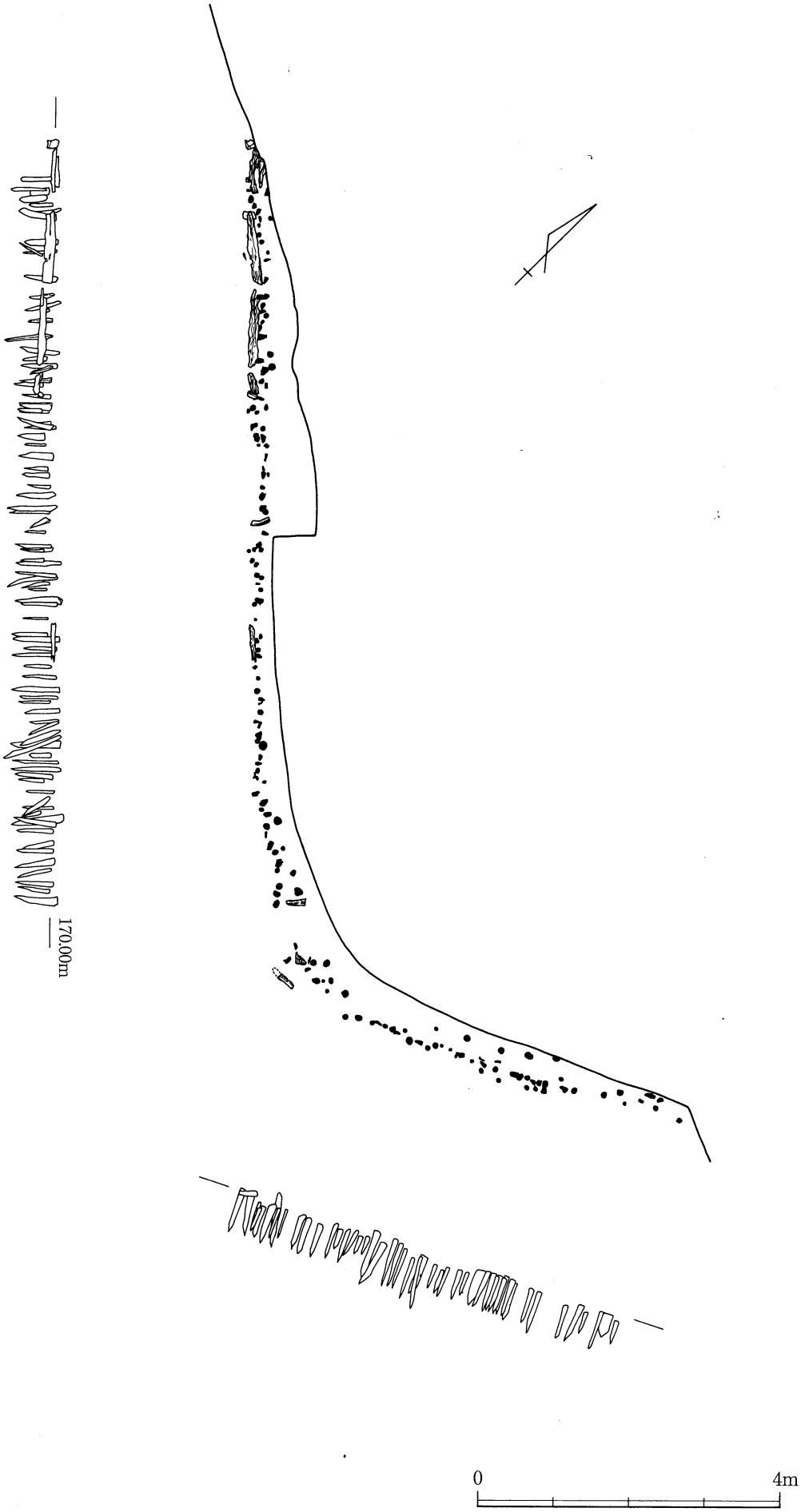
出土遺物 1

図版60

岸ノ下地区



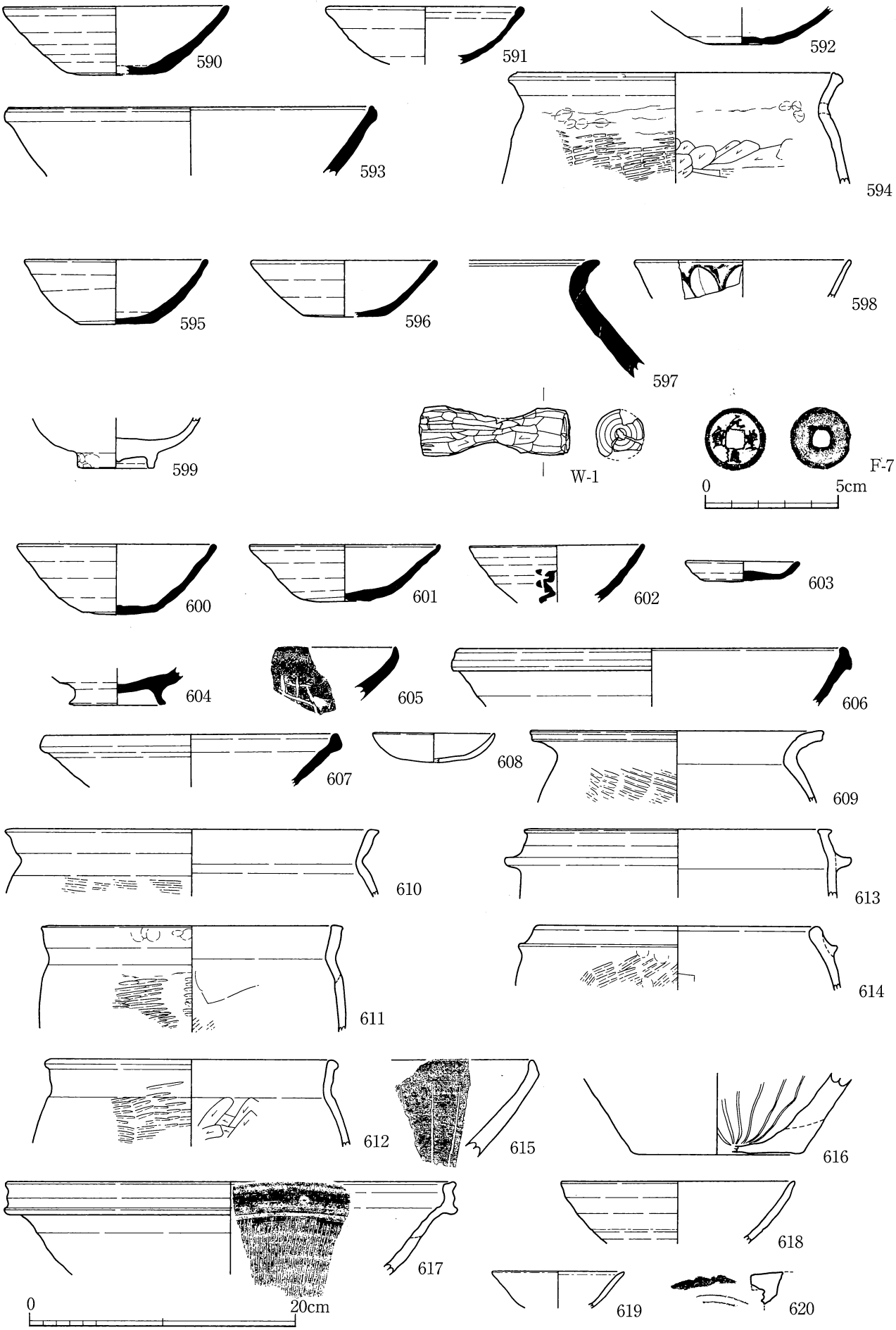
岸ノ下地区　全体図



岸ノ下地区　１区杭列平面図および見通し図

図版62

岸ノ下地区



出土遺物

写真図版

池尻地区

1 区全景

池尻地区

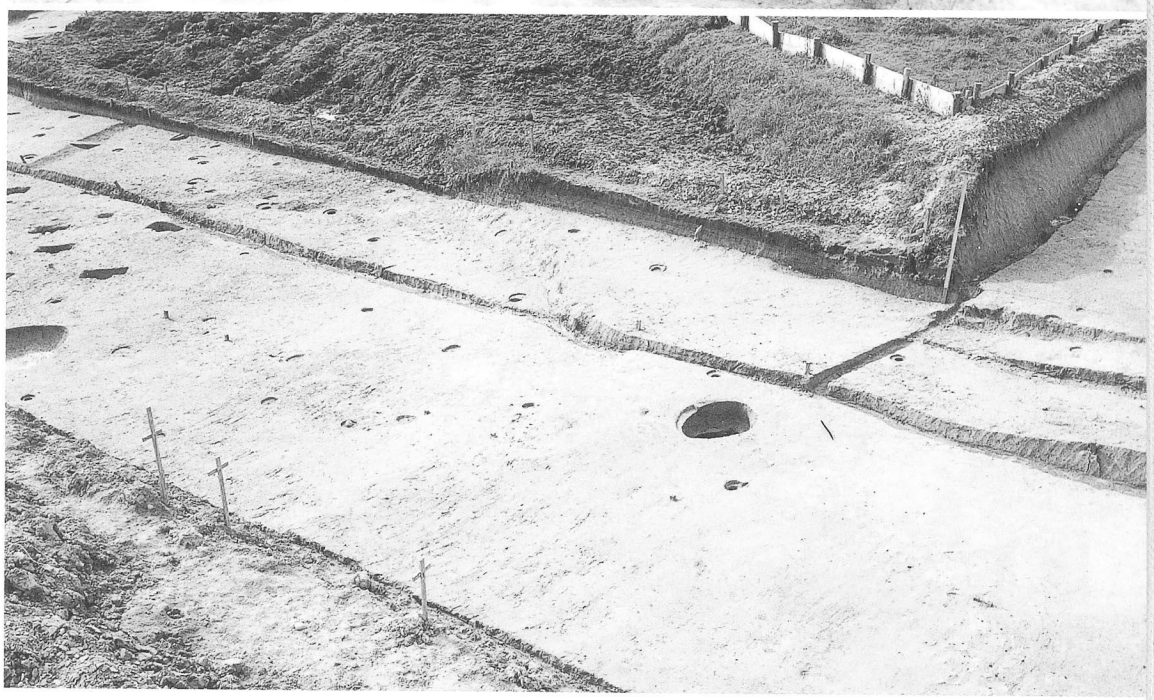
1区全景（北から）

2区全景

池尻地区

ＳＢ－１・２

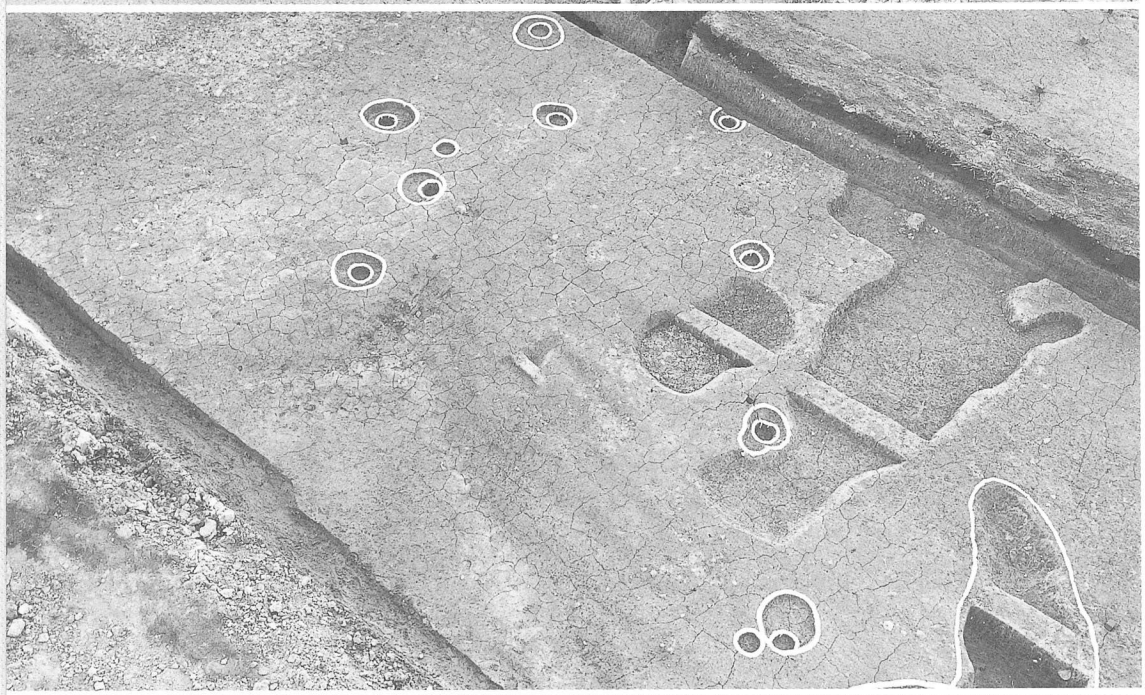
ＳＢ－１
ピット１内遺物出土状態



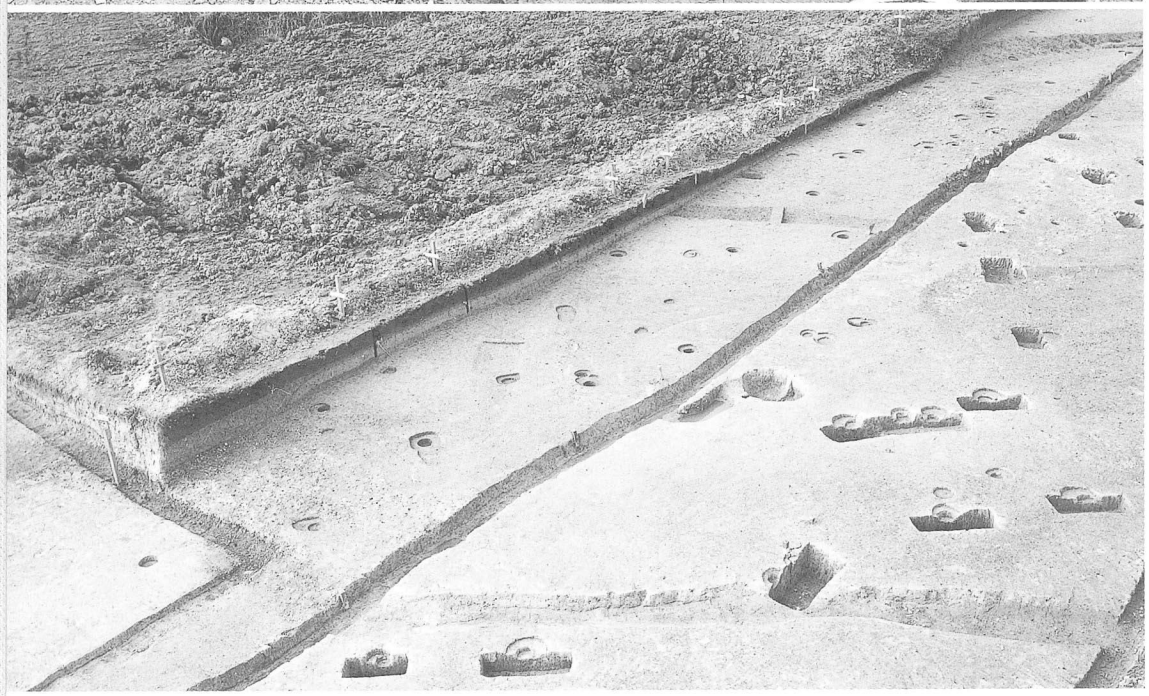
ＳＢ－３

池尻地区

ＳＢ－４・５



ＳＢ－６



ＳＢ－４
西側柱穴群

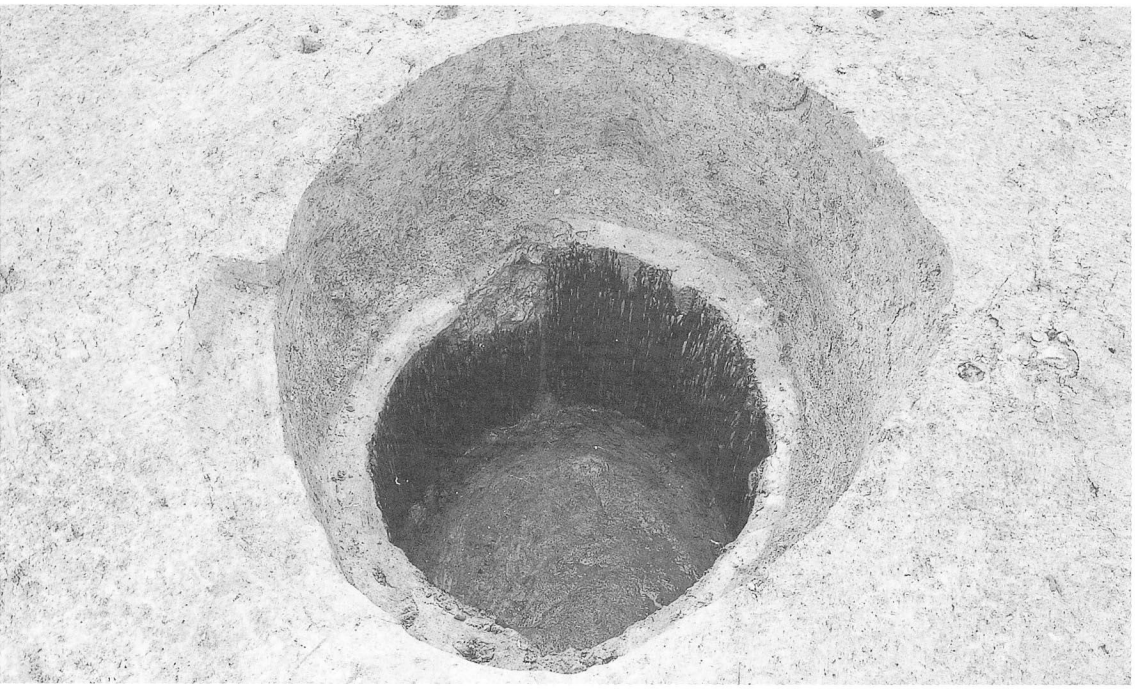
池尻地区

SB－7

SB－8

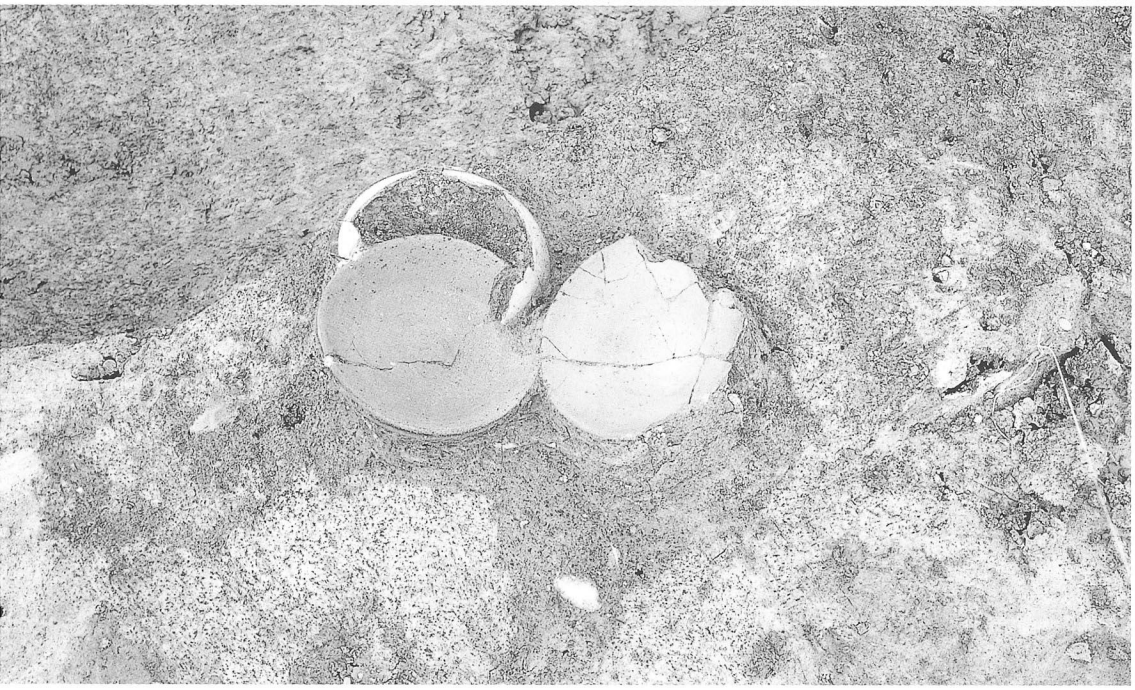
SB－9

池尻地区



ＳＥ－１

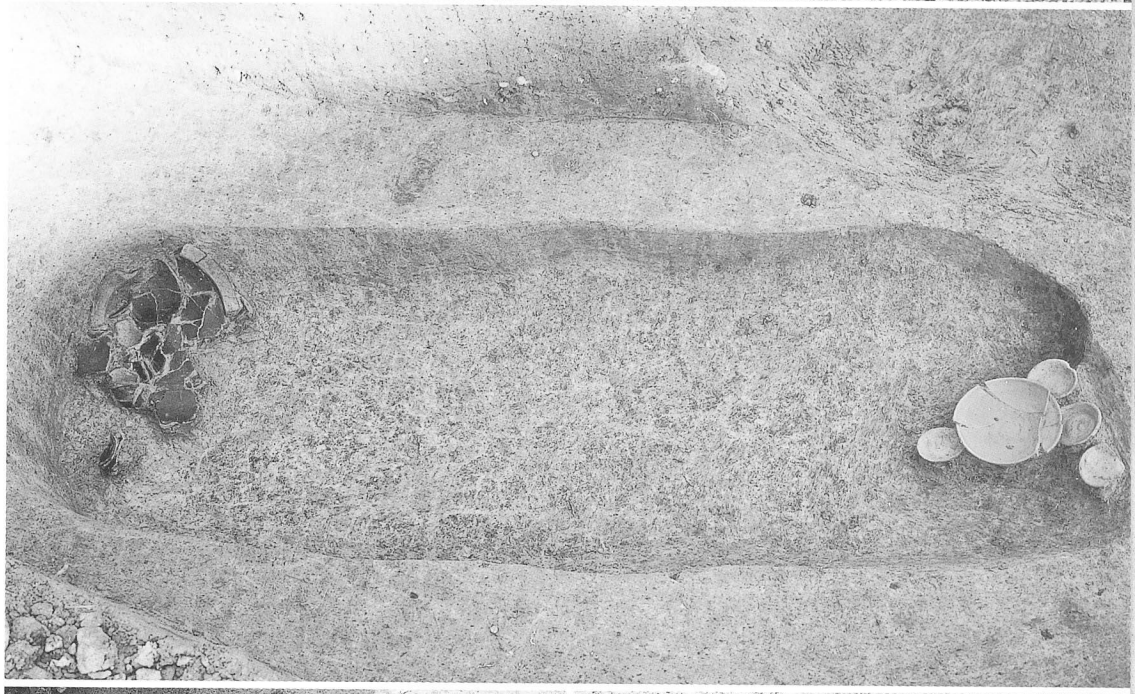
ＳＥ－１　断面



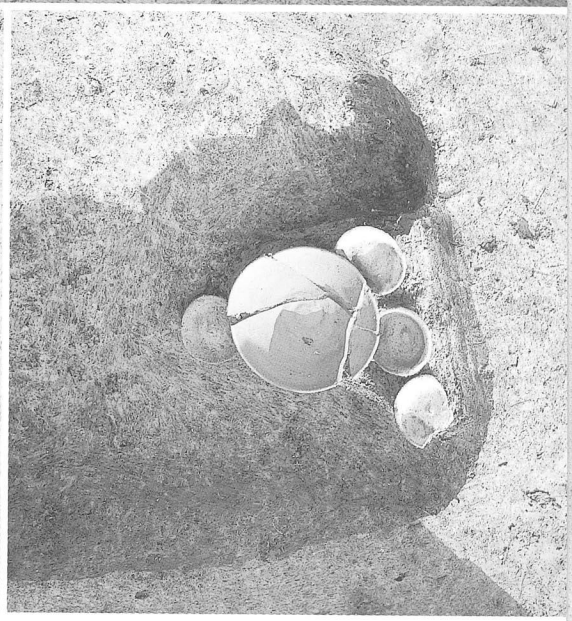
自然流路上
遺物出土状態

池尻地区

ＳＫ－１

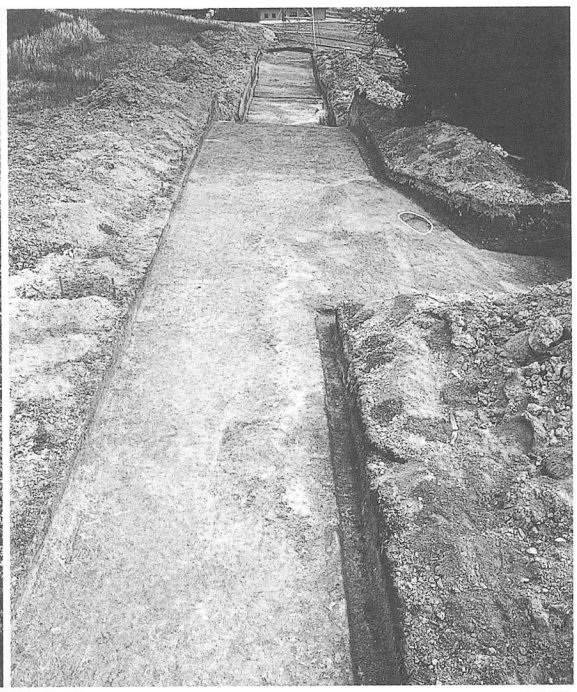


ＳＫ－１
棺外出土遺物状態



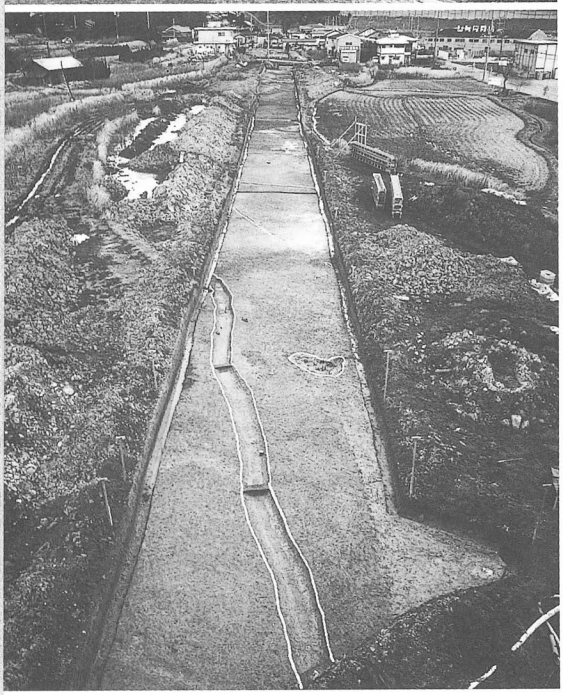
左）西木口部遺物出土状態
右）東木口部遺物出土状態

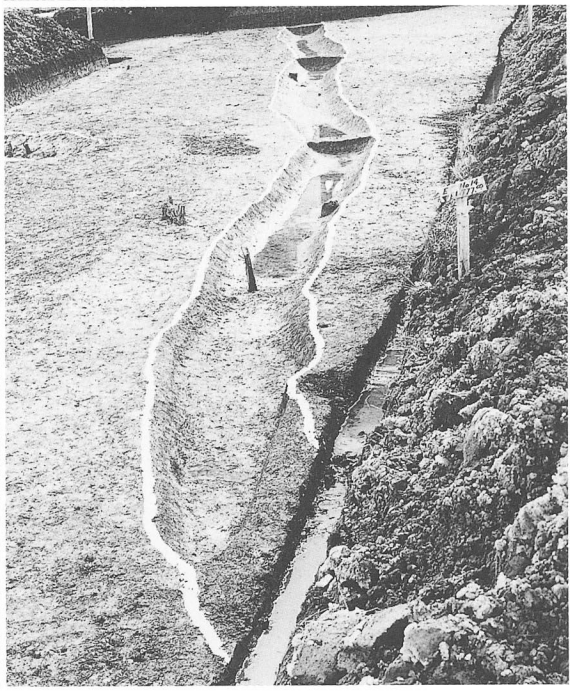
池尻地区



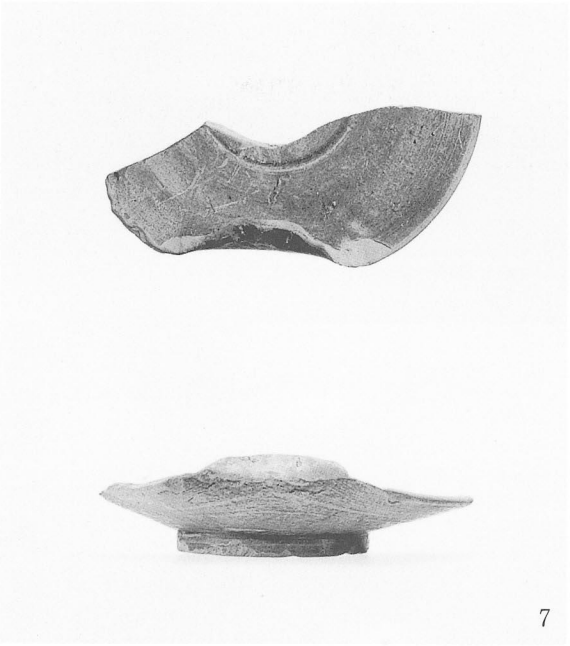
左） 2 区西半
右） 3 区西端

左） 3 区中央付近
右） 3 区東半





左） 6 区全景
右） 6 区ＳＤ－１


7

3

9

12

21

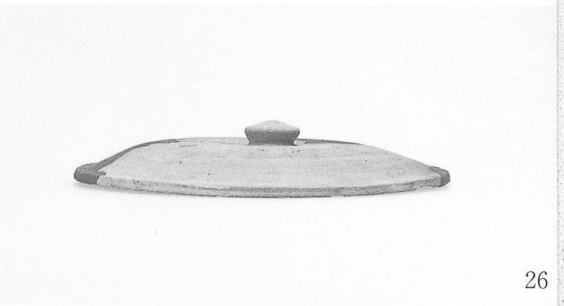
17

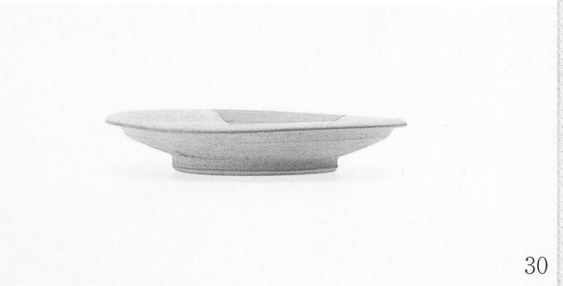
19

18

20

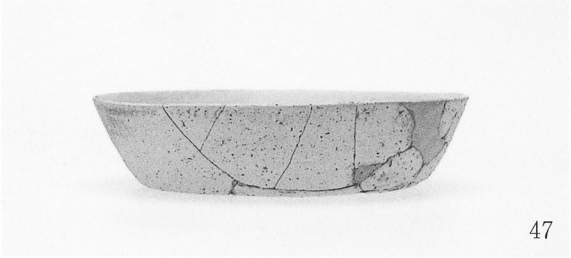
22


26


30

池尻地区　出土遺物 1

46

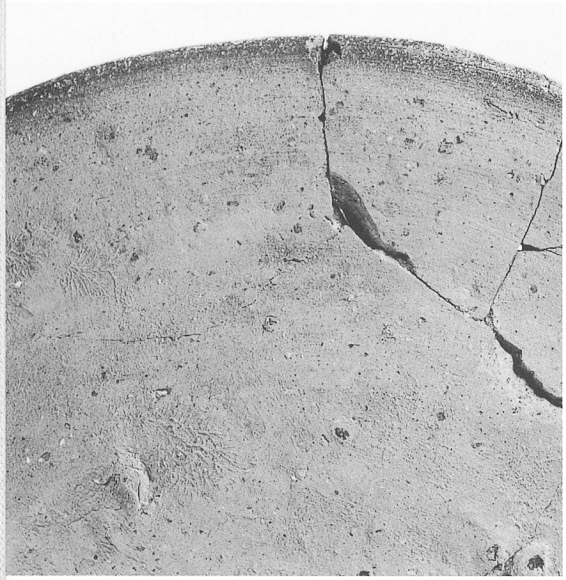

47

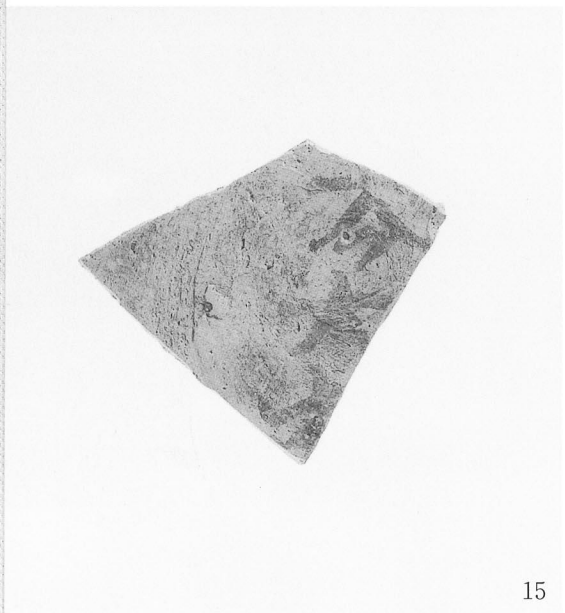
43

42

44

45




15

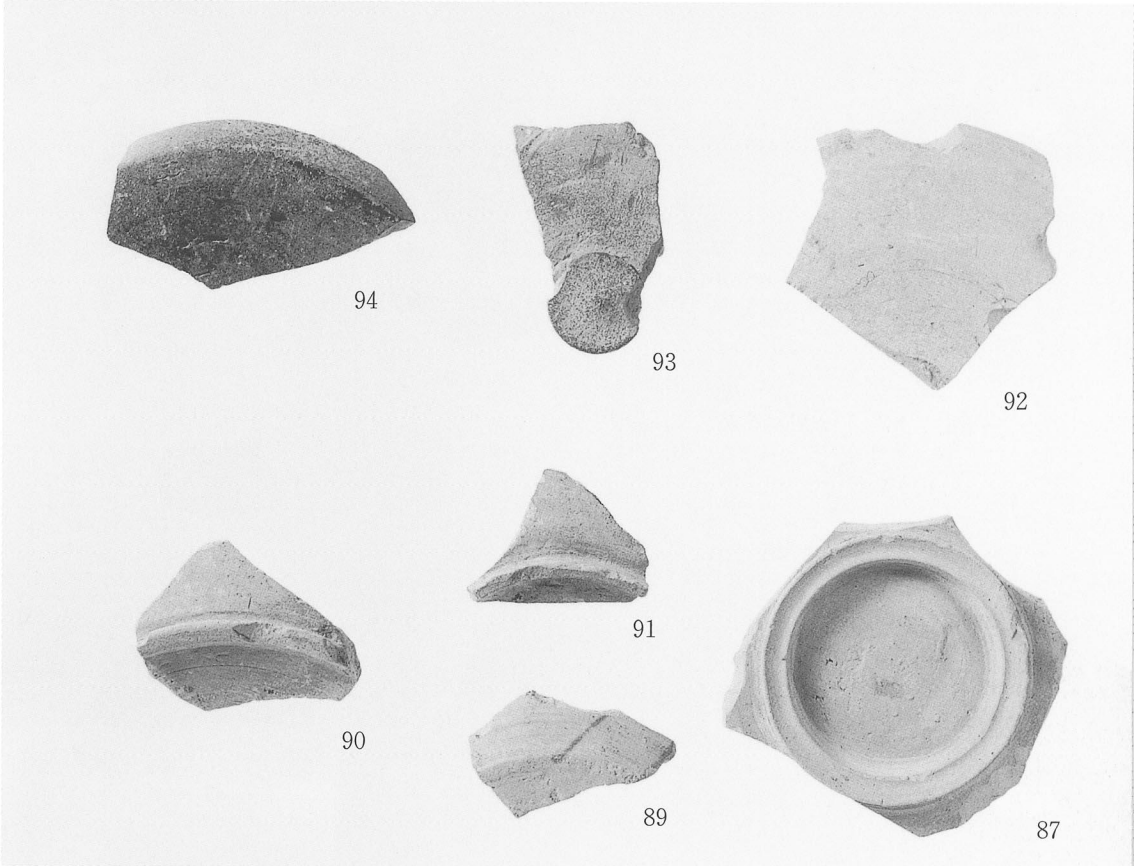
102

池尻地区　出土遺物 2

86

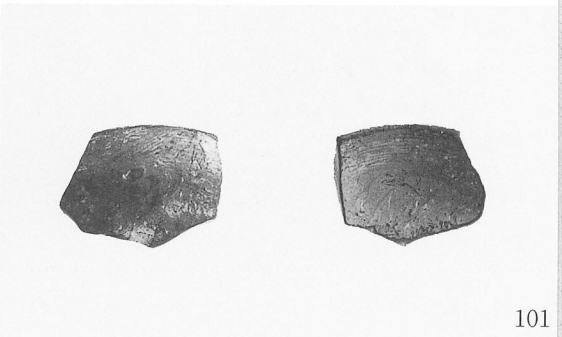
88

97



99

100


101

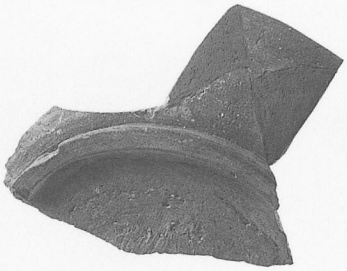
池尻地区　出土遺物 3

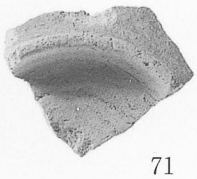
83

79

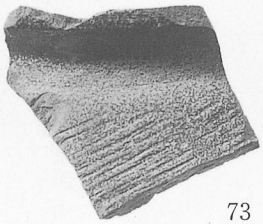
81

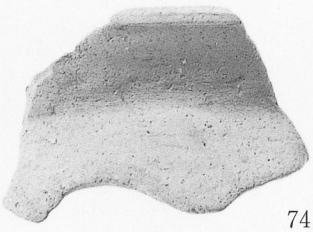
69

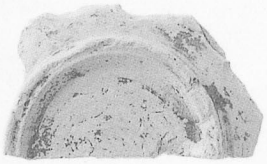

70


71

72

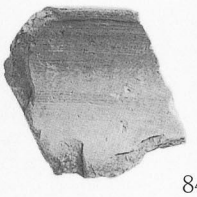

73


74

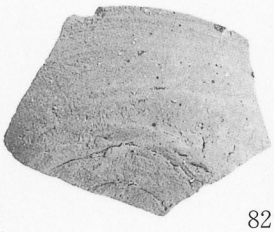

75

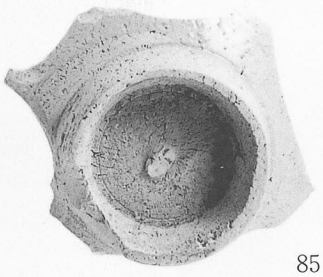
76

77


84

78


82


85

池尻地区　出土遺物 4

上ヨサ田地区

全景

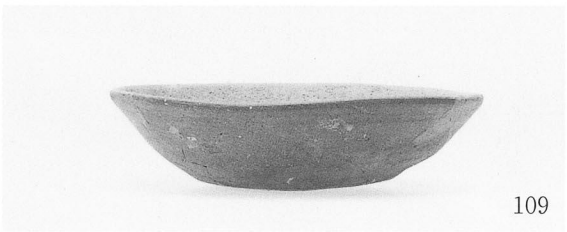
東半柱穴群

104

105

107

108



109

111

出土遺物

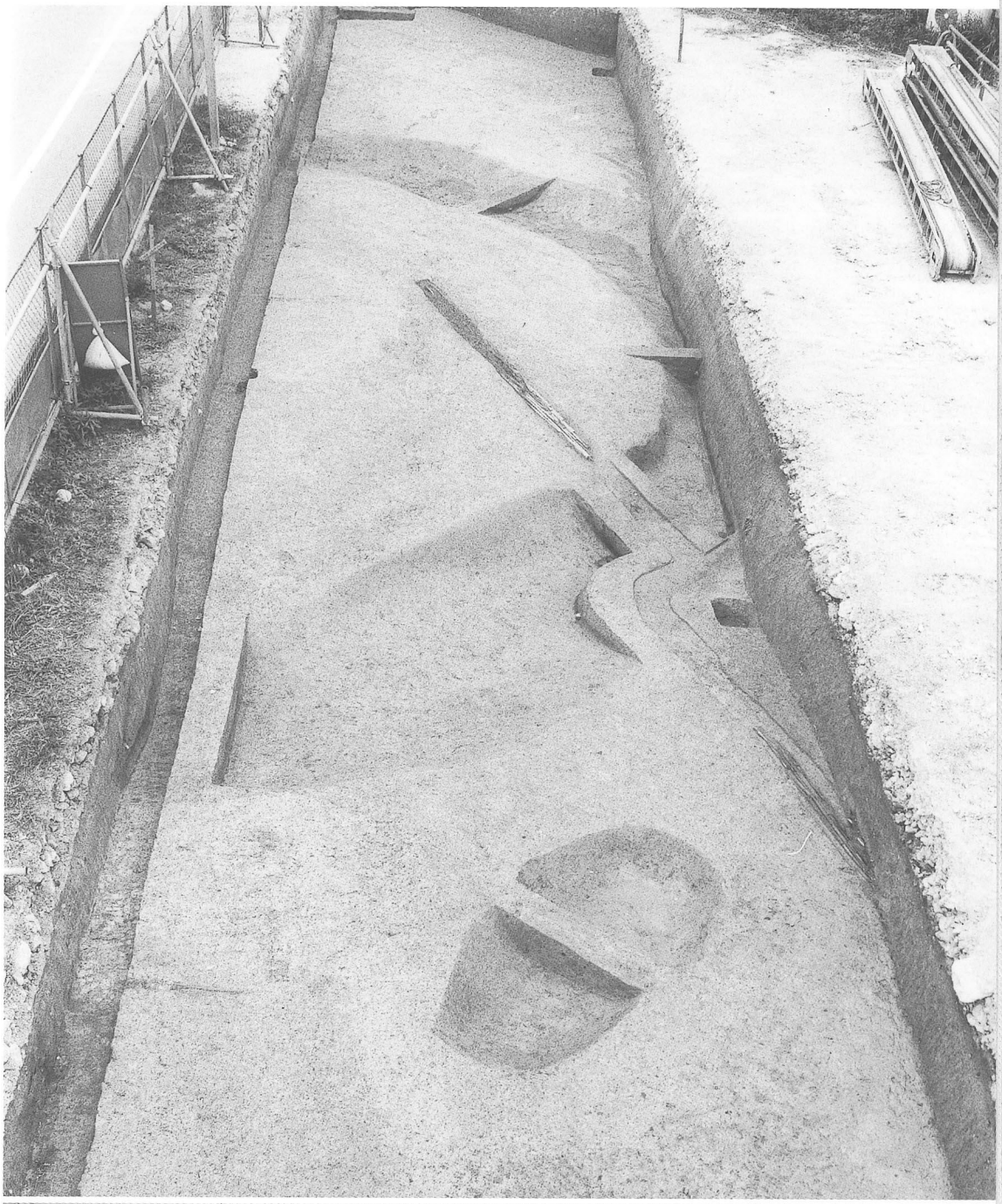
堂ノ元地区

1区　ＳＨ－１

ＳＨ－１
ベッド上遺構壁の炭化材

ＳＨ－１内
炭化材検出状態

堂ノ元地区



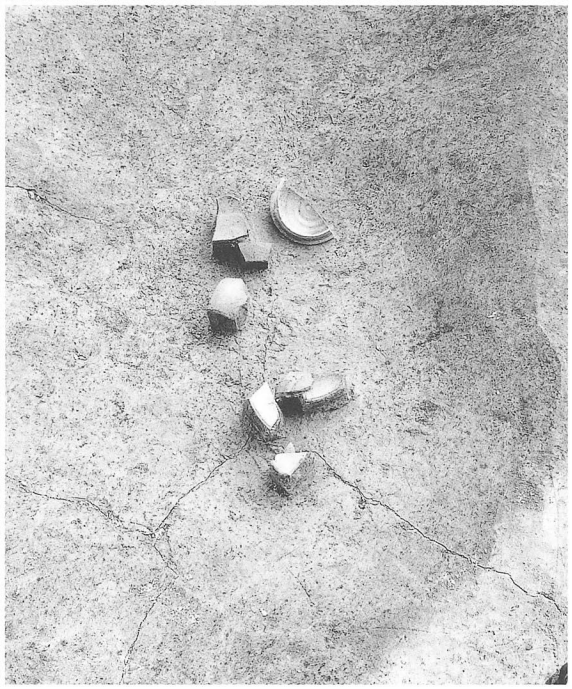
3区　3号墳全景

3号墳周溝内
遺物出土状態

堂ノ元地区

3区　1号墳周溝

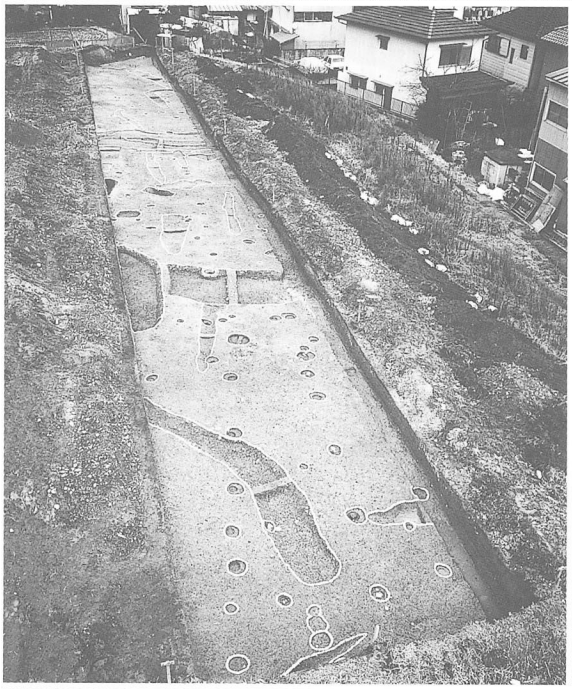
3区　2号墳周溝

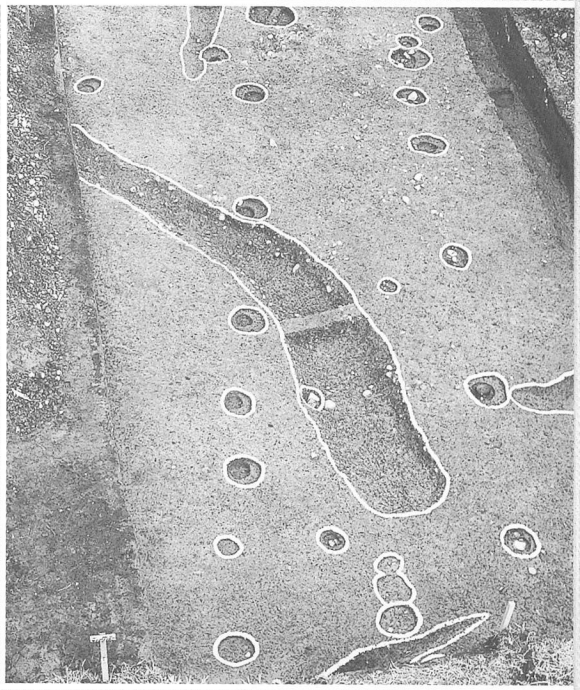


左）ＳＫ－１全景
右）ＳＫ－１内
須恵器出土状況

堂ノ元地区

4区全景（北東から）





左）4区全景（南西から）
右）ＳＡ－１・２

7区全景（北東から）

123

134

128

131

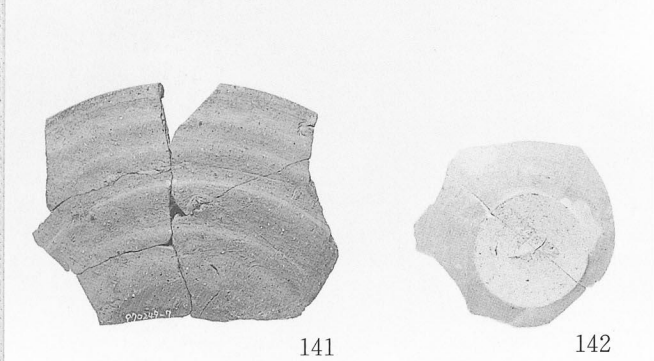
127

132

129

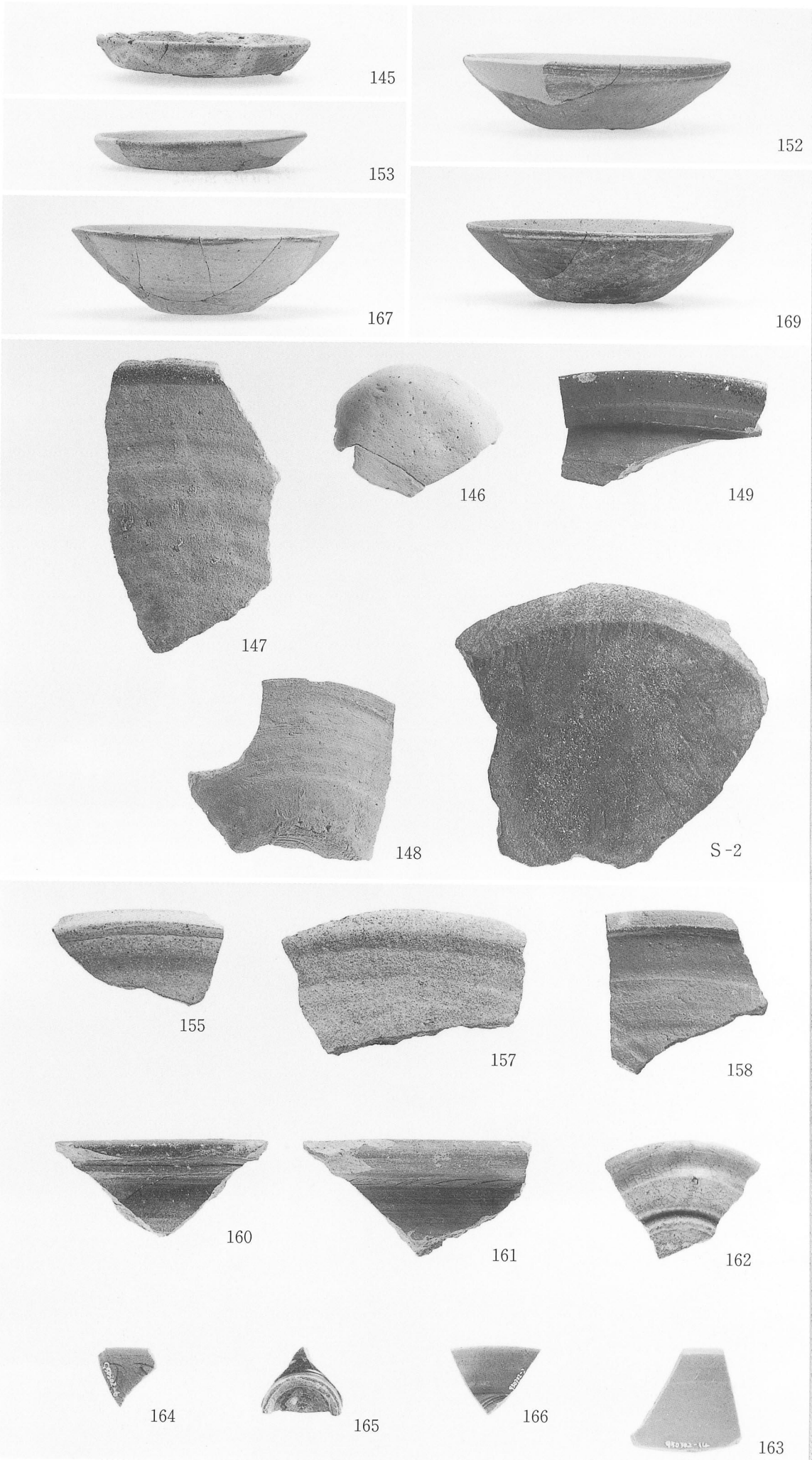
136

139


141 142

140

堂ノ元地区　出土遺物１


145
152
153
167
169
146
149
147
148
S -2
155
157
158
160
161
162
164
165
166
163

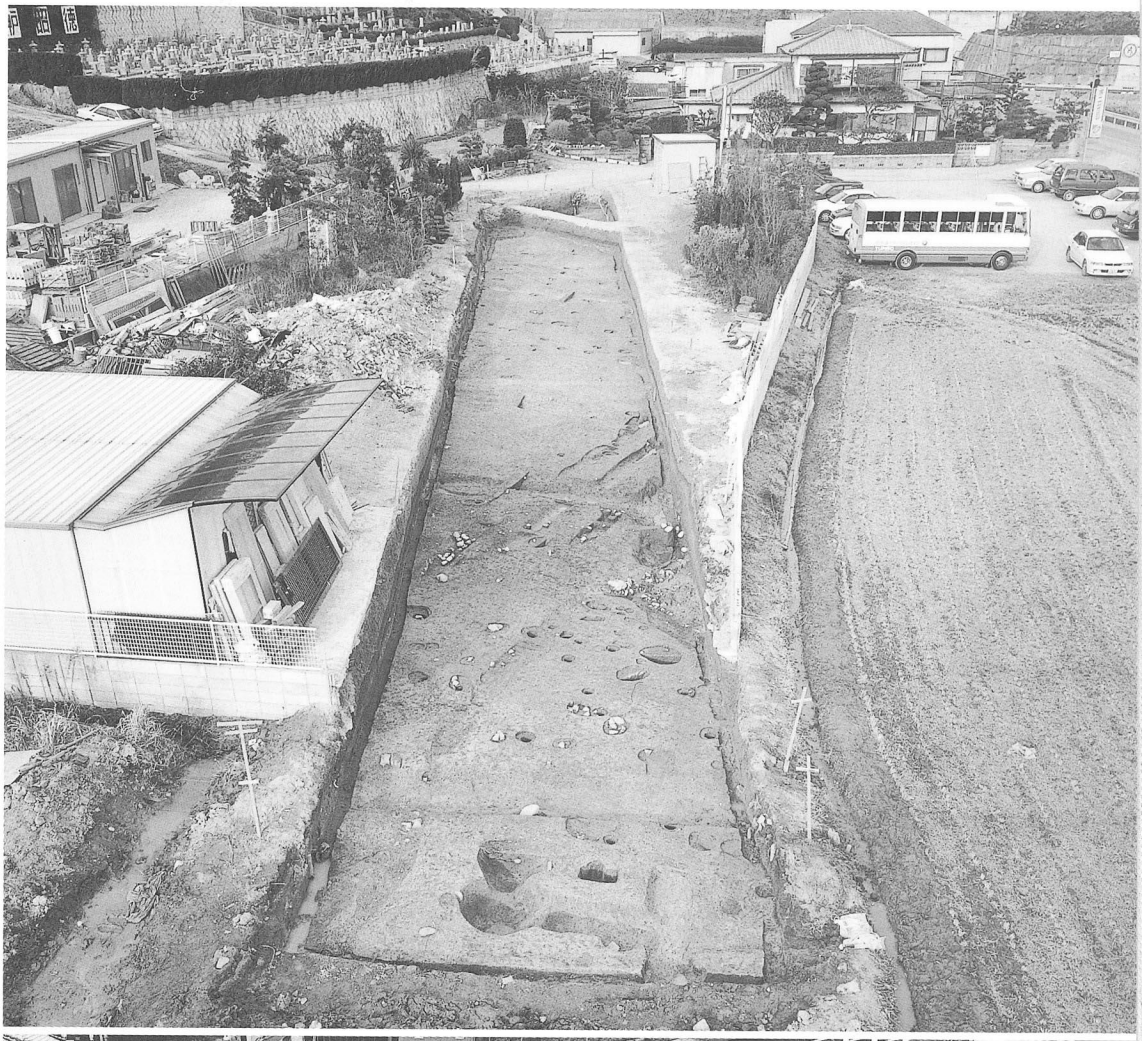
堂ノ元地区　出土遺物 2

カイモリ地区

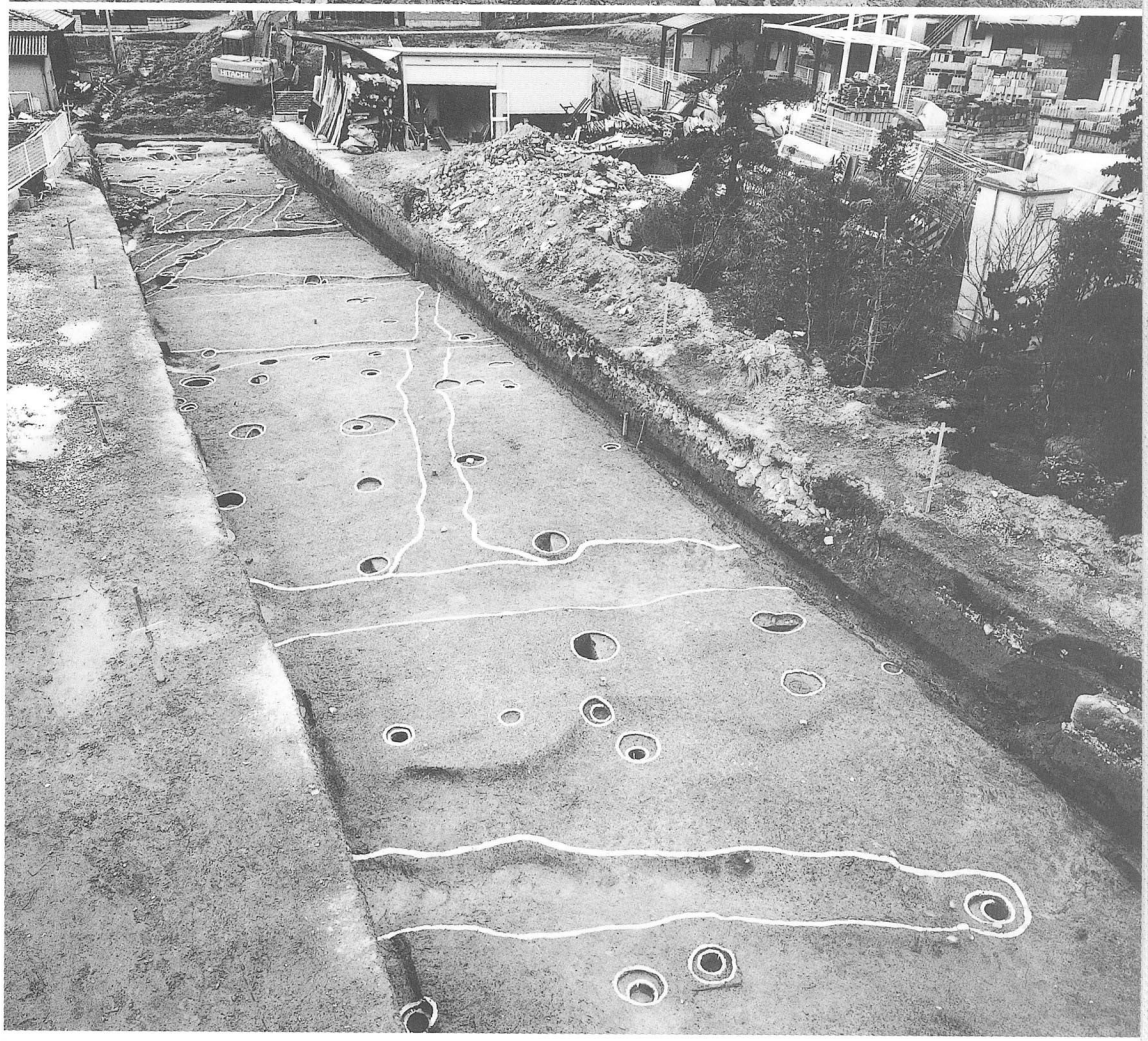
1区西半全景
（西から）

1区東半全景
（東から）

カイモリ地区

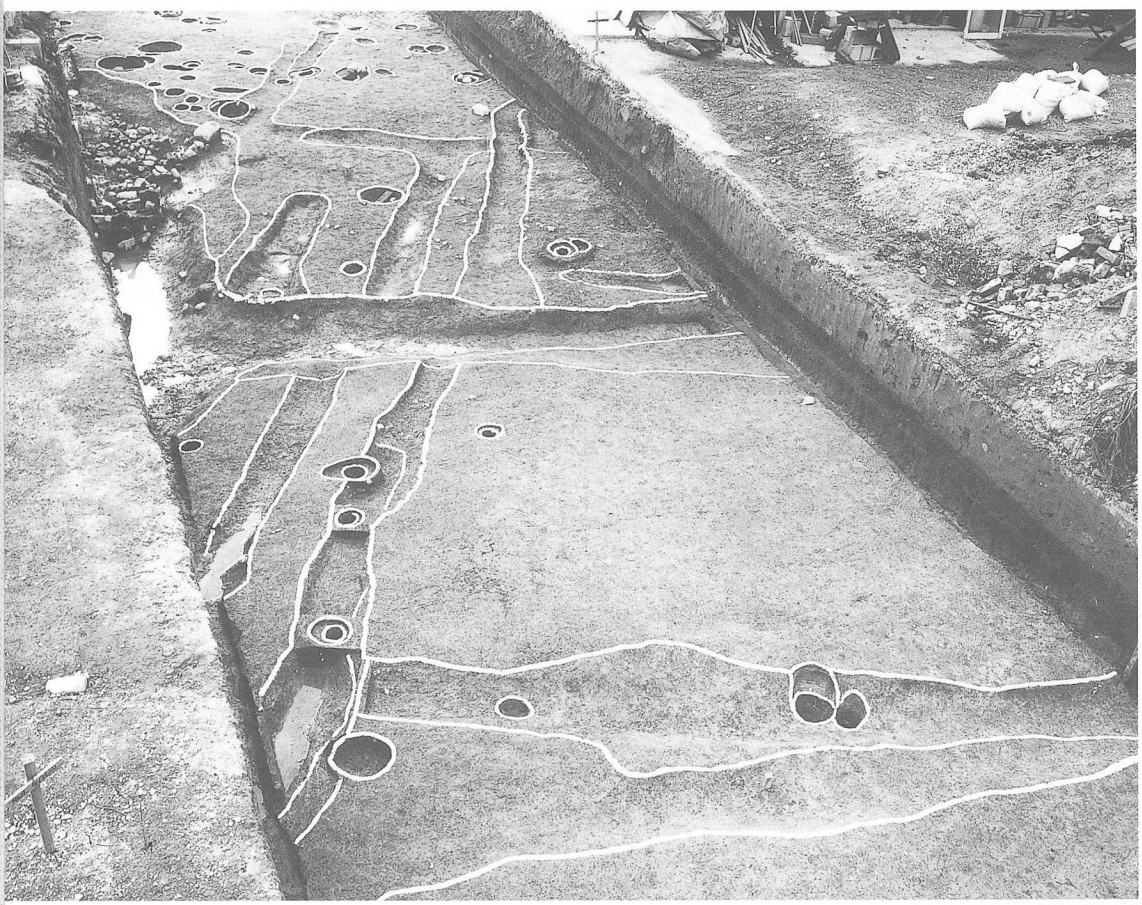


１区東半全景
（西から）



１区東半の遺構群

カイモリ地区



１区ＳＸ－１と溝群

１区ＳＸ－１断面

１区ＳＲ－２断面

カイモリ地区

1区　ＳＫ－12・42断面

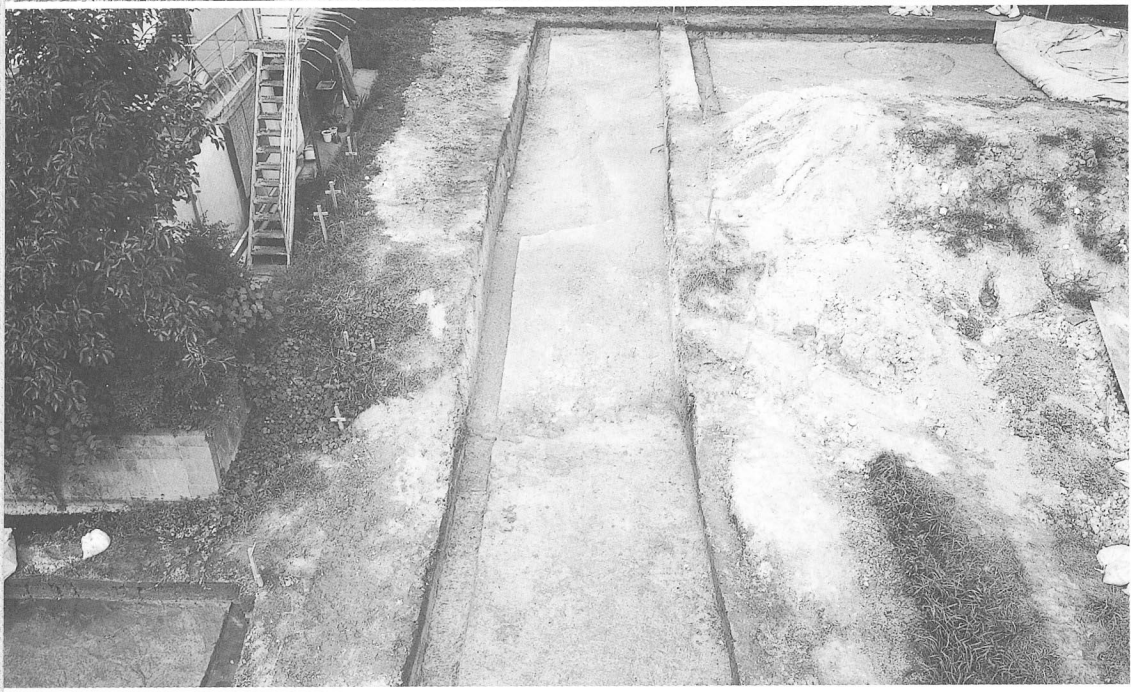
ＳＫ－14断面

ＳＫ－13断面

カイモリ地区

2区全景
（東から）

2区　ＳＢ－１・２



3区全景
（南から）

カイモリ地区

４区全景
（南から）

ＳＫ－１

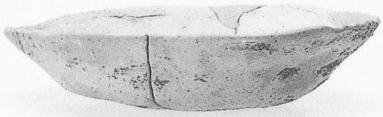
ＳＫ－１完掘状況

183

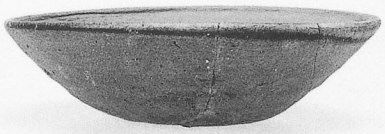
186

205

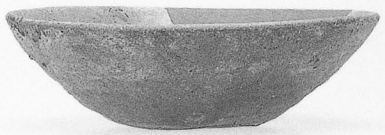
204

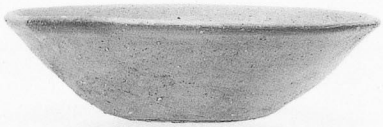

211

233


234

231


232


235

237

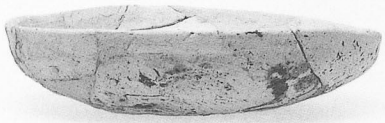
238

239

240

241

242


243

244

カイモリ地区　出土遺物１

275

255

246

266

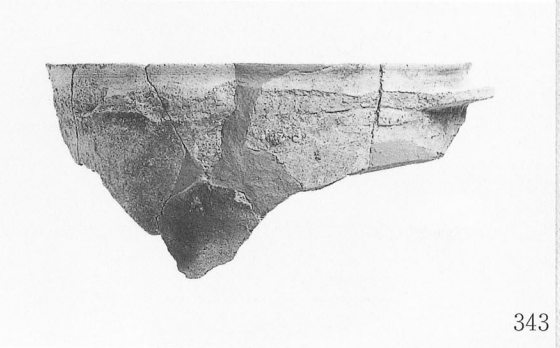
277

267

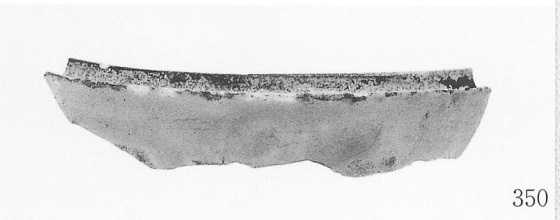
278

621

339


343

351

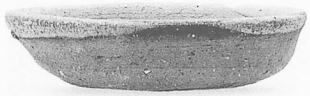

350

351

319

カイモリ地区　出土遺物 2

391


392

393

394

397

399

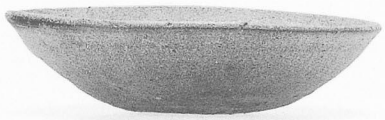
402

404

410

413

417


423

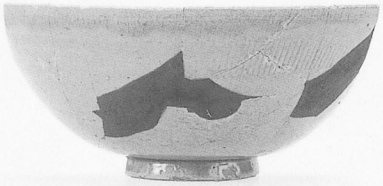
438

371

440

366

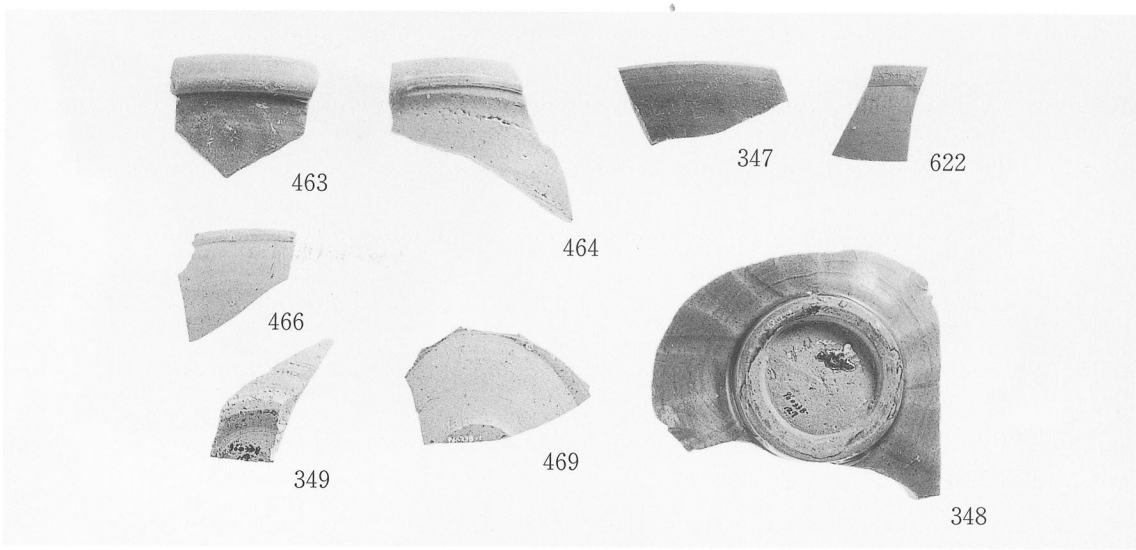
441

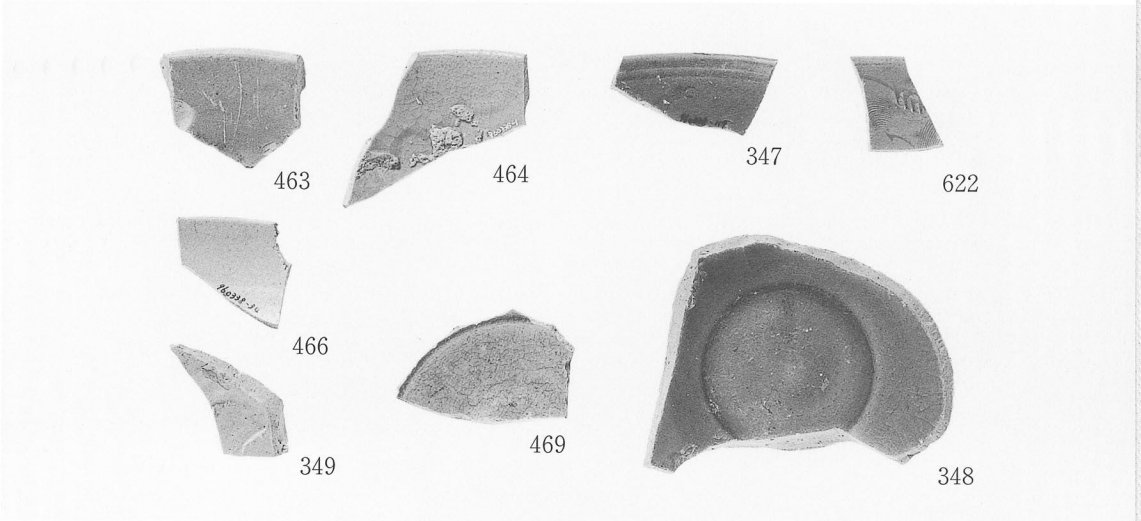


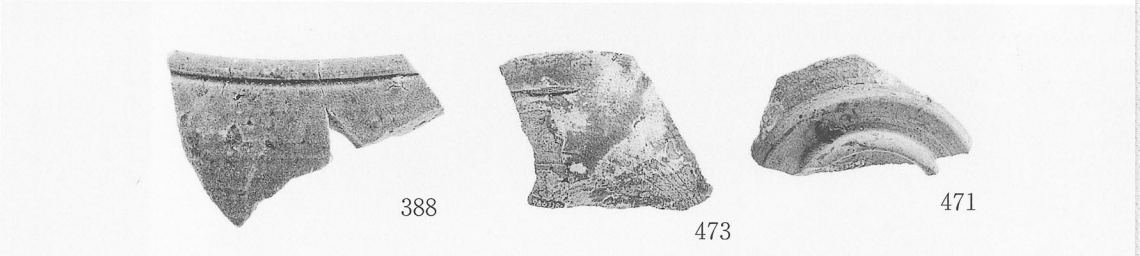
448

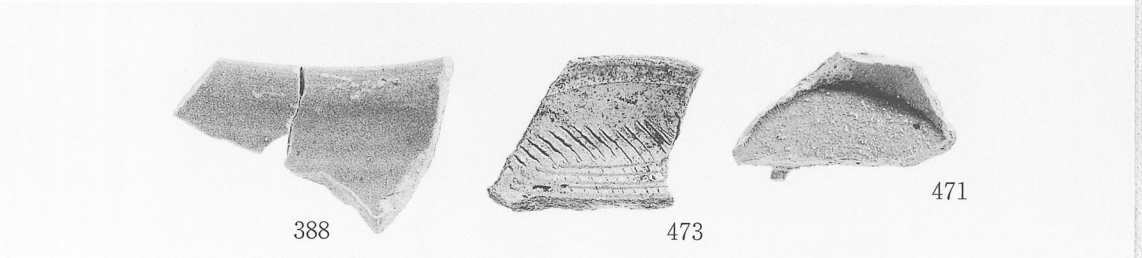
380

カイモリ地区　出土遺物 3





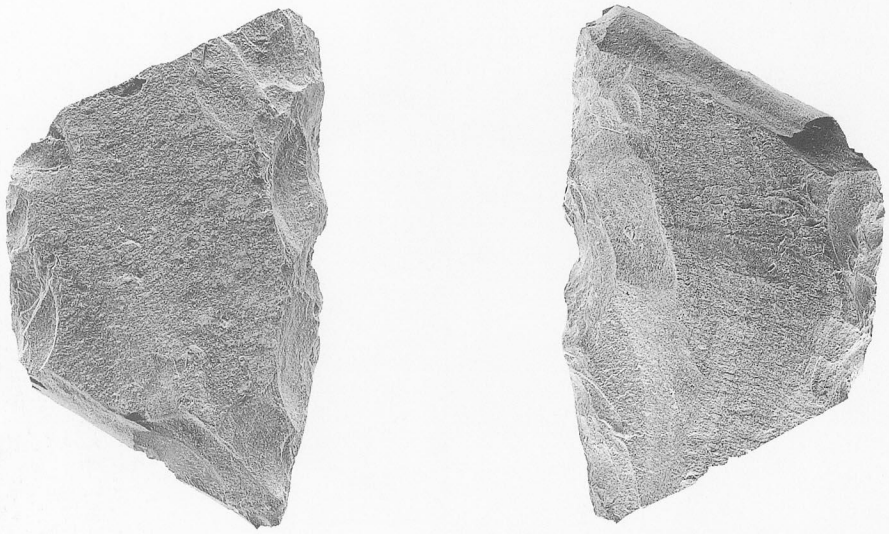




F-2

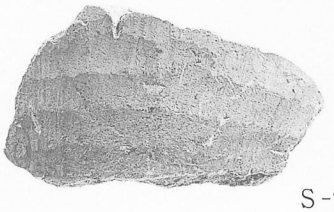
カイモリ地区　出土遺物４

S-4

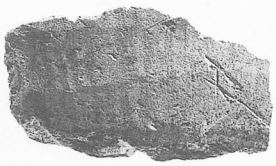


S-5

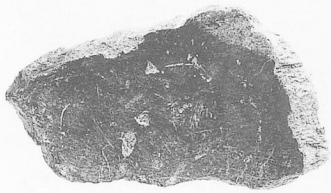
S-6

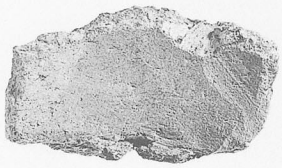


S-7



S-13





カイモリ地区　出土遺物５

フケ地区

遠景（航空写真）

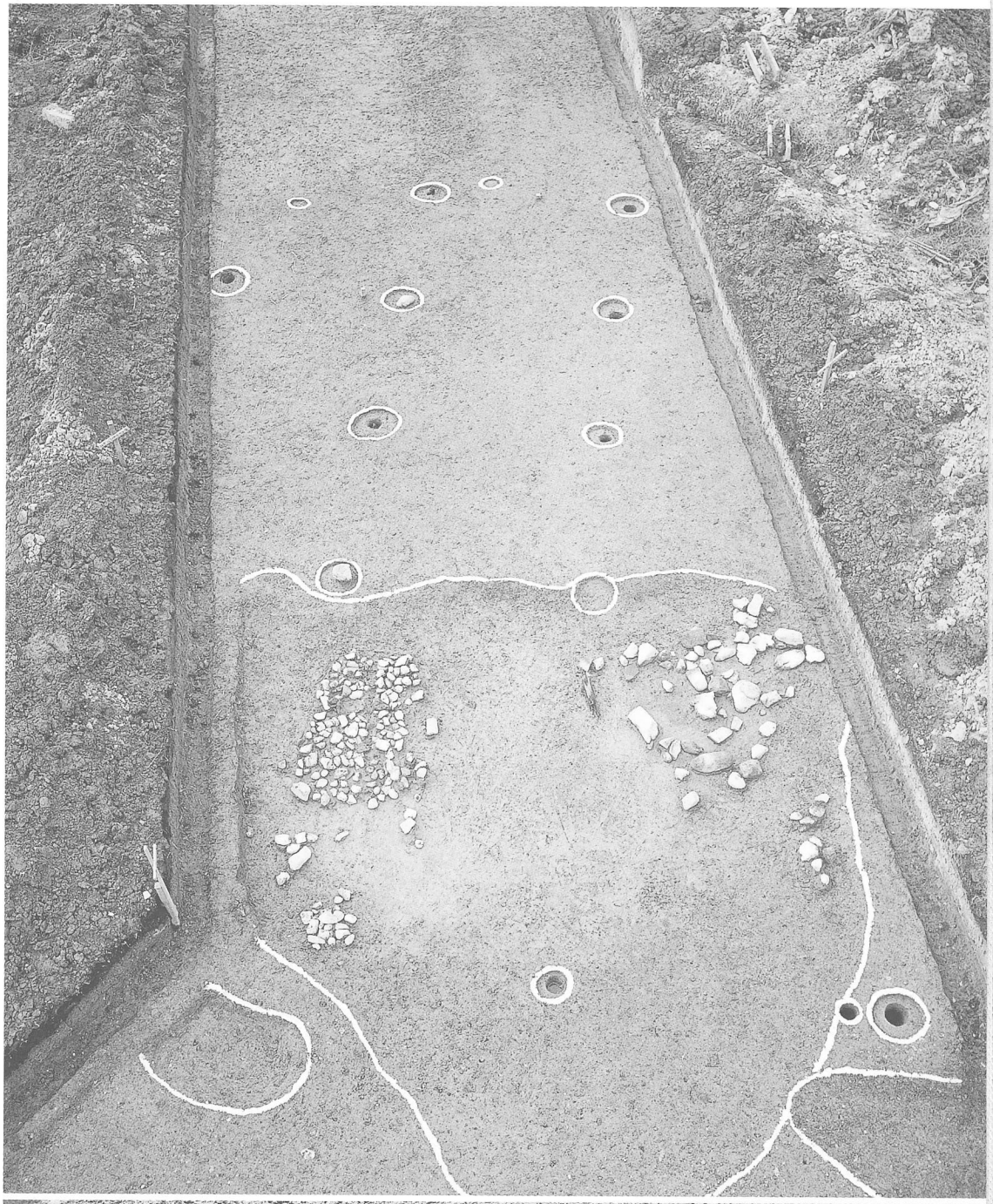
調査区全景
（航空写真）

フケ地区

B区西半遺構群
（SB－2）

B区東半遺構群
（SB－3）

フケ地区



ＳＢ－１および池状遺構
（北から）

池状遺構内石組
（北から）

フケ地区

A区北部遺構群
（SB－6、SD－7・9）

C区遺構群
（SB－4・5、SD－6・7）

491

494

492

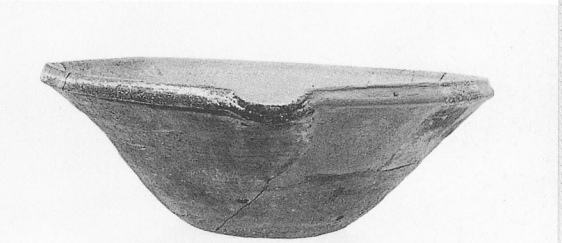
514

515

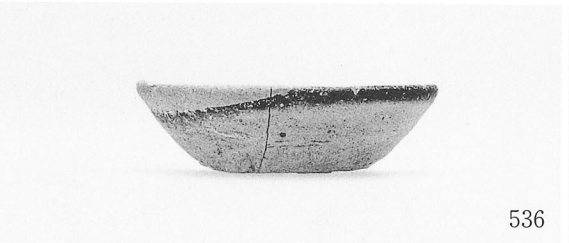
516

517

520


524

522

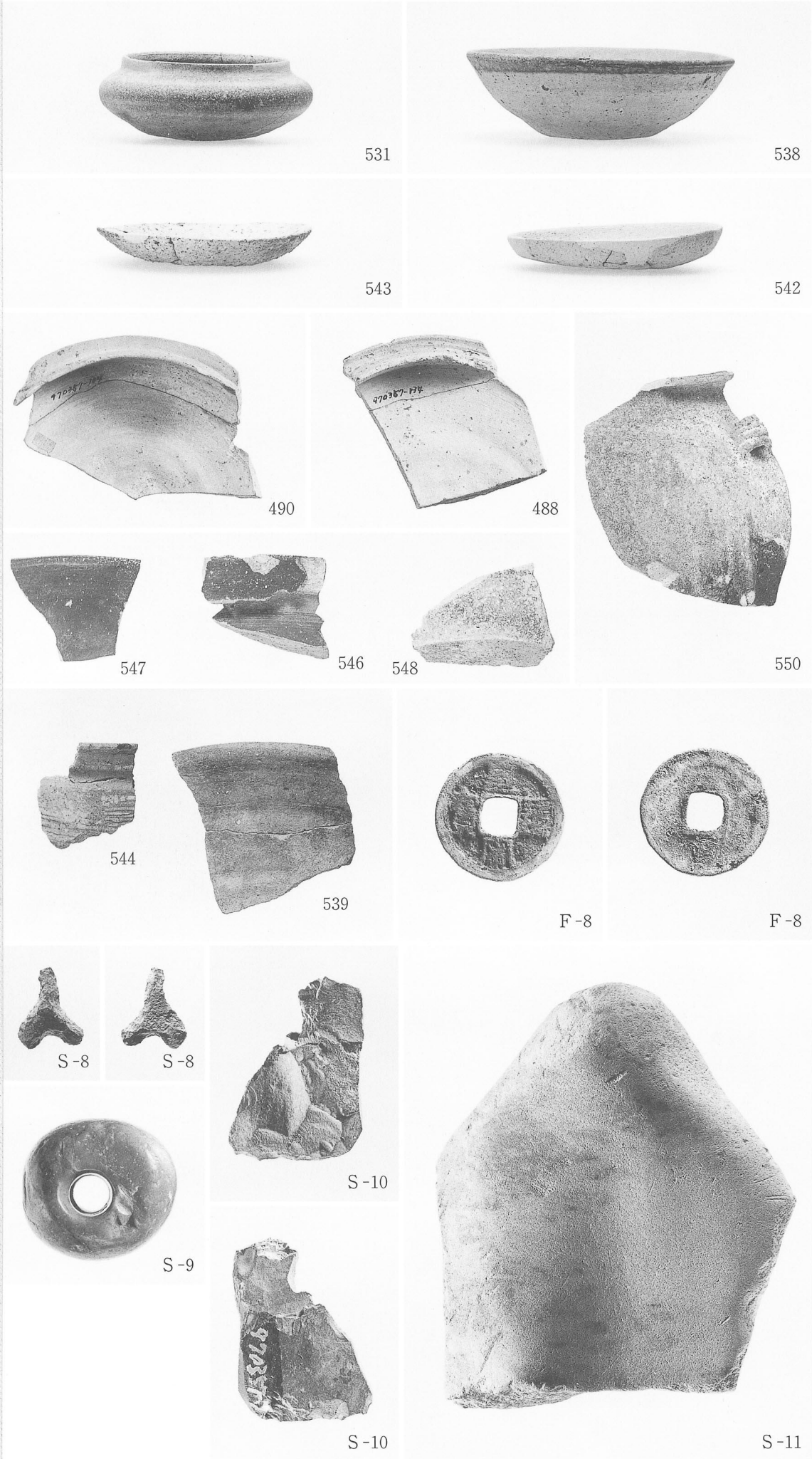

536

505

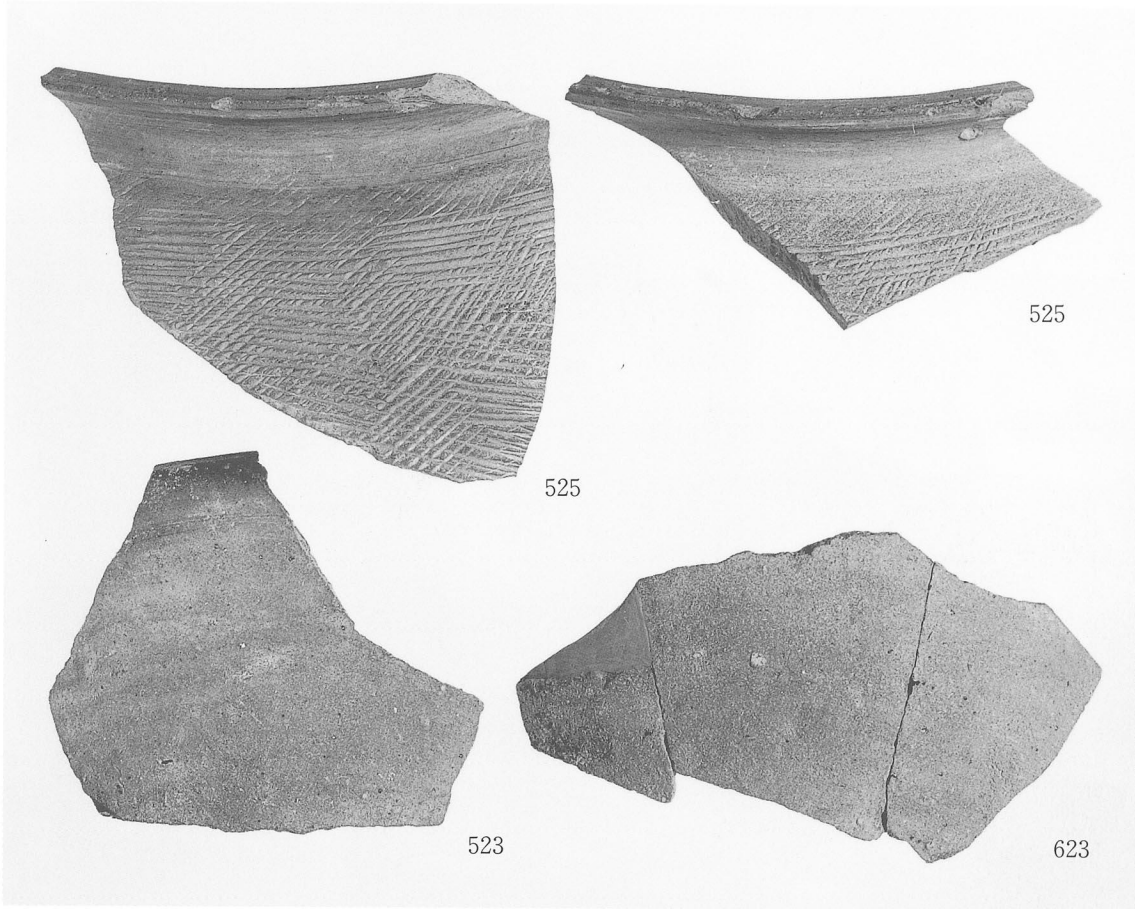
498

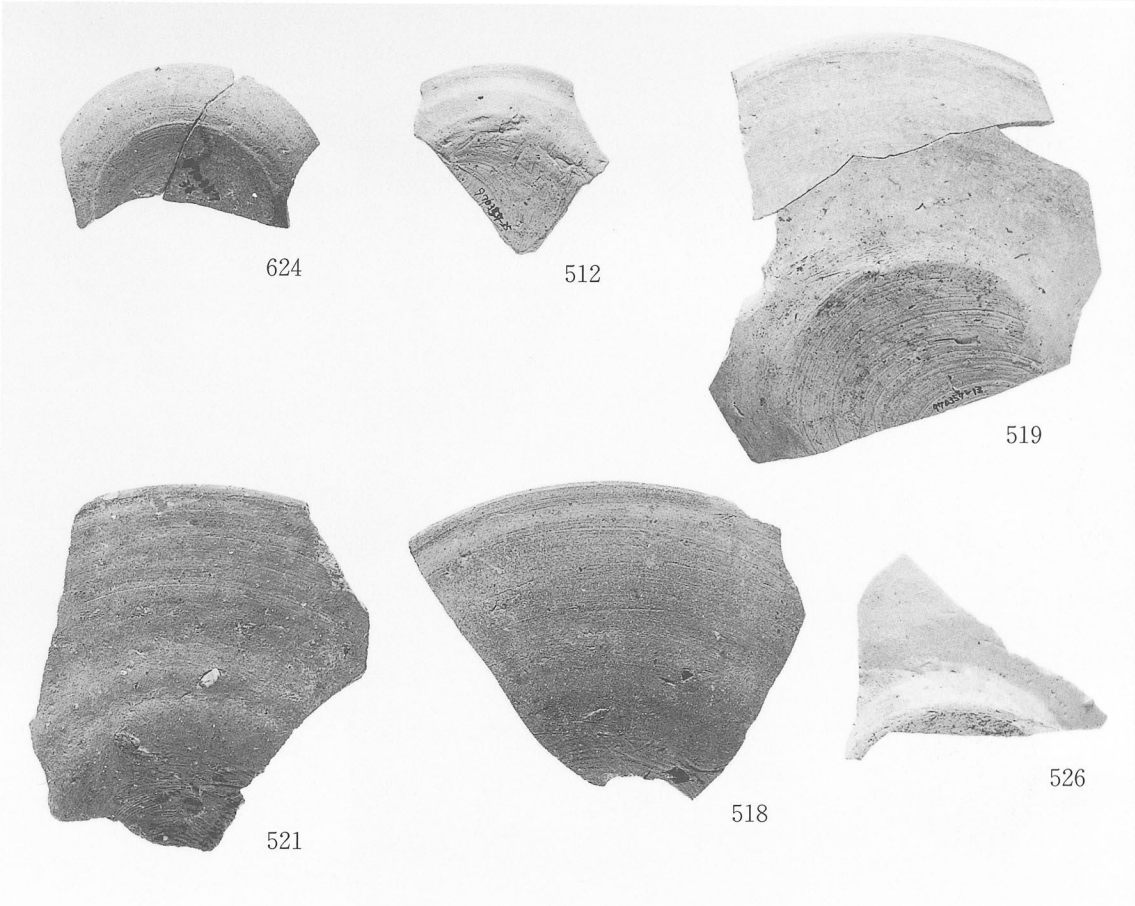
501

フケ地区　出土遺物１

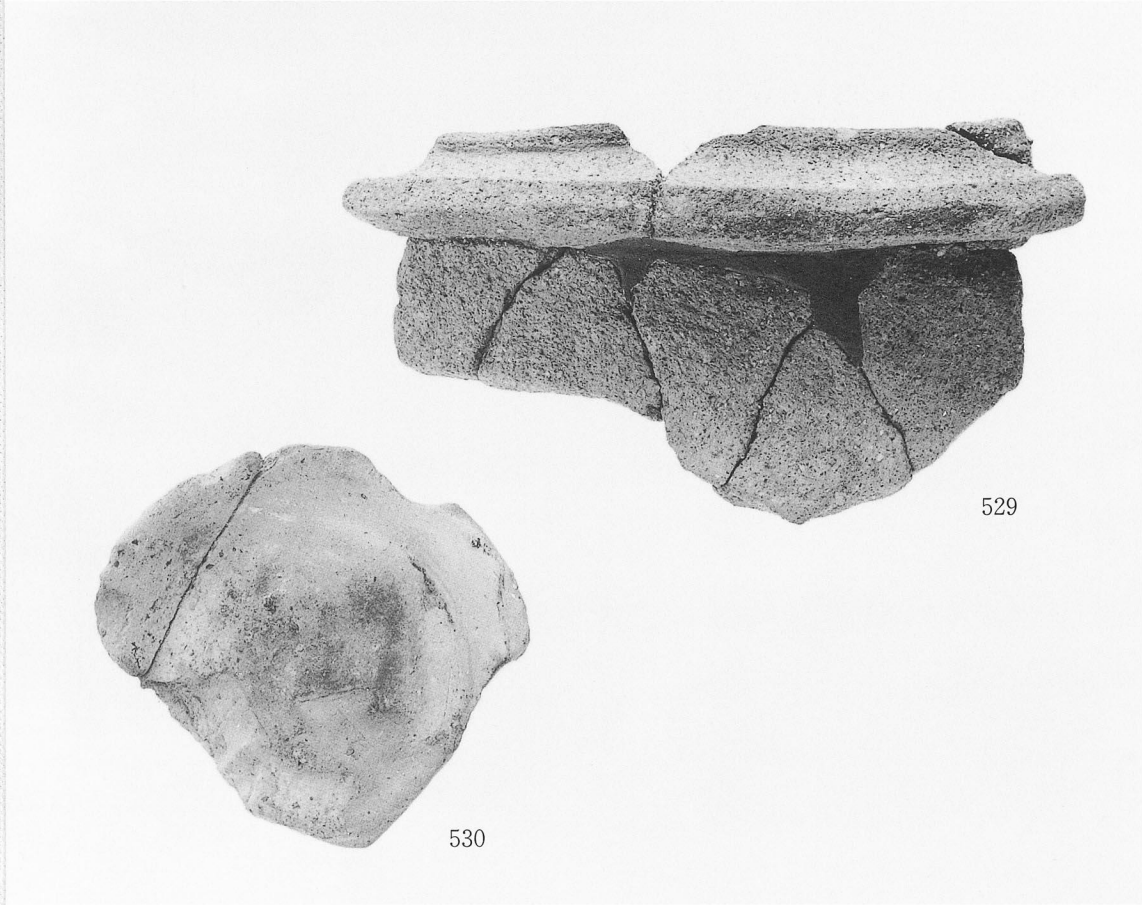

531
538
543
542
490
488
547
546
548
550
544
539
F-8
F-8
S-8
S-8
S-10
S-9
S-10
S-11

フケ地区　出土遺物２

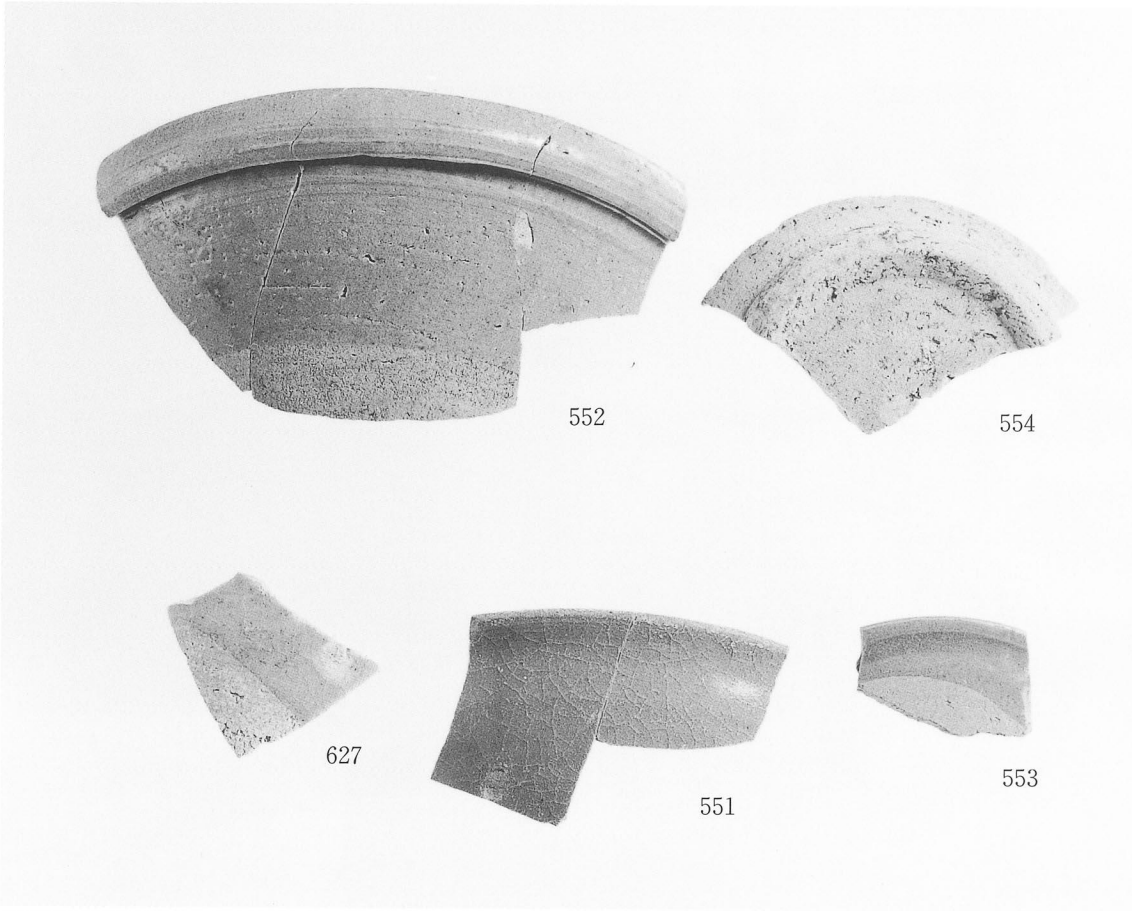


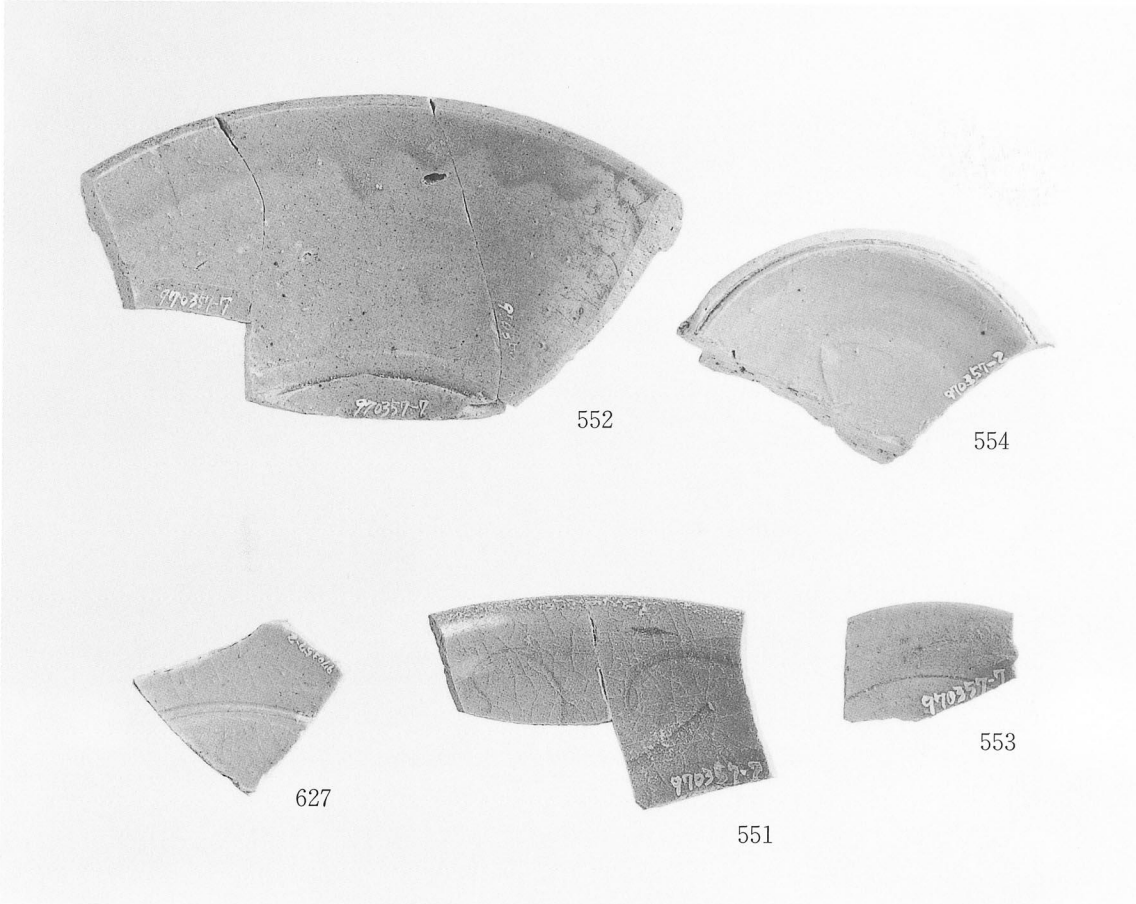


フケ地区　出土遺物 3

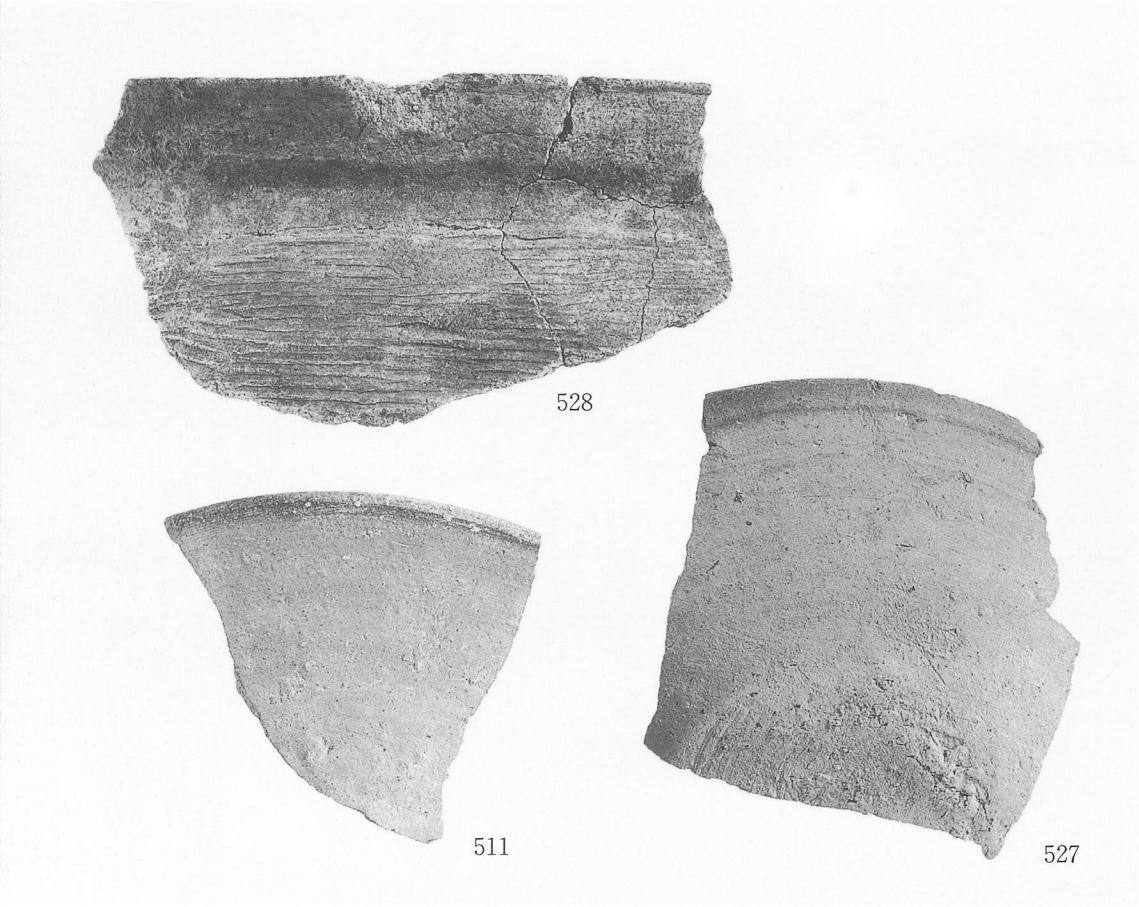


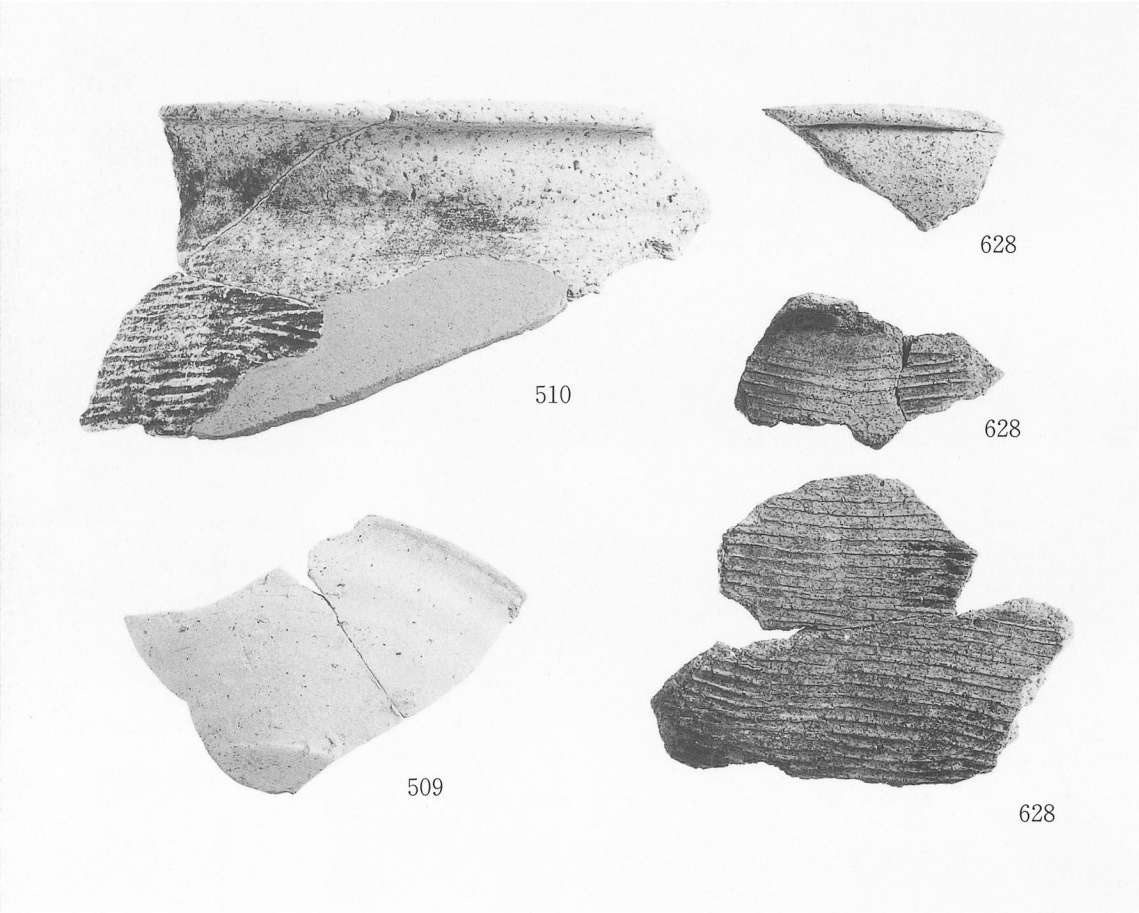
フケ地区　出土遺物４





フケ地区　出土遺物 5

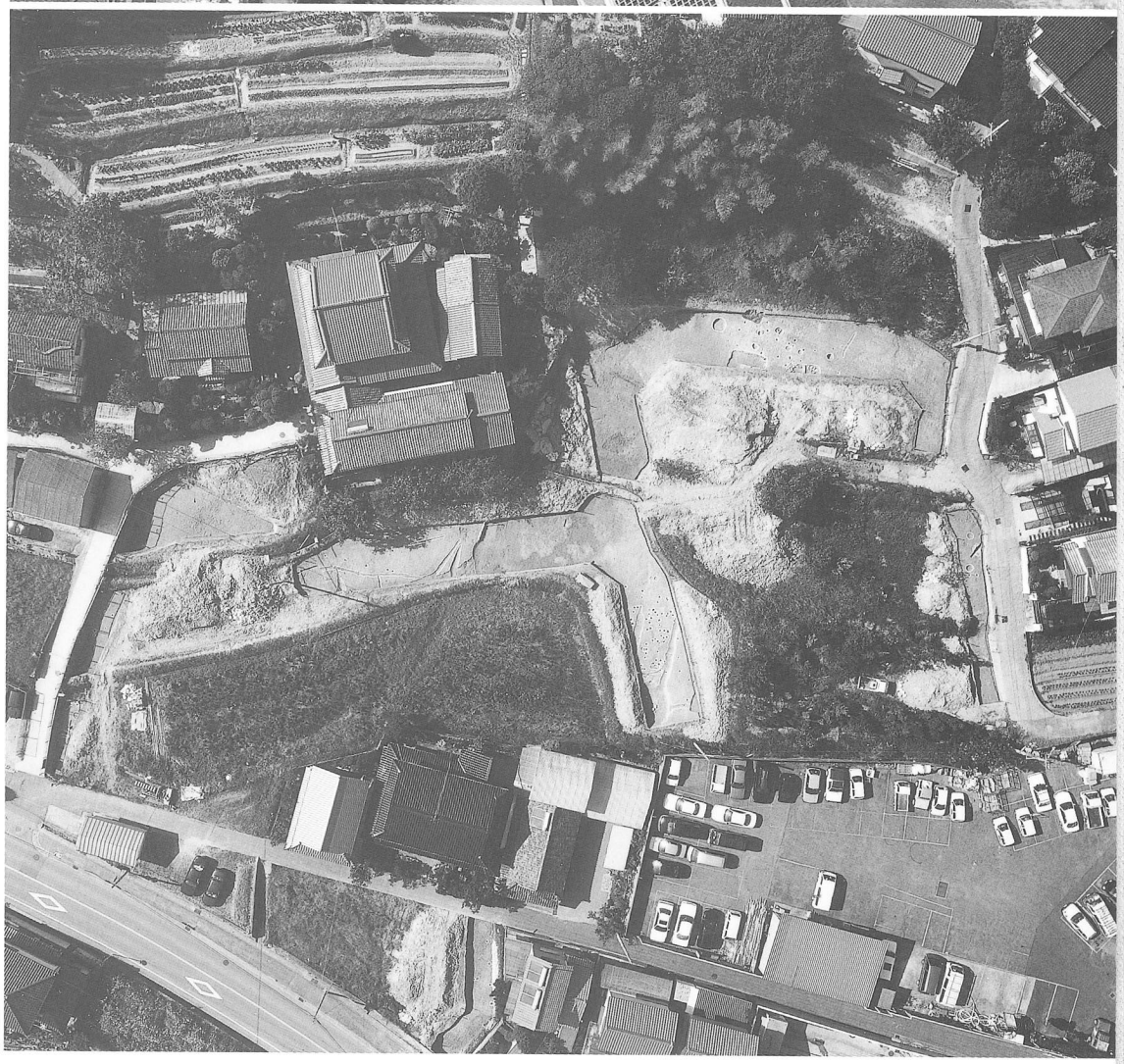




フケ地区　出土遺物 6

道ノ上地区

遠景（航空写真）



調査区全景
（航空写真）

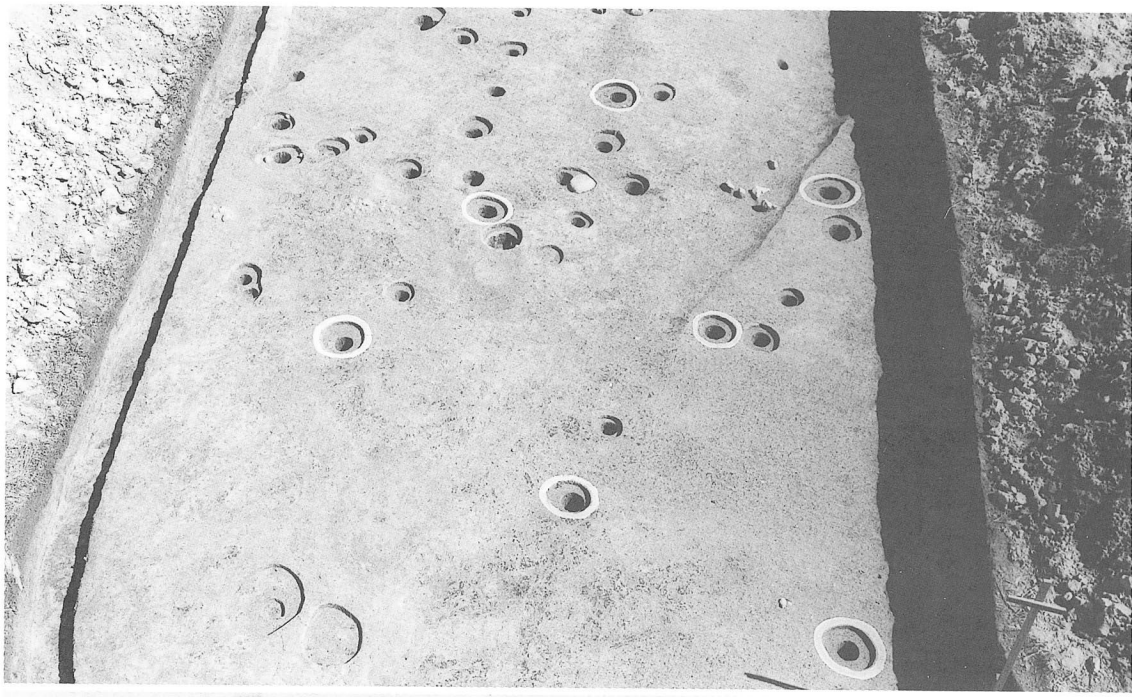
道ノ上地区

A区全景
（東から）

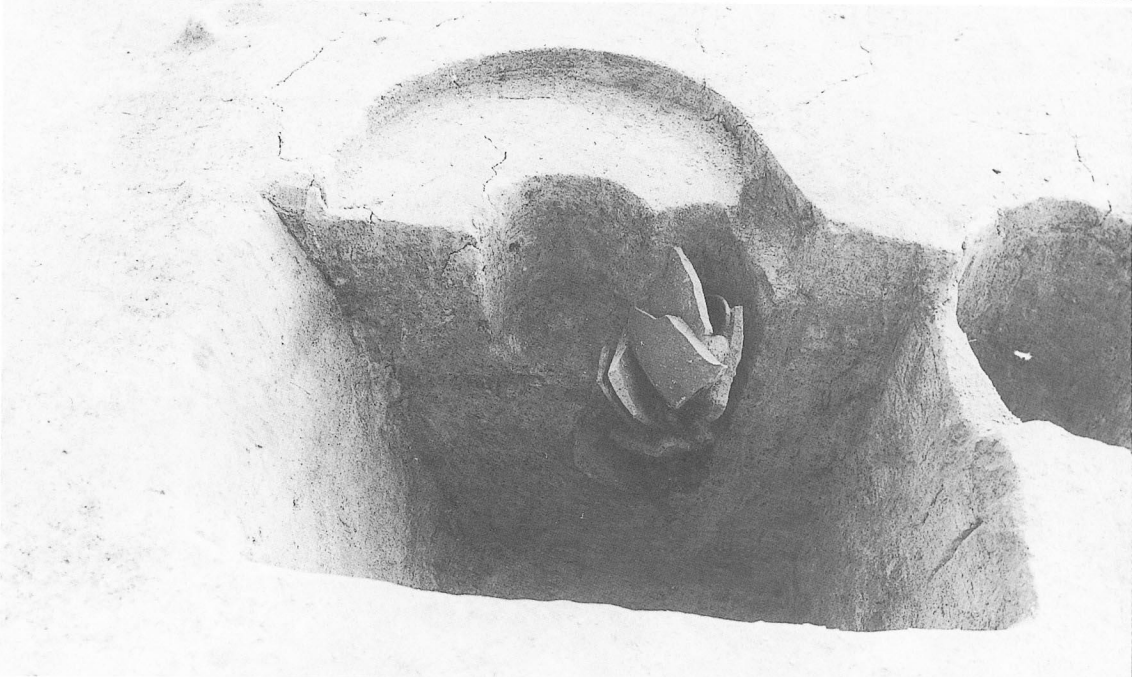
C区全景
（北から）

C区ＳＫ－１完掘状況
（北から）

道ノ上地区



E区　ＳＢ－１
（西から）



E区　柱穴１内遺物出土状況
（西から）

F区　ＳＢ－２
（北から）

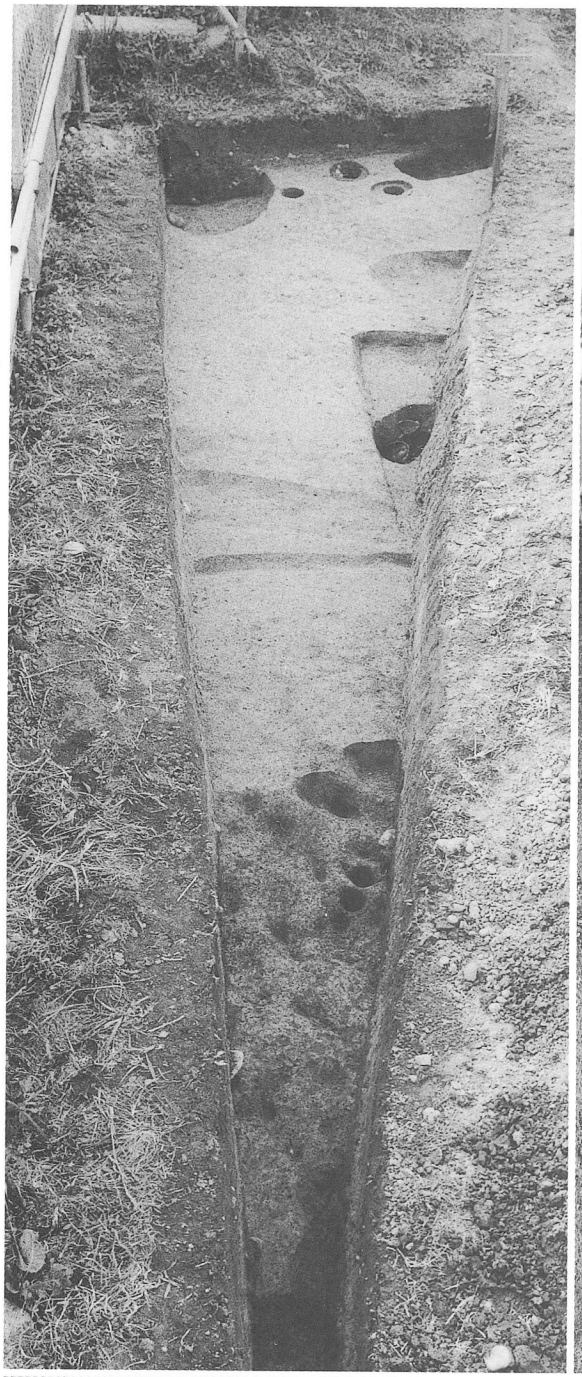
道ノ上地区

C区　SK－4
（東から）

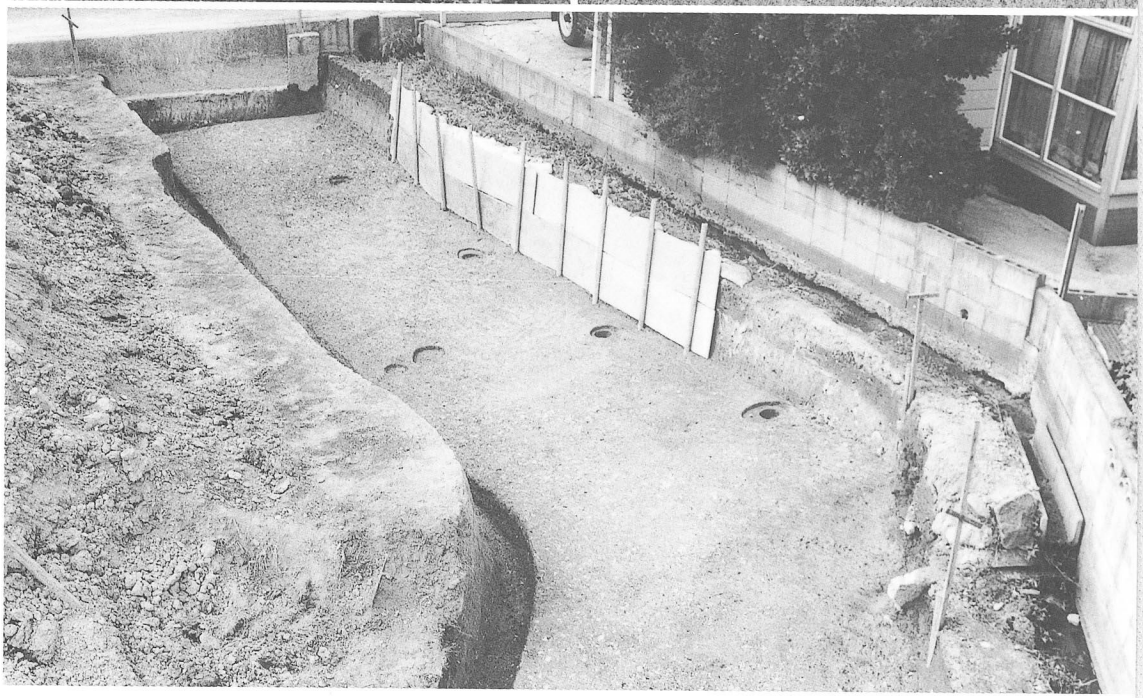
C区　SK－6
（西から）

E区池状遺構断面
（北から）

道ノ上地区



左）Ｊ区全景（東から）
右）Ｉ区全景（西から）



Ｈ区全景
（東から）

556

562

569

563

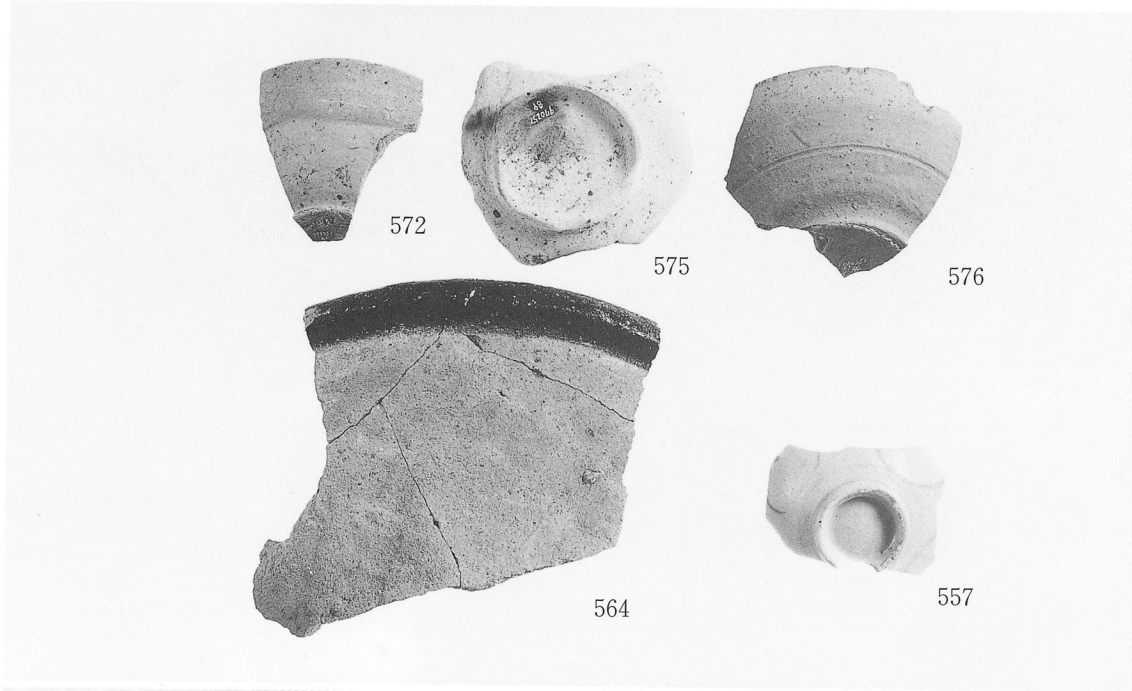
568

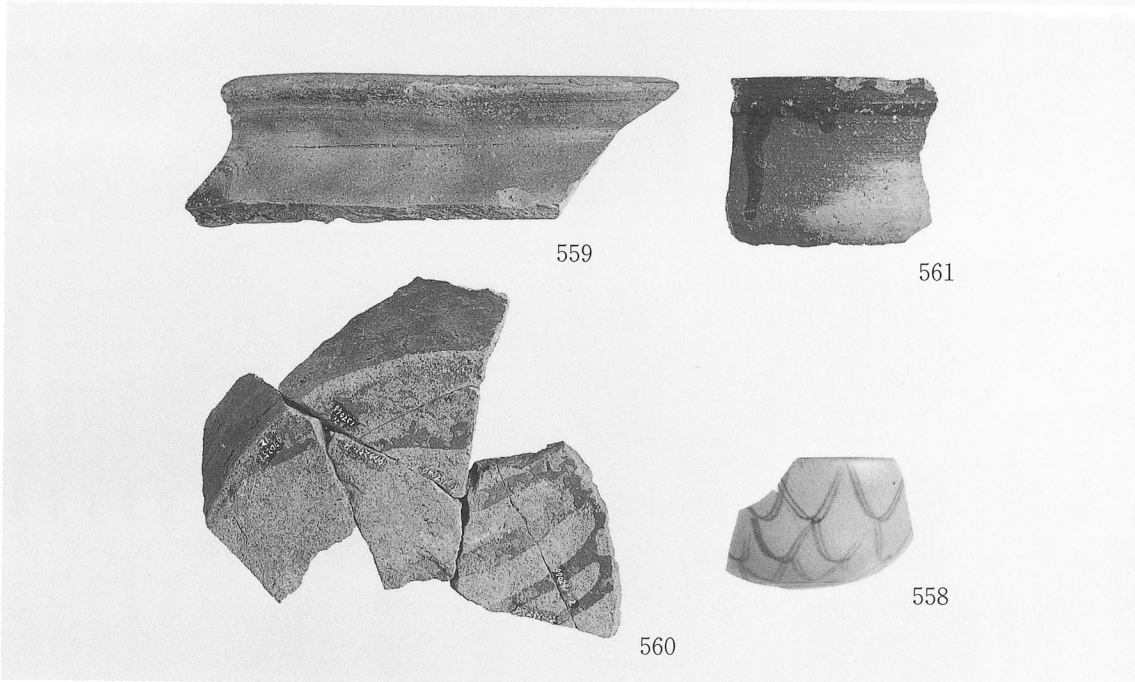
570

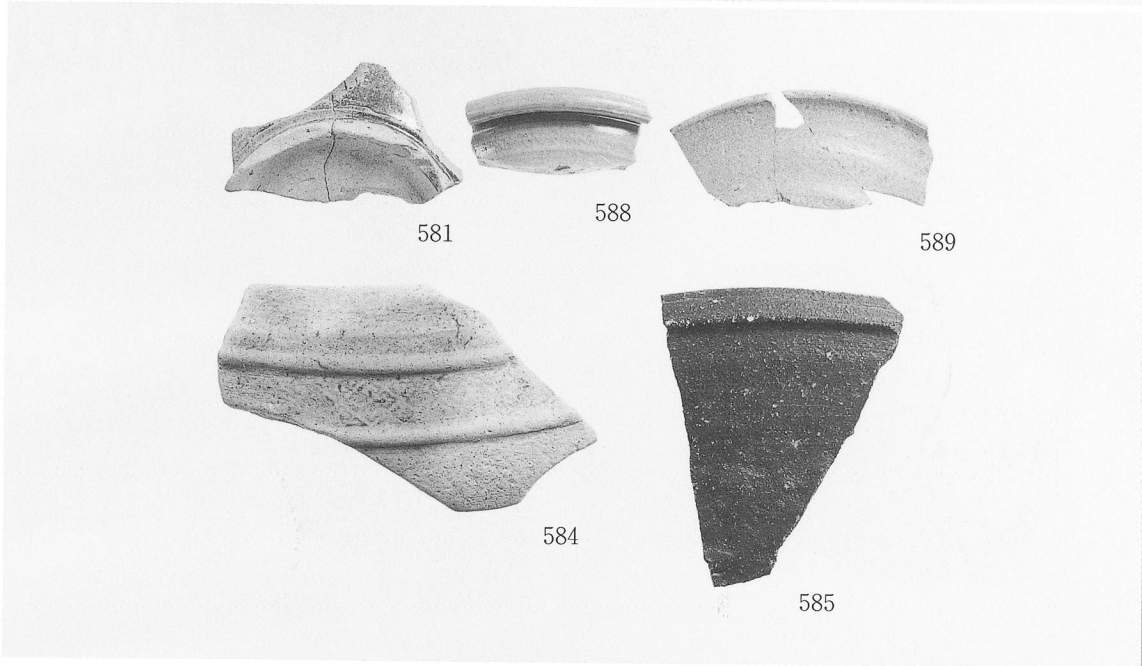
571

577

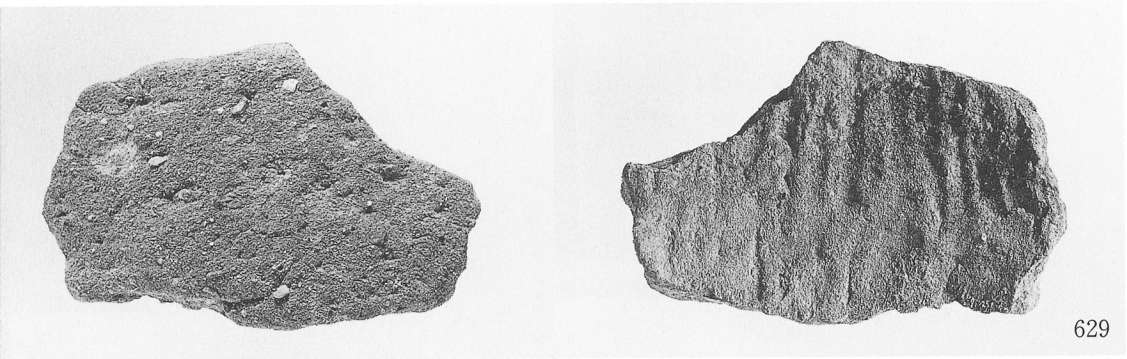
道ノ上地区　出土遺物１

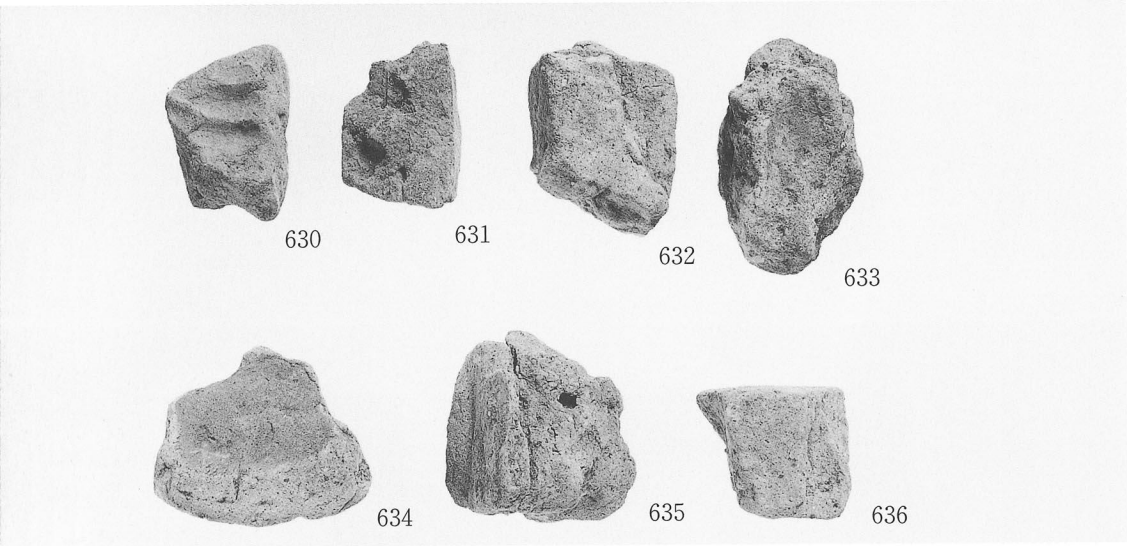


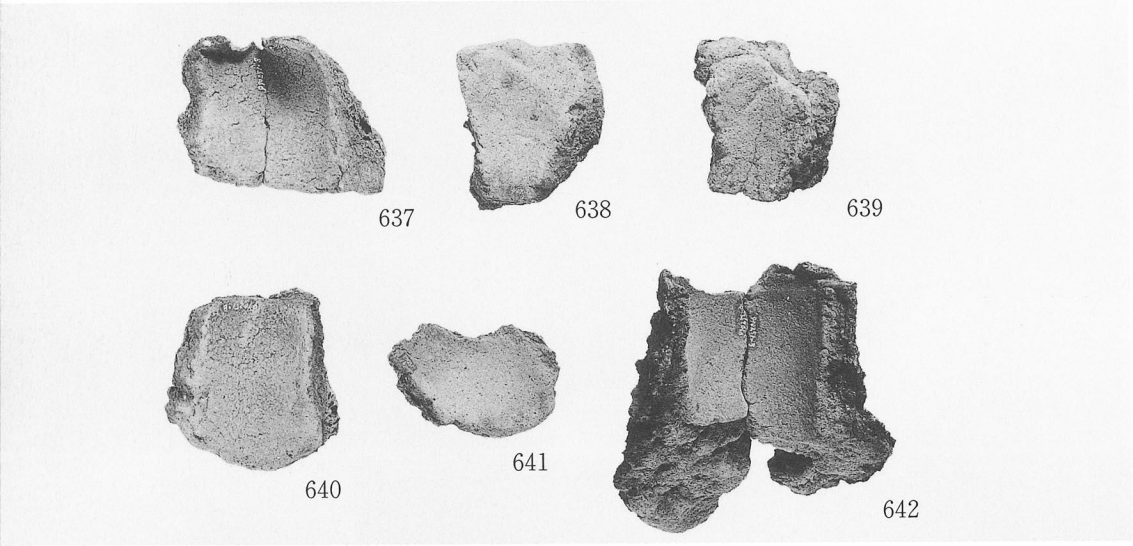


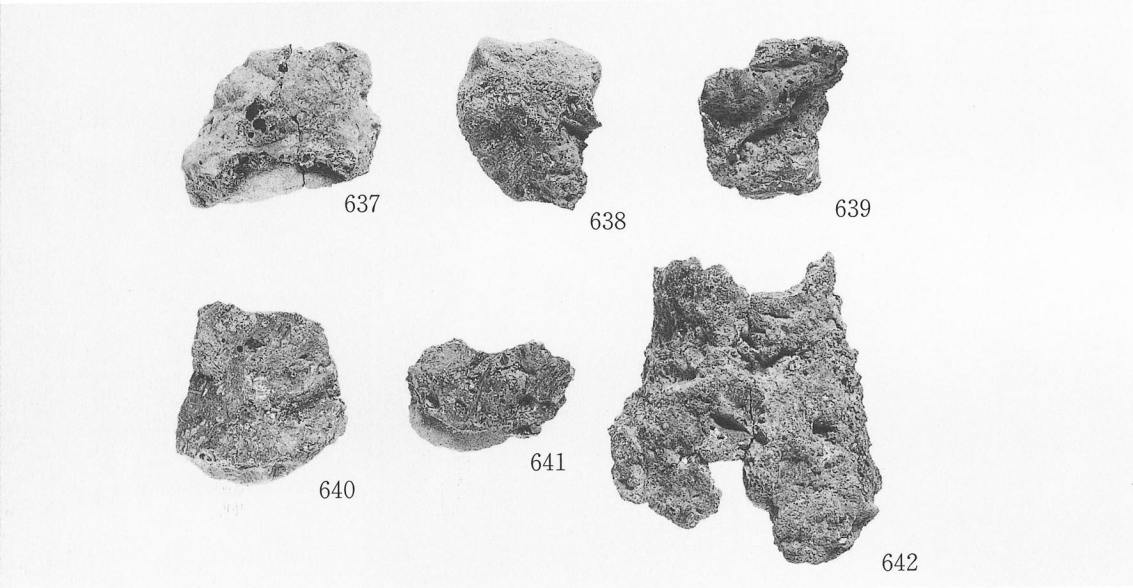


道ノ上地区　出土遺物 2


629

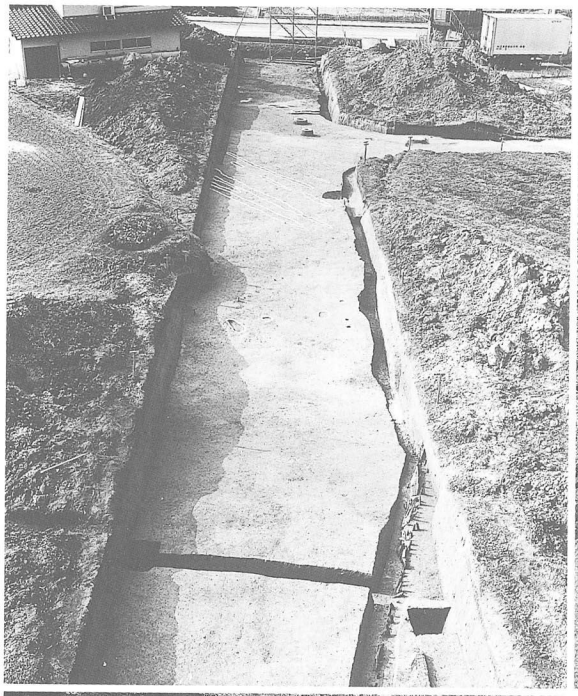

630
631
632
633
634
635
636


637
638
639
640
641
642

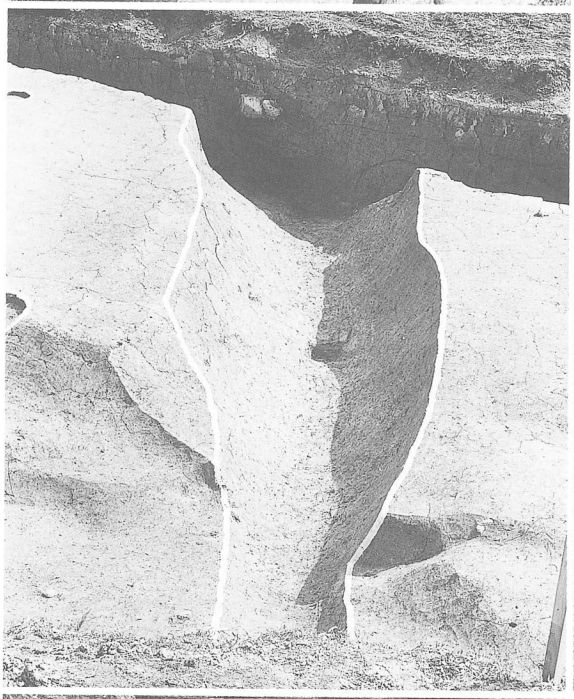

637
638
639
640
641
642

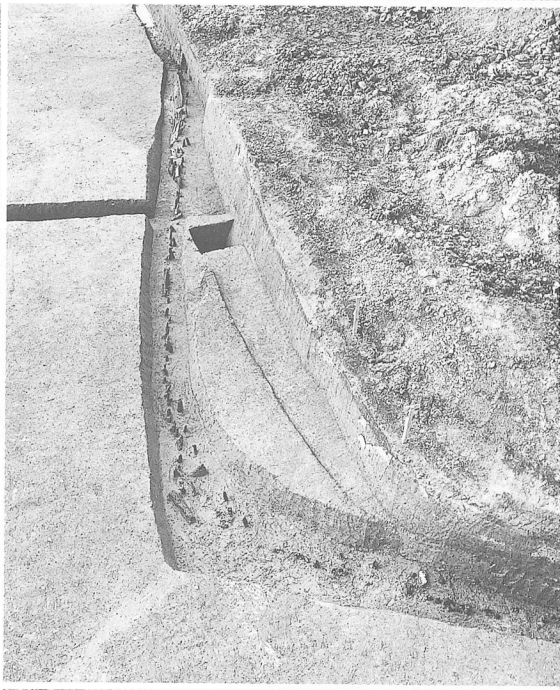
道ノ上地区　出土遺物 3

岸ノ上地区

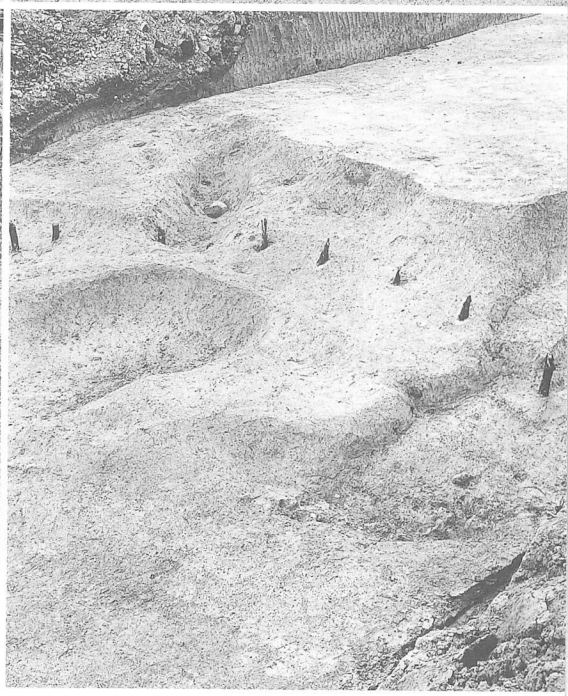


左）１区全景（南東から）
右）１区ＳＤ－１付近



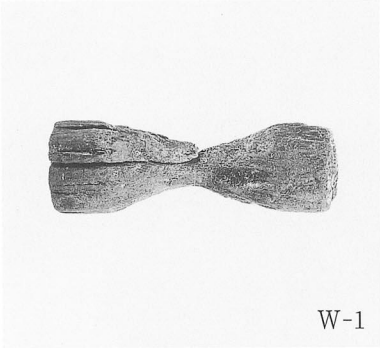


左）１区ＳＤ－１
右）１区杭列



左）９区全景（北東から）
右）９区杭列

595


W-1

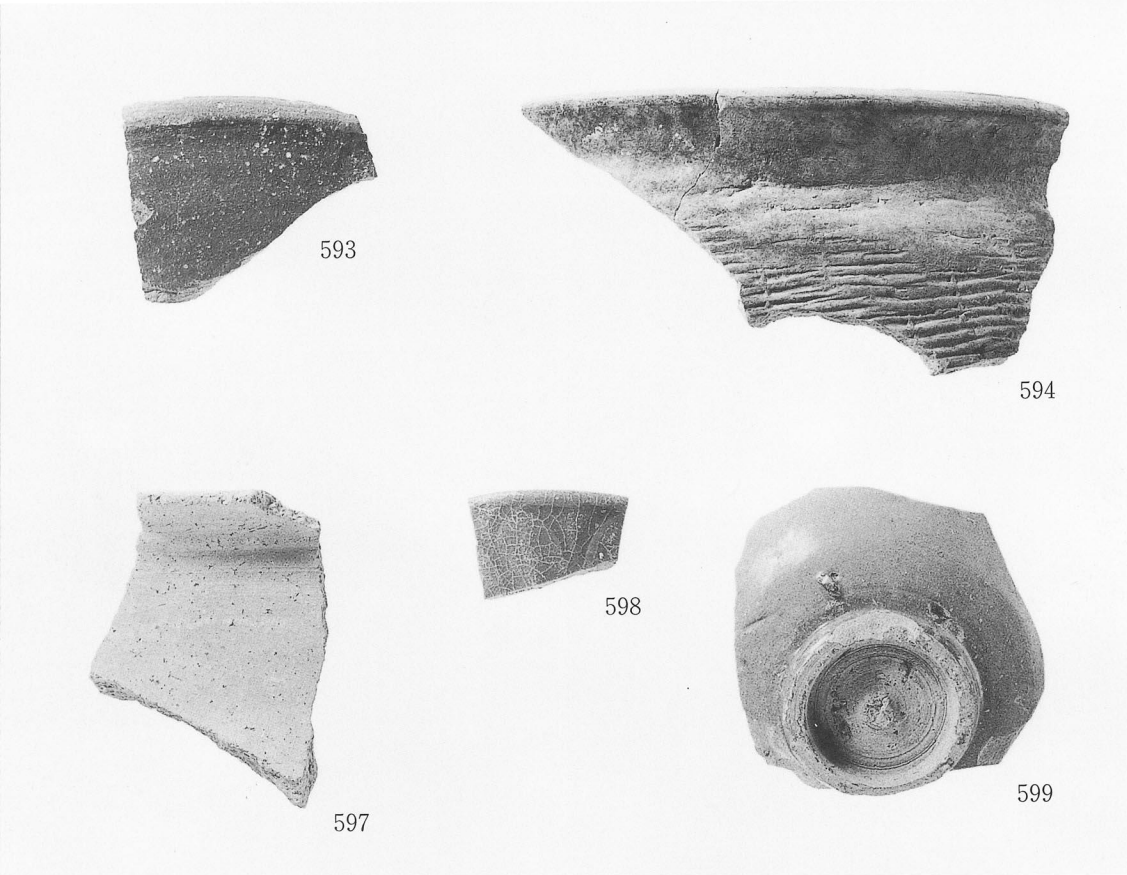
F-7

600

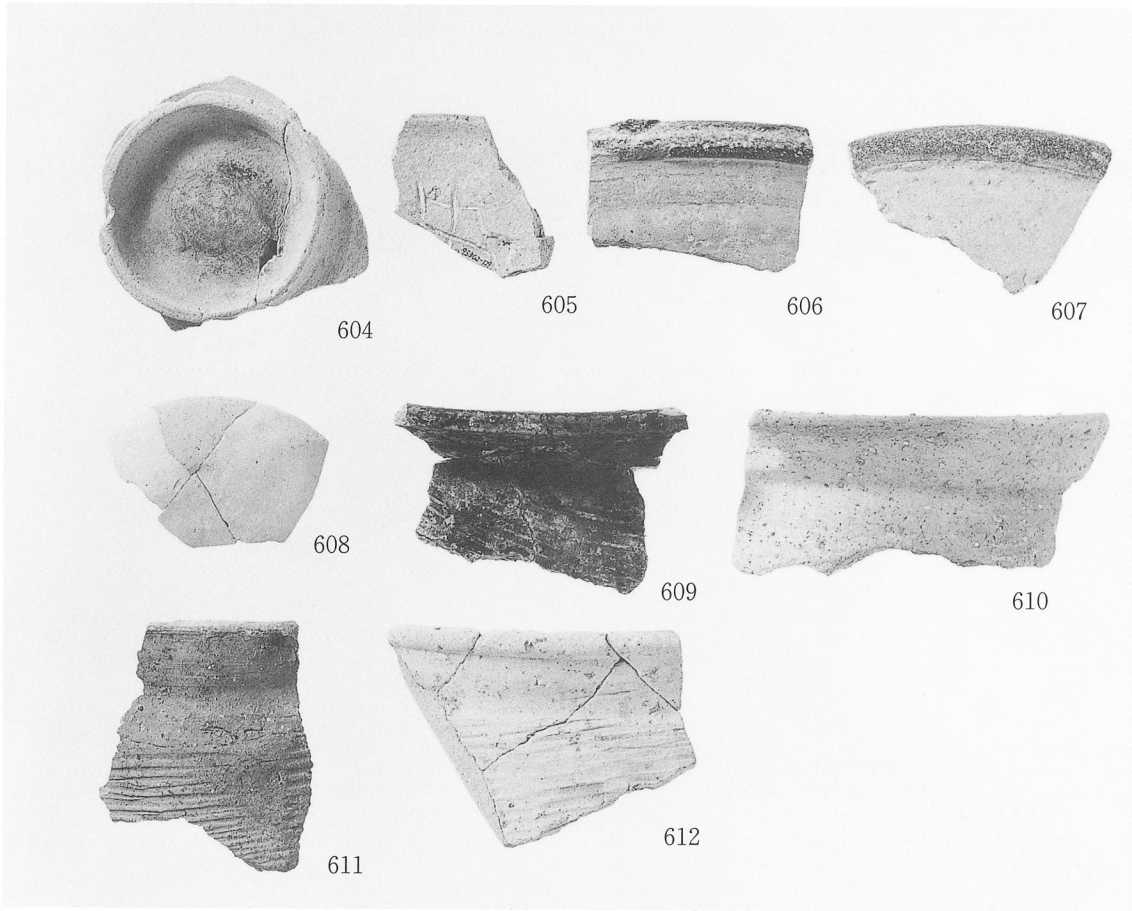
601

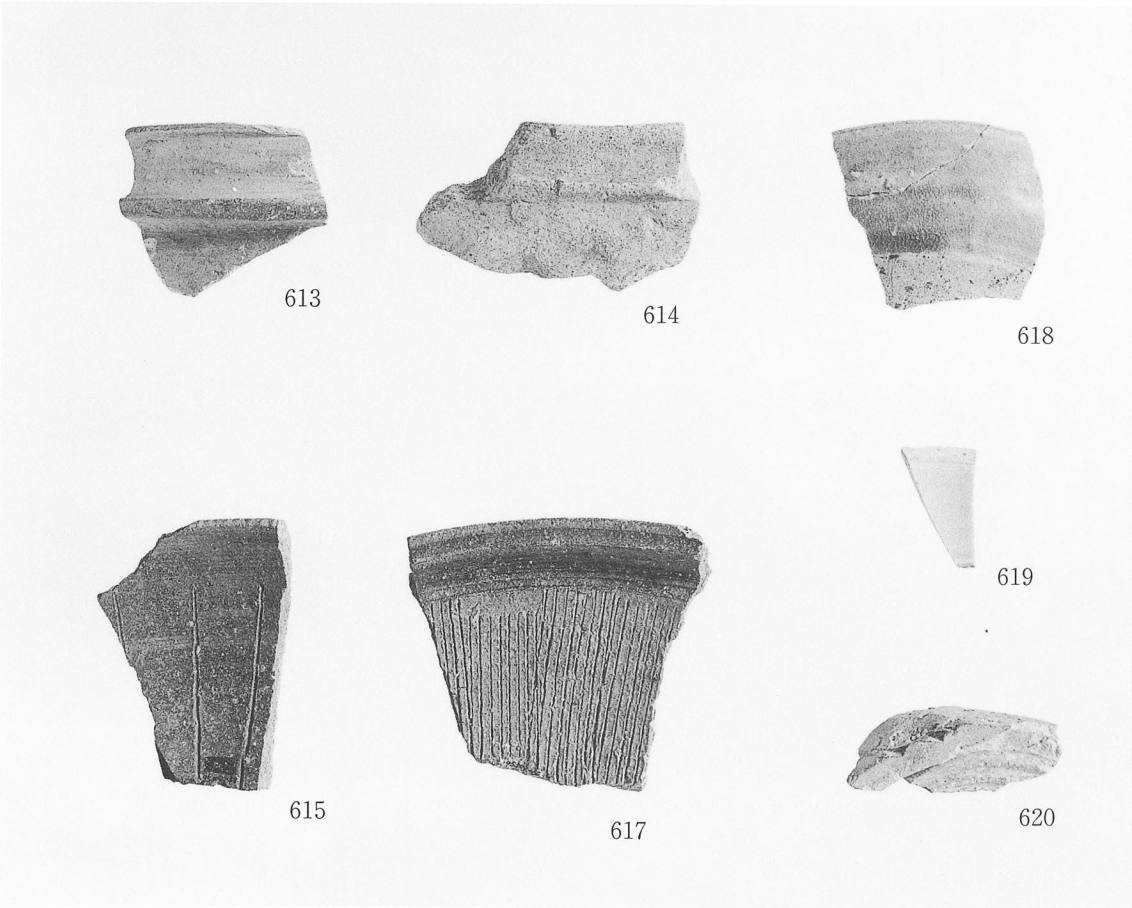
602

603


593
594
597
598
599

岸ノ下地区　出土遺物１





岸ノ下地区　出土遺物２

兵庫県文化財調査報告　第216冊

神戸国際港都建設事業道場八多地区
特定土地区画整理事業に伴う

八多中遺跡発掘調査報告書

平成13年３月31日　発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５

発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目16－12

印　刷　ウニスガ印刷株式会社
〒677-0053　兵庫県西脇市和布町39